

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第88集

羽曳野市 郡戸所在

郡 戸 遺 跡

—— 南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書 ——

2003年2月

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

羽曳野市郡戸に所在する郡戸遺跡は、難波と大和を結ぶ幹線道路の一つ「丹比道」に比定される竹ノ内街道に近接した交通の要衝の地にあります。古代には、河内国丹比郡丹上郷に属し、その地名から、丹比郡の郡家があったと推定されています。同じ丹上郷に属し、遺跡の北西に接する丹上遺跡からは奈良時代の官衙施設と考えられる大型掘立柱建物群や官人・識字層の存在を示唆する石帶・墨書土器が検出されました。

この地域は、『続日本紀』には初代催鎔銭司を勤めた丹比真人三宅麻呂など中央の政治の舞台で活躍した人名が多く見え、近くには彼ら「丹比真人」氏や「丹比宿禰」氏と関係が深いとされる式内社丹比神社や、平城宮型式の瓦を出土する黒山廃寺や丹比廃寺が所在する事から、古代から中央と深い繋がりがあった事が窺われます。

今回の調査では、24領もの甲冑をはじめ多くの武器を出土したことで知られる国史跡の黒姫山古墳との関係が窺える古墳時代中期の方墳群や、計画的に配置された飛鳥時代の掘立柱建物群や南北条里型地割に一致した半町四方の範囲に計画的に配置された平安時代の大型の掘立柱建物群が検出され、硯・墨書土器などの遺物も出土し、この地域が、古墳時代から平安時代を通じて重要な位置にあった事がより一層明らかになりました。

これらの成果は、当地域の歴史を考える上において貴重な資料といえます。

最後に、発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜った大阪府教育委員会、大阪府道路公社、羽曳野市教育委員会をはじめ関係各位の方々に深く感謝するとともに、今後とも当センターへのご支援を賜るよう希望します。

平成15年 2月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、大阪府羽曳野市郡戸地内に所在する、郡戸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府道路公社より財団法人 大阪府文化財調査研究センター〔現 財団法人 大阪府文化財センター（平成14年4月から）〕が受託し、大阪府教育委員会の指導のもと、実施した。
3. 発掘調査、遺物整理事業は、平成12年5月12日～平成15年2月28日まで行った。調査体制・期間は以下のとおりである。

調査部

調査部長 井藤 徹（平成14年3月まで）・玉井 功（平成14年4月から）

<調整課>

調整課長 赤木 克視

調整係長 藤永 正明（平成13年3月まで）・森屋 直樹（平成13年4月から）

技師 岡戸 哲紀（平成14年1月まで）・山元 建（平成14年2月から）

設計係長 藤原 秋利（平成14年3月まで）・山口 和男（平成14年4月から）

主査 岩本 和記（平成14年3月まで）・山下 篤（平成14年4月から）

<南部調査事務所>

所長 濑川 健（平成14年3月まで）・渡邊 昌宏（平成14年4月から）

主任技師 立花 正治〔写真〕

調査第2係長 金光 正裕（平成14年3月まで）

技師 三宮 昌弘（平成14年3月まで）・後藤 信義（平成14年3月まで）

佐伯 博光（平成13年3月まで）

非常勤専門調査員 宮地聰一郎（平成12年8月まで）・大庭みゆき（平成14年3月まで）

森本 裕美（平成13年3月まで）

調査第1係長 橋本 高明（平成14年4月から）

技師 後藤 信義（平成14年4月から）

非常勤専門調査員 大庭みゆき（平成14年4月から）

4. 木器・金属器類などの保存処理については、中部調査事務所主査 山口 誠治、同非常勤専門調査員 立花るりこ（平成13年3月まで）・仁田（旧姓下山）恵子（平成13年4月から）が行った。

5. 現地調査は、平成12年5月から平成14年2月まで実施し、引き続き南部調査事務所で遺物整理作業を行い、平成15年2月28日、本書の刊行をもって完了した。

6. 調査の実施にあたっては、羽曳野市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、ならびに以下の方々のご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

〔敬称略、組織五十音順、組織内五十音順〕

田中 清美（財団法人 大阪市文化財協会）、森村 健一（堺市立埋蔵文化財センター）、河内一浩・高野 学・吉澤 則夫（羽曳野市教育委員会）、足立 俊彦・岡本 武司・芝田 和也（松原市教育委員会）

7. 本調査で出土した石器およびサヌカイトの剥片について、以下の機関に自然科学的分野からの分析

を依頼した。

遺物分析研究所 薩科 哲男（京都大学原子炉実験所）

8. 本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ起稿し、執筆分担は目次に示した。
9. 本書の編集は後藤・大庭が行った。
10. 現地調査・報告書作成作業にあたっては、南部調査事務所・古市分室の非常勤職員諸氏の協力を得た。
11. 本調査で出土した遺物および、本調査に係わる写真、カラースライド、実測図などの記録類は、財団法人 大阪府文化財センター南部調査事務所にて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1. 遺構実測図の基準高については、すべて東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。
2. 遺構平面図は、国土座標にのっとった平面直角座標系、第VI座標系に準拠し、座標数値の記載はメートル単位で表す。
3. 遺構平面図に表す方位針は、座標北を示す。
4. 遺構断面図を作成した位置については、平面図に鉤形で示し、方向は矢印で表す。
5. 土色の表現については、小山正忠・竹原秀雄編1998年版『新版標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に依拠した。
6. 遺構番号については、現地調査の際に付与した番号を基本的に踏襲する。
7. 遺物写真の縮尺率は、不同である。
8. 写真図版右下に記載している（ ）内の数字は、挿図番号である。
9. 遺物実測図については、基本的に土器類を4分の1、石器類を3分の2とした。
10. 文章中における表現法や仮名遣いなどについては、執筆者の意向を尊重し、敢えて統一しない。
11. 土器編年は主に陶邑編年、飛鳥編年、平城宮編年を参考とした。

目 次

序 文 例 言 凡 例

財団法人 大阪府文化財センター 理事長 水野正好

第I章 位置と環境	金光 正裕	1
第II章 調査に至る経緯と経過	(金光)	5
第III章 調査の方法	(金光)	7
第IV章 調査の成果		
第1節 全体の基本層序	後藤 信義	9
第2節 その1調査区	(後藤)	
第1項 位置		11
第2項 基本層序		11
第3項 遺構		14
第4項 遺物		48
第5項 小結		65
第3節 その2調査区	三宮 昌弘・大庭みゆき	
第1項 基本層序		67
第2項 遺構		78
第3項 遺物		134
第4項 小結		159
第4節 その3調査区	(後藤)	
第1項 位置		169
第2項 基本層序		169
第3項 遺構		169
第4項 遺物		174
第5項 小結		174
第V章 まとめ	(後藤)	176
第VI章 基礎分析		
第1節 郡戸遺跡出土サヌカイト石器、石片の原材産地分析	藁科 哲男	178
第VII章 考察		
第1節 多治比地域の古墳から見た社会構成	(三宮)	190
第2節 平安時代の粗製土師器碗について	(三宮)	216
写真図版		

挿図目次

図1	遺跡位置図	1
図2	周辺遺跡分布図	3
図3	遺跡周辺図	5
図4	地区割概念図	7
図5	調査区配置図	7
図6	柱状図ポイント位置図	9
図7	基本層序 柱状図	10
図8	調査区配置図	11
図9	基本層序 柱状図	12
図10	土坑249 平・断面図	13
図11	谷 平面図	13
図12	飛鳥時代遺構分布図	14
図13	建物 1 平・断面図	15
図14	建物 2 平・断面図	16
図15	建物 3 平・断面図	17
図16	建物 4 平・断面図	18
図17	建物 5 平・断面図	18
図18	建物 6 平・断面図	18
図19	建物 7 平・断面図	19
図20	柵列 1 平・断面図	19
図21	柵列 2 平・断面図	19
図22	柵列 3 平・断面図	20
図23	柵列 4 平・断面図	20
図24	溝88 平・断面図	20
図25	土坑241 平面図	21
図26	建物 8 平・断面図	22
図27	建物 9、柵列 7 平・断面図	23
図28	建物10 平・断面図	24
図29	建物11、柵列 8・9 平・断面図	25
図30	建物12 平・断面図	26
図31	建物13 平・断面図	27
図32	建物14 平・断面図	27
図33	建物15 平・断面図	28
図34	建物16 平・断面図	29
図35	建物17 平・断面図	30
図36	建物18 平・断面図	30
図37	建物19 平・断面図	31
図38	建物21 平・断面図	32・33
図39	建物20 平・断面図	33
図40	建物22 平・断面図	33
図41	建物23 平・断面図	34
図42	建物24 平・断面図	34
図43	建物25 平・断面図	35
図44	建物26 平・断面図	35
図45	建物27 平・断面図	36
図46	建物28 平・断面図	36
図47	建物29 平・断面図	36
図48	建物30 平・断面図	37
図49	建物31 平・断面図	37
図50	建物32 平・断面図	37
図51	建物33、柵列14 平・断面図	38
図52	柵列10・11・12・13 平・断面図	38
図53	建物34 平・断面図	39
図54	建物35 平・断面図	39
図55	建物36 平・断面図	39
図56	ピット306・324・774・777 平・断面図	39
図57	土坑642・679・723 平・断面図	40
図58	土坑680 平・断面図	41
図59	土坑625 平・断面図	41
図60	土坑658 平・断面図	41
図61	井戸657 平・断面図	42
図62	井戸139 平・断面図	43
図63	溝838 平・断面図	44
図64	溝396 平・断面図	45
図65	溝594・621・682・729・752 断面図	46
図66	焼土坑933・952 平・断面図	46
図67	轍痕跡 平・断面図	47
図68	溝344・579・624 断面図	47
図69	包含層 出土石器（1）	49
図70	包含層 出土石器（2）	51
図71	谷・7層 出土遺物	53
図72	ピット71・240、土坑241、溝3・88・390・574、5層 出土遺物	54
図73	ピット内 出土遺物	56
図74	土坑680・658 出土遺物	58
図75	井戸657 出土遺物	59
図76	溝621 出土遺物	60
図77	溝396・682・684・752・838 出土遺物	61
図78	溝594・929 出土遺物	62
図79	4層 出土遺物	62
図80	溝344・913・921 出土遺物	63
図81	3層 出土遺物	64
図82	トレンチ割り図	67
図83	調査区断面模式図 (1トレンチ南壁・6トレンチ南西壁断面を元に作成)	68
図84	調査区・トレンチ断面位置図	68
図85	1トレンチ 南壁・西壁断面図	71
図86	3トレンチ 南壁・5トレンチ南壁断面図	73
図87	6トレンチ 北東壁断面図	74
図88	6トレンチ 南西壁断面図	75
図89	7トレンチ 南西壁断面図	76
図90	7トレンチ 深掘トレンチ南壁断面図	77
図91	1トレンチ 6面 平面図	79
図92	古墳1 周溝内土器出土状況図	80
図93	古墳1 平・断面図	81
図94	古墳2、落込み1187 平面・出土状況図	82
図95	古墳3 平・断面・出土状況図	83
図96	古墳4 平面図	84
図97	古墳4 断面図	85
図98	古墳4 周溝内土器出土状況図	86
図99	古墳5 平面・出土状況図	86
図100	古墳6 平面図	87
図101	建物I 平・断面図	89
図102	建物II 平・断面図	90
図103	建物III・IV 平・断面図、柱穴土器出土状況図	91
図104	建物V 平・断面図	93
図105	建物VI 平・断面図	94
図106	建物VII 平・断面図	95
図107	建物VIII 平・断面図	97
図108	建物IX 平・断面図	98
図109	建物X 平・断面図	99
図110	建物XI 平・断面図	100
図111	建物XII 平・断面図	101
図112	建物XIII 平・断面図	102
図113	建物XIV 平・断面図	102
図114	建物XV 平・断面図	103

図115	建物X VI 平・断面図	104
図116	建物X VII 平・断面図	104
図117	建物X VIII 平・断面図	105
図118	調査区西半掘立柱建物分布図（建物III～X VIII） （自然地形と最古段階耕地区画溝）	106
図119	ピット列群I、轍状条痕I 平面図	109
図120	ピット列群II 平面図	110
図121	轍状条痕II 平面図	110
図122	溝群 平面図	111
図123	溝1063（その1）、 土器・石製紡錘車出土状況図	113
図124	溝1063（その2）、 北半・南半境付近及びその変遷模式図	114
図125	溝1707 南側及び土器出土状況図	116
図126	溝1710 平面図及び土器1～3出土状況図	117
図127	溝2405 平・断面図	118
図128	ピット1790・1850・2137・2183・2416 土器出土状況図	119
図129	（その2）調査区 1～4トレンチ 4面	121・122
図130	（その2）調査区 5～7トレンチ 4面	123・124
図131	（その2）調査区 1～4トレンチ 1～3面	125・126
図132	（その2）調査区 5～7トレンチ 1～3面	127・128
図133	溝1、土坑2、ピット2560・117 平・断面図、出土状況図	130
図134	明法寺池堤防断ち割り断面図	133
図135	出土石器遺物（1）	135
図136	出土石器遺物（2）	136
図137	出土石器遺物（3）	137
図138	古墳関連遺構出土遺物	139
図139	古墳6及びその周辺出土遺物	140
図140	建物柱穴出土遺物	143
図141	4面溝・ピット・土坑出土遺物	146
図142	1～3面遺構出土遺物	152
図143	表探及び1層出土遺物	156
図144	2層、2・3層出土遺物	157
図145	3層、4層出土遺物	158
図146	（その2）調査区 西半部平安時代集落変遷模式図	165
図147	1～4面耕地区画変遷主要遺構 及び耕地区画変遷図	167
図148	基本層序 柱状図	169
図149	遺構平面図	170
図150	古墳7 平・断面図	171
図151	溝1 遺物出土状況図・断面図	172
図152	土坑33 平・断面図	172
図153	土坑45 平・断面図	172
図154	遺構 断面図	173
図155	出土遺物	175
図156	サヌカイトおよび サヌカイト様岩石の原産地	183
図157	郡戸古墳群分布図	191
図158	古墳と古墳時代集落分布図	197
図159	古墳時代多治比地域の 集落と古墳群の存続期間	204
図160	古墳時代の多治比地域編成概念図	207
図161	多治比地域の古墳の階層性と群構成	210
図162	編年表No 1 梢頬	220
図163	編年表No 2 杯・皿・黒色土器	221
図164	編年表No 3 壺・羽釜	222
図165	編年表No 4 その他の土師器	223

表 目 次

表1-1	各サヌカイト（安山岩）の原産地における 原石群の元素比の平均値と標準偏差値	184
表1-2	各サヌカイト（安山岩）の原産地における 原石群の元素比の平均値と標準偏差値	185
表1-3	原石産地不明の組成の似た遺物で作られた 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	186
表 2	岩屋原産地からの サヌカイト原石66個の分類結果	187

表 3	和泉・岸和田原産地からの サヌカイト原石72個の分類結果	187
表 4	和歌山市梅原原産地からの サヌカイト原石21個の分類結果	187
表 5	郡戸遺跡出土サヌカイト製石器・剝片の 元素比分析結果	188
表 6	郡戸遺跡出土サヌカイト製石器・剝片の 産地分析結果	189

付

付図 1 郡戸遺跡全体図（1）

付図 2 郡戸遺跡全体図（2）

写真図版目次

図版1	全景 vol. 1 (航空写真)		
図版2	全景 vol. 2 (航空写真)		
図版3	全景 vol. 3 (航空写真)		
図版4	左上 谷 (東から) 左中 谷 (北西から) 左下 谷 (東から)	右列 遺物出土状況 (南東から) (北から) (西から) (北東から) (東から)	
図版5	上 全景 飛鳥時代建物群 (南から)	下 建物 1 (南から)	
図版6	上 建物 2・溝88 (西から) 左中 建物 2 ピット67 断面 (北から) 左下 建物 2 ピット68 断面 (西から)	右中 建物 2 ピット72 断面 (南から)	
図版7	上 建物 3 (南から) 左中 建物 3 ピット205 断面 (南から) 左下 建物 3 ピット208 断面 (東から)	右中 建物 3 ピット210 柱根出土状況 (南から) 右下 建物 3 ピット213 柱根出土状況 (北から)	
図版8	上 建物 4 (南から) 下 建物 5 (南から)	中 建物 4 ピット218 断面 (東から)	
図版9	上 建物 6 (西から) 左中 溝 1・3 (北から) 左下 溝88 (東から)	右上 建物 6 ピット237 断面 (東から) 右中 土坑241 (東から) 右下 土坑241 遺物出土状況 (南から)	
図版10	上 建物 8・9 (南から)	下 建物 8 (西から)	
図版11	上 建物10・11・12・13・14 (北から)	下 建物11 (北から)	
図版12	上 建物13・14 (東から) 下 建物17 (東から)	中 建物16 (東から)	
図版13	上 近景 (北から)	下 近景 (東から)	
図版14	上 建物18 (西から) 下 建物20 (南から)	中 建物19 (西から)	
図版15	上 建物21 (南から) 下 建物25 (南から)	中 建物22 (南から)	
図版16	上 建物24 (西から) 下左 建物33 (東から)	中 建物26・31 (北から) 下右 建物36 (東から)	
図版17	上左 ピット395 遺物出土状況 (西から) 下左 井戸139 (西から) 上左 溝838 (北から) 下左 溝396 遺物アップ (北から) 下中 溝396 遺物アップ (北から)	上右 土坑658 遺物出土状況 (南から) 下右 井戸657 遺物出土状況 (北から) 上右 溝396 遺物出土状況 (北から) 下右 溝396 遺物アップ (北から)	
図版18	上左 近景 (東から) 下左 溝621 (北から)	上右 溝621 遺物出土状況 (北から) 下右 溝621 遺物出土状況 (南東から)	
図版19	上左 撥痕跡 檜出状況 (北西から) 下左 撥痕跡 断面 (南西から) 上左 溝621 (北東から) 下左 溝621 (南西から)	上右 炉933 檜出状況 (西から) 下右 炉952 檜出状況 (東から) 上右 溝344 (東から) 下右 溝344 (北西から)	
図版20	石器 (1)		
図版21	石器 (2)		
図版22	石器 (3)		

図版23	谷843出土遺物		
図版24	土坑625・谷914・7層・土坑241出土遺物		
図版25	土坑241・溝3・88・390・5層・ピット160・176出土遺物		
図版26	ピット306・395・777・827・土坑658・680出土遺物		
図版27	井戸657・土坑658出土遺物		
図版28	井戸657・溝396・684・752・838出土遺物		
図版29	溝396・621・929出土遺物		
図版30	溝594・4層・土坑913・921・溝344・3層出土遺物		
図版31	3層出土遺物		
図版32	陶磁器		
図版33	1段左1トレンチ 南壁断面 2段左6トレンチ 南壁東半断面（東端） 3段左7トレンチ 南西壁断面（南東端） 4段左7トレンチ 4面以下深掘り南壁断面（東半）	1段右1トレンチ 南壁断面 2段右6トレンチ 南壁西半断面 3段右7トレンチ 南西壁断面（中程） 4段右7トレンチ 4面以下深掘り南壁断面（西半）	
図版34	上左 古墳1（南から） 下左 古墳1残り部分（北東から）	上右 古墳1土器出土状況（北から） 下右 古墳1土器出土状況アップ（北東から）	
図版35	上左 古墳2（西から） 下左 古墳2残り部分（北から）	上右 落込み1187全景（南東から） 下右 落込み1187土器出土状況	
図版36	1段 古墳3（手前は建物III・IV） 2段左古墳3周溝内土器出土状況 （土器4・5南東から） 上 古墳3北東側周溝断面（南東から）	2段右古墳3周溝内土器出土状況 （土器1～3北西から） 下 古墳3南東側周溝断面（北東から）	
図版37	1段 古墳4（北から） 2段左古墳4土器出土状況（南から） 上 古墳4北側周溝断面（西から） （右側に溝1710も重複）	2段右古墳4南側周溝断面（東から） 下 古墳4西側周溝断面（南から）	
図版38	上左 7トレンチ西半 4面南側（北東から） 下左 7トレンチ西半 4面北側（東から）	上右 7トレンチ西半 4面古南側（北東から） 下右 7トレンチ西半 4面古北側（東から）	
図版39	上左 建物I 下左 建物II	上右 建物III・IV 下右 建物V	
図版40	上左 建物VI 下左 建物VII	上右 建物VIII（北半） 下右 建物VIII（南半）	
図版41	上左 建物IX 下左 建物X	上右 建物XI 下右 建物XII	
図版42	上左 建物XIII 下左 建物XIV	上右 建物XV 下右 建物XVI	
図版43	上 建物I・II 上左 建物I柱穴78断面（東から） 下左 建物II柱穴128（北から）土器出土状況	上右 建物III柱穴1847土器出土状況 下右 建物III柱穴1825土器出土状況（西から）	
図版44	上左 建物III柱穴1843断面・土器出土状況（東から） 下左 建物III柱穴1840断面（南から） 上左 建物V柱穴1880断面（北から） 下左 建物VI柱穴1908断面（北から）	上右 建物III柱穴1843土器出土状況 下右 建物IV柱穴1826断面（北から） 上右 建物VII柱穴1936断面（北から） 下右 建物VIII北半（旧VIII）柱穴1931断面（西から）	
図版45	上左 建物VIII南半（旧XVI）柱穴1905断面（北から） 下左 建物IX柱穴1960断面（南から） 上左 建物XII柱穴1821断面（南から） 下左 建物XIII柱穴2038断面（西から）	上右 建物X（旧XVII）柱穴2166断面（西から） 下右 建物XI柱穴2093断面（西から） 上右 建物XIV柱穴2033断面（南から） 下右 建物XV柱穴2022断面（西から）	
図版46	上 1トレンチ ピット列群・溝群・轍（南から）	中 1トレンチ ピット列群・溝群・轍（南西から）	

	下	6トレンチ ピット列群・溝群・轍 (南から)		
図版47	上	3トレンチ 溝・ピット・土坑 (南から)	中	4トレンチ 溝・ピット・土坑 (西から)
	下	4トレンチ ピット2416 (北から)		
図版48	上	溝1063・古墳1 (南から)	中右	溝1063断面 (北から)
	中左	溝1063南側断面 (南西から)	下右	溝1063土器出土状況 (北から)
	下左	ピット1598・溝1504出土状況 (北東から)		
図版49	上左	溝1710土器1出土状況 (西から)	上右	ピット1850土器出土状況 (北西から)
	下左	溝1710土器2出土状況 (西から)	下右	ピット1790土器出土状況 (南西から)
	上左	溝1710土器3出土状況 (南東から)	上右	ピット2137土器出土状況 (南東から)
	下左	7トレンチ東半 4面	下右	ピット2183土器出土状況 (東から)
図版50	上	1トレンチ西半 2面 (南から)	下	1トレンチ東半 3面 (南西から)
図版51	上	3トレンチ 2面 (南から)	下	4トレンチ 2面 (西から)
図版52	上	6トレンチ東半 2面 (南から)	下	6トレンチ西半 2面 (南から)
図版53	上	7トレンチ東半 3面 (北東から)	下	7トレンチ西半 3面 (東から)
図版54	1段	溝001断面 (東から)		2段右ピット117出土状況 (西から)
	2段左溝1707土器出土状況 (南から)			4段右旧明法寺池堤防断面 (南から)
	3段	旧明法寺池現況 (南東から)		
	4段左旧明法寺池堤防検出状況 (西から)			
図版55		石器 (1)		
図版56		石器 (2)		
図版57		石器 (3)		
図版58		石器 (4)・古墳1出土遺物		
図版59		古墳1・2・3出土遺物		
図版60		古墳4・5・6出土遺物		
図版61		建物II・III・VIII・X出土遺物		
図版62		建物X・XIV・XV出土遺物・陶磁器		
図版63		溝001・1048・ピット117・土坑604・溝1063・1707出土遺物		
図版64		溝1710・ピット149・1506・1790・2137・2183・2416出土遺物		
図版65		包含層出土遺物		
図版66		全景 (航空写真)		
図版67	上	古墳4 (西から)	中	古墳7 全景 (東から)
	下左	周溝 断面 (東から)	下右	周溝 断面 (南から)
図版68	1段左溝1	遺物出土状況 (北東から)	1段右土坑45	遺物出土状況 (南から)
	2段左溝2	(南西から)	2段右土坑33	(北から)
	3段左溝3	(南西から)	3段右溝7・8	断面 (東から)
	4段左溝35	(西から)	4段右落込み6	断面 (南から)
図版69		溝1・7・8・土坑33・ピット45・落込み6・3層・4層		

第Ⅰ章 位置と環境

地理的環境

郡戸遺跡は大阪府羽曳野市郡戸に所在し、西端は南河内郡美原町丹上遺跡・真福寺遺跡に接し、東端は羽曳野市河原城遺跡に接している。

遺跡周辺は、東除川と西除川に挟まれた中位段丘面でも、標高38~40mの比較的平坦な面にあたる。この中位段丘面は、大阪狭山市池尻付近の標高80mを最高所として北の平野区瓜破地区に向かって緩やかに傾斜し、東端と西端のより低位の地形面との高度差では、西端より東端の方が大きい。また、東除川の活発な下方侵食作用は、各地形面との間に2~8mの深い段丘崖を形成するのに対して、西除川の侵食作用は緩やかで、1~2m程度の崖と広い谷底平野を形成している¹⁾。

段丘面上には、多くの浅い開析谷が刻まれており、郡戸遺跡のほぼ中央にも南の青ヶ池西を通って北の大座間池へ抜ける南北方向の谷が存在している。これら谷の多くは複数の不整形な溜池「谷池」を伴っており、平坦部での方形の溜池「皿池」とともにこの地域の特徴的な景観を形成している。これら溜池の築造時期の問題は、段丘面の耕地開発と関連する重要な課題を含んでいる。

阪和自動車道建設に伴う調査では多くの谷が調査され、このうち幅100m前後の大きな谷からは流路が検出された。流路は、谷内を蛇行しながら停滞期と活動期を繰り返し、遅くとも10世紀頃には埋没して平坦地となり、さらに13世紀頃の遺物を包含する整地土層が確認されている。日置荘遺跡では、谷斜面から天井部が削平された6世紀中葉の須恵器窯が検出された。両側の平坦部からは7世紀後半から8世紀前半と9世紀から11世紀中葉の集落が検出され、周辺の大規模な土地改変事業が早くとも7世紀後半以降には行なわれ、谷が埋没する11世紀中葉には集落も移動している事が明らかにされた。これらの調査結果は直接溜池の築造時期を示すものではなく、また谷地形が全て同じ経過を経たとは考えない。しかし、狭山池の築造時期が7世紀初頭で確定され、池の築造を契機として段丘面上の開発が可能になったとする説があるが²⁾、少なくとも標高40m以上の段丘面については、なお周辺地域での調査資料の蓄積が必要と思われる。

歴史的環境

遺跡周辺は、旧石器時代から弥生時代の遺跡が希薄な地域である。

これまでにも国府型ナイフ形石器・有舌尖頭器が多数出土しているがいずれも後世の遺構や包含層からの出土である。しかし、太井遺跡や南花田遺跡では旧石器包含層が確認され、太井遺跡からは舟底形石器・有舌尖頭器・ナイフ形石器など900点余りが、南花田遺跡からは、縦長剝片素材のナイフ形石器を含む400点以上の石器が出土している。弥生時代の遺跡はさらに希薄で、周辺の丹上遺跡・真福寺遺跡・太井遺跡で石包丁・石匙・石鏟・後期土器が少量出土している程度である。



図1 遺跡位置図

美原町黒山には、24領もの短甲をはじめ多量の鉄製品が出土した全長114mの黒姫山古墳が所在する。古墳の東と西には開析谷がはしり、古墳築造時には東側谷部とは約5m以上の比高差を有していた事が確認されている。かつて周辺には陪塚と考えられた6ないし7基の古墳が存在していた。その一つサバ山古墳は、全長34mの葺石と埴輪を伴う帆立貝式古墳で、黒姫山古墳に後続する古墳である事が確認された。また、太井遺跡で検出された飛鳥時代の井戸枠に転用された埴輪は、黒姫山古墳出土の埴輪と特徴が異なるが、周辺には黒姫山古墳の他にも大型の埴輪を伴う古墳が存在していた事を示唆している。この他、太井遺跡や真福寺遺跡からは、5世紀末から6世紀初頭の一辺10m前後の方墳が検出されている。丹上遺跡北端からも5世紀末の方墳が検出され、「雄略陵」説のある河内大塚山古墳や立部古墳群・山ノ内遺跡（山ノ内古墳）との関係が注目される。百舌鳥・古市両古墳群の中間地帯において、黒姫山古墳や河内大塚古墳以外にも多くの古墳が存在していた事を示す資料が蓄積されつつある。

6世紀後半になると周辺地域でも遺跡数が増加する。河原城遺跡では、堅穴住居群から掘立柱建物群へ移行する6世紀後半から7世紀の集落の様子が明らかにされ、太井遺跡では堅穴住居と掘立柱建物からなる集落の一旦が明らかにされている³⁾。南花田遺跡からは、二重の溝で区画された大型の掘立柱建物の一部が検出されている⁴⁾。8世紀まで継続する河原城遺跡を除き、いずれも存続期間は長くはない。生産遺跡では、樋野ヶ谷池窯・平尾窯⁵⁾・日置荘西町窯など須恵器や埴輪の窯跡の他に、南花田遺跡や余部遺跡で検出された畠が注目される。余部遺跡の畠は、800m²以上の規模で、近接地点で掘立柱建物も検出されている⁶⁾。段丘面上での農業生産の一形態を示している。

7世紀以降になると、周辺でも遺跡数が増加し、文献にも当地域に関連した「丹比坂」などの地名・当地域を本貫地とする丹比連とその同族および丹比公の一族や秦氏をはじめ渡来系氏族の人名や開発に関する記事が多く登場する。当地域は河内国丹比郡11郷のうち丹上郷と一部黒山郷に属し、丹北・丹南・八上の3郡に分かれた11世紀後半以後は丹南郡に属する。郡戸遺跡は、その地名から丹比郡の郡家とする説もあるが発掘調査件数も少なく実体は明らかでない。9世紀以降には、石清水八幡宮領田井庄・宮家領菅生庄・興福寺領日置庄・狭山庄・広隆寺領松原庄など社寺・宮家領の莊園が置かれ、律令制下の郡郷制が変容する中で複雑な展開を見せる。

7世紀初頭から8世紀の平尾遺跡からは柵列や溝の区画施設を含む42棟の掘立柱建物が検出され、丹比郡の郡衙もしくは初代催銭司丹比真人三宅麻呂など、中央との繋がりが深い皇別系新興氏族「丹比公・真人」氏との関連も推定されている⁷⁾。北約500mの地点には、地元で（オオテラ）と呼ばれ、檜隅寺式の塔心礎や池田寺式軒丸瓦や平城宮式系軒丸瓦を出土する丹比廃寺や丹比連の祖先神「火明命」や丹治比公の氏神「端歯別命」を祭神とする式内社丹比神社が位置する。遺跡の南には、茅渟道に比定される平尾村から黒山村・余部村・堺市原寺村を経て堺市閔茶屋へ至るルートが通じている。

黒山郷のほぼ中央に位置する太井遺跡からは、7世紀末から8世紀の真北方向の溝で区画された数時期の掘立柱建物からなる屋敷地と青銅製品の鋳造土坑が検出され、多量のトリベ・ルツボ・和同開珎・貞岩製丸鞘・円面硯・統一新羅系土器が出土している。東500mの地点には、小金銅仏の右手先や瓦塔・平城宮式系軒丸瓦を出土した7世紀後半から8世紀後半頃の黒山廃寺が位置し、仏具生産を通じて同廃寺との関連が窺われる。

条里制と古代の道については、歴史地理分野での研究が多く蓄積されている。周辺地域では、真福寺遺跡で検出された10世紀前半の条里型地割に一致する南北溝が施工時期の上限を示す資料である。古代官道に関する遺構は堺市大和川・今池遺跡・松原市上田2丁目遺跡・羽曳野市伊賀南遺跡などで検出さ



- | | | | | |
|----------|-------------|--------------|-----------|-------------|
| 1 郡戸遺跡 | 13 黒山廐寺 | 25 乃木寺北古墳 | 37 伊賀南遺跡 | 49 高鷲七丁目散布地 |
| 2 立部遺跡 | 14 丹比神社 | 26 坂戸廐寺 | 38 榎山遺跡 | 50 島泉九丁目散布地 |
| 3 立部古墳群跡 | 15 丹比廐寺跡 | 27 西浦古墳群 | 39 伊賀遺跡 | 51 古市大溝 |
| 4 真福寺遺跡 | 16 黒山遺跡 | 28 藏の内遺跡 | 40 阿弥陀廐寺 | 52 高鷲遺跡 |
| 5 太井遺跡 | 17 平尾遺跡 | 29 徳樂山古墳 | 41 新堂遺跡 | 53 高鷲中島遺跡 |
| 6 黒畠山古墳 | 18 六ツ塚河原城古墳 | 30 藏の内古墓 | 42 上田町遺跡 | 54 岡ミサンザイ古墳 |
| 7 大保遺跡 | 19 石曳遺跡 | 31 農林センター散布地 | 43 山ノ内古墳跡 | 55 葛井寺跡 |
| 8 真福寺跡 | 20 郡戸東遺跡 | 32 軽里遺跡 | 44 丹比大溝 | 56 葛井寺跡 |
| 9 丹南遺跡 | 21 平下遺跡 | 33 ボケ山古墳 | 45 楠野ヶ池窯跡 | 57 鉢塚古墳 |
| 10 岡遺跡 | 22 善正寺跡 | 34 野々上遺跡 | 46 大塚山古墳 | 58 北岡遺跡 |
| 11 丹上遺跡 | 23 峯ヶ塚古墳 | 35 下田池瓦窯跡 | 47 恵我之荘遺跡 | 59 はぎみ山遺跡 |
| 12 河原城遺跡 | 24 増生野南塚古墳 | 36 野中寺旧伽藍跡 | 48 明教寺跡 | 60 雨ヶ池古墳 |

図2 周辺遺跡分布図（縮尺2万5千分の1）

国土地理院発行 1:25000地形図に加筆

第Ⅰ章 位置と環境

れており、いずれも7世紀代の年代が得られている。一方、足利健亮氏は、南北方向地割に斜向する表層古道痕跡に注目し、正方位条里地割に先行する、斜向条里地割が存在する事を指摘し、斜向丹比道と斜向大津道を推定した⁸⁾。このうち斜向丹比道にあたる松原市立部1丁目や松原市新堂2丁目遺跡からは橋や水路の遺構が検出され、丹上遺跡からは斜向地割に平行あるいは直交する溝が検出されている。

また、松田正男氏は、丹上遺跡と真福寺遺跡を隔て、大庭間池の南を東西に通じる道路を、丹比道に比定する⁹⁾。難波大道や丹比道・磯齒津路・大津道に比定されるルート添いや交点には、野中寺・西琳寺など有力寺院が分布しており、南花田遺跡・丹上遺跡・長曾根遺跡・野々上遺跡・伊賀遺跡などでは、計画的に配置された大型の掘立柱建物群が検出されている。丹比道に接する丹上遺跡からも、石帶（巡方）や墨書き土器が出土し、「コ」字に配置された大型掘立柱建物群を駅家とする説もある¹⁰⁾。

10世紀以降の集落遺跡は、観音寺に代表される屋敷地の他は、掘立柱建物2～3棟と倉1～2棟を1単位とする小グループが点在する姿が、丹上・真福寺・太井遺跡などで確認されている。

一方、平安時代後期を経て鎌倉時代から室町末期には、大保遺跡・立部遺跡・松原市上田2丁目所在遺跡（金屋友国遺跡）・余部遺跡など「河内（丹南）鑄物師」に関連する集落が急増する。彼らの活躍の痕跡は、全国の金石文や文献資料からも窺う事ができ、「河内鍋」に代表される鉄製品など金属生産技術を持った職能集団をも内包していた。

註

- 1) 服部昌之 1999 「自然地理編」『美原町史』第1巻 美原町史編纂委員会
- 2) 小山田宏一 1999 「古代の開発と治水」『狭山池』論考編 狹山池調査事務所
- 3) 大阪府教育委員会 1989 『太井遺跡発掘調査概要』—府立農芸高校牛舎建設に伴う調査—
- 4) 大阪府教育委員会 1990 『南花田遺跡発掘調査概要』IV
- 5) 財團法人 元興寺文化財研究所考古学研究室 1979 『美原町土塁跡試掘調査概要報告書・美原町平尾古窯址群発掘調査報告書』考古学研究室調査概要第8冊
- 6) 大阪府教育委員会 1999 『余部遺跡（その2）発掘調査概要』II—府営美原北余部住宅建て替え工事（第2期）に伴う発掘調査—
- 7) 濑川健 1976 「平尾遺跡の構造について」『古代を考える』2 平尾遺跡の検討 古代を考える会
- 8) 足利健亮 1985 「攝河泉州の古代計画道路」『日本古代地理研究』一畿内とその周辺における土地計画の復元と考察—
- 9) 松田正男 1993 「古代丹比道の復元」『大阪春秋』第72号 大阪春秋社
- 10) 河内一浩 1997 「羽曳野市野中寺東方地区の発掘調査」—大型掘立柱建物群と古櫃・面—『大阪府下埋蔵文化財研究会 第(35回) 資料』 財團法人 大阪府文化財調査研究センター

参考文献

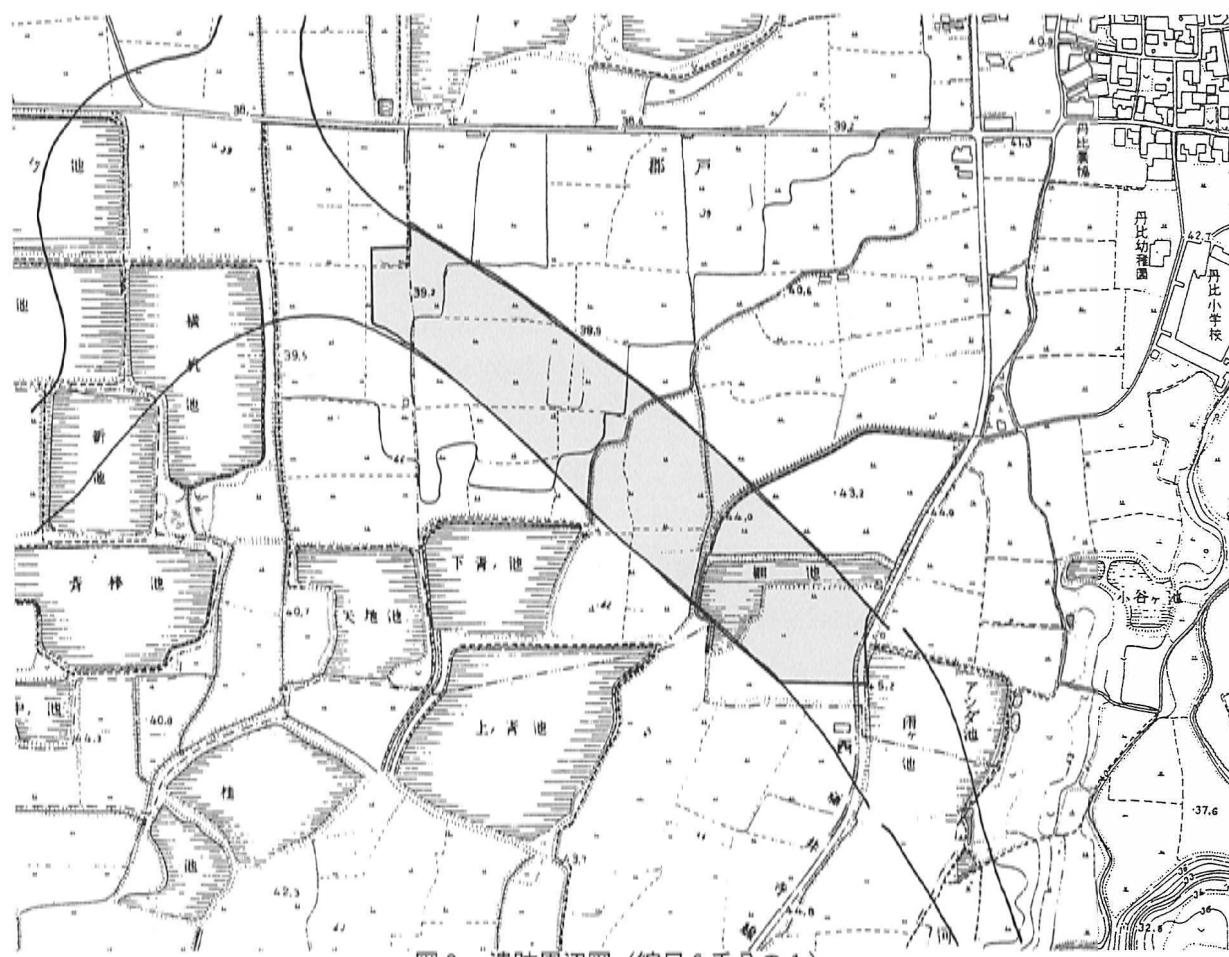
- 大阪府教育委員会・財團法人 大阪文化財センター 1995 『大阪府堺市・南河内郡美原町所在 日置莊遺跡』—近畿自動車道松原すきみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—
- 大阪府教育委員会・財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1996 『大阪府南河内郡美原町所在 太井遺跡』—近畿自動車道松原すきみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—
- 大阪府教育委員会・財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1997 (財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第19集 『大阪府南河内郡美原町所在 真福寺遺跡』—近畿自動車道松原すきみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—
- 大阪府教育委員会・財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1998 (財) 大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書 第28集『大阪府南河内郡美原町・松原市所在 丹上遺跡』近畿自動車道和歌山線・都市計画道路松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書
- 財團法人 大阪府文化財調査研究センター 1998 (財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第34集『大阪府松原市所在 観音寺遺跡』近畿自動車道那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書
- 美原町史編纂委員会 1999 『美原町史』第1巻

第II章 調査に至る経緯と経過

郡戸遺跡は、昭和50年度に実施された分布調査の際、大座間池の南側の水田地帯から、弥生時代の石鏃や古墳時代から奈良時代の須恵器や中世の青磁碗などが採集された事によって周知された遺跡である。その地名から、古代丹比郡の郡家が置かれていたと推定されてはいたが、これまで個人住宅の建設に伴う小規模な発掘調査が数箇所で実施された程度で、遺跡の内容についてはほとんど明らかにされていなかった。

今回の調査の契機となった南阪奈道路は、大阪府南河内郡美原町丹上（現阪和自動車道）を起点とし、奈良県北葛城郡新庄村（国道165号線大和高田バイパス）を終点とする、総延長16.9km の第1種3級道路（自動車専用道路）である。路線名は府道美原太子線・一般国道165号線・166号線で、この間を国土交通省・日本道路公団・大阪府・大阪府道路公社・奈良県の合併施工によって事業が進められている。

この道路設計画は昭和46年度まで遡る。当時、建設省近畿地方建設局（現国土交通省近畿地方整備局）浪速国道工事事務所は、南河内地域の交通渋滞の緩和と、奈良県中和地域との連絡網の整備を目的として、一般国道165号線南河内バイパス道路の建設を計画した。建設省は、ルート選定に先立って、南河内郡美原町丹上から太子町までの間の分布調査を、財団法人 元興寺佛教民俗資料研究所（現財団法人 元興寺文化財研究所）に依頼した。道路工事が公示された昭和49年度には、分布調査の結果遺跡



第II章 調査に至る経緯と経過

の範囲が広がることが指摘された尺度地区での範囲確認調査を、再度、財団法人 元興寺仏教民俗資料研究所に依頼した。調査は大阪府農林技術センターの敷地内で実施され、須恵器を含む包含層と溝・柱穴等の遺構が検出された事から、道路建設予定地周辺に遺跡が広がっている事が確実となつた。

昭和50年度、建設省は、再度、計画地域内の分布調査を大阪府教育委員会に依頼した。依頼を受けた大阪府教育委員会は協議の結果、調査は財団法人 大阪文化財センター（現財団法人 大阪府文化財センター・以下センター）で実施するのが適当である事を回答すると共に、センターに対しても調査を実地するように通知した。これを受け、センターは、建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所と昭和50年12月1日付けで委託契約を結び、調査に着手した。

調査は、広範囲な道路計画地域を便宜上6地域に分けて実施された。西端の第1地域は、都市計画道路松原～泉大津線予定路線から東除川までの範囲である。調査の結果、郡戸遺跡が発見された他、尺度遺跡を含む第3地区から石川までの第4地区において多くの遺物の散布が認められた。

昭和62年12月には、大阪府道路整備長期計画（レインボーチャート21）が策定され、この中で、南阪奈道路は、「南阪奈軸の主要な路線の一つ」と位置付けられ、「大阪と奈良を結ぶ自動車専用道路として、関西国際空港のアクセス道路として、また西名阪自動車道、国道166号の混雑緩和に寄与する」重要な路線として、平成2年12月、都市計画決定がなされた。

平成5年度には、大阪府土木部道路課は大阪府教育委員会に対して事業内容を説明し、大阪府教育委員会はこれを受けて協議し、平成6年度、事業予定地内全域において現地を踏査し、試掘調査を必要とする地区、さらに分布調査を必要とする地区、本調査地区を確認した。

平成7年度、大阪府教育委員会は、各事業者に対し、調査はセンターに委託して実施することが適當である旨を回答すると同時に、センターに対しても調査を実施するよう通知した。これを受け、センターは各事業者と委託契約を結び、平成8年度、太子町駒ヶ谷地区・地獄谷地区から順次調査に着手していった。

阪和自動車道から国道170号線（外環状線）までの4.6kmは、本線部（府道美原太子線）と側道部（一般国道）が併設する区間で、本線部を大阪府と大阪府道路公社、側道部を大阪府が事業者となって施工されている。センターは、平成12年5月12日付けで、「南阪奈道路事業に伴う郡戸遺跡発掘調査」として、大阪府道路公社と委託契約を締結し、平成12年7月調査に着手した。

調査は、既に発注されていた道路高架橋脚下部工事の工区割の関係から、（その1）・（その2）・（その3）の3調査区にわかれ、各調査区はさらに複数の調査区に分割して進められた。全ての調査が終了したのは、平成14年3月である。この間には、（その1）調査区において、一般集落とは異なる飛鳥時代の計画的に配置された掘立柱建物群が検出された事から、平成12年9月9日 現地説明会を開催し、地元の方をはじめ多数の参加者を得た。

第III章 調査の方法

郡戸遺跡の発掘調査は、美原町丹上遺跡から羽曳野市河原城遺跡までの間約500mを対象として実施され、これは郡戸遺跡のほぼ中央を東西に横断する形となった。

調査対象地区は、すでに道路高架橋下部工事が発注されていた為、工事工区に制約されて（その1）・（その2）・（その3）の3調査区に分割された。各地区とも、NHK地下埋設線や既設農業用水路や道路の機能を確保しながら調査を進める必要があり、これら施設の振り替え時期や用地の取得状況や橋脚工事工程との関係から、調査区の設定は煩雑なものとなった。その結果、遺構番号の与え方についても全体の統一が図られず、一部混乱が見られたが、各種台帳等の記載内容の変更やその際生じる混乱を避けるため、複数の調査区にまたがる遺構を除いては、報告書作成段階であえて再整理・統一する事を避けた。

各調査区の設定は変則的となつたが、全域の地区割については、当センターの「遺跡調査マニュアル」に準拠して設定した。この地区割りは、国土座標である平面直角座標（17座標系）のうち、第VI座標系

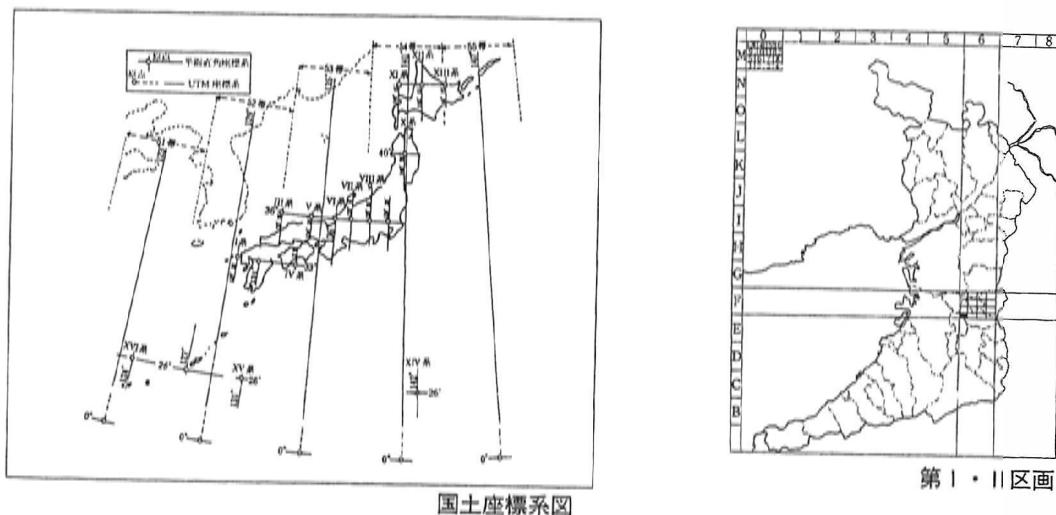


図4 地区割概念図

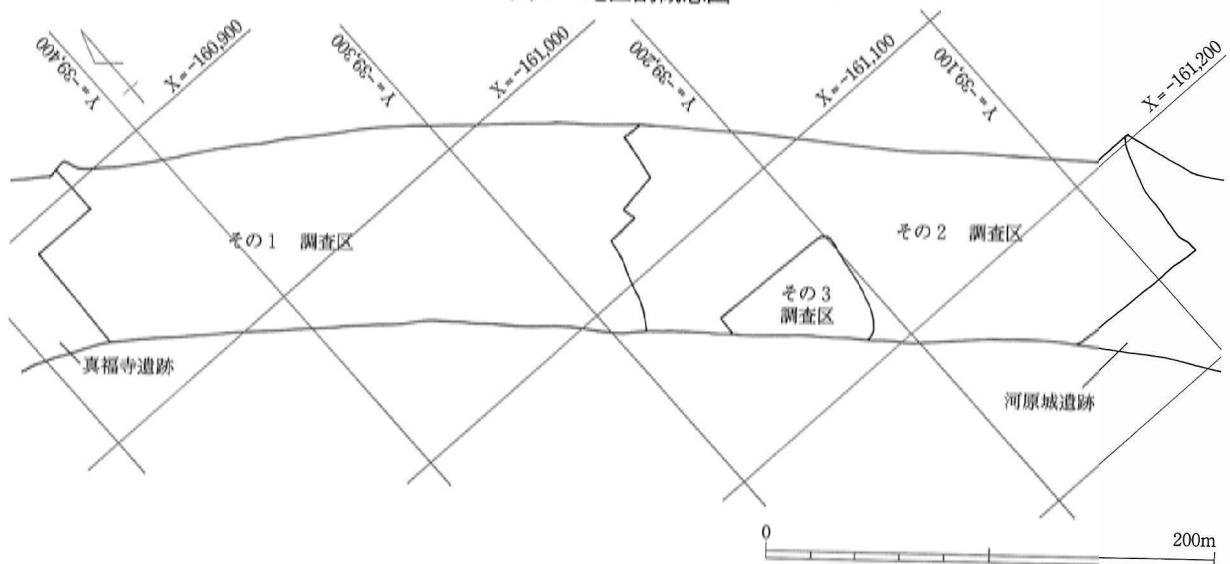


図5 調査区配置図

を基に大阪府全域を共通の方式で区画できるよう設定されたもので、第I区画から第VI区画まで設定されている。第I区画は、1/10,000地形図の地区割図をそのまま利用し、南北6km 東西8kmを最小区画とする。第II区画は、1/2,500地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第I区画の最小区画をさらに16分割した区画割であり、最小区画の範囲は南北1.5km 東西2kmとなる。第III区画は、第II区画の最小区画内を100m単位で区画するものである。検出遺構の平面位置や出土遺物の地点表示は、第III区画(A～O 1～20)とさらに第IV区画の最小区画内を10m単位で区画した第IV区画(a～j 1～10)により行なった。

具体的には、郡戸遺跡(その1) - 地区名 - A1(第III区画名) - a1(第IV区画名)で示される。

方位についても、地区割や測量基準線を国土座標系にそって設定した関係から、国土座標北を使用した。他の方位との関係は、真北は東へ0°12'、磁北は西へ6°40'振っている。

最終遺構面の測量はクレーンとヘリコプターによる航空測量を実施し、1/400撮影 1/50図化を基本としたが、掘立柱建物柱跡などの遺構が集中する調査区では1/200撮影 1/20図化を行なった。また、水路の切り替えなど少規模な追加調査や包含層掘削途中の平面図作成は平板測量によって補つた。

水準については、各調査区とも航空測量を受託した業者が設置した3級・4級の基準点を使用した。また、設置に際しては、隣接調査区の基準点との点検測量を行ない、相互の精度管理に努めた。

発掘調査は、表土・盛土・耕土までを重機を用いて掘削した後は、人力によって進められた。周辺地域の調査結果から、残りが浅い遺構の存在が予想されていた為、遺構・遺物の確認・検出作業は慎重に進められた。また、調査個所によっては複数の包含層の堆積が認められたため、各面での遺構検出に努め、必要に応じて順次図面作成や写真撮影などの記録作成作業を行なった。

(その2)・(その3)調査区内には、灌漑用池やその痕跡が存在しており、当初計画では調査対象外とされていた。しかし、これら池の築造時期については文献にも残されていない事から、大阪府と協議の結果、当地域の段丘面開発時期を知る上において重要と判断されたため、可能な地点での堤防の断ち割り調査を実施した。その結果、池の築造時期は早くても13世紀以降との結果が得られた。

遺跡周辺では後世の包含層・遺構から多くの旧石器が出土しているが、中位段丘面構成層上部には原位置を保つプライマリーな面が存在する事を指摘する意見もあった。今回、その点も含めて下層遺構の確認を目的とした、トレンチ調査を(その1)と(その2)調査区内3箇所で実施した。その結果、いずれのトレンチにおいても遺構・遺物は確認する事ができなかった。

また、(その1)調査区には南北方向の段丘面上を開析した埋没谷が存在する事が明らかになっていたが、調査を必要とする掘削深度に関するデータが得られていなかったため、調査区北端部で先行確認調査をおこなった。T.P+38.2m地点で6世紀後半代の須恵器を出土する層を確認し、それより下は無遺物の谷内堆積層であるとの結果が得られた為、以後の調査区ではこの層までを調査対象とした。

第IV章 調査の成果

第1節 全体の基本層序

郡戸遺跡は前章でも述べたが、中位段丘上の平坦面に位置している。そのため、沖積地のような河川や洪水による土砂の堆積は認められない。したがって、土層の堆積は概ね希薄であり、調査区全体に比較的均一な堆積状況をみせる。今回の調査区は幅約80～95m、総延長約500mと細長く、南北方向にのびる丘陵を横断する形で調査が行われた。各調査区における詳細な基本層序については、後述しているため、ここでは、今回の調査区全体の基本層序について述べるにとどめる。

第1層 現耕土および盛土である。ほぼ調査区全域に堆積する。重機による掘削を行った。

第2層 床土である。現代の耕作に伴う削平が著しく、残りは悪い。（その2）調査区を除いて重機による掘削を行った。

第3層 近世の耕作土層である。現代の耕作に伴う削平が著しく、残りは悪い。（その2）調査区の第2層にあたる。（その2）調査区を除いて重機による掘削を行った。

第4層 平安時代の包含層である。（その1）・（その3）調査区の「4層」、（その2）調査区の「3層系」に相当する。削平が著しく、堆積している個所は、（その1）調査区の開析谷の最上層および（その2）調査区の一部に限られる。層厚は10～65cmを測る。

第5層 古墳時代の開析谷および（その2）調査区の一部に堆積する。（その2）調査区の「4層」および「4層新」に相当する。

第6層 いわゆる基盤層で、黄褐色シルト層が堆積する部分と、そのシルト層が削平を受けてさらに下層に堆積する砂礫層が露出する部分がある。面的に調査を行ったのはこの層の上面までである。下層の堆積状況を確認するためトレンチを入れたが、その詳細については（その2）調査区の基本層序を参照されたい。

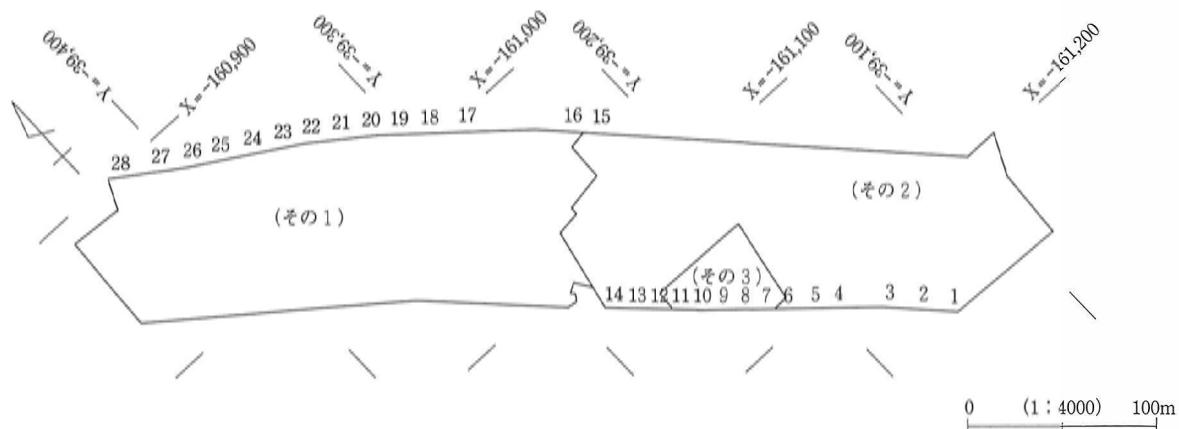


図6 柱状図ポイント位置図

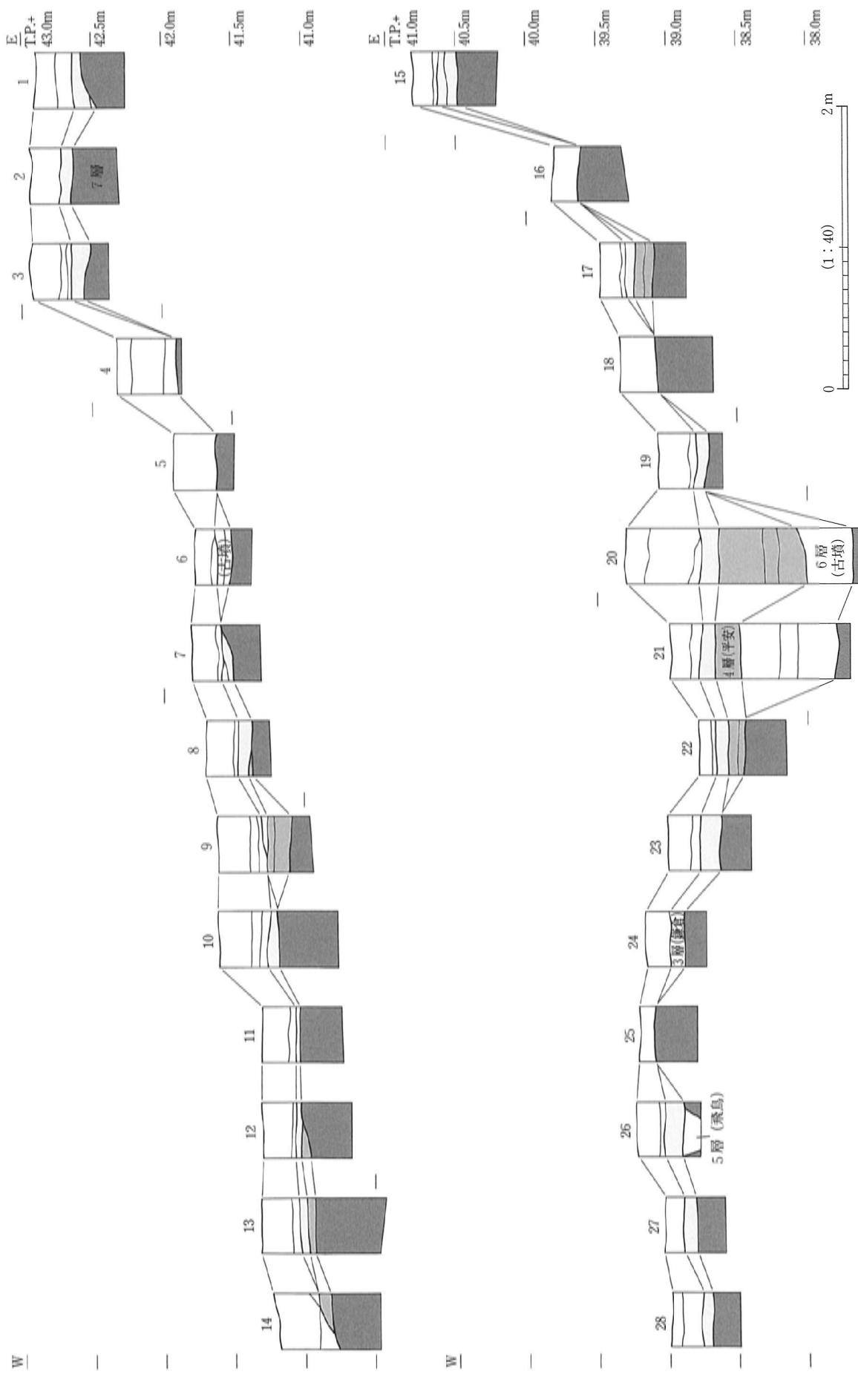


図7 基本層序 柱状図

第2節（その1）調査区

第1項 位置

（その1）調査区は羽曳野市郡戸に所在する。当調査区は美原町真福寺遺跡の南東、郡戸遺跡（その2）調査区の北西に隣接しており、長辺約270m、短辺約90mを測る。

当調査区は、東除川と西除川に挟まれた中位段丘面上に立地しており、標高はT.P.+38.8～40.9mを測る。この高低差は、当調査区の中央部を南北方向にのびる開析谷によるものである。ちなみに調査区の外側では、南には上青井池、下青井池、北には大座間池など、この開析谷を堰き止めて造られた溜池が多く存在する。

このように当調査区では、開析谷を挟んだ東西両側に段丘平坦面があり、東側の段丘平坦面の標高はT.P.+40.9m、西側の段丘平坦面の標高はT.P.+39.1mと、東側の段丘が西側の段丘と比べて高い。

東側の段丘から中央部の開析谷に向かっての下がりは急である。これは、後世の開発に伴って削平を受けているため現状を留めないものの、周囲の地形などから段丘崖が形成されていたことによると考えられる。西側の段丘と開析谷との比高差は0.3mと少ないが、これは西側の段丘が東側のそれと比べて低いことと併せて、開析谷の底部が埋没してしまったためである。この西側の段丘の西には、真福寺遺跡に広がる段丘との間に存在する谷に向かって緩やかに下がる。

つまり今回の調査は、南北方向に展開する段丘およびその間にはしる開析谷を横断する形で調査区が設定されたことになる。

第2項 基本層序（図9）

当調査区は洪積台地の上に立地しているため、土層の堆積は薄い。従って、現耕土および中世段階での耕作によってかなり削平を受けている。

第1層は現耕土、第2層は床土であるため、重機による掘削を行った。第3層は古代から中世にかけての包含層である。土質は2.5Y6/1シルト・極細砂まじり細砂で、鉄分の沈着が顕著に認められるが、

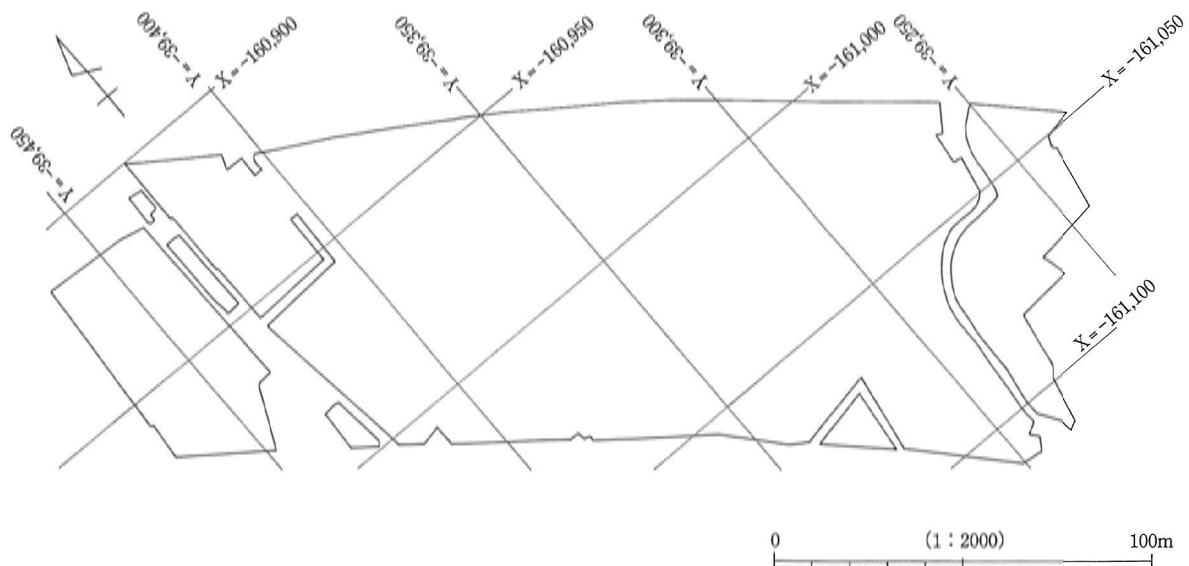
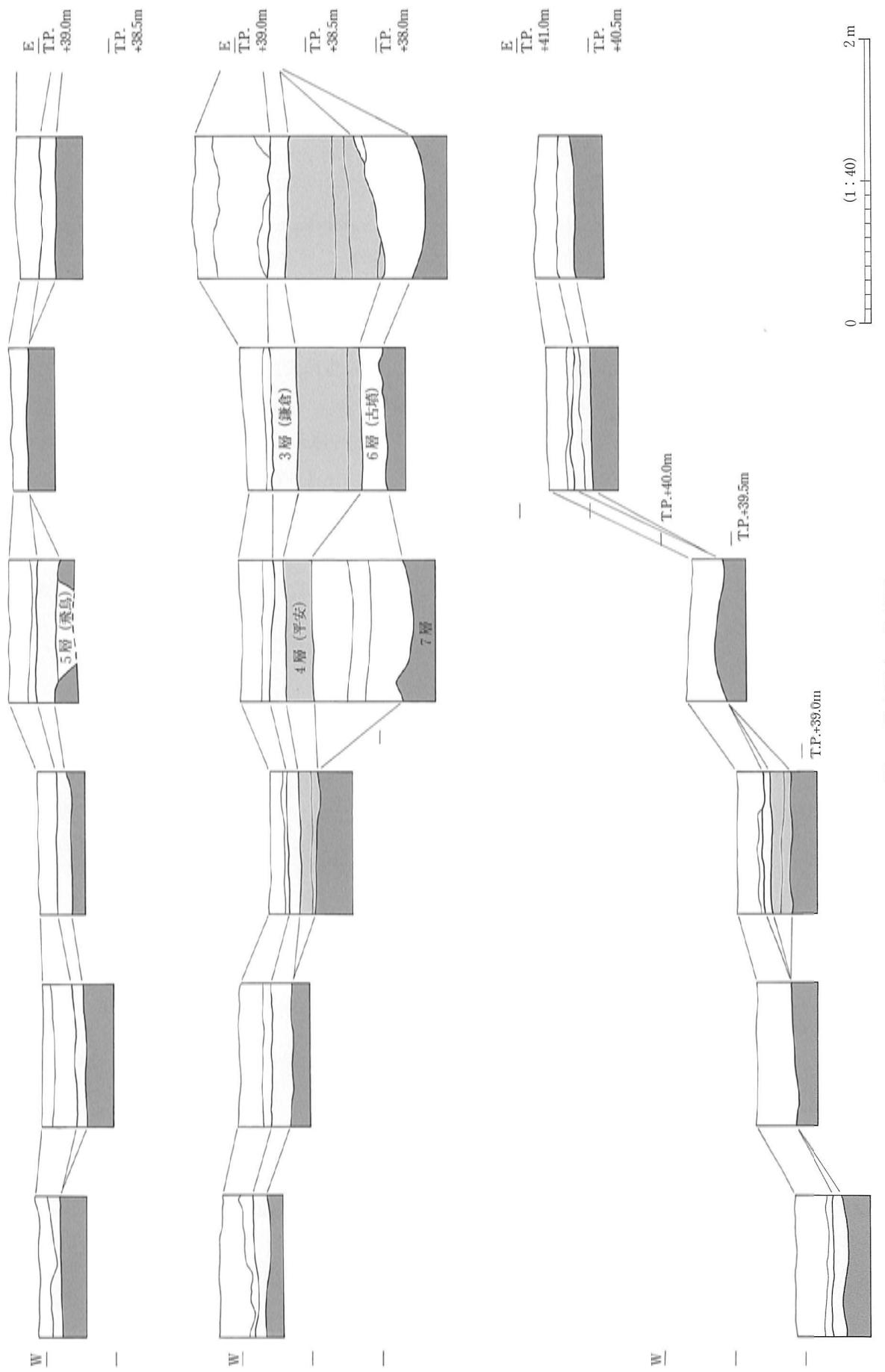


図8 調査区配置図



開析谷のあたりは砂質が強くなる。この層は中世段階に行われたこの地域の開発によって耕地化した際の耕作土として形成されたと考えられ、この層の直下に基盤層が存在する個所が多い。第4層は中世に、開析谷を利用して掘り込まれた溝の堆積層で、4層に細分できるが、最下層の10YR4/1シルトまじり極細砂およびその上層の10YR7/2細砂は流水堆積であることから、溝が機能していた際の堆積と考えられる。中層の7.5Y7/1シルトはほぼ水平に堆積しており、溝としての機能が失われてしまってからの滯水堆積層と考えられる。最上層の10YR6/6中砂は、大人の拳大のシルトブロックを多く含んでいたことなどから、溝を含めた谷部を埋めて耕地化した際の整地土層である。第5層は古墳時代の包含層で、開析谷の埋没過程の中で堆積した。堆積層は3つに細分できる。下層には10YR6/4シルトと粗・中砂の互層が堆積する。この層からは須恵器の完形品が多く出土した。中層は10YR4/3シルトまじり細砂が、

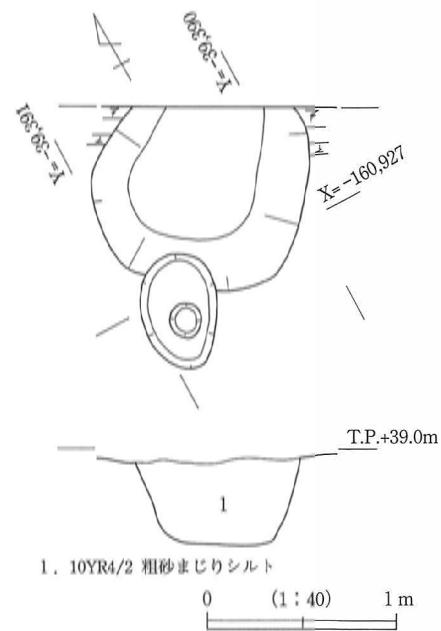


図10 土坑249 平・断面図

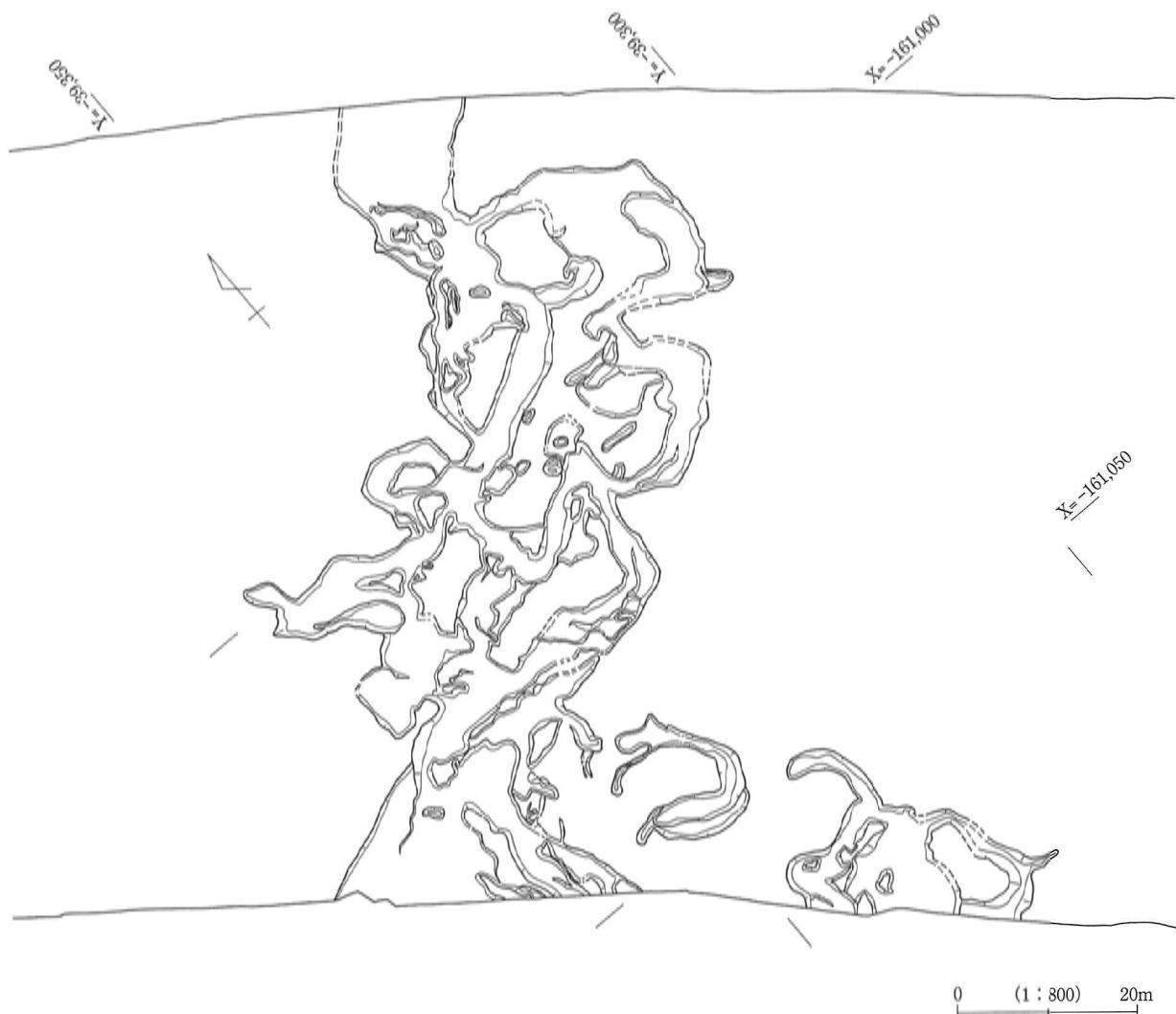


図11 谷 平面図

上層には10YR5/6粗砂まじり極細砂が堆積するが、いずれも谷の西側にのみ堆積する。第6層は基盤層である。基盤層は10YR6/8シルト層や粗・中砂層、その下に堆積する礫層（直径3～5cm）で構成される。上層の10YR6/8シルト層は調査区のほぼ全域で堆積が認められる。それに対し粗砂層は開析谷の底部にみられる。これは開析谷が形成されてから埋没する過程の中で堆積したものであると考えられる。下層の礫層は調査区の東側段丘崖の下で認められた。ここでも礫層の上層にはシルト層が堆積していたのであろうが、後世の開墾時に削平を受けた際に失われて、礫層が露出したものと考えられる。

第3項 遺構

古墳時代

検出した遺構は谷、土坑などであるが、総じて遺構は希薄である。

谷 谷は、調査区の中央部を概ね南西—北東方向にはしる。基本層序でも述べたが、当調査区は東西両側に段丘の高まりがあり、その間に開析谷が形成される。谷本体の幅は段丘崖の両端から測ると約120mを測るが、古墳時代に埋没した部分は谷の底部でその幅は約30mを測る。また、谷の底部は複雑

に蛇行しており、洪水による侵食の激しさを示している。埋土は、主として10YR6/4シルトと粗・中砂の互層が堆積する。

この谷の底から出土した遺物（図71—1～13・15～22）は須恵器の蓋杯・短頸壺・提瓶、手捏ね土器などである。いずれも完形品に近く、あまりローリングを受けていない。また、まとまって出土したものが多かった。

土坑249 調査区の北西に位置する。一辺1.1m、深さ0.5mの不整円形で、北半部は調査区外に延びる。なお、この土坑249は、建物6のピット224に切られる。古墳時代の須恵器の小片が出土した。

飛鳥時代

飛鳥時代の遺構は、開析谷の西側に広がる段丘上に位置する。検出した遺構は掘立柱建物7棟、柵列2、溝8条、不定形土坑1基などである。掘立柱建物および柵列は、調査区の北西部で集中して検出された。

建物1 調査区の北西部で、建物群の北西隅に位置する。桁行3間（4.6m）、梁行2間（4.0m）の南北棟総柱の建物で、床面積は18.4m²を測る。柱掘方は一辺0.6～0.8mの方形で、残存する深さは0.6～0.9mであるが、東柱は深さ0.4mと比較的浅い。柱痕跡の径は0.2mを測る。この建物の桁行の軸は真北より6°11'58"Eである。

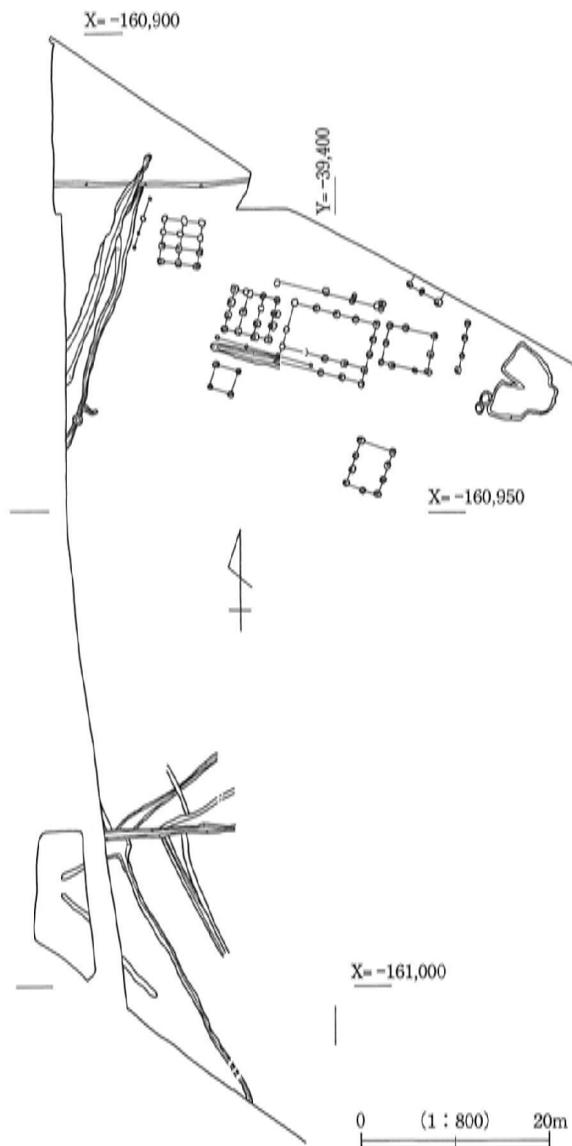


図12 飛鳥時代遺構分布図

建物2 建物1の南東に位置する。桁行3間(4.8m)、梁行3間(4.3m)の、東柱をもつ東西棟建物で、床面積は20.6m²を測る。この建物の特徴として、柱間の異なる東柱が使われていることがあげられる。梁行および東側の東柱の柱間距離は概ね1.4mであるのに対し、西側の東柱の柱間距離は2.2mである。柱穴の掘方は方形で一辺0.6~0.9mを測る。また、東柱の規模は、一辺0.5~0.8m、残存する深さは0.3~0.4mである。柱痕跡の径は0.2~0.3mを測る。建物2の梁行の軸は真北より12°32'00"Eである。この建物の南側には、当初溝88がはしっていたが、建物3を建てる際に埋められた。建物2のピット71の掘方埋土内より須恵器宝珠形つまみ付き杯蓋(図72-1)が出土した。

建物3 建物2の東に北面を揃えて建つ。桁行4間(8.6m)、梁行4間(6.6m)の東西棟建物で、南面庇をもつ。床面積は56.8m²である。身舎の柱掘方は方形で一辺0.6~0.7m、残存する深さは0.4~0.6mであるが、庇部には隅柱以外は一辺0.6mの小振りの方形を呈す。建物3の梁行の軸は真北

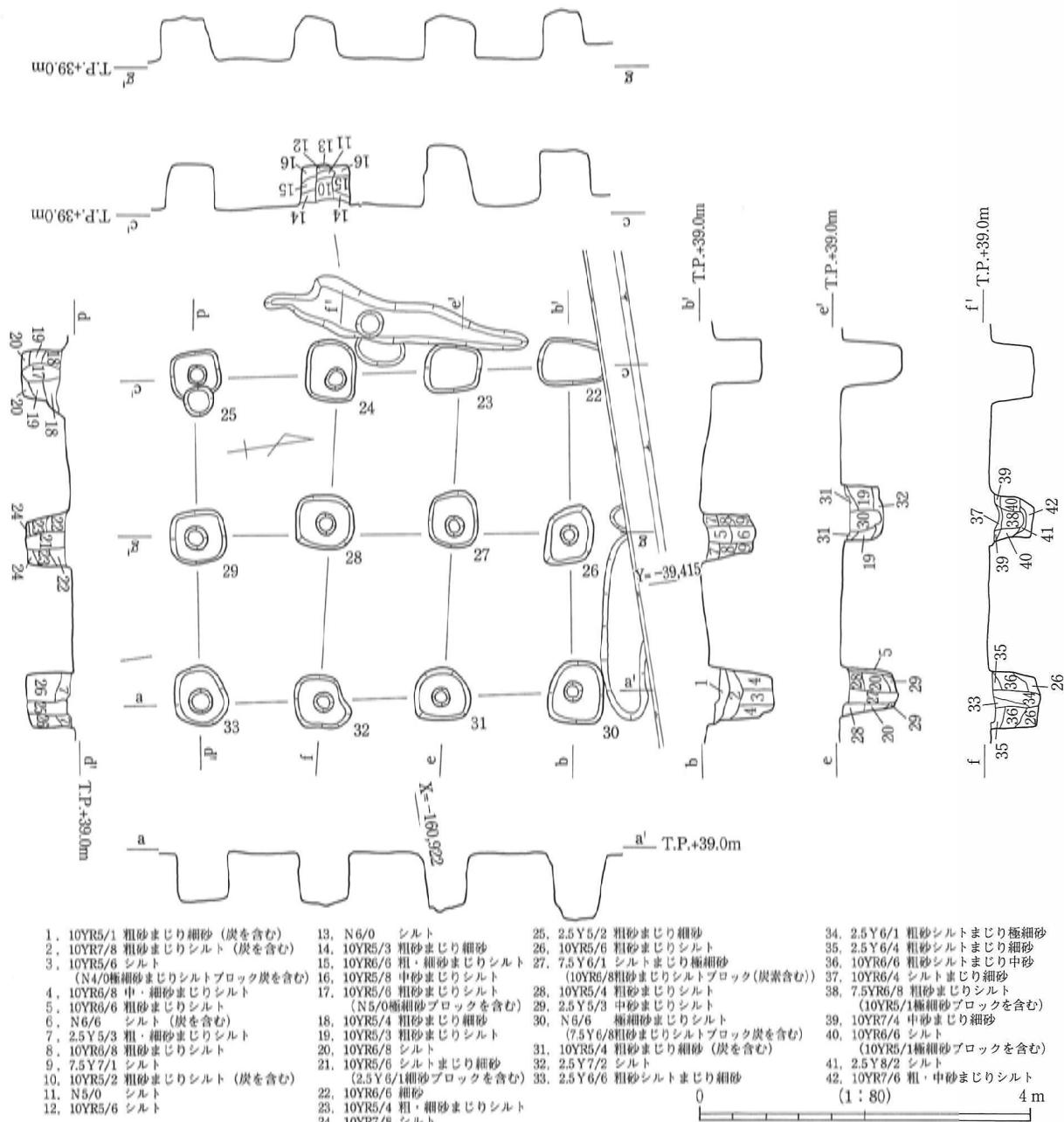


図13 建物1 平・断面図

より $15^{\circ}48'08''$ Eである。このように建物3は、建物2とほぼ軸を揃えて建てられているものの、前述したように南面庇の隅柱が、溝88を埋めた後に建てられていることから、建物2との間には若干の時期差があると考えられる。また、建物3の北側および建物2の一部にかけて、目隠し塀と考えられる柵列2がはしっており、この建物3は建物2と共にこの建物群の中心的な建物と考えられる。なお、ピット205、209、210、212、213には柱根が残っていた。

建物4 建物3の東側に北面を揃えて隣接する。桁行3間(5.2m)、梁行2間(4.0m)の東西棟建物で、床面積は 20.8m^2 である。柱掘方は方形で、一辺 $0.5\sim0.7\text{m}$ 、残存する深さは $0.2\sim0.3\text{m}$ を測る。建物の梁行の軸は真北より $10^{\circ}43'04''$ Eである。

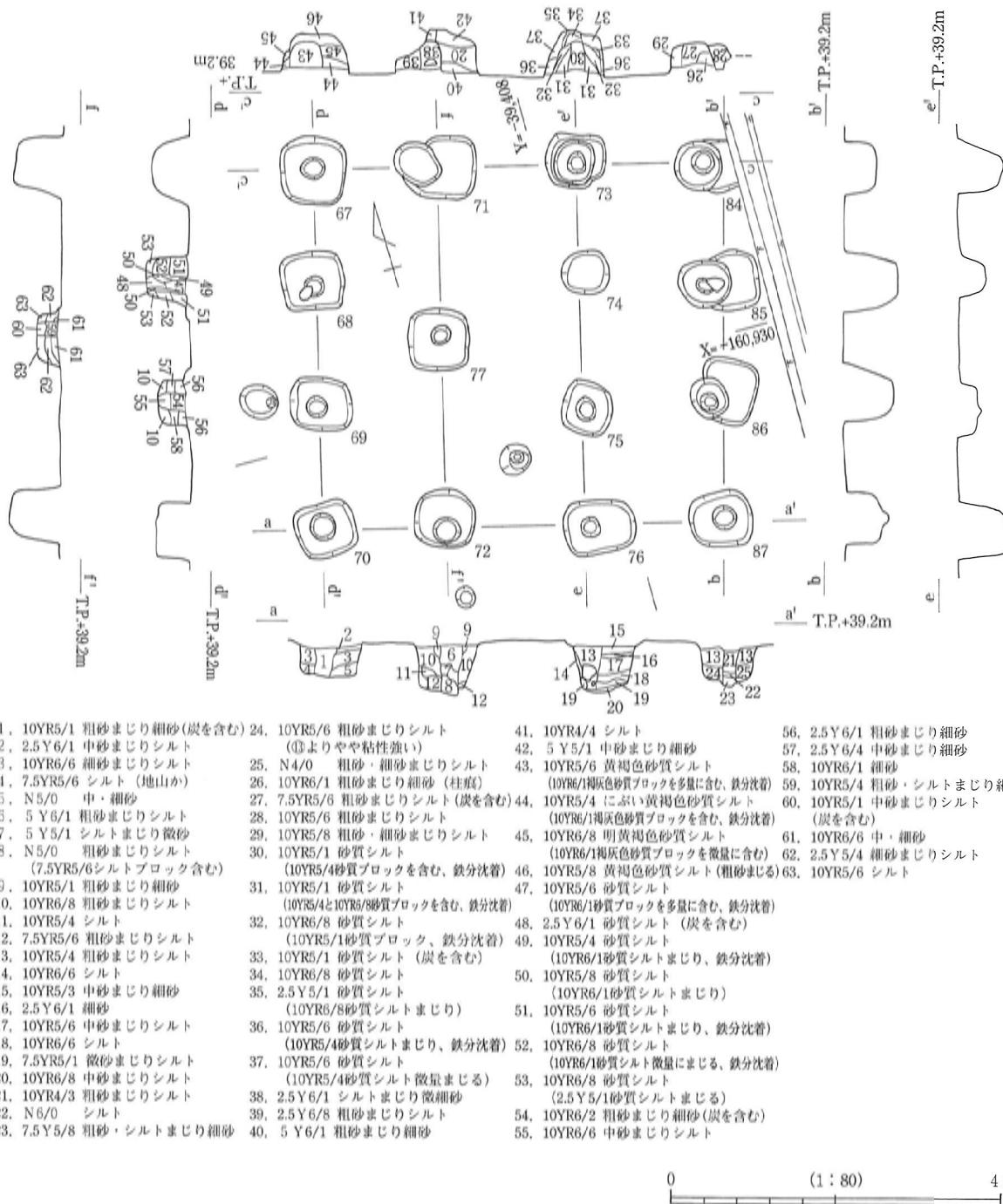


図14 建物2 平・断面図

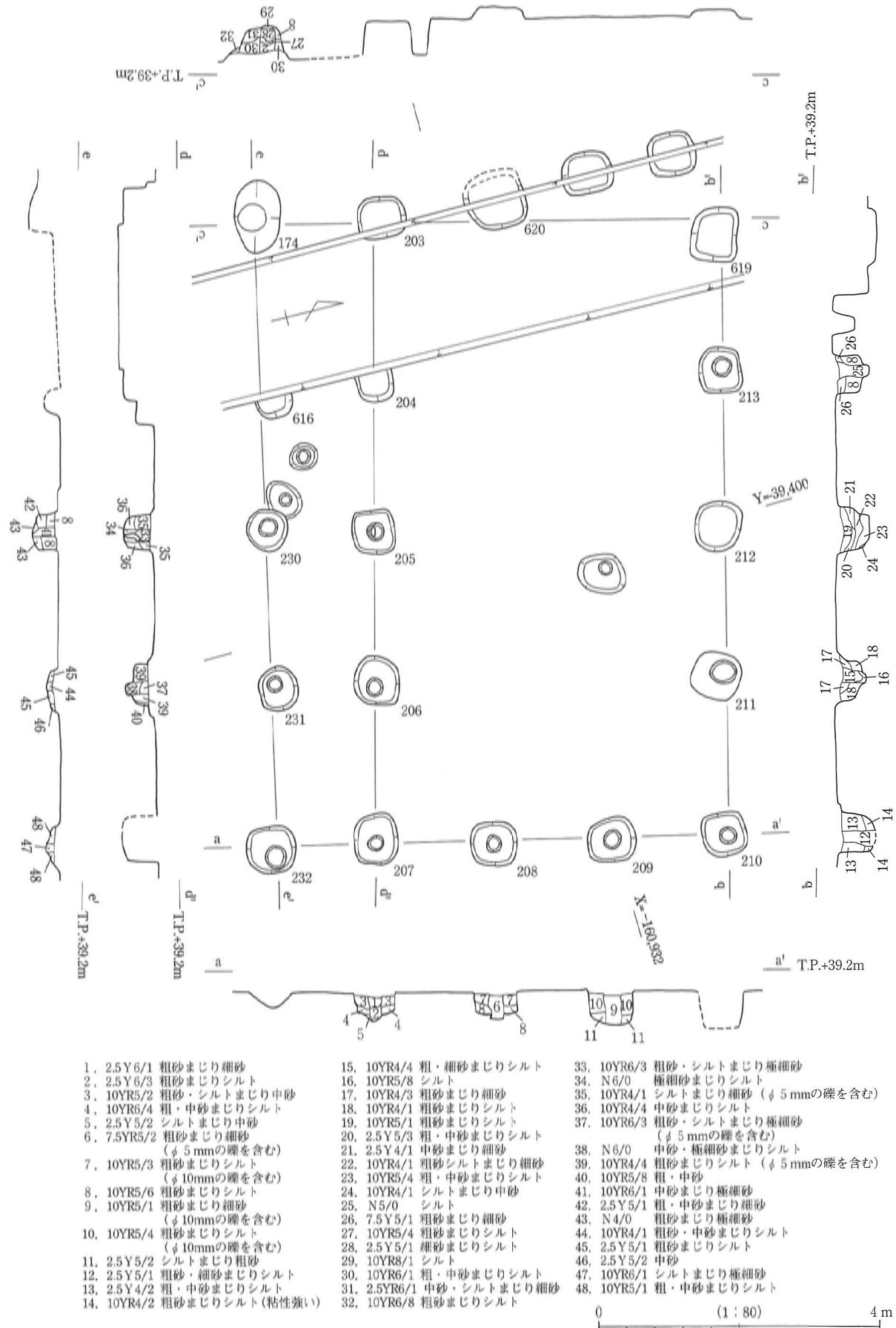
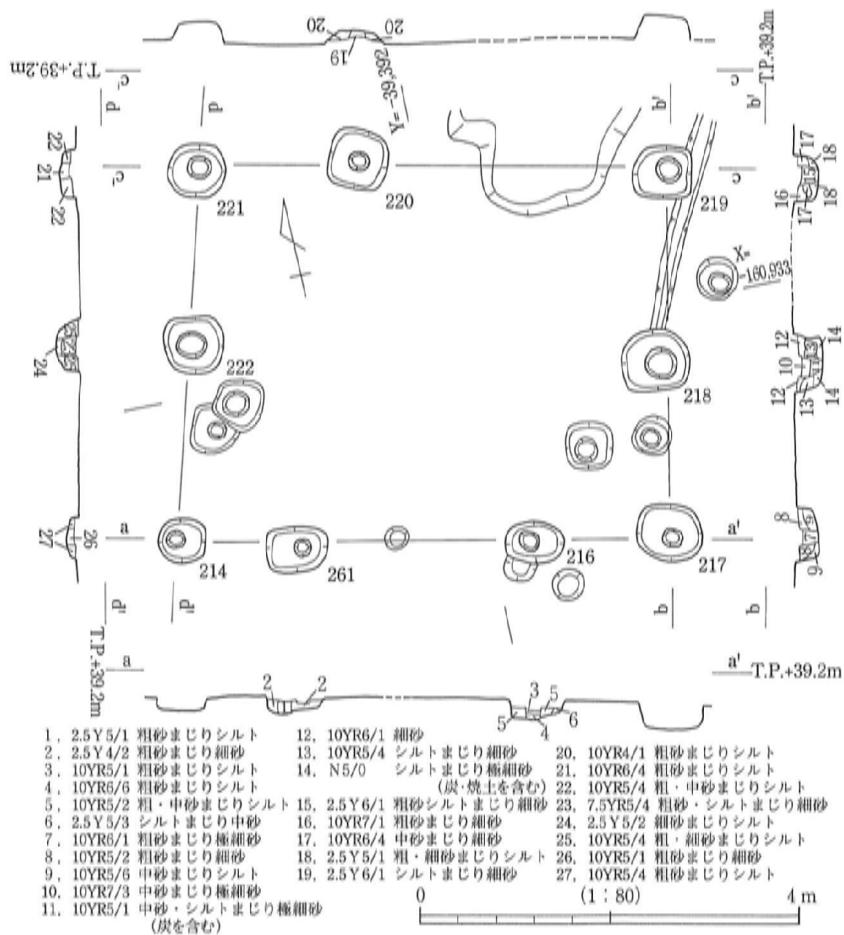


図15 建物3 平・断面図



建物5 建物2の南に溝88

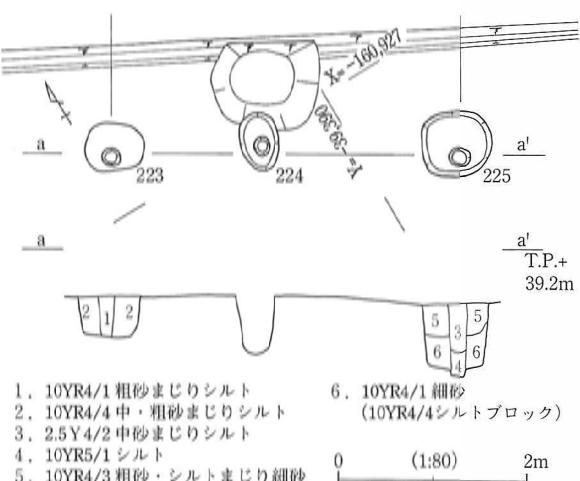
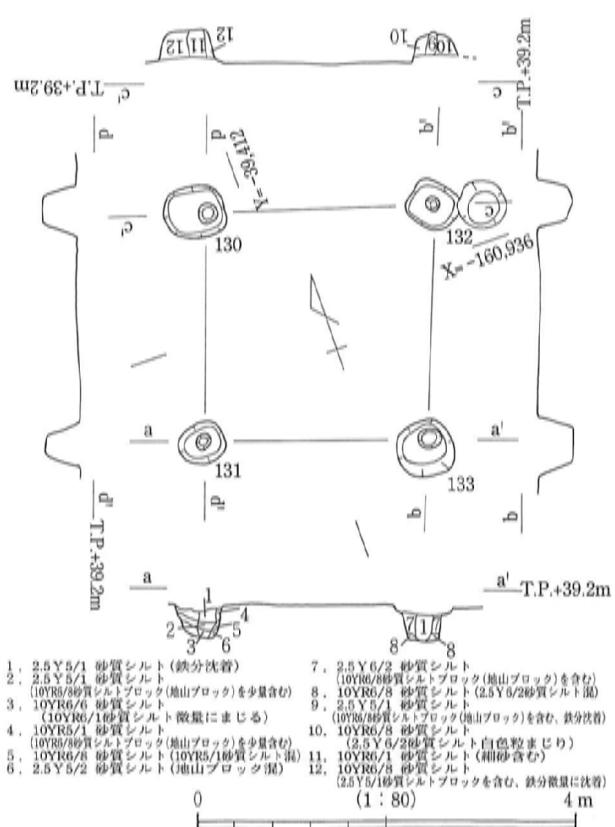
を挟んで位置しており、西面を建物2に接する。1間(2.4m) × 1間(2.4m)で、床面積は5.8m²を測る。柱掘方は方形で、一辺0.4~0.6m、残存する深さは0.4mを測る。納屋的な性格の建物と考えられる。建物の南北軸は真北より19°24'13"Eである。

建物6 建物4の北側に位置する。南面の梁行2間

(3.7m)を検出したのみで残りは調査区外に延びる。柱穴は、隅柱は方形で一辺0.5~0.7m、残存する深さは0.4~0.8m、東柱は0.3×0.5mの橢円形を呈す。柱当りの径も0.16mと小振りである。

建物の桁行の軸は梁行から推定すると真北より28°33'38"Eである。

建物7 建物4の南側に、建物群からやや離れたところに位置する。建物は桁行3間(5.0m)、梁行2間(3.6m)の南北棟建物で、床面積は18.0m²を測る。桁行の軸は真北より18°38'09"Eである。柱掘方は方形で、一辺0.5~0.8



m、残存する深さは0.2~0.5mを測る。柱痕跡の径は15~20cmを測る。なおピット240内より土師器甕(図72-2)が出土した。

柵列1 建物1の西、溝1、溝3の東に位置する。南北3間(5.5m)を数えるが、北端は削平を受けており不明である。柱掘方は径0.3~0.5m、残存する深さは0.2~0.3mの円形である。後述するが、溝1、溝3はこの建物群の西限を区画することから、この柵列1も建物1の西にあって、建物群の西限を示す柵列と考えられる。

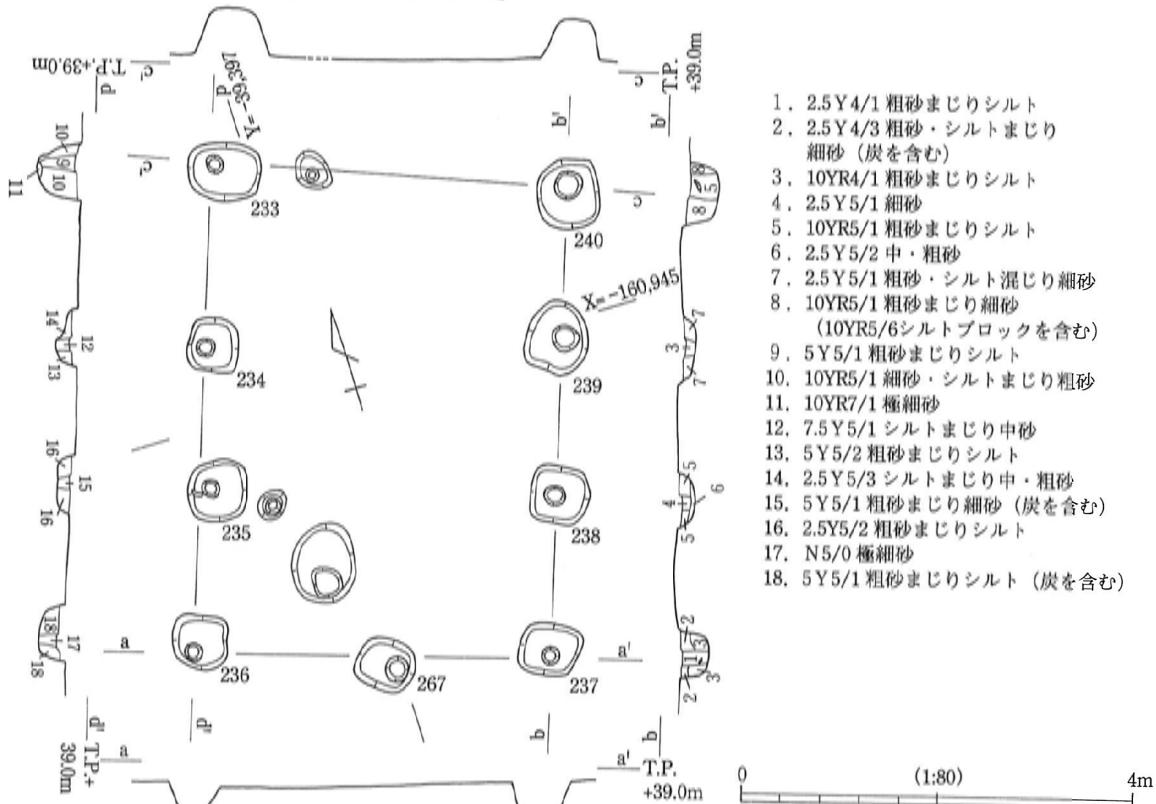


図19 建物7 平・断面図

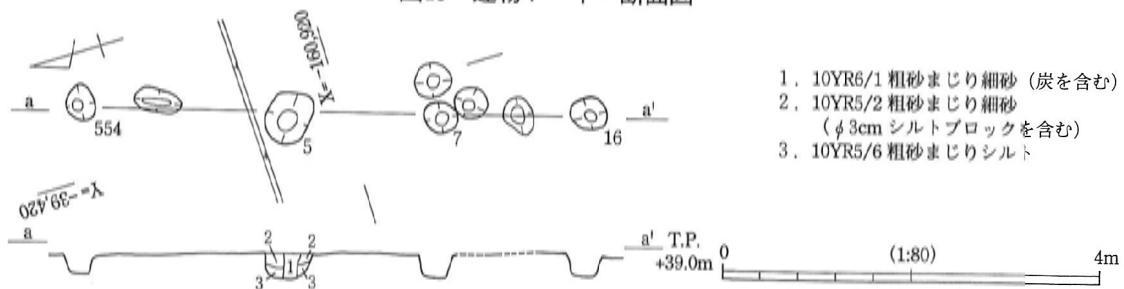


図20 柵列1 平・断面図

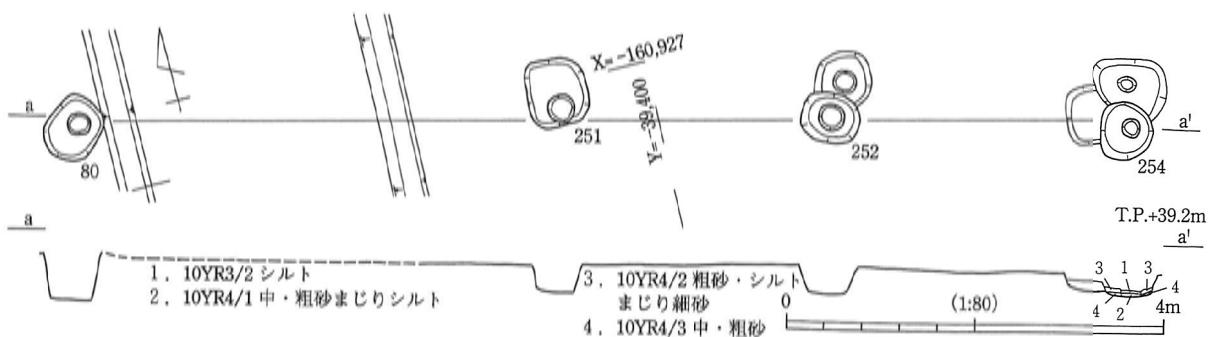


図21 柵列2 平・断面図

柵列2 建物3の北側に、平行と並行して構築されており、「目隠し塀」と考えられる。東端は建物3の東面の延長線上に取り付く。途中現代水路による削平を受けるが、柱間は4間（11.3m）であったと考えられる。東側の2本には建て替えによる切り合いが認められる。柱掘方は方形で、一辺0.5～0.7m、残存する深さは0.3～0.5mを測る。

柵列3 建物2の南、溝88の北側に位置する。東西方向に軸をもつ3間（10.6m）の柵列である。柱掘方は円形を呈し、径0.4m、残存する深さは0.1～0.2mを測る。

柵列4 建物4の東側に位置する南北方向に軸をもつ3間（5.0m）の塀である。真北より $10^{\circ}11'14''$ Eで、建物4の軸とほぼ同一軸をもつことや、これより東側に建物が展開しないことから、建物群の東限を示す塀と考えられる。柱掘方は両端の柱は一辺0.6mの方形を呈し、残存する深さも0.2mである。中間の柱掘方については、やや小振りの一辺0.4～0.5mの方形で、残存する深さも0.1m以下と浅い。

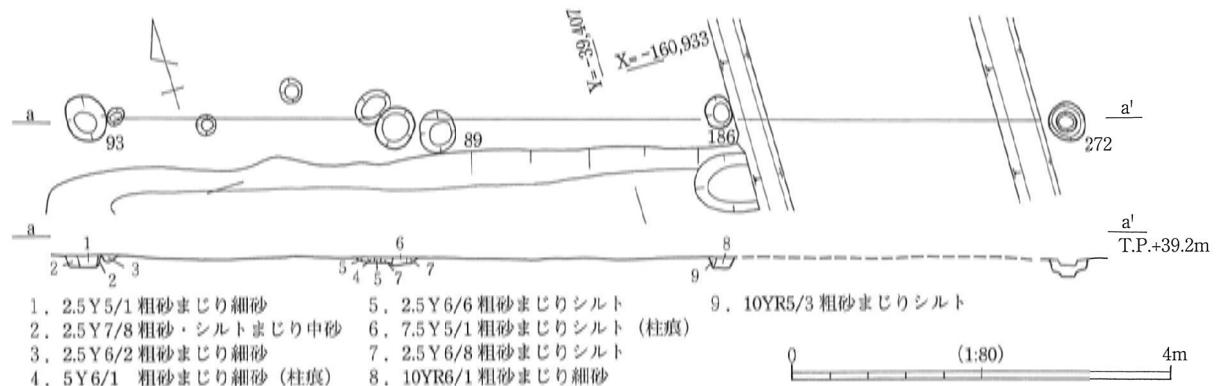


図22 柵列3 平・断面図

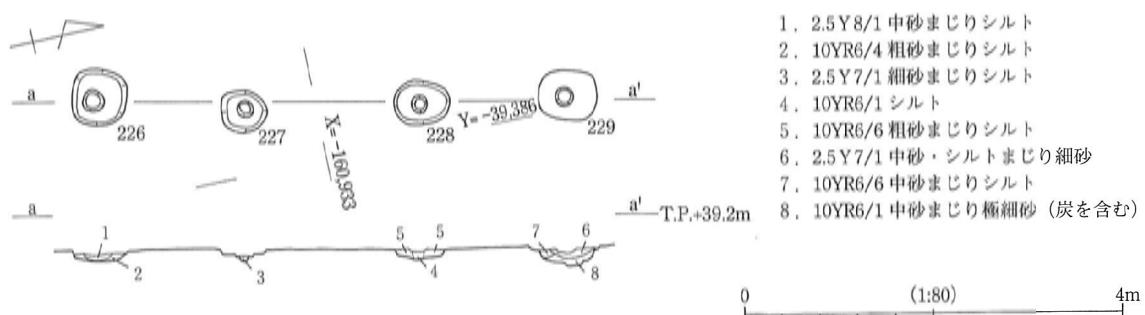


図23 柵列4 平・断面図

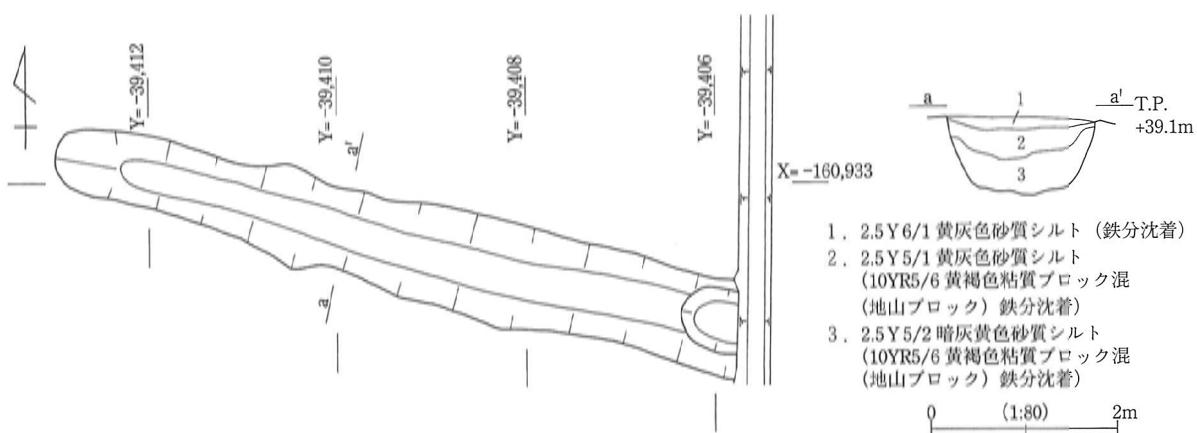


図24 溝88 平・断面図

溝88 建物2の南側1.3mの位置を、南面に並行してはしる。規模は、幅0.7~1.1m、深さ0.4~0.5mを測る。長さは7.4mを測るが現代水路による攪乱を受けており、全長については不明であるが、水路の反対側で検出されなかつたため、10mを超えない。また、建物3の南面庇の隅柱に切られていることから、建物2に伴って掘られたものの、建物3を構築する際に埋められたと考えられる。なお、埋土から須恵器杯身、直口甕・土師器甕など（図72-11~19）が出土した。

土坑241 柵列4の東4.5mに位置する不定形の土坑である。深さは10cm以下と非常に浅い。埋土は2層に分かれ、上層はN6/0シルト混じり極細砂、下層は10YR6/6中砂混じりシルトである。平面形を見る限りでは、長方形の土坑が重複しているようにも見受けられるが、断面観察による切り合いの確認はできなかった。遺物（図72-3~6）は土坑の底部より須恵器宝珠形つまみ付き杯蓋、杯身・土師器杯、甕などが出土した。

溝1 建物群の広がる微高地の高まりが西に向かって下がる肩口に、建物2などの主軸と並行してはしたことなどから建物群の西限を示す区画溝と考えられる。規模は最大幅2.0m、深さ0.3~0.5mを測るが、調査区の北端付近で後世の削平を受ける。埋土は1層で10YR6/1シルト混じり極細砂である。溝1は溝に比べてやや東に振っているもののほぼ同じ軸をもつ。さらに溝3を切っていることなどから、溝3の掘り替えであると考えられる。なお、微高地と溝の西側との此高は約15cmを数える。

溝3 溝1ほぼ同一方向にはしるが、溝1に切られる。幅が0.5~0.9m、深さ0.2mを呈す。溝の埋土は1層で10YR6/1シルト混じり細砂である。出土した遺物は、須恵器平瓶、甕口縁（図72-7・8）などである。

溝390・572・573・574・601 建物群の南には5条の溝がはしる。溝の多くは南南東-北北西方向にはしって東に屈曲するが、溝390はまっすぐ北上する。これは溝1もしくは溝3と繋がる可能性がある。これらの溝の規模は概ね同じで、幅0.4~0.7m、深さ0.1~0.3mを測るが、溝574のみ幅1.5mを測る。

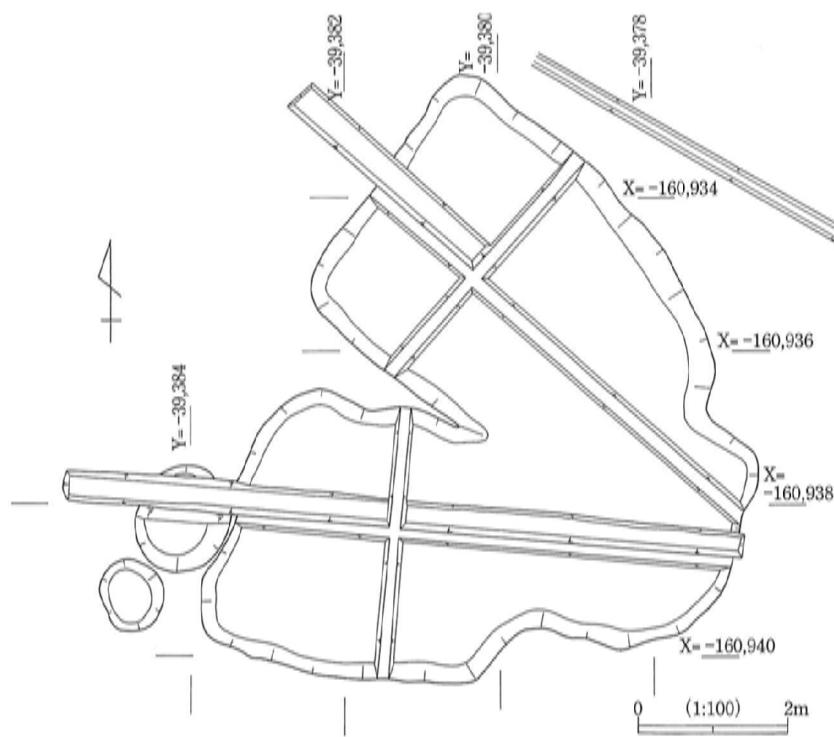


図25 土坑241 平面図

平安時代

平安時代の遺構は、調査区のほぼ全面で検出された。特に、西側に広がる微高地では26棟の掘立柱建物をはじめとして、ピット、土坑、溝などが検出された。また、東側に広がる微高地には3棟の掘立柱建物や、炉などが検出されたが、これは（その2）調査区に展開する掘立柱建物群の一部と考えられる。さらに、中央部をはしる開析谷は、古墳時代には開口していたが、この時期になるとある程度埋没した状態となってお

り、そこには不定形ピット列をはじめ、轍痕跡などを検出した。西に南北方向の条里制地割の坪境溝を検出した。また、調査区西半部で検出された建物群については、建物8～15までの北群と、建物16～32までの南群の2群に大別できる。

建物8 建物群の一番北西隅に位置する。桁行4間(7.2m)、梁行2間(3.4m)の南北棟建物で、南面庇をもつ。床面積は24.5m²である。桁行西側の柱穴は径0.4m、深さ0.1～0.2mの円形を呈すが、東側の柱掘方は東西方向に長軸をもち、長径0.5～0.7m、短径0.4～0.5m、深さ0.2～0.5mを測る楕円形である。また、身舎における東柱の掘方は南北方向に長軸をもち、長径0.5m、短径0.3m、深さ0.2～0.3mを測る楕円形を呈するが、庇部の東柱は、径0.2m、深さ0.1mと小規模である。この建物の桁行の軸は、真北より2°29'53"Eである。

建物9、柵列7 建物8の東に位置する。桁行4間(9.0m)、梁行1間(4.0m)の東西棟建物で、床面積は36.0m²を測る。桁行の柱間は、西から3間は2m間隔であるのに対し、東に1間は1.5mとやや広いため、東の1間は庇などの施設になる可能性もある。柱掘方の規模は、径0.4～0.5m、深さ0.2mの円形であるが、南西の隅柱は0.4×0.6mの長方形を呈す。この建物の梁行の軸は、真北より9°40'34"Eである。さらに、この建物9の西面および南面から2.5m外側には「L」字状に柵列7が巡るが、建物10や建物11の身舎と庇の規模などを参考にすると、庇の可能性もあり、その場合の床面積は74.2m²となる。

建物10 建物8の南に西面を揃えて建つ南北棟建物である。建物11の北に若干重複して建っていることや、規模もほぼ同じことなどから、建物11の建て替えと考えられる。桁行5間(11.0m)、梁行3間(6.4m)で東・南面庇をもつ。床面積は70.4m²である。身舎の柱間は桁行で2.0m、梁行で1.8mを測

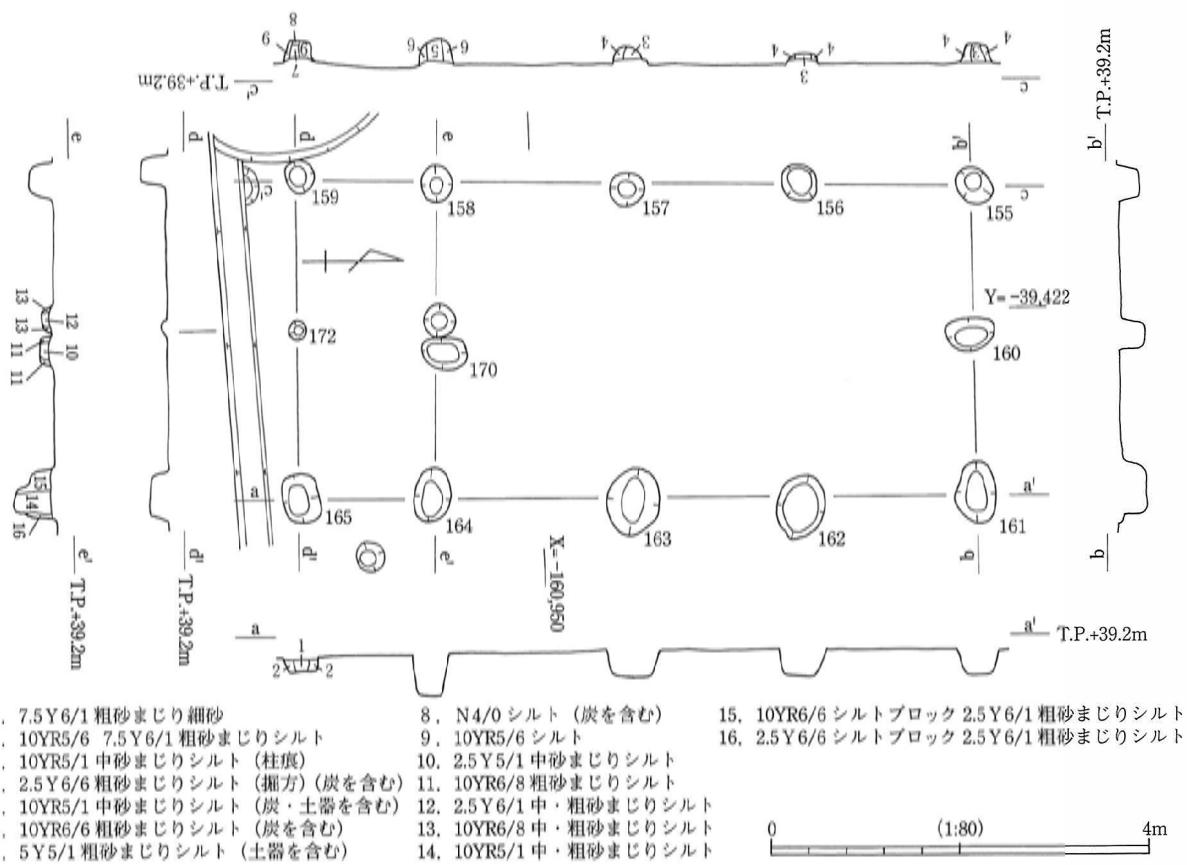


図26 建物8 平・断面図

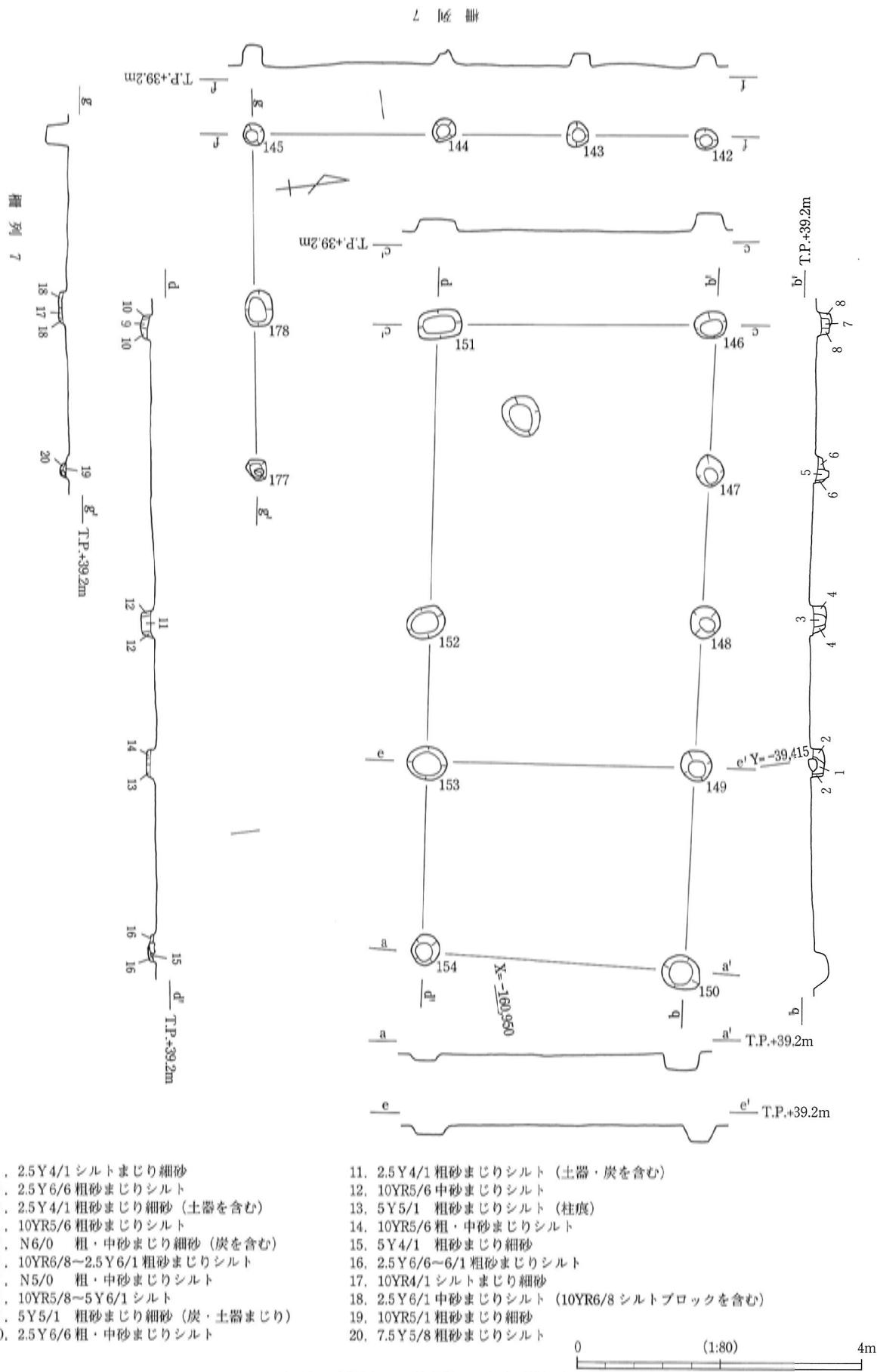


図27 建物9、柵列7 平・断面図

る。底部は身舎から2.5mの距離にある。柱掘方は円形である。その規模は径0.3~0.6m、深さ0.2~0.4mを測る。この建物の桁行の軸は、真北より $2^{\circ}11'26''$ Eである。

建物11、柵列8・9 建物10の南に重複して建つ南北棟建物である。桁行5間(9.6m)、梁行3間(6.4m)で東面庇が伴う。床面積は61.4m²を測る。この建物の南面には柵列9を有するが、この柵列9も庇の一部と考えれば、桁行6間(12.1m)となり、床面積は77.4m²を測る。しかし、この建物の西側には目隠し塀状の柵列8があり、この柵列が身舎部分のみを覆うように配されることから、南面の柱

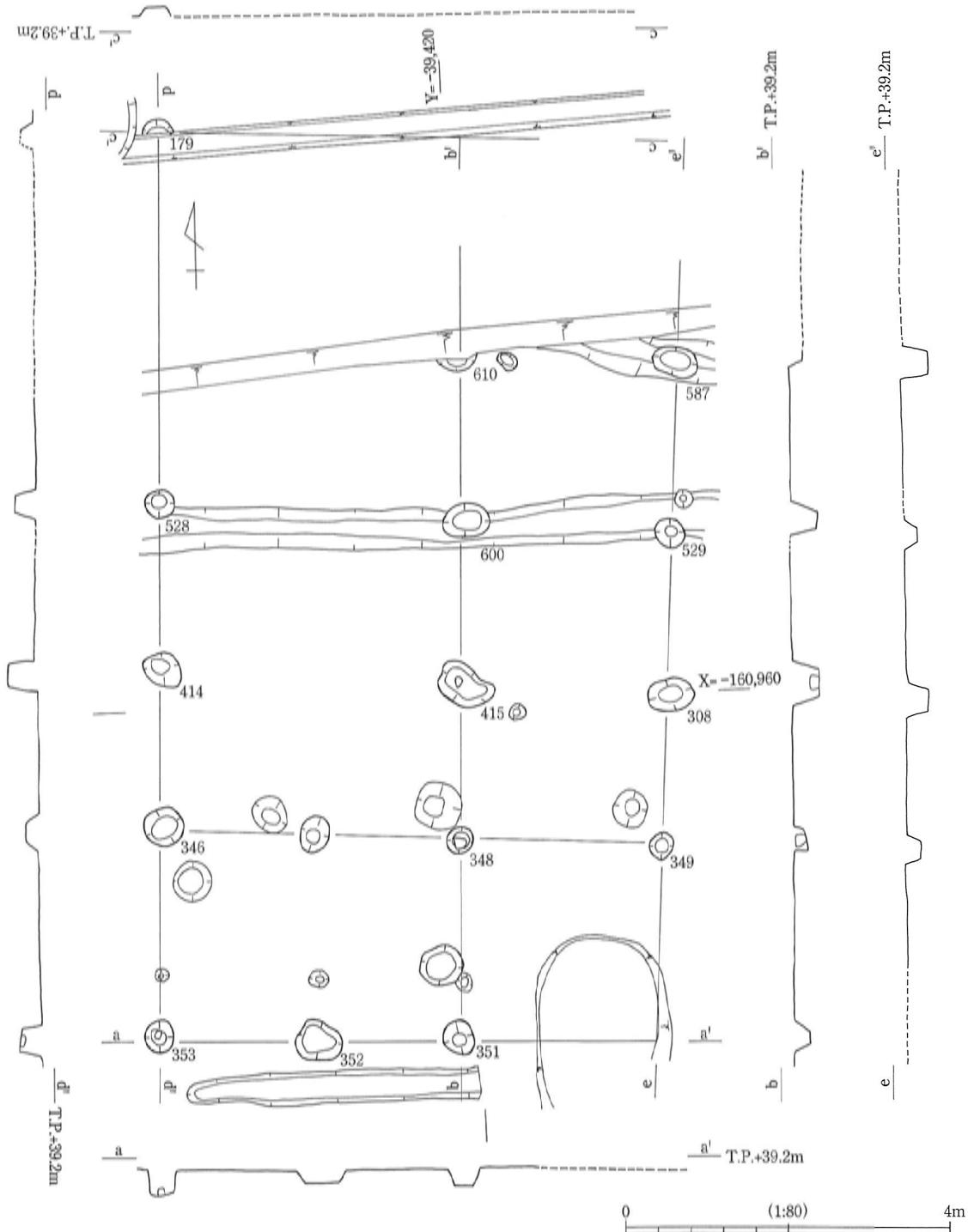


図28 建物10 平・断面図

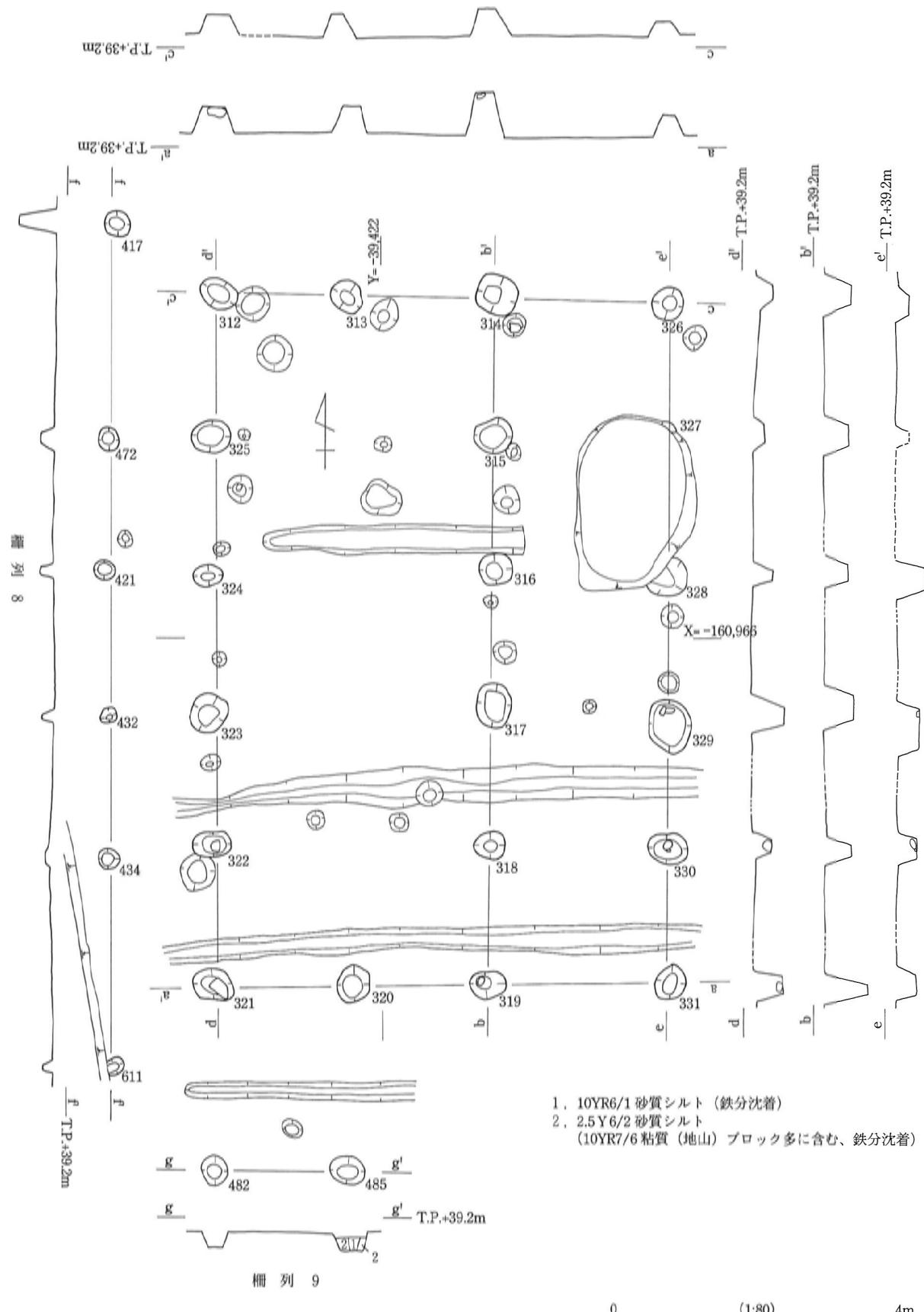


図29 建物11、棚列8・9 平・断面図

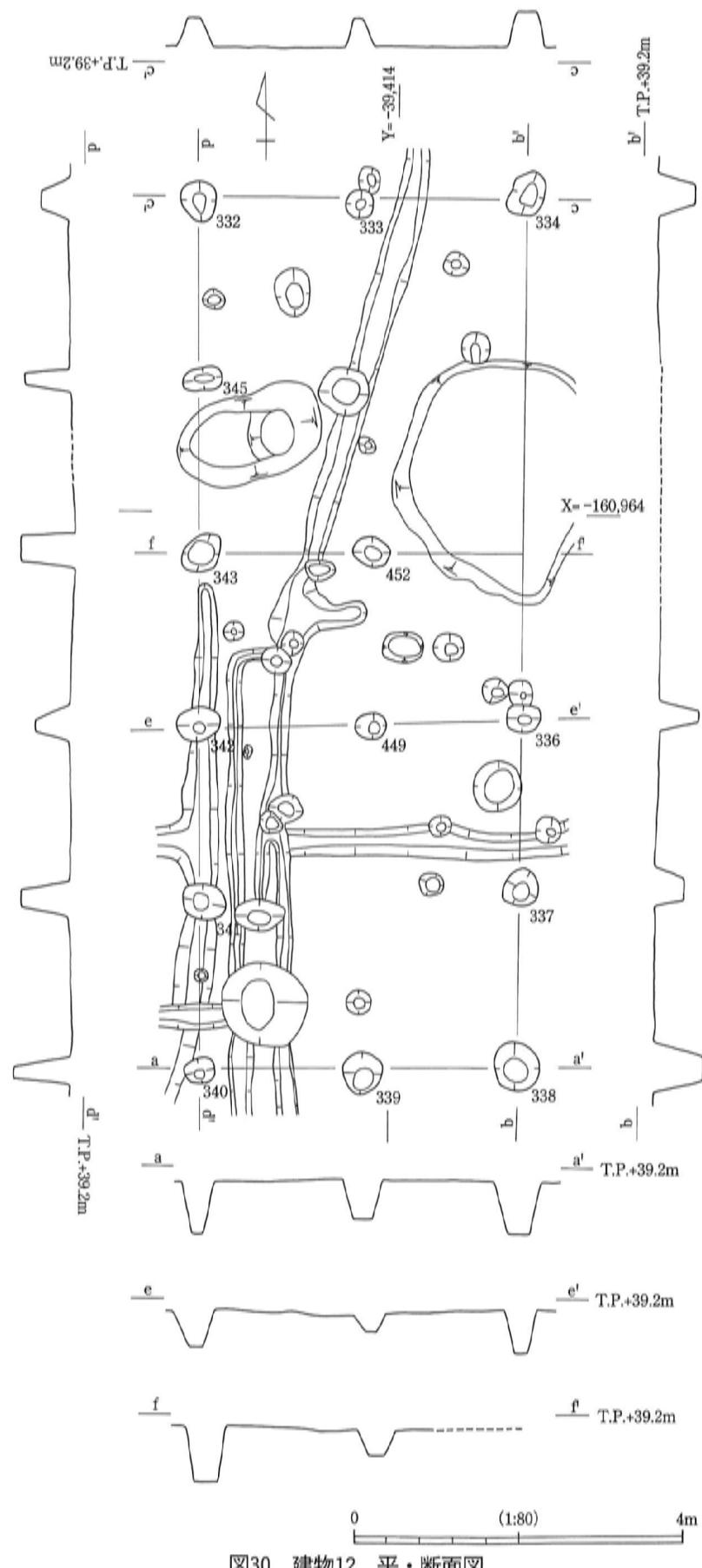


図30 建物12 平・断面図

穴2基は柵列である可能性も残っているため、柵列と解釈した。建物の柱掘方は径0.4~0.5mの円形である。深さは0.2~0.6mを測るが、0.5m前後のものが多い。桁行の軸は、真北より $0^{\circ}29'30''W$ である。

柵列8は建物11の西桁行から1.4m西の地点に位置する。規模は長さ5間(11.6m)を測る。中央部3間の柱間は2.0mであるのに対して、両サイドの柱間は2.8mである。これは、建物11の西には南北方向に坪境がはしっておらず、目隠し塀としての機能を有していたと考えられる。しかし、建物との距離が1.4mと近いことから、屋根を支える構造の一部であった可能性も残る。

建物12 建物11の東1.8mに位置する南北棟建物である。南面を建物11の南面身舎に合わせると共に、建物の主軸も揃える。規模は桁行5間(10.5m)、梁行2間(4.0m)で、床面積は42.0m²を測る。しかし、建物中央部には2本の束柱をもつことや、建物11と比べて桁行の柱間距離が約0.2m長いことなどから、2間×2間の建物が南北に2棟並立していたとも考えられる。桁行の軸は、真北より $1^{\circ}00'50''W$ である。柱掘方の規模は径0.4~0.6m、深さ0.4~0.7mを測る円形であるが、束柱は径0.3~0.4m、深

さ0.2~0.4mとやや小振りである。

建物13 建物10の東4.2mの地点に、建物12の北東部に重複して建てられた、桁行2間(4.2m)、梁行2間(3.8m)の東西棟建物である。床面積は15.9m²である。梁行の軸は、真北より2°32'26"Wである。

攪乱により南西隅の柱穴を失う。柱掘方は径0.2~0.6m、深さ0.1~0.4mの円形を呈する。建物の位置や方向などから考えて、建物10に伴うものであろう。

建物14 建物13の南2.3mの地点に軸を揃えて建てられており、建物12と一部重複する。桁行3間(5.3m)、梁行1間(2.1m)の東西棟建物である。床面積は11.1m²を測る。梁行の軸は、真北より1°03'04"Eである。柱掘方の規模は径0.3~0.4m、深さ0.2~0.5mを測る円形である。建物の位置などから建物14は、建物10・13と同時期の建物と考えられる。

建物15 建物12の東約7m東の地点に位置する、桁行4間(7.4m)、梁行3間(5.0m)で、東面庇をもつ南北棟建物であるが、建物西面側は溝344による削平を受けているため一部柱穴を失う。また、建物中央部は土坑680に切られる。床面積は37.0m²を測る。桁行の軸は、真北より5°30'23"Wである。柱掘方の規模は径0.3~0.5m、深さ0.2~0.3mを測る円形を呈する。

建物16 建物11の南約18m、建物南群の北西隅に位置する。建物の規模は、桁行3間(6.5m)、梁行3間(6.0m)の東西棟総柱建物で、建物の北面は建物18・20・21に揃える。床面積は39.0m²である。桁行の軸は、真北より

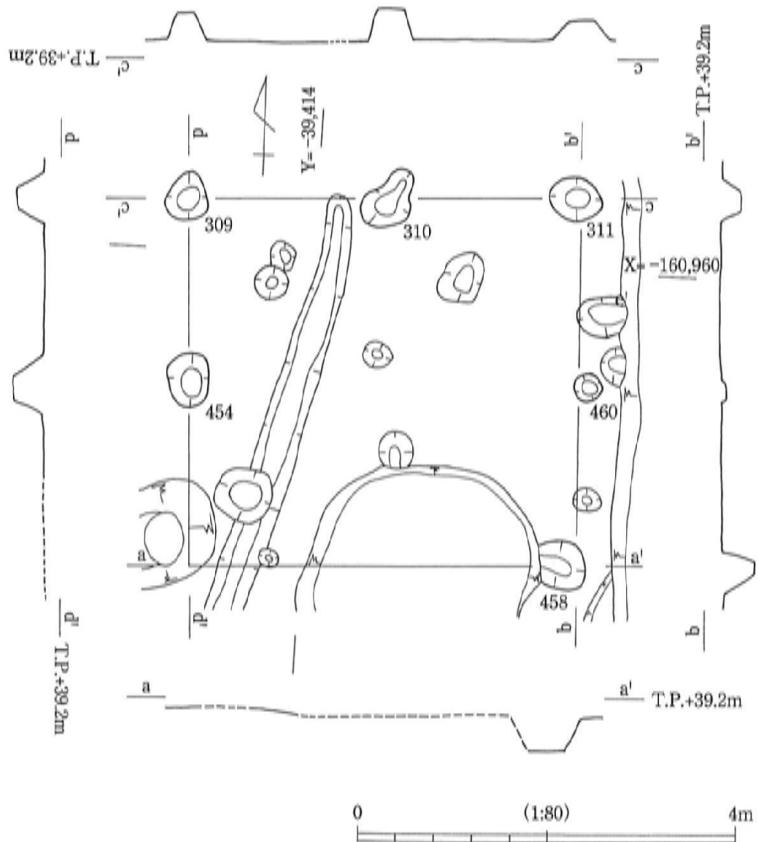


図31 建物13 平・断面図

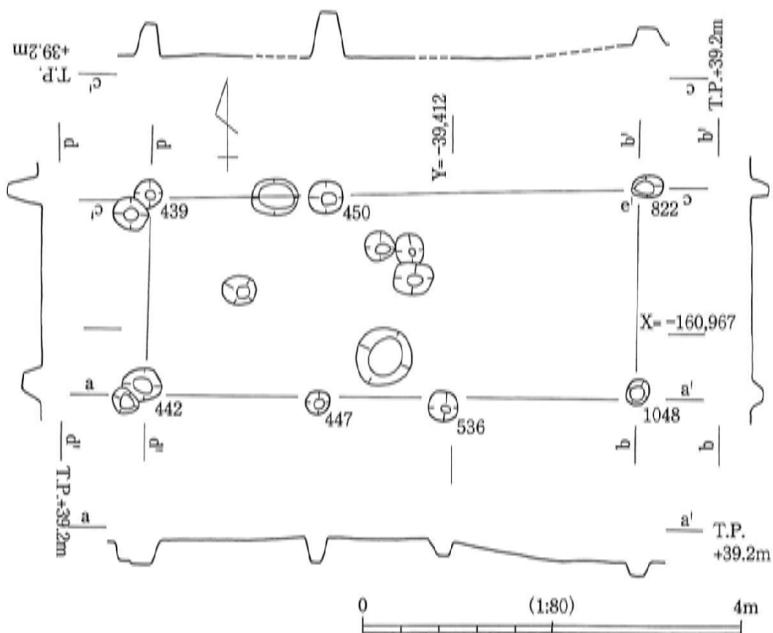


図32 建物14 平・断面図

2°09'32"Wである。柱掘方は円形で、径0.3~0.5m、深さ0.3~0.6mを測る。

建物17 建物16の東に接するように位置する、桁行2間(8.2m)、梁行4間(北面3.9m、南面3.6m)の南北棟建物である。床面積は30.7m²を測る。桁行の軸は、真北より1°39'39"Wである。柱掘方は円形で、径0.3~0.5m、深さ0.2~0.4mを測る。柱穴382の底部から縦約20cm、横約10cm、厚さ約10cmの平石を利用した根石が出土した。この建物17は建物16との間が40cm程しかないことや、建物16などより建物の北面を揃えないことなどから、時期差があったものと考えられる。

建物18 建物17の東に位置し、建物16・建物20と北面を、建物19と西面を揃えて建つ、桁行3間(6.2m)、梁行2間(3.8m)の東西棟建物である。床面積は23.5m²である。梁行の軸は、真北より0°37'02"Wである。柱掘方は方形で、一辺0.5~0.7m、深さ0.3~0.6mを測る。

建物19 建物18の南約4mに位置する、桁行4間(8.0m)、梁行3間(5.9m)の南北棟建物で、東北半部に庇をもつ。床面積は39.2m²である。桁行の軸は、真北より4°12'37"Wである。柱穴は、一辺0.5mの正方形を呈するものから、1.1×0.7mを測る大型の長方形の掘方をもつものがある。深さは身舎部の柱穴で0.2~0.5m、庇部のそれは0.3mを測る。この建物19は、南群の中でも主たる建物のひとつと考えられる。なお、建物18の南東隅と建物19の北東隅をつなぐように、柵列12を配す。

建物20 建物18の東約2.7m、建物21の西約1.7mの位置に、北面を揃えて建つ。桁行4間(5.2m)、梁行3間(3.2m)の東西棟建物で、床面積は16.6m²を測る。梁行の軸は、真北より1°07'28"W

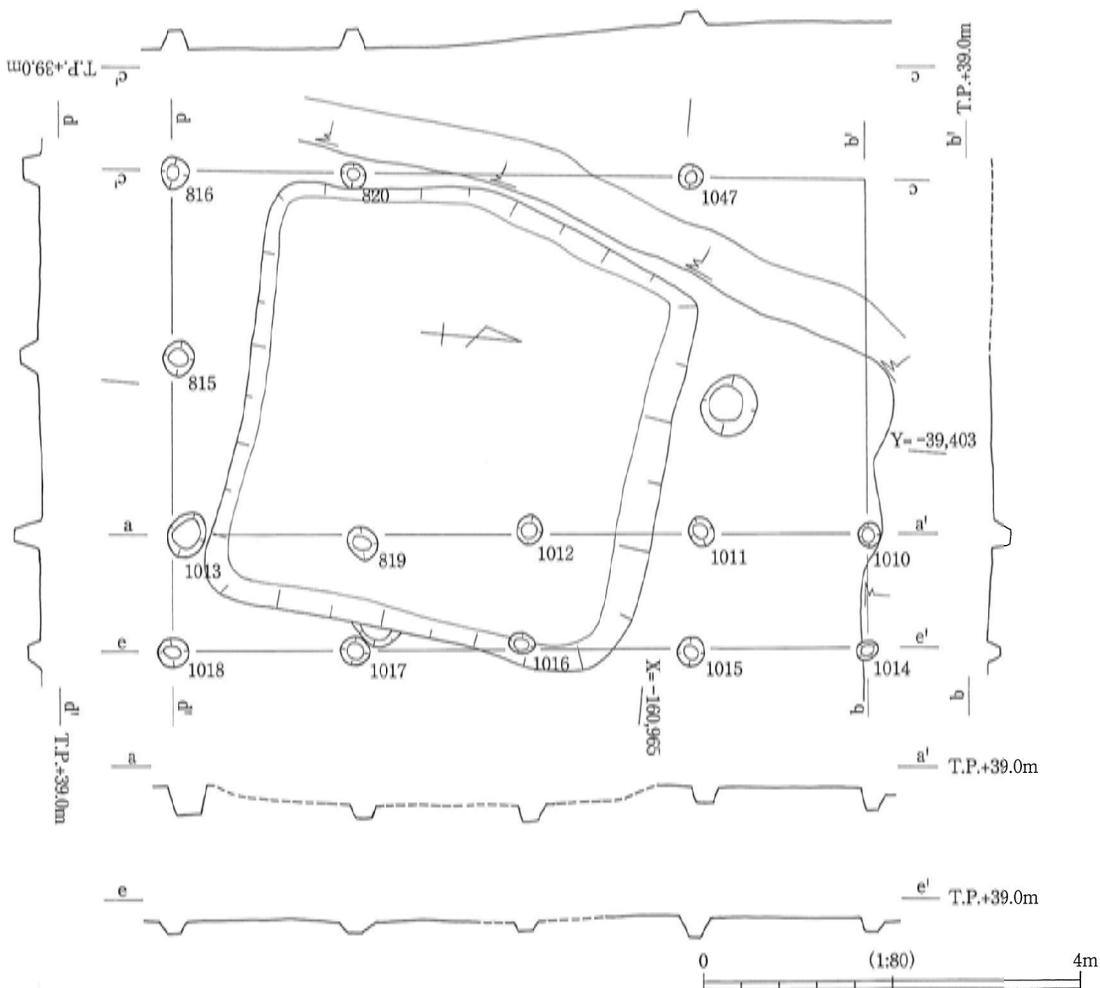


図33 建物15 平・断面図

である。柱掘方の規模は、一辺0.5~0.6m の方形を呈する。

建物21 建物20の東約1.7m の地点にあり、北面を揃える。また、建物の南辺を溝752がはしる。建物の柱間は変則的ではあるが、最大桁行4間(8.0m)、最大梁行4間(6.0m)の東西棟総柱建物である。南面は建物拡張の際の抜き取り穴およびそれに伴う柱穴を検出した。総床面積は43.0m²である。東面庇をもつが、南東隅は溝396による規制を受ける。梁行の軸は、真北より3°54'42"Wである。柱掘方の規模は、一辺0.5~0.7m の方形である。

建物22 建物20の南約1.4m に位置し、溝752埋没後につくられる。桁行2間(5.2m)、梁行2間(3.2m)の南北棟建物で、床面積は16.6m²を測る。桁行の軸は、真北より2°27'02"Eである。柱掘方の規模は、一辺0.5×0.6m、0.7×0.9m の方形を呈し、深さは0.4~0.6m を測る。

建物23 建物21の南約1m に位置し、溝752埋没後につくられる。桁行2間(4.4m)、梁行2間(3.4m)の南北棟建物で、床面積は14.9m²を測る。桁行の軸は、真北より1°16'56"Wである。柱掘方の規模は、径0.3~0.9m の円形もしくは橢円形で、深さは0.2~0.4m を測る。なお、南面の隅柱には

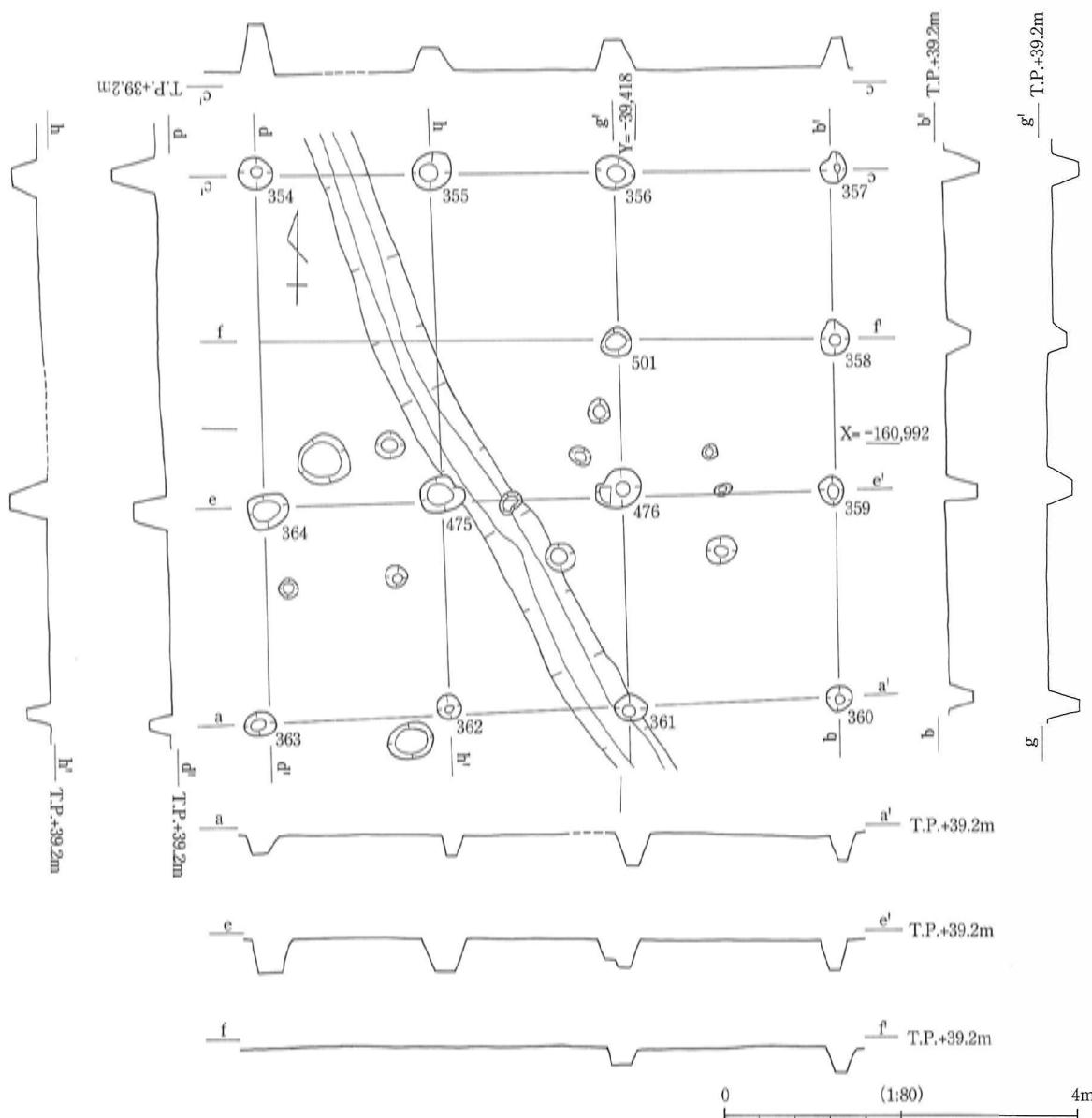


図34 建物16 平・断面図

0.1~0.2m 大の円礫を配す。

建物24 建物23の南東約 2 m に位置する、桁行 2 間 (3.5m) 、梁行 2 間 (3.2m) の南北棟建物で、床面積は11.2m²を測る。桁行の軸は、真北より 9°40'30"Wである。柱掘方の規模は、径0.3~0.9mの円形もしくは楕円形で、深さは0.2~0.3m を測る。

建物25 建物19の東約 5 m、建物23の南西に位置する、桁行 2 間 (7.4m) 、梁行 2 間 (3.8m) の南

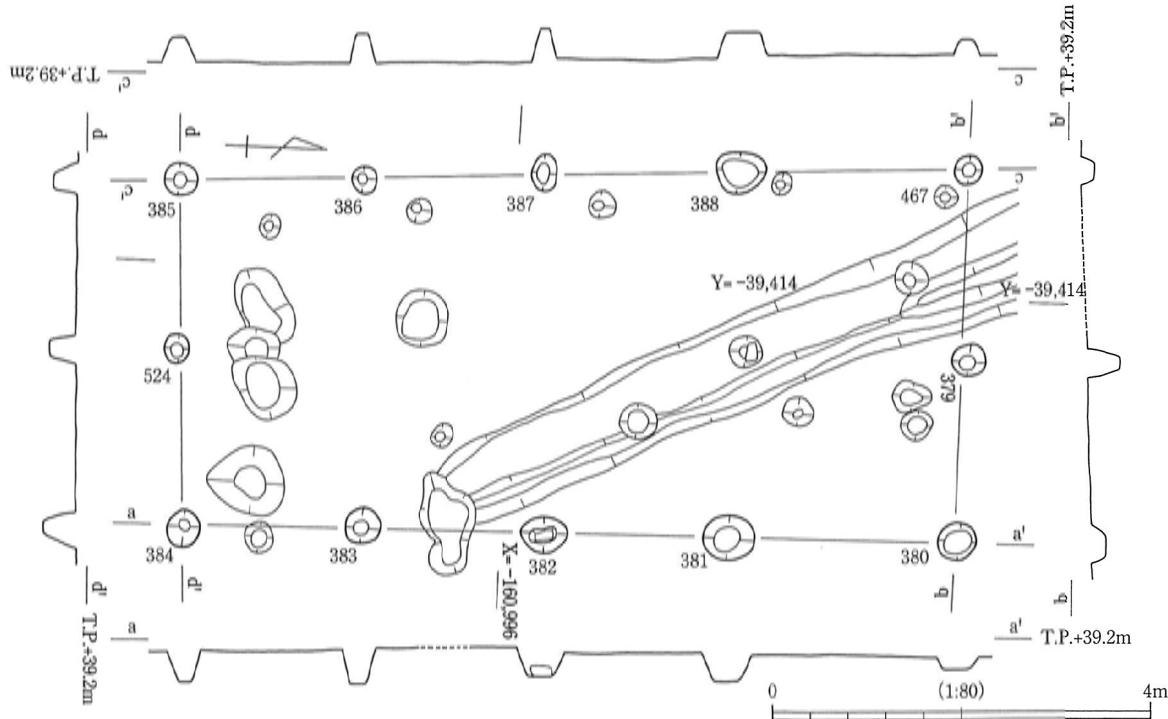


図35 建物17 平・断面図

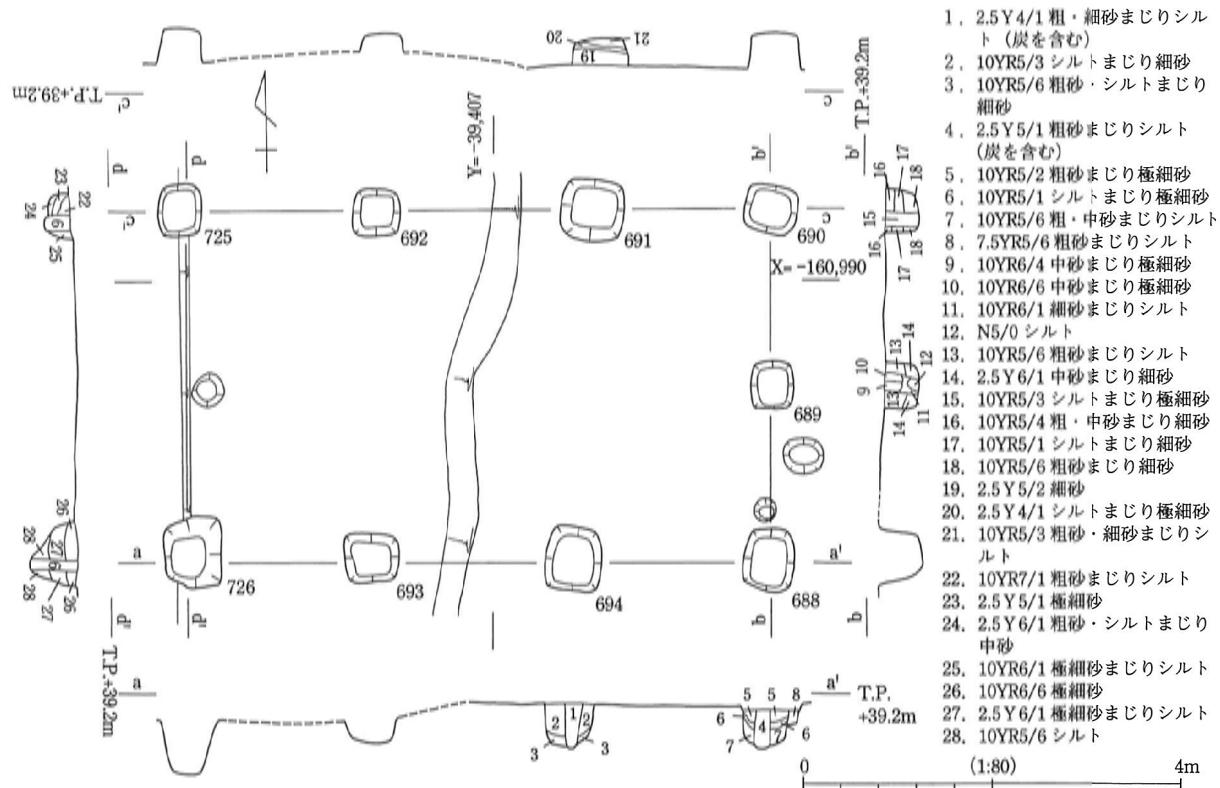
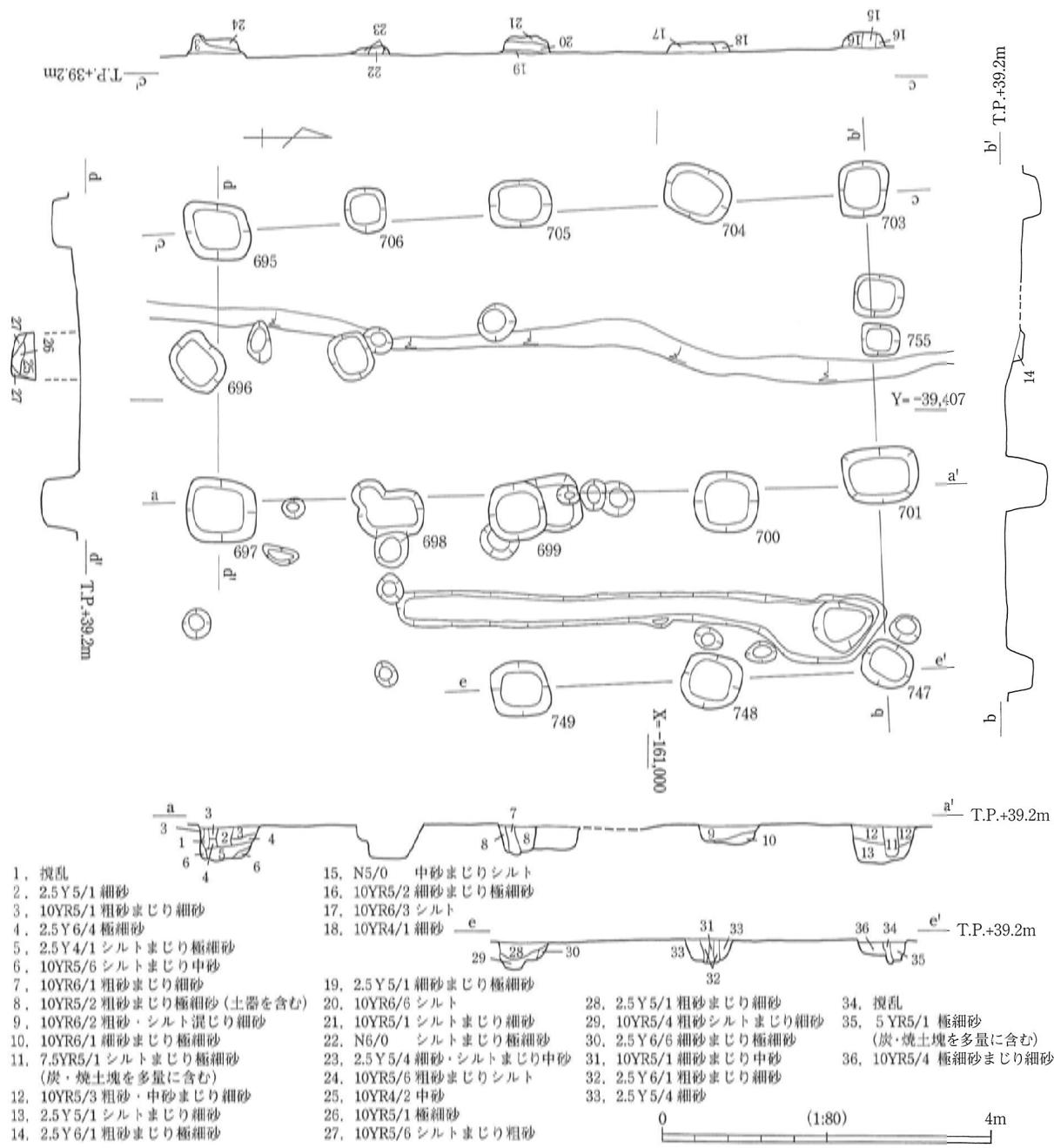


図36 建物18 平・断面図

北棟建物であるが、中央部に東柱をもつ。床面積は 28.1m^2 を測る。桁行の軸は、真北より $3^{\circ}13'36''\text{W}$ である。柱掘方の規模は、一辺 $0.5\sim0.6\text{m}$ の方形で、深さは $0.2\sim0.5\text{m}$ を測る。

建物26 建物25の南約 5 m に位置する、桁行3間(6.6m)、梁行2間(4.1m)の東西棟建物である。床面積は 27.0m^2 を測る。梁行の軸は、真北より $5^{\circ}21'07''\text{W}$ である。柱掘方は北面西側の2本は一辺 $0.5\sim0.6\text{m}$ 、深さ $0.2\sim0.3\text{m}$ の方形であるが、との掘方は径 $0.3\sim0.4\text{m}$ 、深さ $0.1\sim0.2\text{m}$ の円形である。

建物27 建物16の南半部に重複して建つ。桁行3間(5.8m)、梁行1間(4.1m)の東西棟建物であるが、建物のすぐ西側が未調査区であるため、柵列10までの間でさらに延びる可能性もある。検出した中の床面積は 23.7m^2 を測る。梁行の軸は、真北より $6^{\circ}30'32''\text{W}$ である。柱掘方は円形で、径 $0.2\sim0.3\text{m}$ 、深さ $0.2\sim0.4\text{m}$ を測る。なお南東隅の柱穴374には一辺 0.2m の角礫が入る。



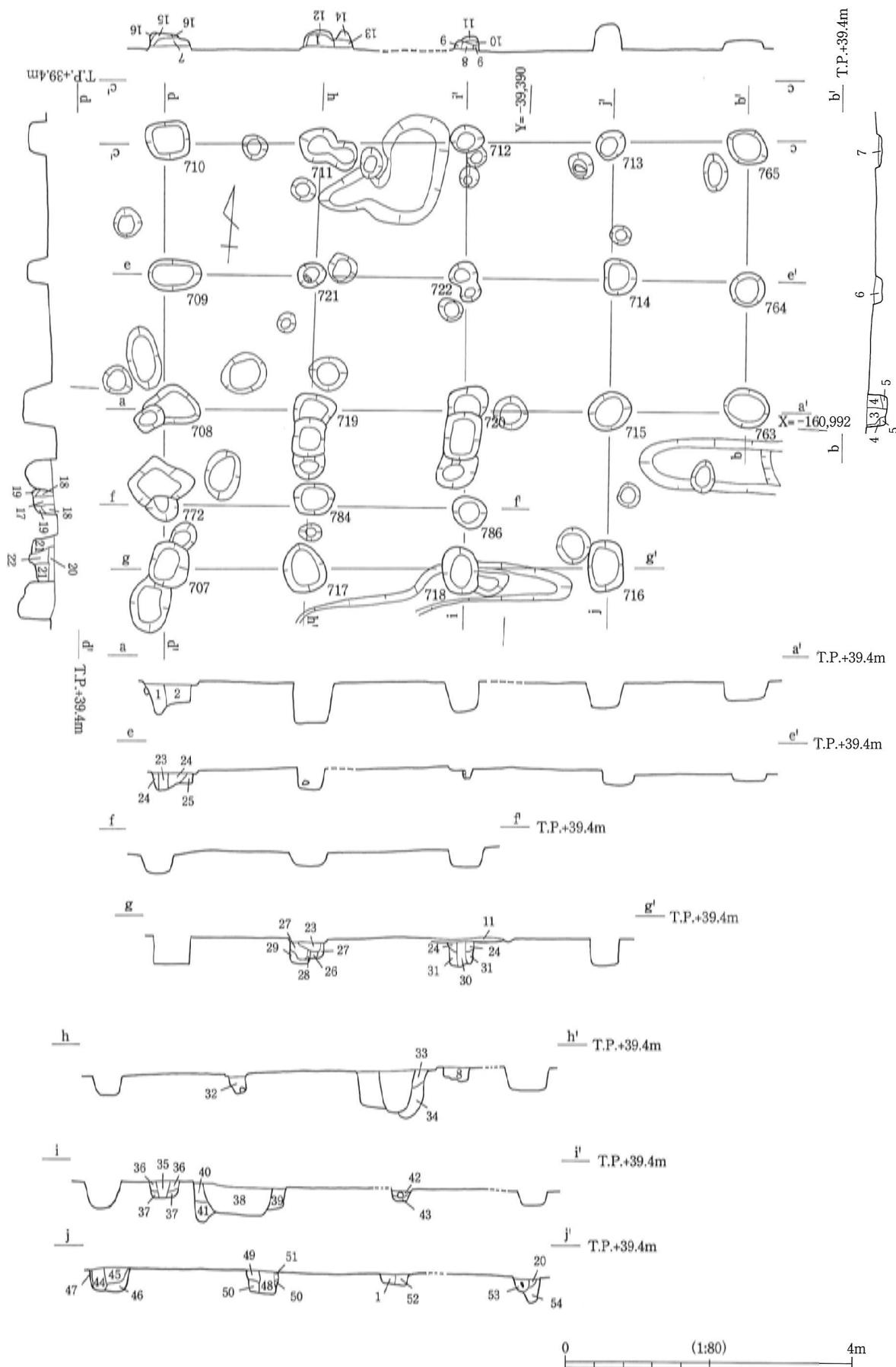


図38 建物21 平・断面図

1. 10YR5/1 極細砂
 2. 2.5Y6/2 中砂まじりシルト
 3. 10YR4/1 極細砂
 4. 10YR5/3 粗砂・シルトまじり極細砂
 5. 10YR6/6 極細砂まじりシルト
 6. 10YR4/1 粗砂まじりシルト
 7. 10YR5/1 極細砂まじり細砂
 8. 10YR5/1 中砂まじり極細砂
 9. 2.5Y5/1 シルトまじり細砂
 10. 10YR5/4 シルト
 11. 2.5Y6/4 極細砂
 12. 2.5Y6/4 シルトまじり細砂
 13. 2.5Y5/1 細砂まじり極細砂
 14. 2.5Y5/3 シルトまじり細砂
 15. 10YR6/1 シルトまじり極細砂
 16. 2.5Y6/4 極細砂まじりシルト
 17. 2.5Y4/1 粗砂まじり極細砂
 18. 10YR4/3 シルトまじり極細砂
 19. 10YR6/6 細砂まじりシルト
 20. 10YR5/2 極細砂
 21. 2.5Y5/4 中砂まじりシルト
 22. 2.5Y5/1 シルトまじり細砂
 23. 7.5Y5/1 極細砂
 24. 10YR5/1 粗砂まじり極細砂
 25. 10YR4/1 粗砂まじり細砂
 26. 7.5YR4/1 粗砂まじり極細砂
 27. 10YR5/4 粗砂まじりシルト
 28. 10YR6/1 シルトまじり中砂
 29. 10YR5/6 粗砂まじりシルト
 30. 10YR4/1 シルトまじり極細砂
 31. 2.5Y4/1 粗砂まじりシルト
 32. 10YR3/1 シルトまじり極細砂
 33. 10YR4/1 細砂まじり極細砂
 34. 10YR6/6 シルトまじり細砂
 35. 10YR5/1 シルトまじり極細砂
 36. 10YR5/3 極細砂
 37. 10YR7/1 シルト
 38. 10YR5/3 細砂まじりシルト
 39. 10YR4/1 極細砂まじり細砂
 40. 10YR5/4 中砂まじり極細砂
 41. 7.5YR4/1 極細砂まじりシルト
 42. 2.5Y5/1 極細砂(炭を含む)
 43. 2.5Y5/4 シルト
 44. 10YR4/1 中砂まじり極細砂
 45. 7.5YR4/1 極細砂
 46. 10YR5/4 細砂まじりシルト
 47. 10YR5/3 細砂まじり極細砂
 48. 10YR4/1 中砂まじり細砂(炭を含む)
 49. 10YR5/1 粗砂まじり細砂
 50. 10YR5/4 極細砂まじりシルト
 51. 2.5Y5/2 粗砂まじり極細砂
 52. 7.5YR5/1 粗砂まじり極細砂(炭を含む)
 53. 2.5Y5/1 粗砂まじり細砂
 54. 10YR5/1 粗砂まじり極細砂(炭を含む)

建物21 土色

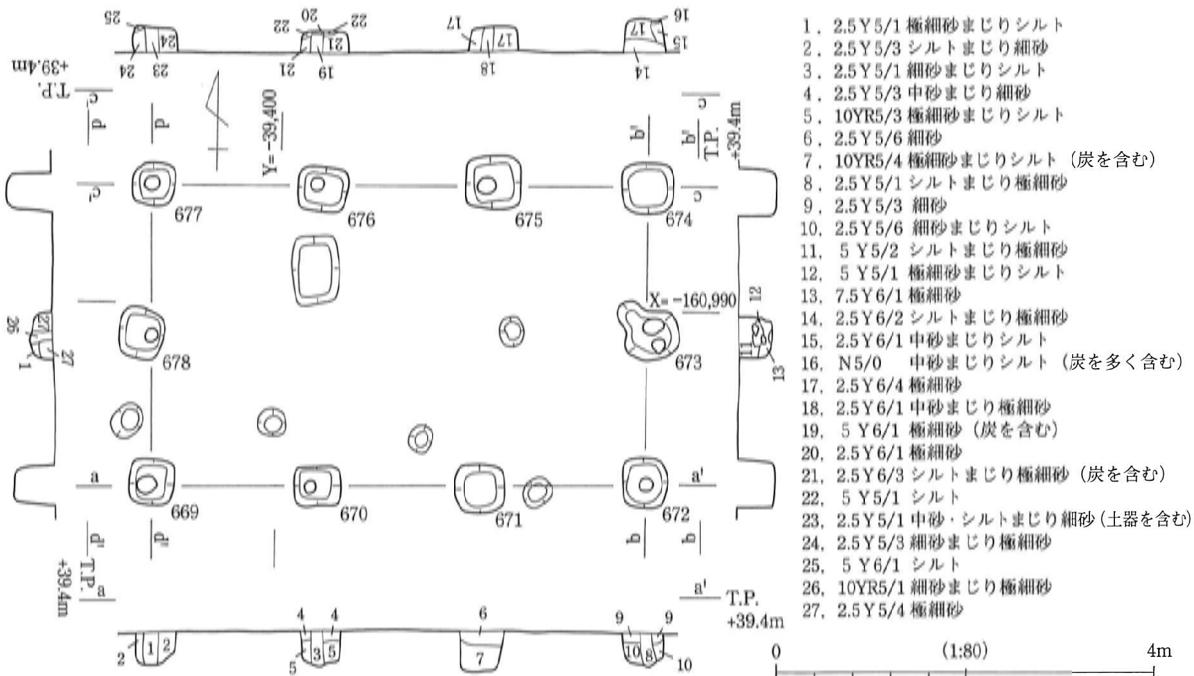


図39 建物20 平・断面図

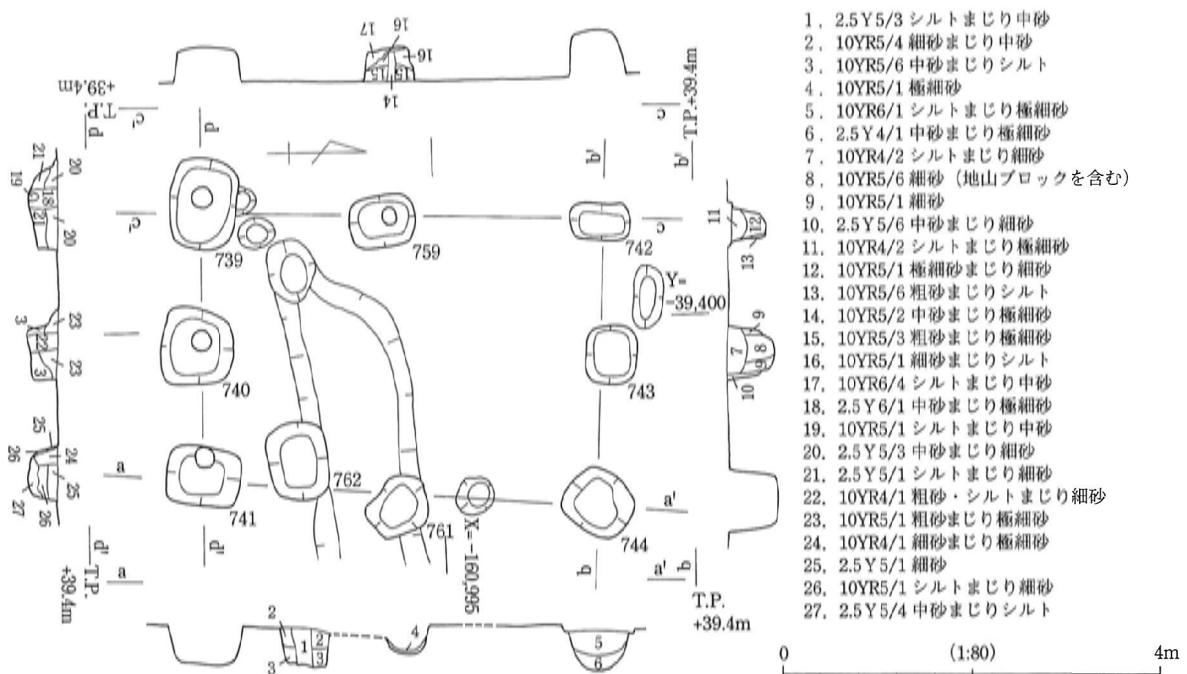
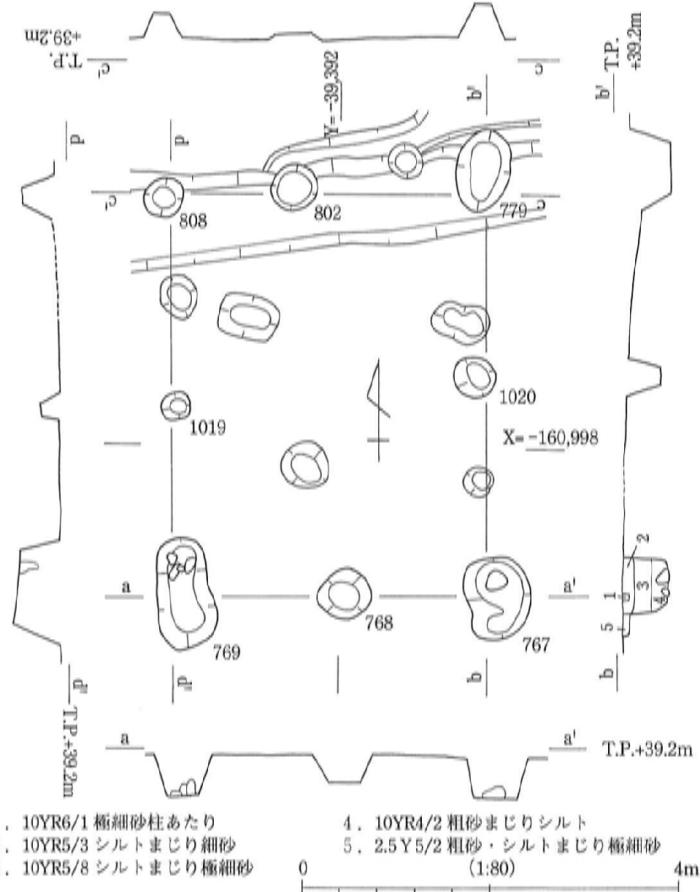


図40 建物22 平・断面図



建物28 建物27の東約1.8mの位置に、南面を揃えて並列させる。桁行2間(3.8m)、梁行1間(2.4m)の南北棟建物である。床面積は9.1m²と、今回の調査で検出した建物の中で一番狭い。桁行の軸は、真北より6°23'25"Wである。柱掘方は円形で、径0.2~0.4m、深さ0.2~0.4mを測る。

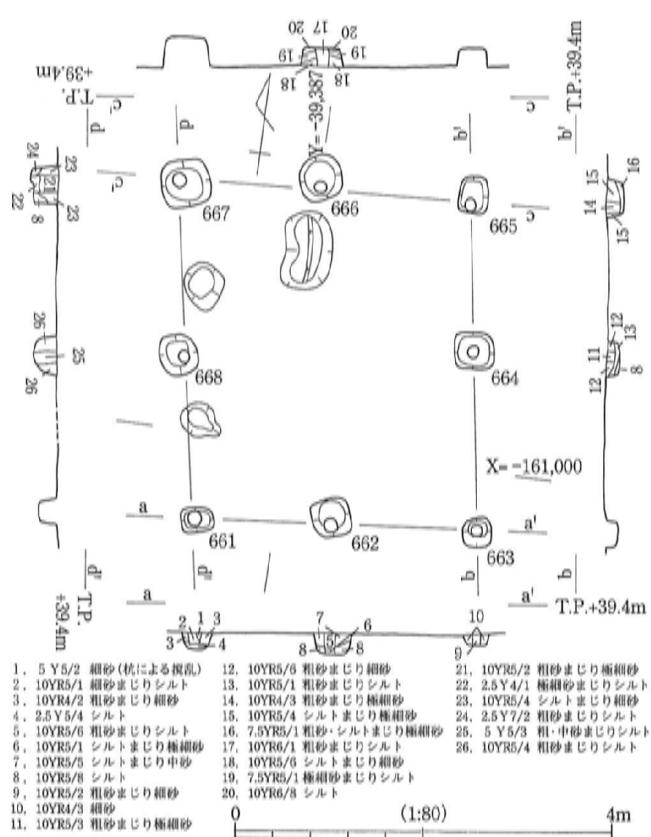
建物29 建物25に重複して建つ、桁行4間(8.1m)、梁行2間(3.8m)の南面庇をもつ南北棟建物である。床面積は30.7m²を測る。桁行の軸は、真北より3°00'08"Wである。柱掘方は円形で、径0.3m、深さ0.2~0.3mを測る。この建物29は、建物25の建て替えと考えられる。

建物30 建物29・31の西約1mに位置する。東西2間(3.0m)、南北1間(2.8m)を確認したが、調査区外に延びるため全容は不明である。南北軸は、真北より10°15'28"Wである。柱掘方は円形で、径0.3m、深さ0.2mを測る。

建物31 建物30の東に軸を揃えて隣接する。桁行3間(6.4m)、梁行2間(4.0m)の東西棟建物である。床面積は25.6m²を測る。梁行の軸は、真北より4°49'26"Wである。柱掘方は円形で、径0.3~0.4m、深さ0.1~0.3mを測る。建物26の建て替えと考えられる。

建物32 建物31の東約13.5mに位置する。桁行4間(8.0m)、梁行1間(2.0m)の南北棟建物である。床面積は16.0m²を測る。桁行の軸は、真北より10°42'55"Wである。柱掘方は円形で、径0.3m、深さ0.1~0.3mを測る。

建物33、柵列14 調査区東半部で検出し



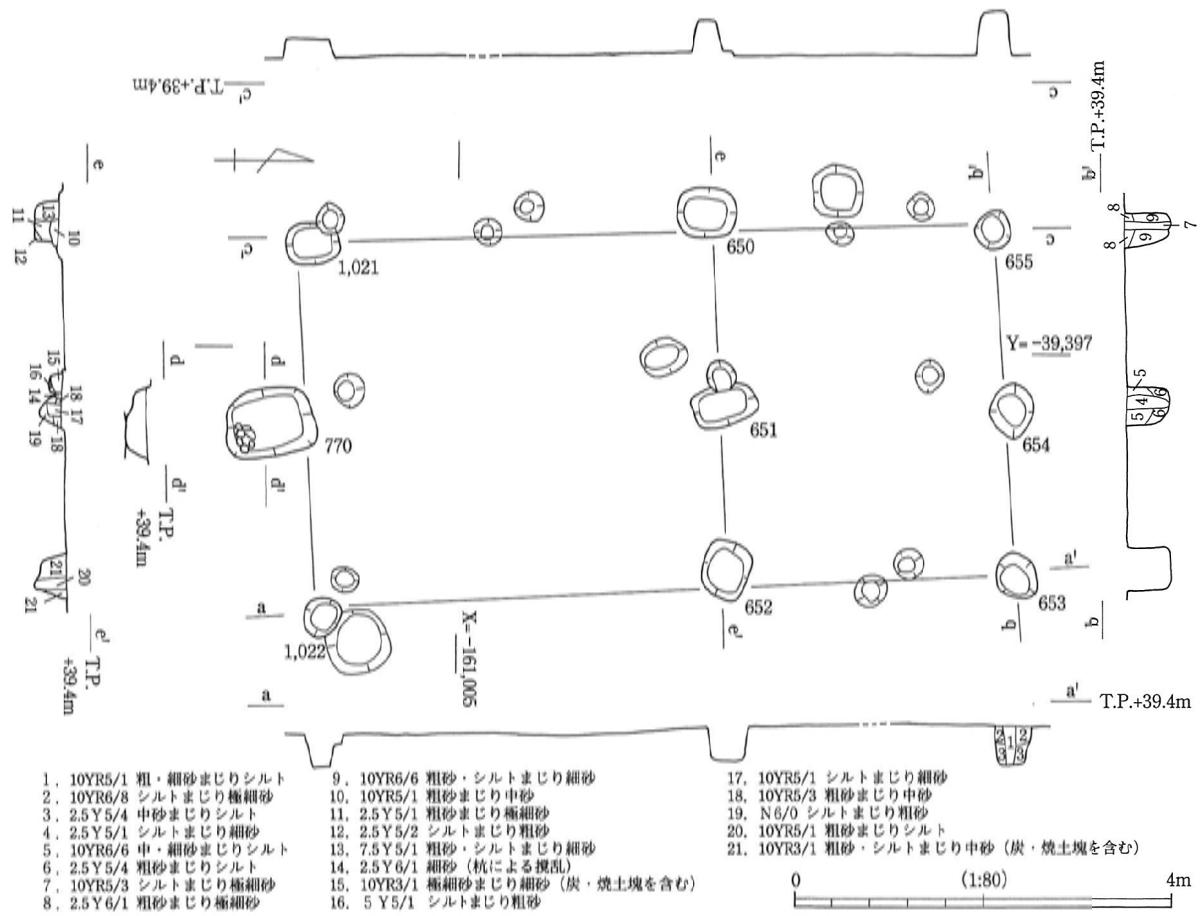


図43 建物25 平・断面

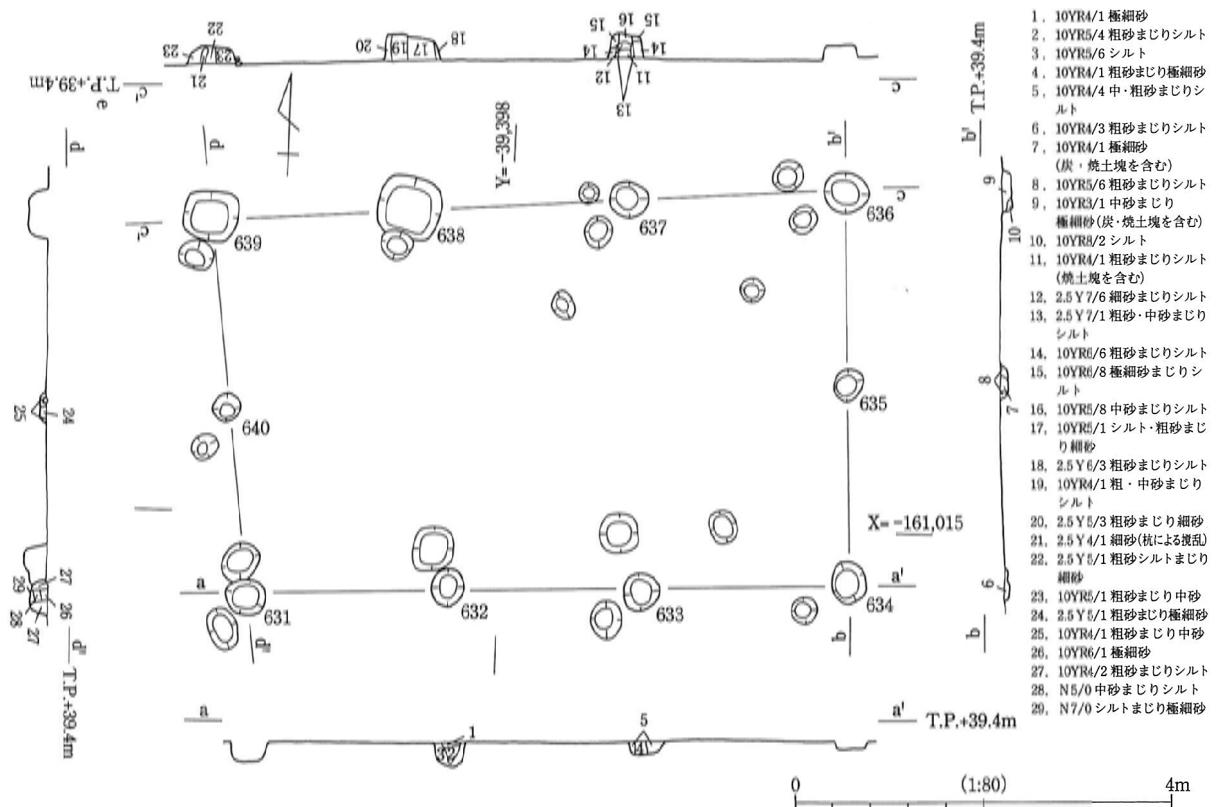


図44 建物26 平・断面図

た。南北1間(2.0m)、東西1間(2.2m)を数えるが、西側の調査区外へ延びる可能性がある。南北軸は、真北より $1^{\circ}02'14''E$ である。柱掘方は円形で、径0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mを測る。建物の

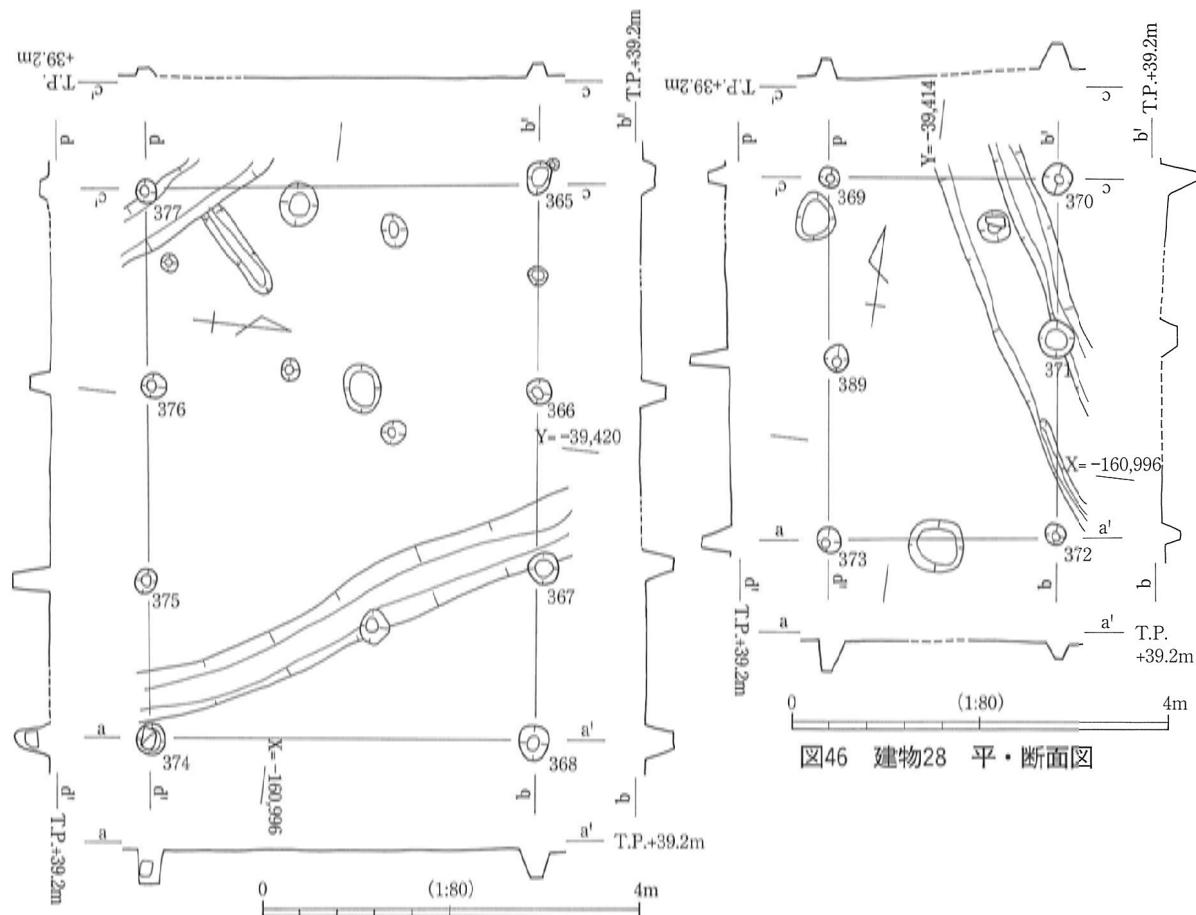


図45 建物27 平・断面図

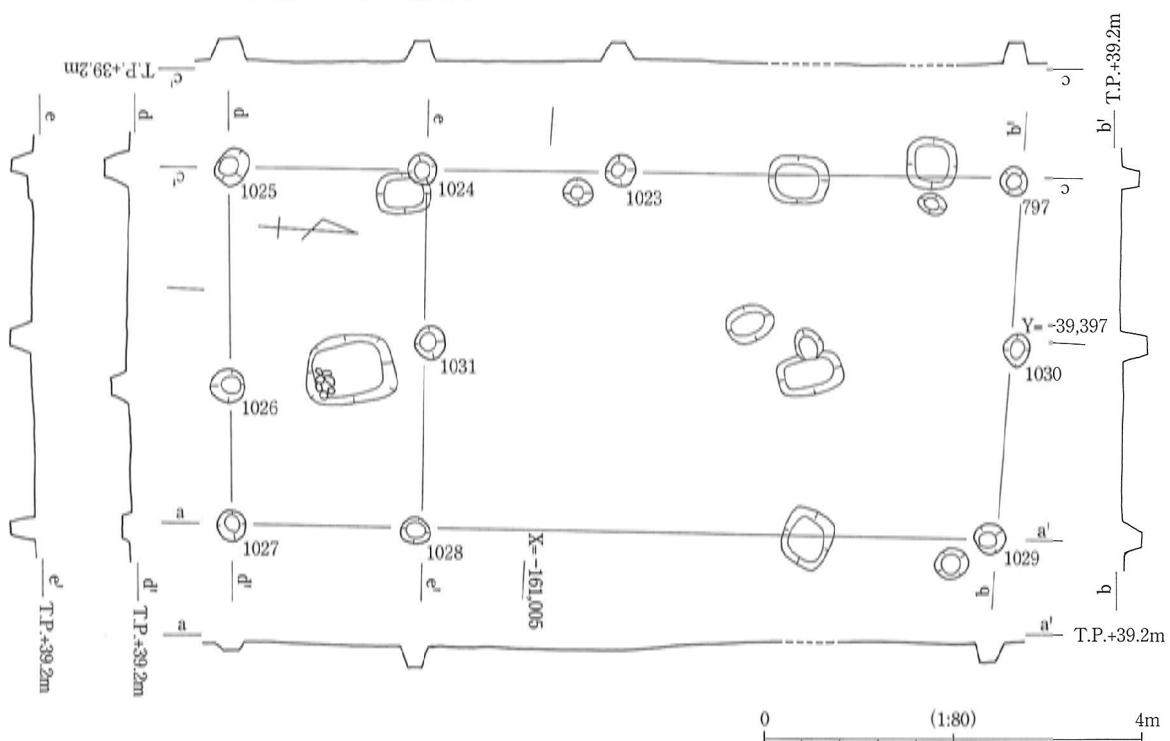


図46 建物28 平・断面図

北側に柵列14を検出したが、庇の可能性もある。

建物34 建物33の東約5mに位置する、桁行3間、梁行2間の東西棟建物であるが、(その2)調査区で検出した建物XVIIIの一部である。この建物34(建物XVIII)の詳細についてはp.104を参照。

建物35 建物33の南東約8.5m、建物34の南約5.2mに位置する、桁行4間、梁行2間の東西棟建物であるが、(その2)調査区で検出した建物XIIの西面庇の一部である。建物35(建物XII)の詳細についてはp.104を参照。

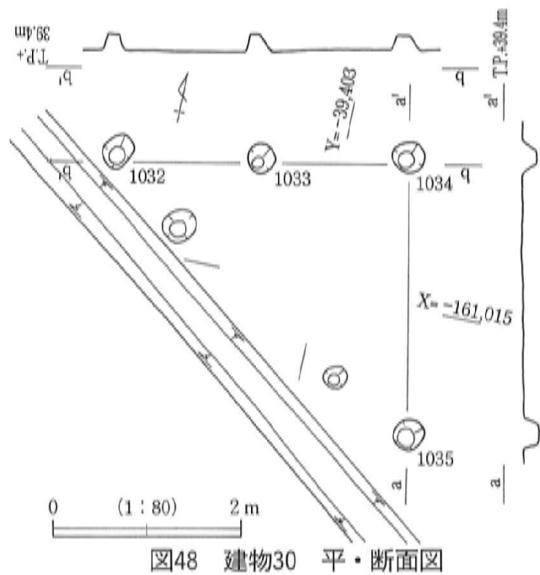


図48 建物30 平・断面図

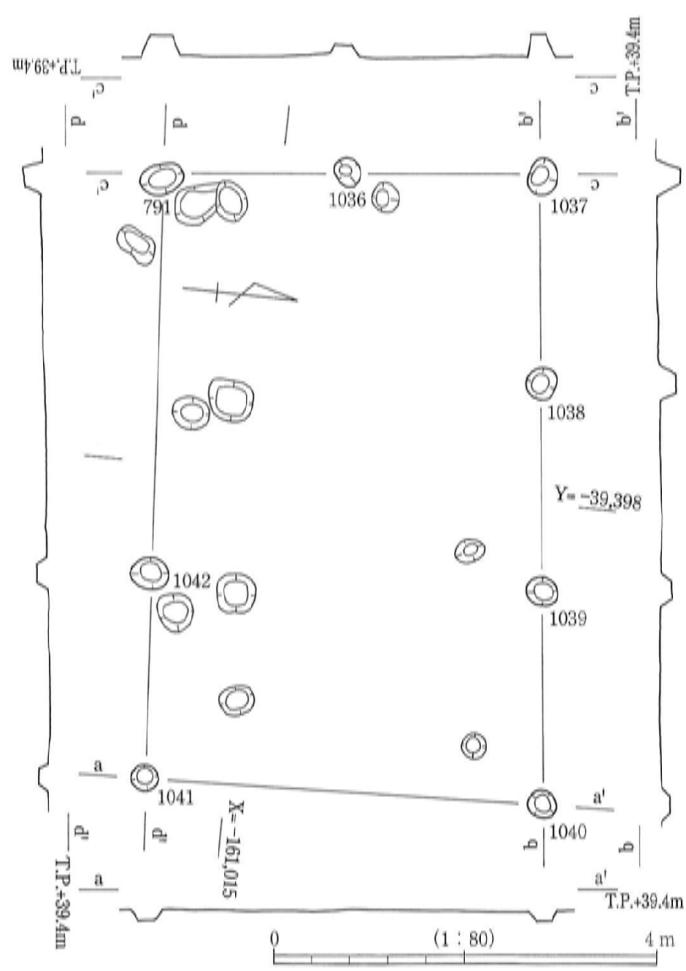


図49 建物31 平・断面図

建物36 建物33の北東約29mの位置にある。桁行2間(3.2m)、梁行2間(2.8m)の南北棟建物であるが、北半部は調査区外に延びるため、詳細は不明である。桁行の軸は、真北より $3^{\circ}19'34''E$ である。柱掘方は円形で、径0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。

柵列10 建物27の西約4mに位置し、建物群の西限を区画する柵である。南北方向に3間(4.8m)検出したが、調査区外へ延びる可能性もある。

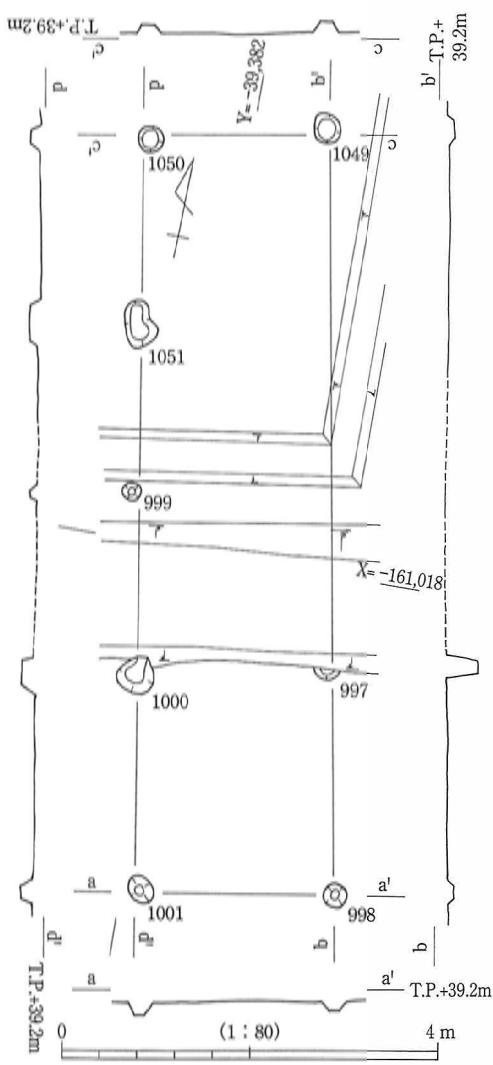


図50 建物32 平・断面図

南北軸は、真北より $3^{\circ}41'01''W$ である。柱掘方は円形で径0.2~0.3m、深さ0.1mを測る。

柵列11 建物17の南約3mの位置に、東西方向に2間(4.2m)検出した。柱掘方は、一辺0.4~0.7m、深さ0.2~0.5mを測る方形であることなどから考えて、この柵列11は建物19に伴うと考えられる。

柵列12 建物18の南東隅柱から東へ約1.2m、建物22の北東隅柱から西へ約1.3mに位置する、南北方向に延びる2間(3.5m)の柵である。これは建物18と建物19の間の空閑地に対する目隠し柵の役割をもっていたのであろう。また、南北軸は真北より $0^{\circ}56'15''W$ で、建物18の梁行軸と同方向である。

柵列13 柵列11の南約4.5mに位置す

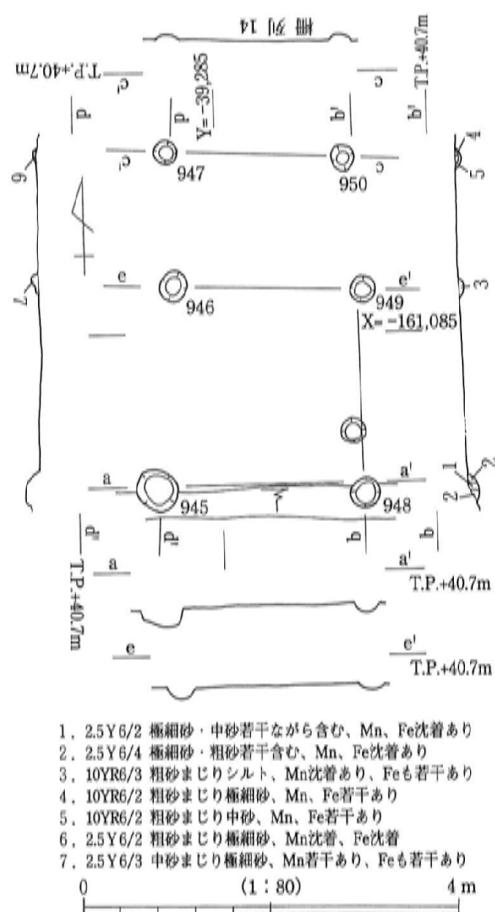


図51 建物33、柵列14 平・断面図

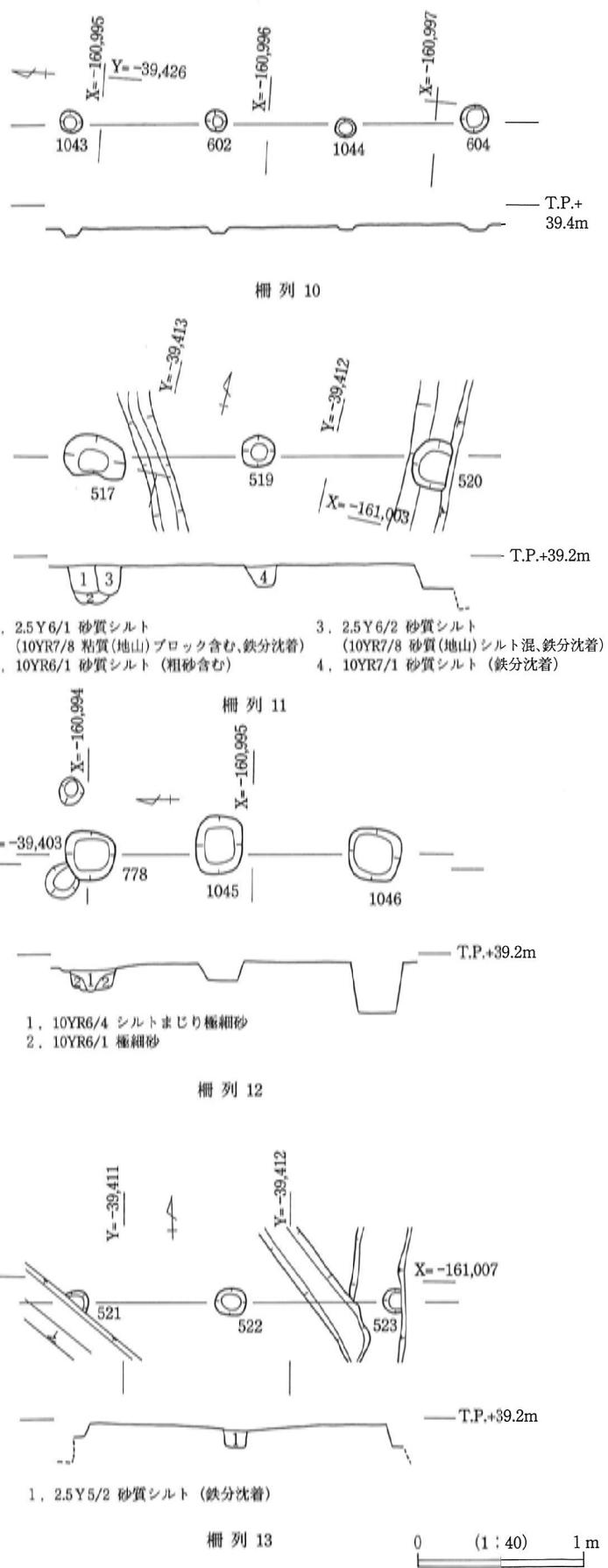
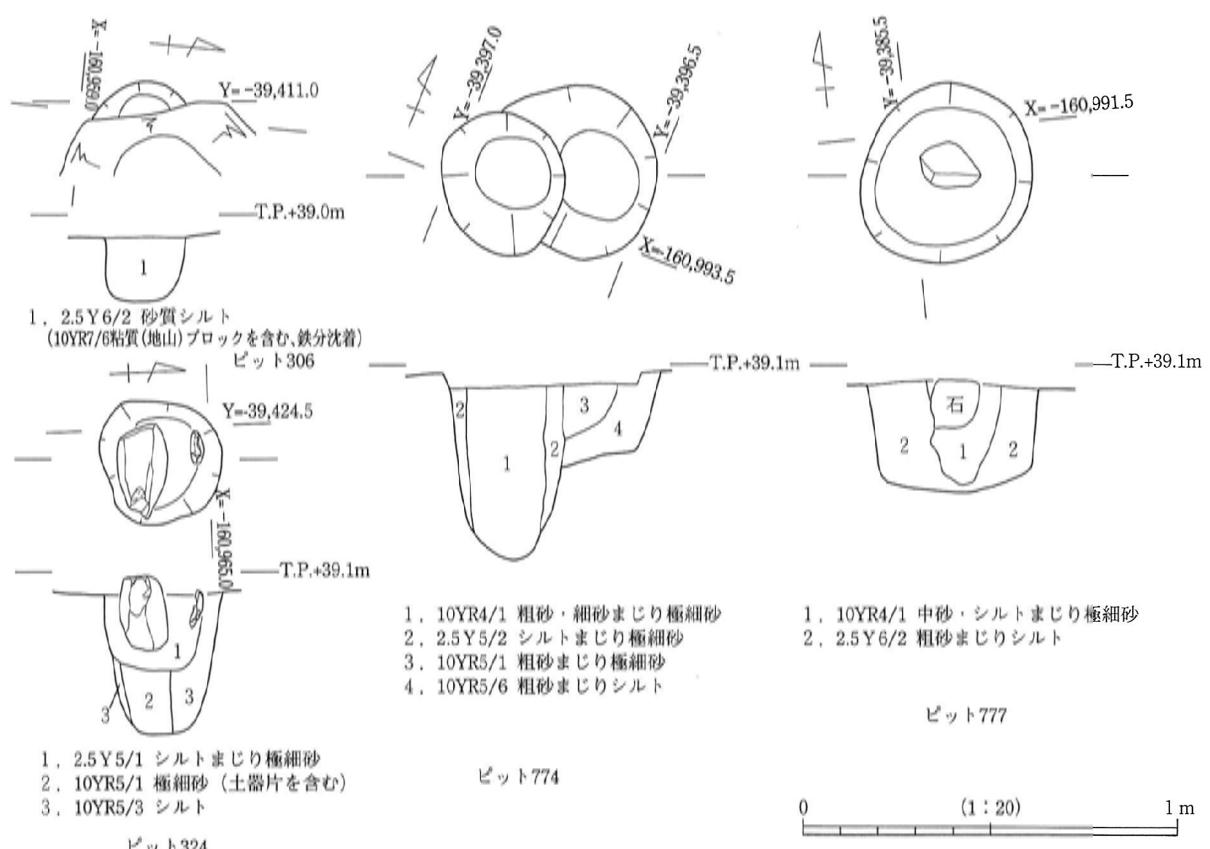
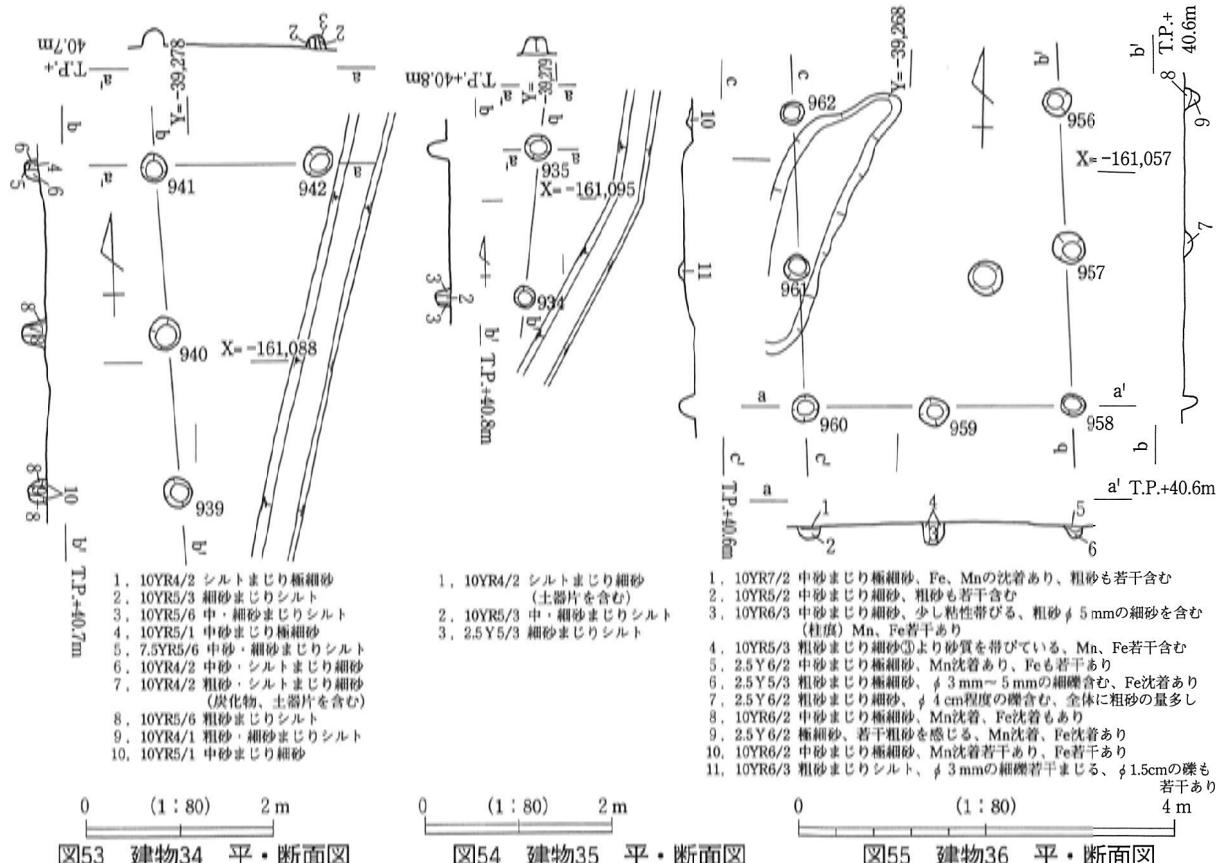


図52 柵列10・11・12・13 平・断面図

る、東西方向に延びる2間(3.8m)の屏である。調査区端に近いことから、西方向への延伸や、建物に発展する可能性もある。



柱穴306 建物13の隣に位置し、東半部を側溝で失ったため、柱痕跡などは見つからなかったが、掘方埋土中より須恵器の円面鏡（図73-8、図版26-1）が出土した。

柱穴324 建物11の東面の柱穴で、建物廃絶時に穴を掘り込み、その中へ花崗岩の角礫と、土師器杯（図73-1）を一枚壁際に立てかけた状態で入れる。

柱穴774 建物22の東にある柱穴で、綠釉陶器片（図173-10）が出土した。

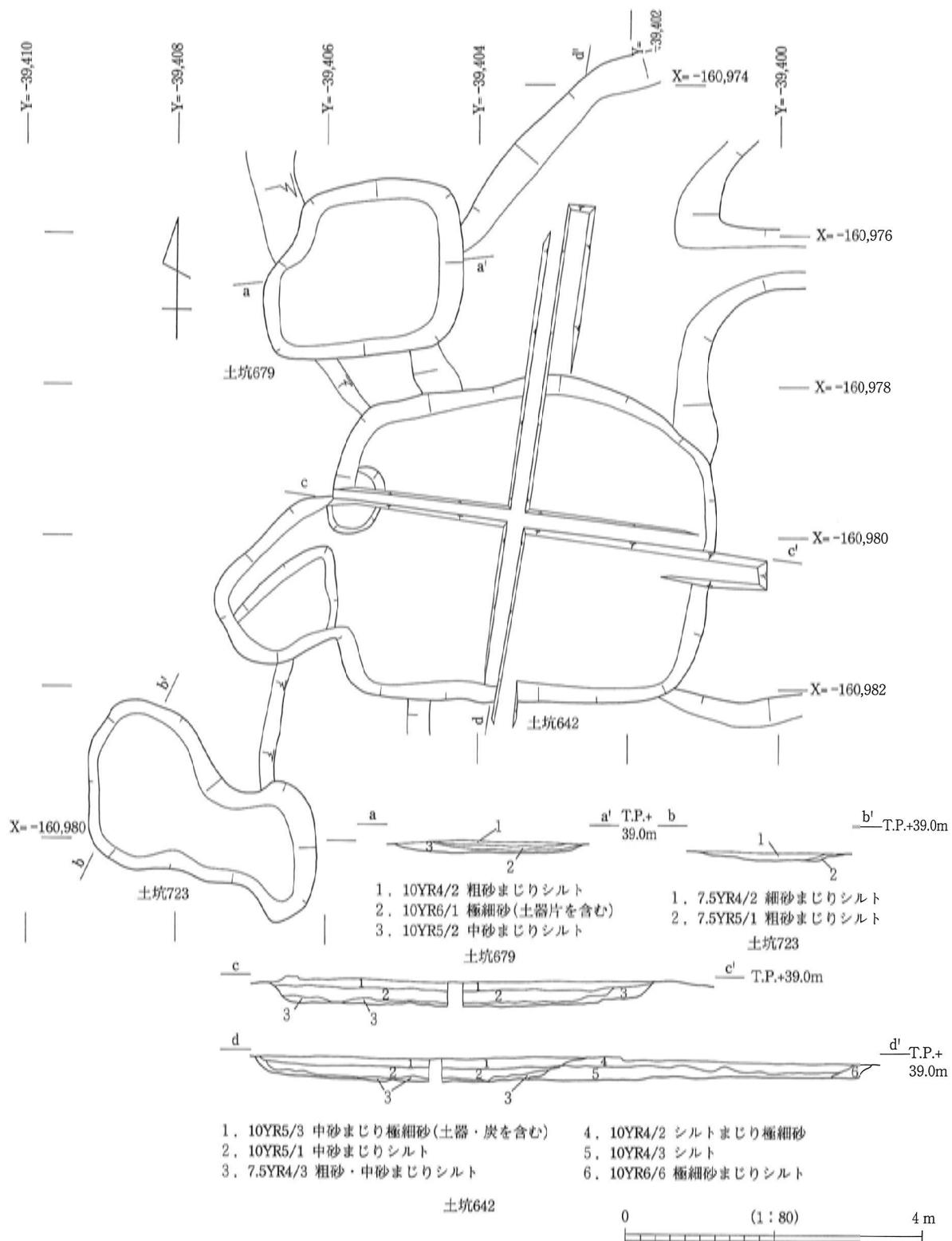


図57 土坑642・679・723 平・断面図

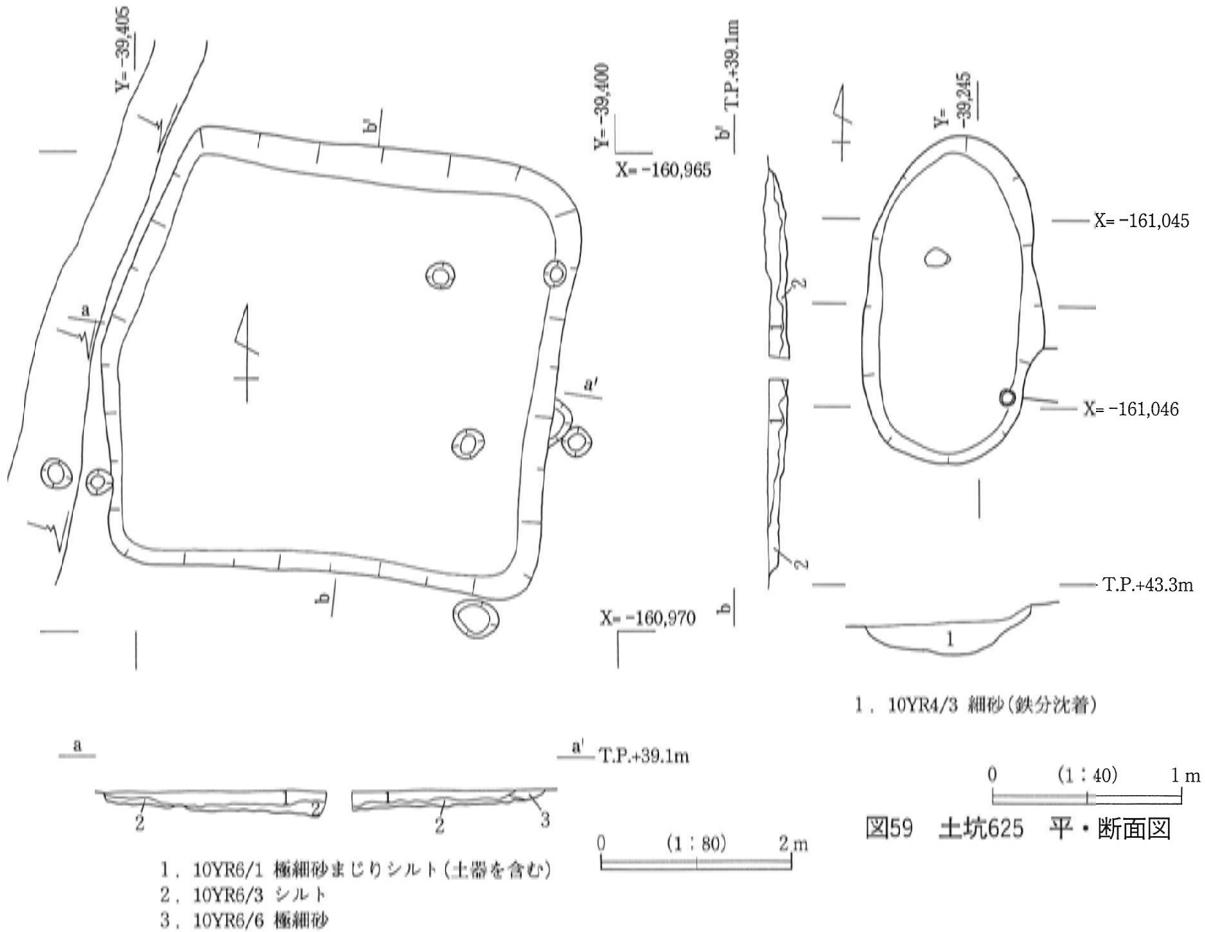
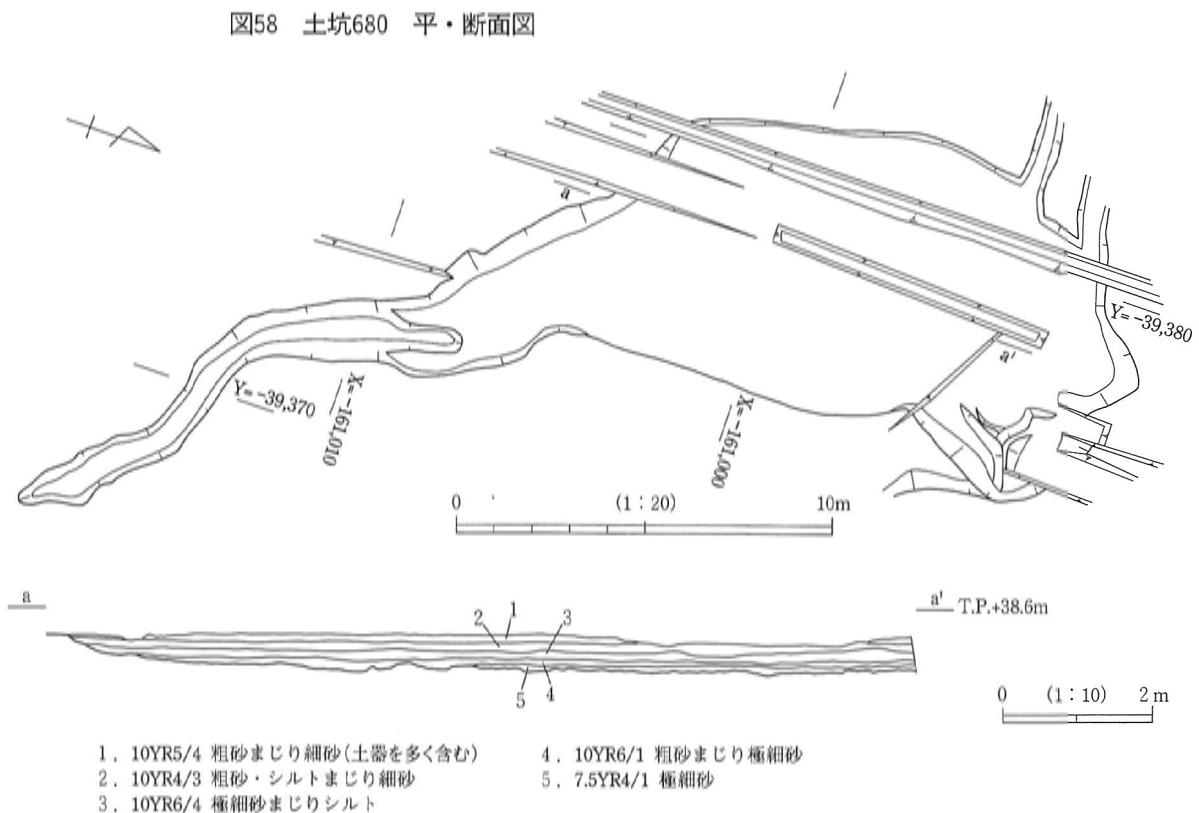
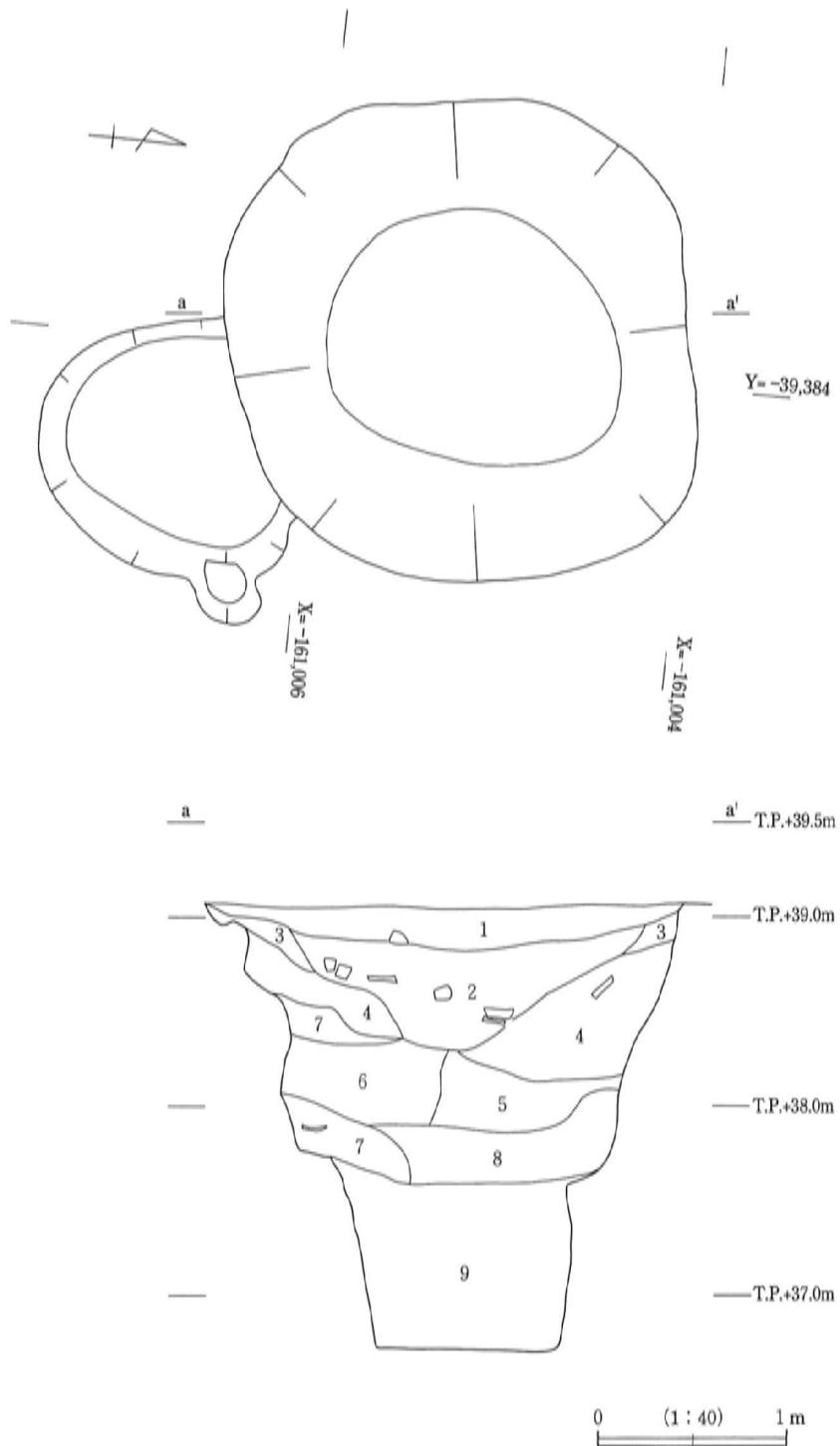


図59 土坑625 平・断面図





- 1. 10YR4/2 粗砂まじり極細砂(2.5Y6/6シルトブロック含む)
- 2. 7.5YR5/1 シルト(石・瓦・土器を多く含む)
- 3. 10YR5/2 粗砂・シルトまじり細砂
- 4. 7.5YR5/6 極細砂(7.5Y6/1シルトブロック含む)、土器を含む
- 5. 5 Y7/1 シルトブロック
- 6. N5/0 粗砂・細砂まじりシルト
- 7. 10YR5/1 粗砂・中砂まじり細砂
- 8. 5 Y4/1 細砂まじりシルト
- 9. 10GT3/1 粗砂まじりシルト

図61 井戸657 平・断面図

柱穴777 建物21の東に位置する柱穴で、廃絶時に被火した凝灰岩の切石（図73-18、図版26-9）が出土した。

土坑642 方形の突出部をもつ方形の土坑である。規模は、縦4.3m、横5.1m、深さ0.3mを測る。突出部の規模は、長辺2.0m、短辺1.6m、深さ0.2mを測る。底部は概ね平坦で、溝729埋没後に掘り込まれる。

土坑679 土坑642の北に位置する、方形の土坑である。規模は、長辺2.6m、短辺2.3m、深さ0.2mを測る。底部は概ね平坦で、溝729埋没後に掘り込まれる。

土坑723 土坑642の南西に位置する、瓢形の不定形土坑である。規模は、長辺3.2m、短辺1.2m、深さ0.3mを測る。底部は概ね平坦で、溝729埋没後に掘り込まれる。

土坑758 建物18の北1.2mに位置する、不定形土坑である。規模は、長辺2.4m、短辺1.2m、深さ0.2mを測る。

土坑680 土坑679の北約6mに位置する、方形の土坑である。規模は、長辺4.7m、短辺4.5m、深さ0.3mを測り、底は平坦で

ある。建物15の廃絶後に掘り込まれる。埋土中より灰釉陶器の底部（図74-1、図版26-10）および土師器碗（図74-2）が出土した。

土坑658 溝396と溝752が取り付く不定形土坑で、建物群の東端に位置する。長辺15.1m、短辺3.7m、深さ0.5mを測る。遺構の中央部を南北方向に現代水路がはしる。埋土は5層あり、上から2層目の10YR4/3粗砂・シルトまじり細砂から遺物が多く出土した。この遺構は、位置や形状、それに堆積状況などから、建物群に伴ってはしる溝群の水が谷部に向かって流れる際の水溜のような役割を果たしていたと考えられる。

土坑625 調査区の北東に位置する。長径1.7m、短径1.0m、深さ0.3mを測る橢円形の土坑である。土坑内より土師器甕（図71-14）および拳大の礫が出土した。

井戸139 飛鳥時代の建物3のすぐ南、平安時代の建物9の北約10mに位置するが、周囲に平安時代の遺構はない。素掘りの2段掘りの井戸で、規模は径1.6m、深さ1.3mである。井戸廃絶後、埋め戻しの際、上層に一辺0.2mの角礫と共に須恵器杯身（図73-5）や鉄鉢形鉢（図73-6）などの遺物が出土した。

井戸657 建物群の東端で、建物24の南約3.5mに位置する。素掘りの2段掘りの井戸で、一辺2.5mの隅丸方形を呈す。深さは2.4mを測り、基盤層下の湧水層にまで達する。井戸廃棄時には、下層および中層まで一気に埋め戻した後、上層は廃棄土坑として多量の遺物を廃棄がみられた。出土した遺物（図75-1～16、図版27-1～4）は、須恵器杯身・壺、土師器碗・甕・鉢、平瓦などである。中でも特筆すべきは、須恵器杯身底部外面に「甲」と書かれた墨書き土器（図75-3、図版27-2）が出土したことである。

溝838 建物群の西端を南北方向にはしる溝で、条里制地割施行に伴う坪境溝である。現代道路の下に当っていたため残りが悪く、一部を検出したのみである。規模は、幅1.2m以上、深さ0.4mを測る。平安時代の建物群はこの坪境溝より東にのみ展開するため、集落の西限を示す区画溝の役割も担っていたと考えられる。出土した遺物は、灰釉陶器短頸壺（図77-1、図版28-5）、角礫などである。

溝396 建物群の中に入り、東西方向にはしる溝群のひとつで、建物21の南東隅から掘り込まれて、土坑658に取り付く。規模は、長さ7.2m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。溝からは多量の遺物（図77-7～14、図版28-7～9、29-1～3）が出土した。須恵器杯身・壺、土師器杯身・甕・羽釜などである。建物21が溝396に規制されて東面庇を控えることや、建物21に並行することなど

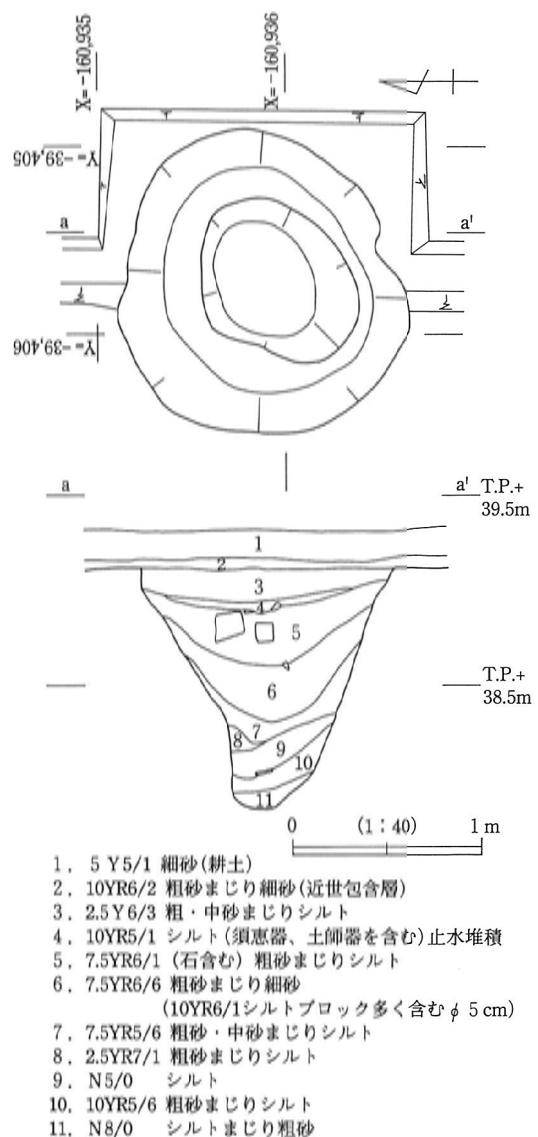


図62 井戸139 平・断面図

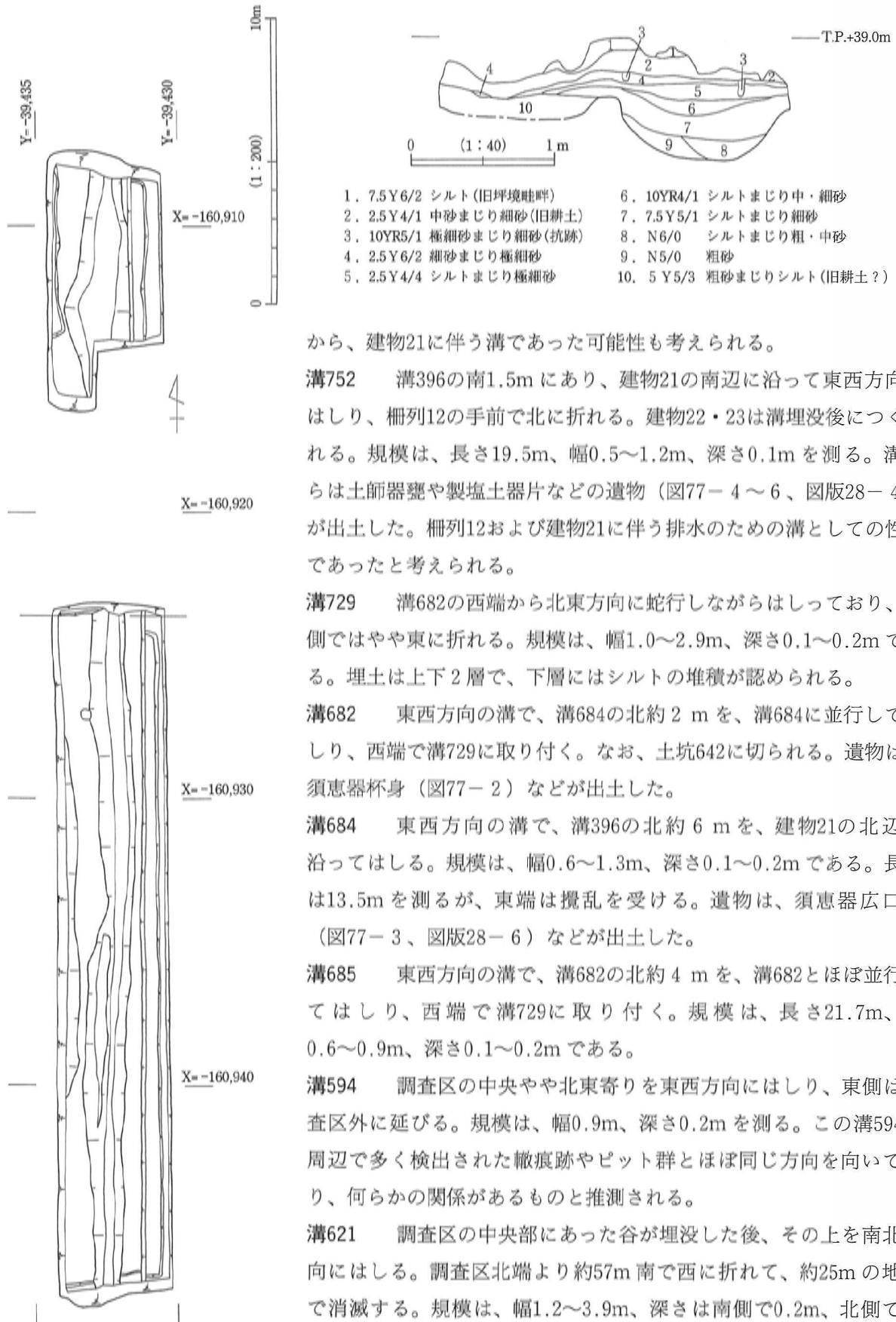


図63 溝838 平・断面図

らに、この溝621が西に屈曲するあたりには、東西方にはしる轍痕跡が多くみられることなどから、屈曲部が坪境にあたると思われる。

炉952 調査区の東端部、建物34の北約11mの地点で検出した。長辺1.3m、短辺0.5mを測る平面長方形を呈する。深さは5cmで、細砂まじり中砂の炭層が堆積する。炉の周囲が5~15cm幅で被火による地面の変色がみられる。

炉933 建物33から南へ約12m、炉952から南南西へ約34mの地点で検出した。炉の平面形は不定形であるが、長辺0.5m、短辺0.4m、深さ5cmを測る。炉の最下層には炭層が、その上層には焼土塊を含むシルトまじり細砂がそれぞれ堆積する。また、炉の周囲は5~15cm幅で、被火による地面の変色がみられる。

轍痕跡 溝621が屈曲するあたりを中心に、東西方に向に多く轍痕跡が認められる。轍痕跡は無数にあるが、その中でも比較的残りのよいものについて断面観察を行った結果、轍痕跡は断面逆台形もしくは方形で、幅は下幅4.5~5.0cm、上幅5.0~7.0cm、深

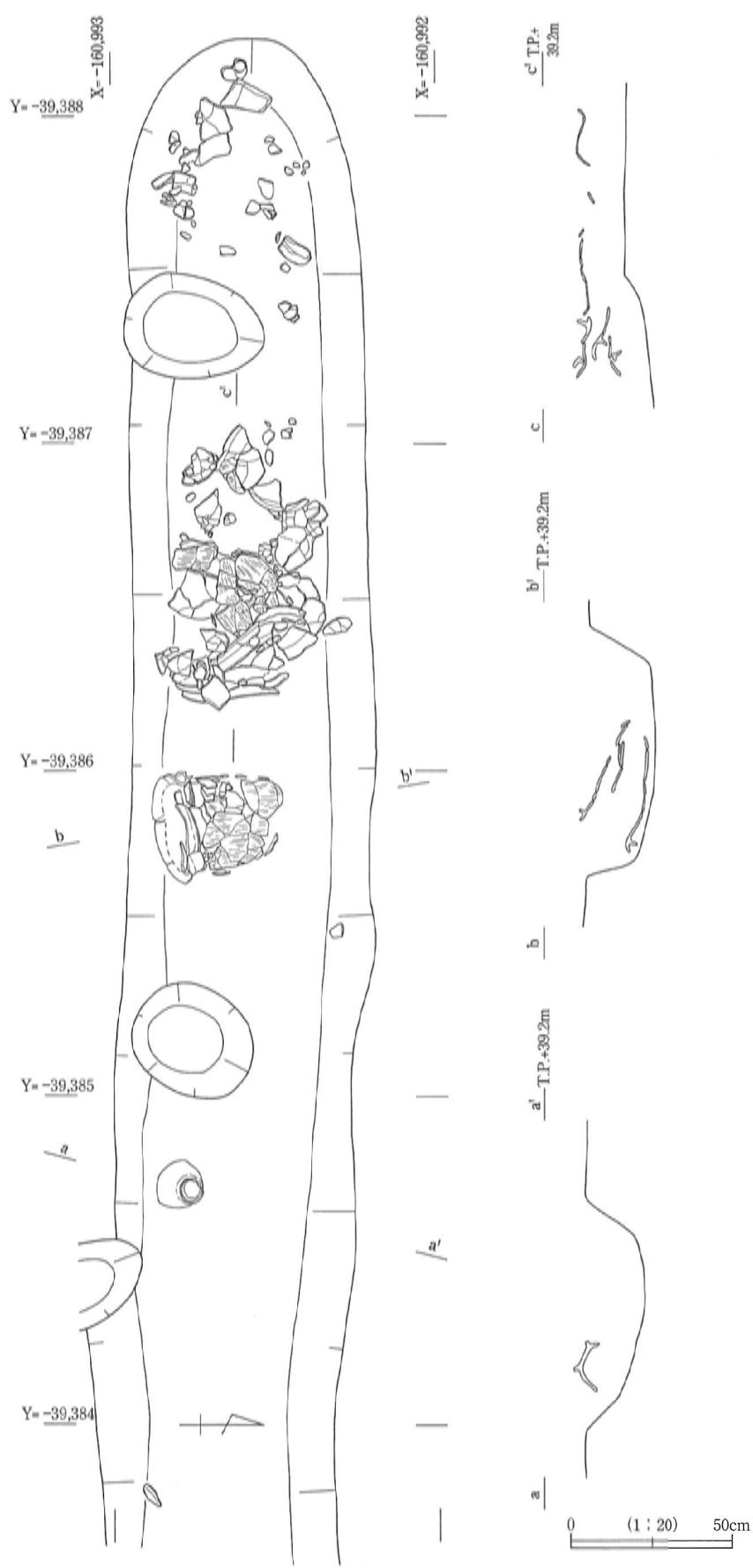


図64 溝396 平・断面図

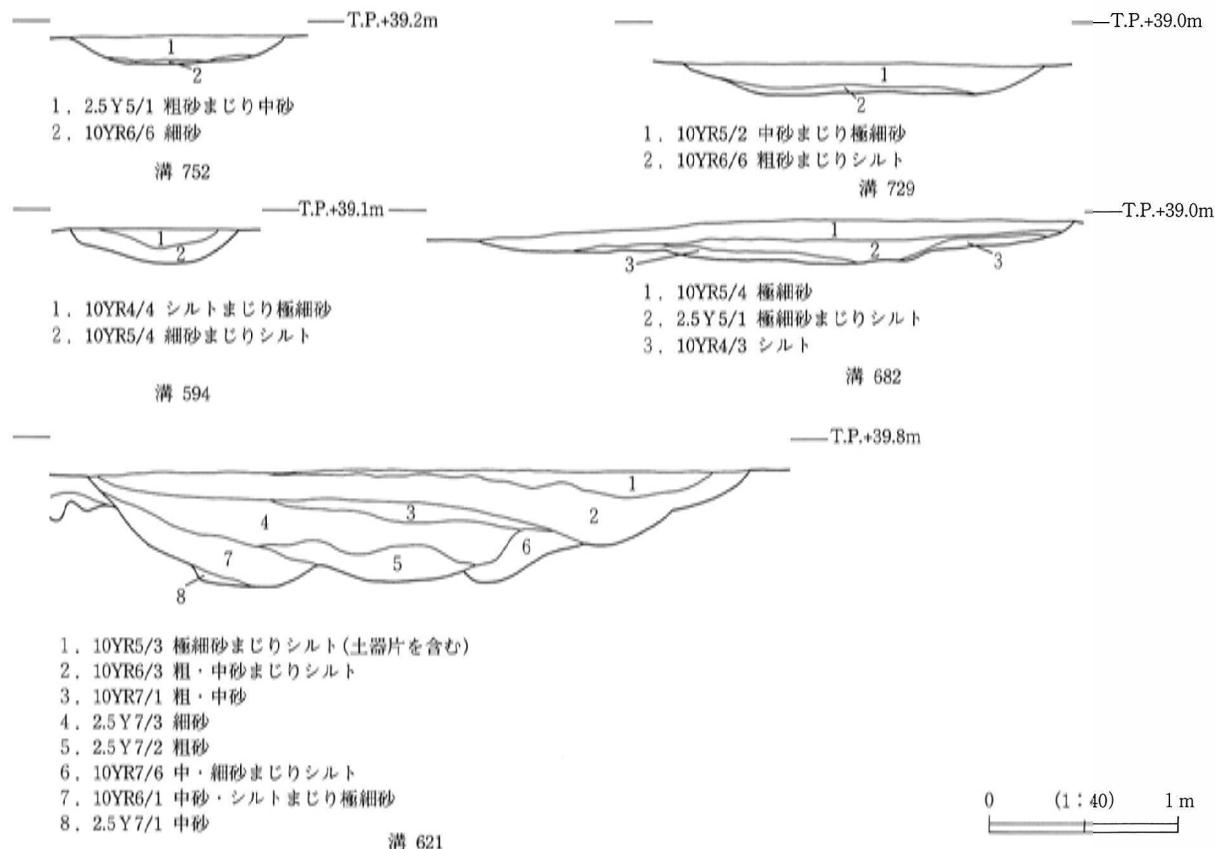


図65 溝594・621・682・729・752 断面図

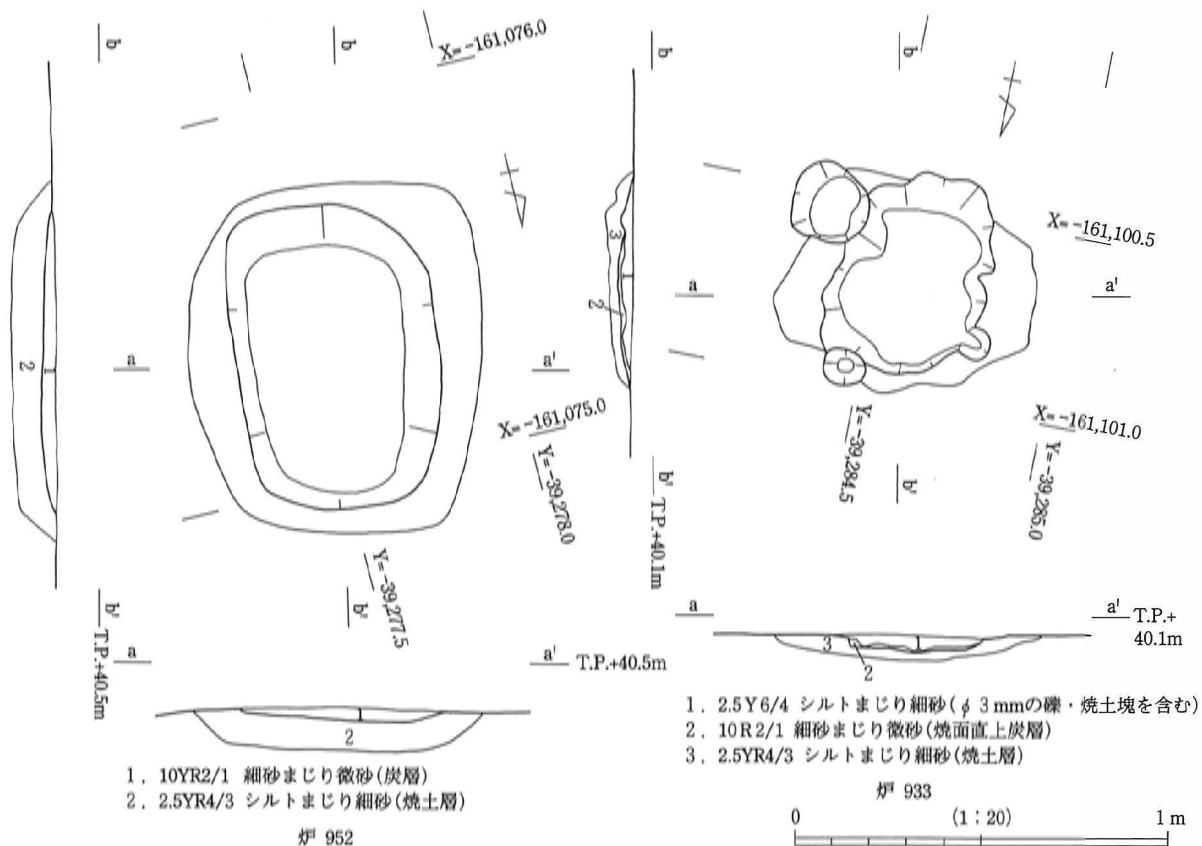


図66 焼土坑933・952 平・断面図

さ3.0~5.0cmで、洪水砂によって覆われる。ちなみに両輪が明らかにわかる轍痕跡の幅は1.6mを測る。さらにこれらの轍痕跡は鎌倉時代の溝に切られる。

ピット列群 今回の調査で、谷部を中心に東西方向および北東-南西方向にピット列を検出した。ピット列は、長径0.5~1.2m、短径0.2~0.5m、深さ5~15cmの楕円形のピットが3~14基、概ね0.2~0.4m間隔で並ぶ。従来の研究結果から、車を引く牛馬の歩みの痕跡であるとする説や、重量物を運搬する際に使用する「転」説などがあるが、当調査区内でも轍痕跡と共に検出されることが多い。

鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は、正方位に則った溝2条と、正方位に斜行する溝1条、井戸1基、さらに土坑2基を検出したのみである。

溝344 調査区の西半部を北上し、東に折れる。屈曲部には井戸660が築かれ。溝の規模は、幅3.5~6.2m、深さは南北に流れる部分は0.1m程だが、屈曲部から東では0.4~0.5mを測る。溝埋土中から、瓦器椀・皿・小皿、須恵器円面鏡、銅製品（太刀の足金物）など（図80-3~11、図版30-6~10）が出土した。この溝344は正方位に則って掘削されているものの、平安時代の条里制地割とは一致しない。しかし、この時期の遺構の中で屋敷地など集落域を示唆する遺構は検出されなかったことなどから、耕作地における区画溝であると考えられる。

溝579 調査区の北端で、溝344の東約118mの位置で検出した、南北方向にはしる溝である。規模は幅1.5m、深さは南で0.1m、北の調査区端で0.4mを測る。遺物は、瓦器椀の細片

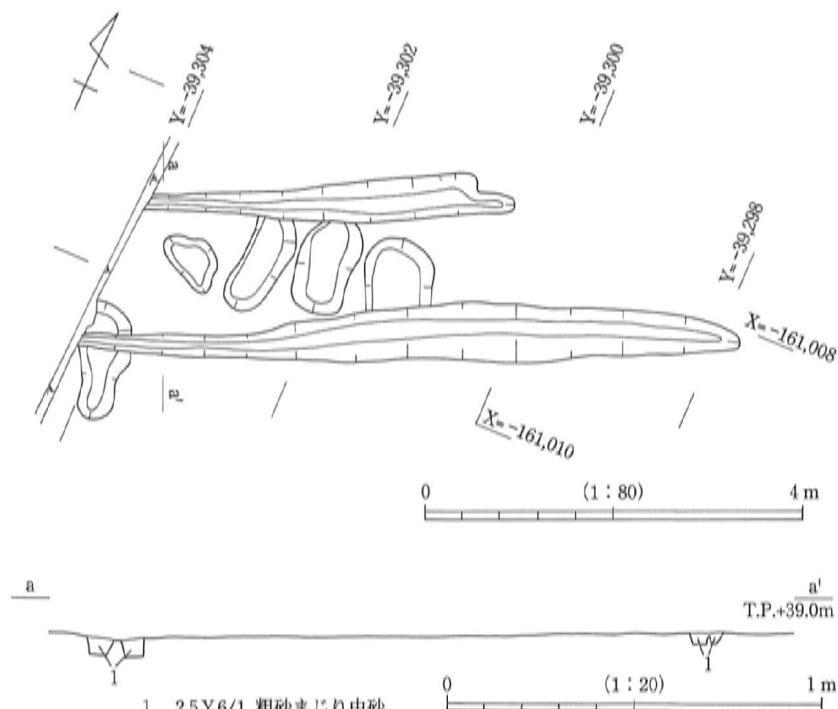


図67 轟痕跡 平・断面図

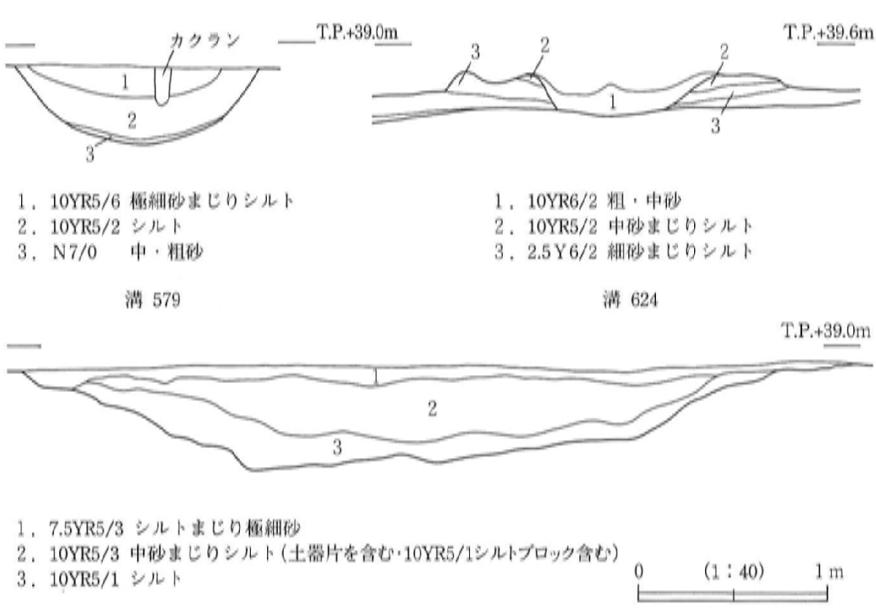


図68 溝344・579・624 断面図

が出土したのみである。

溝624 調査区中央部を、古墳時代の谷や平安時代の溝621などが埋没した後を、南西—北東方向にはしる。調査区北端部付近では残りがよく、溝の両側に畦が構築される。溝の規模は、幅0.9m、深さ0.2mで、畦の規模は幅0.5m、高さ0.1mを測る。調査区の中央部で溝988と合流する。

土坑913 調査区南東部にある不定形土坑である。規模は、長辺3.5m、短辺2.7m、深さ0.1mを測る。坪境と思われる溝群に隣接することから、耕作に伴う土坑と考えられる。土師器小皿（図80-1、図版30-7）が出土した。

土坑921 調査区北東部に位置する。規模は、径0.9m、深さ0.2mの円形を呈する。土坑底部より瓦器椀（図80-2、図版30-6）が出土した。

第4項 遺物

石器（図69-70、図版20～22） 当調査区から出土した石器は全てサヌカイト製で、旧石器時代のナイフ形石器から弥生時代の石鏸まで多種にわたる。全て原位置から遊離しており、包含層中および遺構の中に混入した状態で出土した。

石鏸・ナイフ形石器・削器・有舌尖頭器・石匙（図69-1～17、図版20・21）

1～12は石鏸である。縄文時代の凹基無茎式9点（図69-1～7・9・10）、弥生時代の尖基無茎式2点（図69-11・12）である。1は平面やや細長で、側縁部を直線的に仕上げる。逆U字形の抉りをもつ。器厚は薄い。重量は0.55gである。2は摩耗が顕著で、先端部が欠損する。浅めの逆U字形の抉りをもつ。3は直線的な側縁部をもつが、先端部は鈍く仕上げる。逆U字形の抉りをもつ。重量は0.55gである。4は細長の平面を呈し、側縁は内彎しながらのび、先端部は鋭く尖るように仕上げる。逆U字形の抉りをもつ。逆刺の一部を欠損するが、重量は0.78gを量る。5は一方の逆刺を欠損する。側縁部は直線的にのびる。逆U字形の抉りをもつが、逆刺は丸みをもたせるように仕上げる。重量は1.21gである。6は一方の逆刺を欠損する。側縁はやや外彎しながらのび、先端部は鈍く収める。抉りは深く、逆刺部は比較的長く鋭く仕上げる。器厚は厚めで、重量は2.10gである。7は側縁部が緩やかなS字状のカーブを描く。凹基部の抉りは深く、逆刺は鋭く長く仕上げる。器厚は厚く、重量は2.25gを量る。8は先端部のみで、下半部を欠く。側縁部は直線的にのびる。9は先端部が大きく欠損する。浅く大きな抉りをもち、逆刺は鋭く仕上げる。10は左右非対称で外彎する側縁をもち、先端部は鈍く仕上げる。深いが幅の狭い抉りをもち、逆刺は緩やかな丸みを帯びるものである。重量は1.33gを量る。11はいわゆる木葉形石鏸であるが、先端は欠損する。側縁部は細かな鋸歯状に仕上げ、外彎しながらのびる。本来は鋭い先端を有していたと考えられる。基部は、若干抉り込んで有茎状に仕上げる。重量は1.78gを量る。12は同じく木葉形石鏸である。体部と基部の境にゆるやかな稜をもつ。側縁部は外彎しながらのび、先端を鈍く仕上げる。基部の一部を欠損するが、重量は1.88gである。

13・14はナイフ形石器である。13は翼状剝片を素材とする。素材の面構成は、右面が一枚のポジティブ面、左面は石核のポジティブ面と先行する剝片剥離作業によるネガティブ面で構成される。プランティングは右面右側縁を打面に丁寧に施す。14は上半部を欠損する。翼状剝片と思われる横長剝片を使用する。右面が1枚のポジティブ面、左面は石核のポジティブ面と先行する剝片剥離作業によるネガティブ面で構成される。プランティングは右面右側縁を打面に鋸歯状に施す。15は削器である。縦長剝片を素材とする。右面には1枚のポジティブ面で構成され、バルブが鮮明に残る。左面には一部自然面

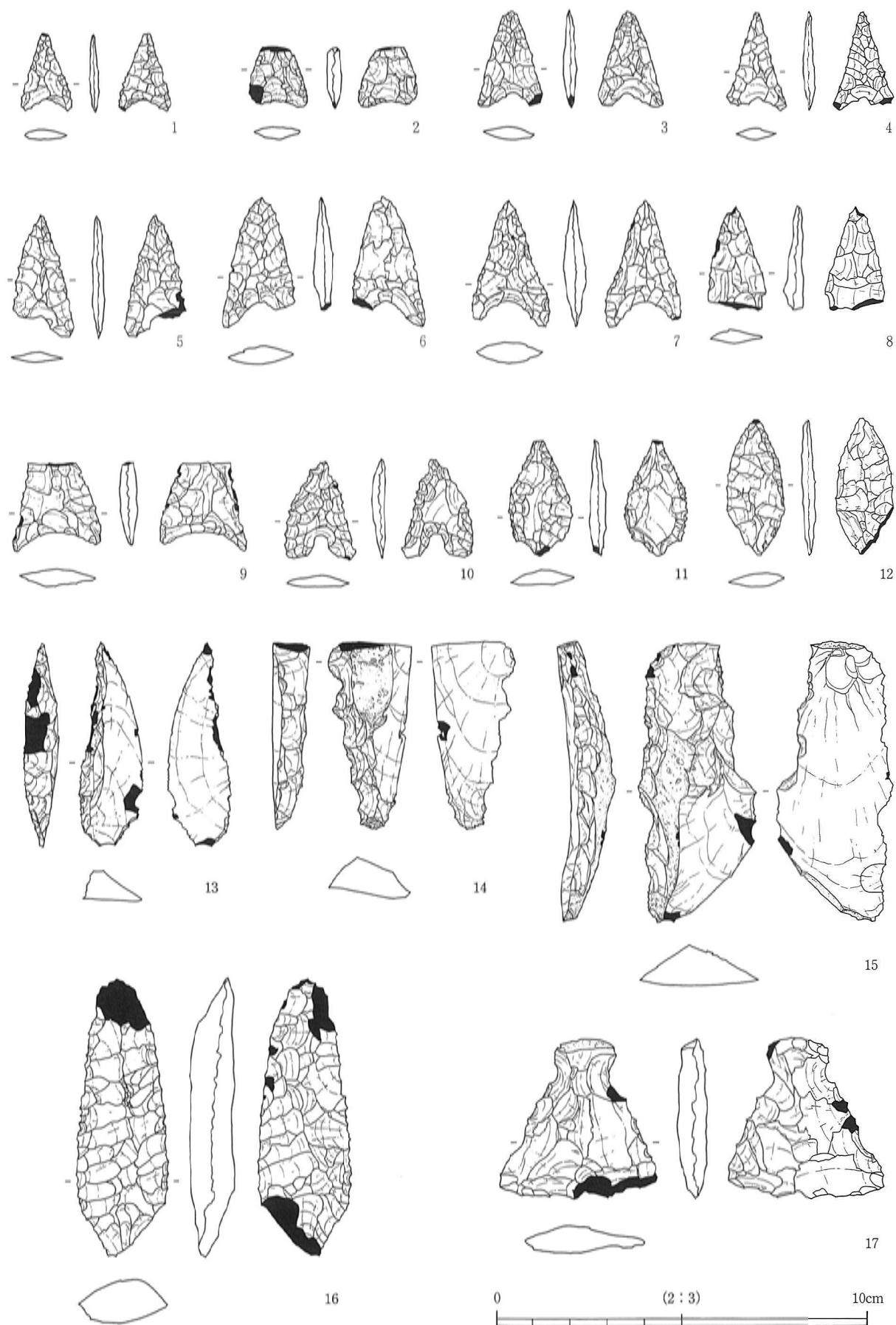


図69 包含層 出土石器 (1)

を残す。数回のポジティブ面と剝片剝離作業に伴う数回のネガティブ面を施す。プランディングは右面右側縁を打面に施す。16は有舌尖頭器である。先端部および基部の一部を欠損する。両面とも大きな剝離の調整を行った後、両側縁部から細かい調整剝離を施す。17は石匙である。深形調整を行っているため素材は不明である。但し、上面には自然面が残る。つまみの抉り部分は両面とも調整を行う。刃部は一部欠損が認められるものの、総じて右面の調整が粗い。

楔形石器（図70-1～8、図版22）

1～8は楔形石器である。1は平面四角形を呈し、右面は1枚の左面は2枚のポジティブ面で構成される。上下端部に両極打法による剝離を行い、上端部には階段状剝離が認められる。両極打法による剝離は、あまり内側に侵入しない。2は平面台形を呈し、右面は2枚のポジティブ面が確認できたが、左面は上下端部からの両極打法による剝離が深いため、1枚のポジティブ面しか確認できなかった。3は平面四角形を呈し、両面とも2枚以上のポジティブ面で構成される。上下端部に両極打法による剝離を行い、下端部には階段状剝離が認められる。プランディングは右面左側縁を打面に施す。4は平面五角形を呈し、両面とも3枚以上のポジティブ面で構成される。上下端部に両極打法による剝離を行うが、両極打法による剝離は、左面右端部を除いてあまり内側に侵入しない。5は平面四角形を呈す。縦長の剝片を使用し、右面に1枚の、左面に2枚のポジティブ面で構成される。また、プランディングは右面左側縁を打面に施す。上下端部に両極打法による剝離を行うが、両極打法による剝離は、左面右端部を除いてあまり内側に侵入しないが、下端部には階段状剝離が認められる。6は平面三角形を呈し、右面は2枚の、左面は1枚のポジティブ面で構成される。さらに、右面上端部および左面中央部には自然面が残る。下端部には剝離が認められるが、上端部には明らかなツブレ状の階段状剝離が認められないため、楔形石器にはならない可能性もある。7は扁平な原礫を使用し、平面四角形を呈す。上下端部とも、両極打法による剝離によって階段状剝離が顕著に認められる。8は平面五角形の横長を呈す。右面は自然面が残る。左面は複数のポジティブ面で構成される。上下端部に両極打法による剝離を行い、上下端部とも階段状剝離が顕著に認められる。

古墳時代（図71、図版23・24）

谷843 出土遺物（図71-1～13、図版23） 調査区の中央部をはしる開析谷の底部より出土した。1～12は須恵器である。1～4は杯蓋である。1は天井部中央に中凹みのつまみがつく。2は平らな天井部をもち、体部はまっすぐ気味にのびる。3は丸い天井部をもつ。4は内面中央部に当て具痕跡が残る。5～11は杯身である。5は内傾する立ちあがりをもち、底部はやや扁平に仕上げる。底部内面に同心円紋の当て具痕が残る。6は内傾する立ちあがりをもち、底部は丸く仕上げ、内面には同心円紋の当て具痕が残る。7は内傾する立ちあがりをもち、底部は扁平に仕上げる。底部内面には同心円紋の当て具痕が残る。8はやや内傾しながら立ちあがり、口縁端部は面をつくる。底部は丸く仕上げ、外面にヘラ記号を施す。9は内傾気味に立ちあがり、底部は丸く仕上げる。10は口縁部が外反しながら立ちあがる。11は口縁部が内傾しながら短く立ちあがる。12は提瓶である。口縁部は外反しながら立ちあがり、端部は段をなす。体部前面は丸く膨らみカキメ調整を、背面は平らでヘラケズリ調整を施す。また、体部内面には接合時のヘラ状工具による圧痕が残る。体部側面には鉤形の耳がついていたと考えられるが欠損する。13は手捏ね土器の高杯である。製作方法は、形1.5cmの棒状の台に粘土柱を差し込み、杯部を捻り出す。口縁部を横方向のナデによる調整で整形した後、棒から外して脚部の成形を行う。

谷914 出土遺物（図71-14～17、図版24） 15～17は須恵器である。15は杯身である。内傾して立

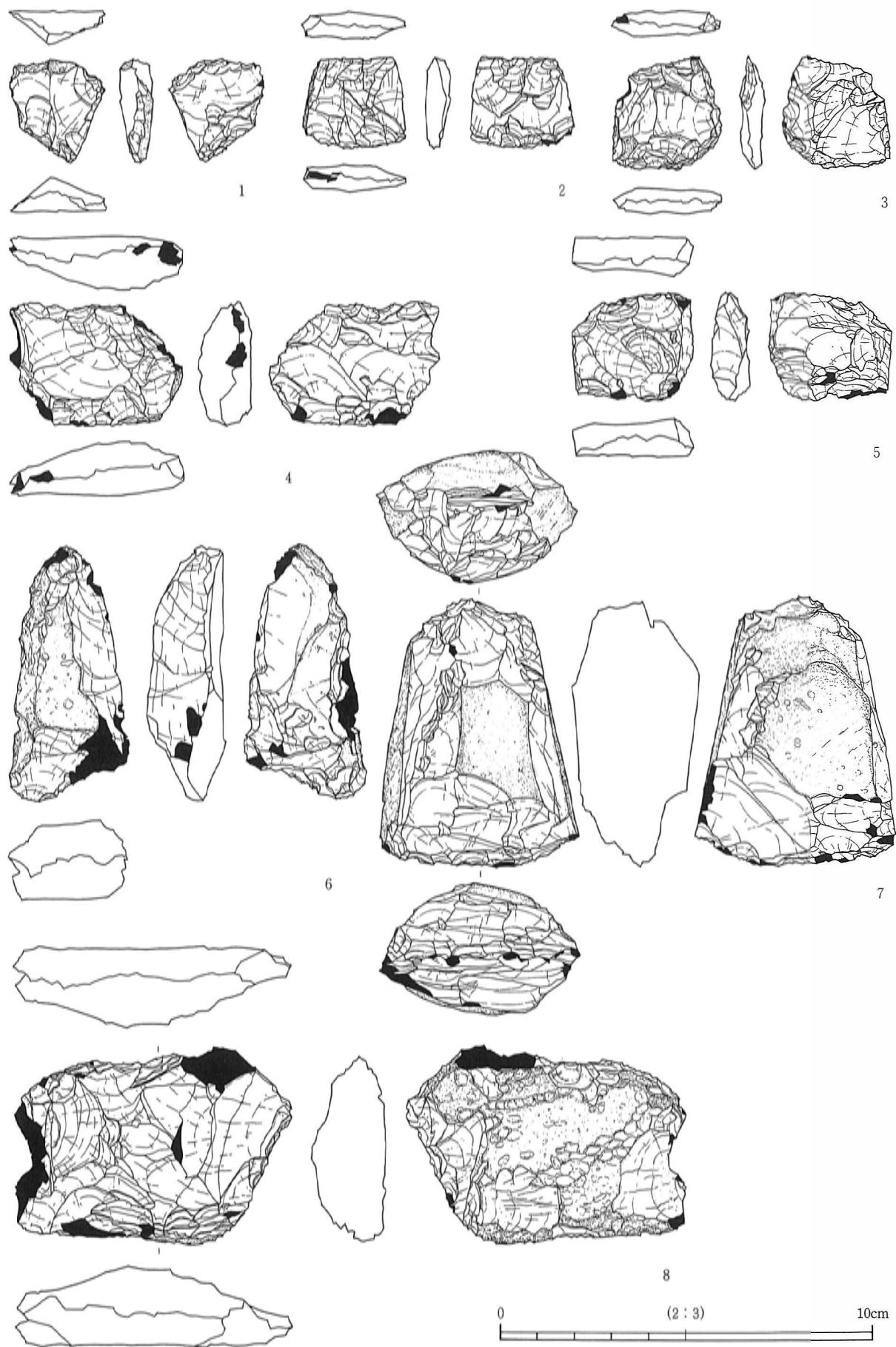


図70 包含層 出土石器 (2)

ちあがる口縁をもつ。16は小型の有蓋短頸壺である。体部外面下半にヘラケズリ調整を行う。17は提瓶である。口縁部は大きく外反しながら立ちあがり、端部は段をなす。前面は扁平な膨らみをもつ。背面は大半を失う。前・背面ともにカキメ調整を行う。体部側面には鉤形の耳がつく。

7層 出土遺物 (図71-18~22、図版24) 18~22は須恵器である。18は杯蓋である。丸みのある天井部をもち、口縁短部は丸く収める。19・20は杯身である。20は丸みのある底部をもち、口縁は短く内傾する。19は底部が焼きひずみにより凸状に盛りあがる。21・22は小型の有蓋短頸壺である。21は口縁部を欠損する。ややなで肩の体部をもち、体部上半部に粘土紐の痕跡が残る。体部外面中央部にはカキメを、底部にはヘラケズリ調整を行う。22は内傾する口縁をもち、肩は大きく張る。体部外面中央部にはカキメを、底部にはヘラケズリ調整を行う。

飛鳥時代 (図72、図版24~25)

ピット71 (建物2) 出土遺物 (図72-1、図版24-9) 1は柱穴の掘方埋土から出土した、須恵器杯蓋である。天井部にヘラケズリ調整を行った後、天井頂部にやや扁平な宝珠つまみがつく。内面にはかえりがつくが、口縁部よりも下に突出しない。口径10.9cm、器高2.8cmを測る。

ピット240 (建物7) 出土遺物 (図72-2) 2は柱穴の掘方埋土から出土した、土師器甕である。大きく外反する口縁と、肩の張らない体部をもつ。体部外面はハケメ調整を、体部内面はヘラケズリ調整を行う。また、口縁部はナデ調整の後、内面に横方向のハケメ調整を施す。

土坑241 出土遺物 (図72-3~6、図版24・25) 3は須恵器杯蓋である。天井部にヘラケズリ調整を行った後、天井頂部に扁平な宝珠つまみをつける。内面にはかえりがつくが、口縁部よりも下に突出しない。口径15.0cm、器高3.3cmを測る。4は須恵器杯蓋である。やや丸みのある天井部をもつ。口径13.6cm、器高4.2cmを測る。5は土師器杯である。表面の剝離が顕著なため、調整は不明である。口径14.2cm、器高3.4cmを測る。6は土師器甕である。器壁の厚い体部と短く外反する口縁部をもつ。内面にはハケメ調整を施す。

溝3 出土遺物 (図72-7・8、図版25-7) 7は平瓶である。上半部を欠損する。体部最大径は22.4cmを測る。8は須恵器甕である。頸部は大きく外反し、口縁端部は上方につまみあげる。体部外面にはカキメを施す。

溝88 出土遺物 (図72-9~11、図版25-3・4) 9は須恵器杯身である。底部内寄りに高台がつく。口縁はまっすぐ上外方にのびる。10は須恵器甕である。口縁部はやや開き気味にまっすぐ立ちあがり、端部は面をなす。頸部外面にはタタキ痕跡が残る。肩部外面はタタキの後、カキメ調整を施す。11は土師器鉢である。口縁は大きく外反し、端部は面をもつ。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には横方向のハケメを施す。

溝390 出土遺物 (図72-12、図版25-5) 12は須恵器杯蓋である。扁平な宝珠つまみをもつ。内面にはかえりがつくが、口縁部よりも下に突出しない。口径は11.4cm、器高は2.5cmである。

溝574 出土遺物 (図72-13~17、図版25-6・7) 13~17は須恵器である。13は杯身である。やや丸みをもつ底部は弱い仕上げナデを施す。口径0.8cm、器高3.5cmを測る。14は杯身である。平らな底部とまっすぐ上外方にのびる口縁をもつ。底部は未調整である。15は甕であるが、頸部を欠損する。平底気味の底部をもつ。16は壺体部下半部である。外面はヘラケズリ調整を行い、高台がつく。17は鉄鉢形鉢である。体部は内彎しながら立ちあがり、口縁端部は面をなす。

5層 出土遺物 (図72-18~21、図版25) 18~21は須恵器である。18・19は杯蓋である。どちらも

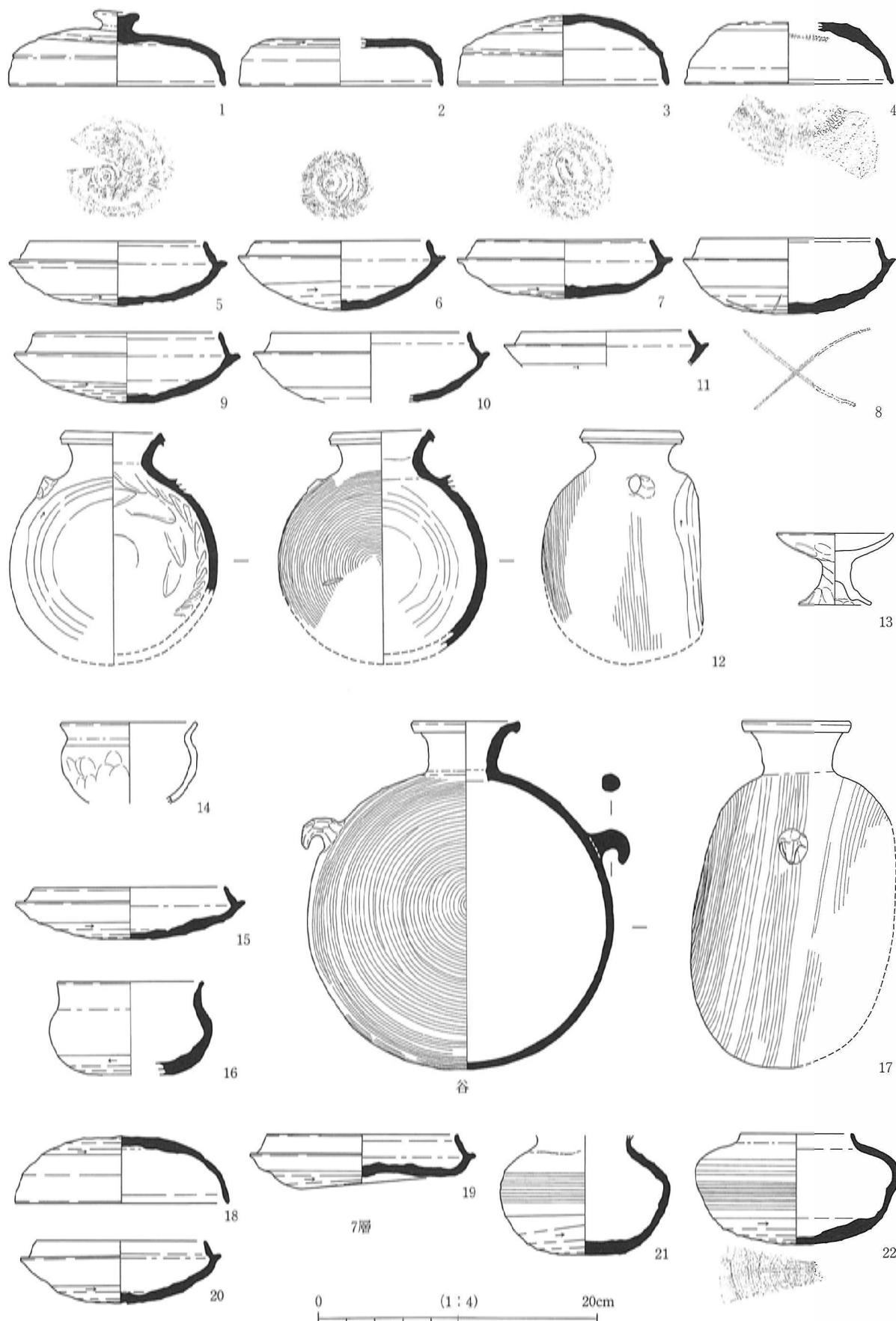


図71 谷、7層 出土遺物

つまみは欠損しており、内面にかえりがつく。19は焼きひずみがみられる。20は杯身である。平らな底部とまっすぐ上外方にのびる口縁をもつ。21は皿である。やや丸みを帯びた底部に、まっすぐ上外方にのびる口縁をもち、口縁端部は面をなす。口径19.9cm、器高4.4cmを測る。

平安時代 (図73~79)

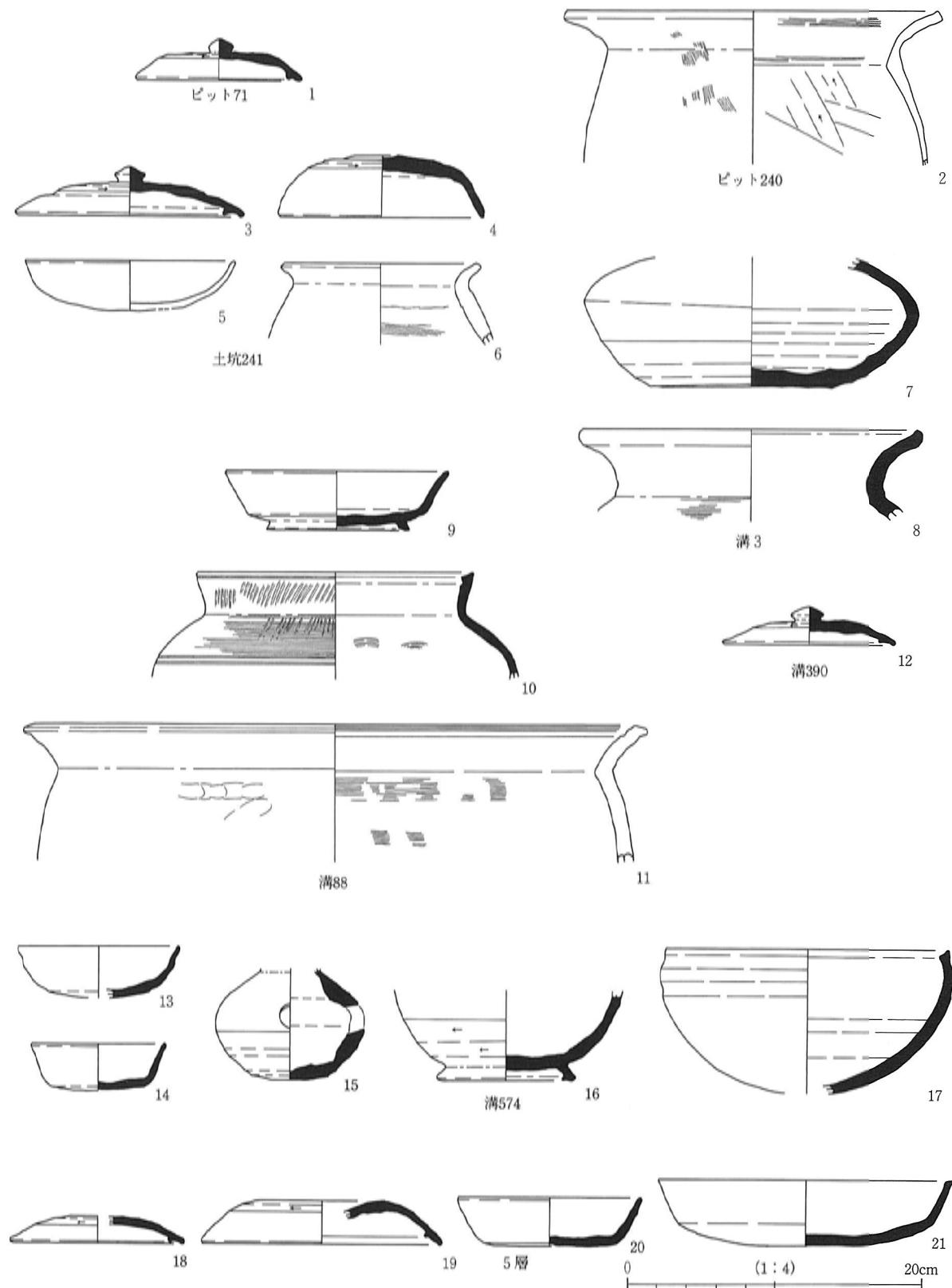


図72 ピット71・240、土坑241、溝3・88・390・574、5層 出土遺物

ピット324（建物11）出土遺物（図73-1、図版25-9）1は土師器碗である。建物廃絶後に掘り込まれた穴に礫とともに埋められた。外面には指頭圧痕が残り、口縁部には横方向のナデを施す。底部はやや上げ底状を呈す。

ピット791（建物31）出土遺物（図73-2）2は土師器碗である。南西隅柱の掘方埋土中から出土した。底部を欠損している。外面に残る指圧痕と、口縁部に施された横方向のナデの境に段を有す。

ピット160（建物8）出土遺物（図73-3、図版25-12）3は砥石である。建物8の北側東柱の掘方中から出土した。下部を欠損する。四面とも使用しているが、うち二面に使用時の擦痕が顕著に認められる。

ピット763（建物21）出土遺物（図73-4）4は土師器甕である。東面庇の柱穴の掘方から出土した。口縁部は短く外反し、端部を丸く収める。肩部はあまり張らない。摩耗が著しいため、調整は不明で、粘土紐の痕跡が残る。

井戸139 出土遺物（図73-5・6）5は須恵器杯身である。平らな底部と、まっすぐ上外方に立ちあがる口縁をもつ。6は鉄鉢形鉢である。口縁は内巻しながら立ちあがり、端部は面をもっている。

ピット176 出土遺物（図73-7、図版25-11）7は塙である。出土したのは隅のみで、後は欠損する。表面はヘラ状工具による調整を行い、側面は丁寧に面取りを施す。色は暗灰白色である。

ピット306 出土遺物（図73-8、図版26-1）8は須恵器圈足円面硯であるが、半分しか残存しない。また、脚台部下端部も欠損する。径9.7cmの小形品である。陸部は大変使い込まれており、摩滅が著しい。脚台部には方形の透かし孔を4個穿ち、透かしと透かしの間にはヘラ状工具による焼成前線刻を施す。さらに特筆すべき点は、陸部に焼成後の線刻による文様が描かれていることであるが、何を表しているのかは不明である。但し、線刻後もこの硯を使用していたことが確認できた。

ピット395 出土遺物（図73-9、図版26-2）9は土師器碗である。口縁部を欠損する。底部径は11.4cmである。杯部外面に暗紋状のヘラミガキを施す。

ピット774 出土遺物（図73-10）10は灰釉陶器碗底部である。高台端部は欠損する。

ピット418 出土遺物（図73-11、図版25-10）11は土師器碗である。口縁部は横方向のナデを、杯部外面には指圧痕が残る。底部はやや上げ底気味である。

ピット812 出土遺物（図73-12・13）12は土師器碗である。底部を欠損する。口縁部は横方向のナデを施す。杯部は表面の剥離が著しく、調整は不明であるが、内外面ともに指圧痕が残る。13は黒色土器A類の碗である。体部外面には指頭圧痕が残り、口縁部外面および内面には粗めのヘラミガキを施す。

ピット782 出土遺物（図73-14）14は土師器甕の口縁部である。表面の剥離が著しく調整は不明である。

ピット829 出土遺物（図73-15）15は土師器甕である。口縁部は横方向のナデを、体部内面にはヘラケズリを施す。また、体部と口縁部の境には接合痕が残る。

ピット827 出土遺物（図73-16・17、図版26-3・4）16は須恵器杯である。杯部はまっすぐ上外方にのびる。17は土師器杯である。内外面ともに横方向のナデで仕上げるが、底部外面には指圧痕が残る。

ピット777 出土遺物（図73-18、図版26-9）18は凝灰岩製の石製品である。二次加工を受けた後、被火を受けて、ピットに掘り込まれる。

土坑680 出土遺物 (図74-1・2、図版26) 1は灰釉陶器椀底部である。底径は6.8cmを測る。

2は土師器椀である。S字に彎曲しながら立ちあがる。表面の剝離が著しく調整は不明である。

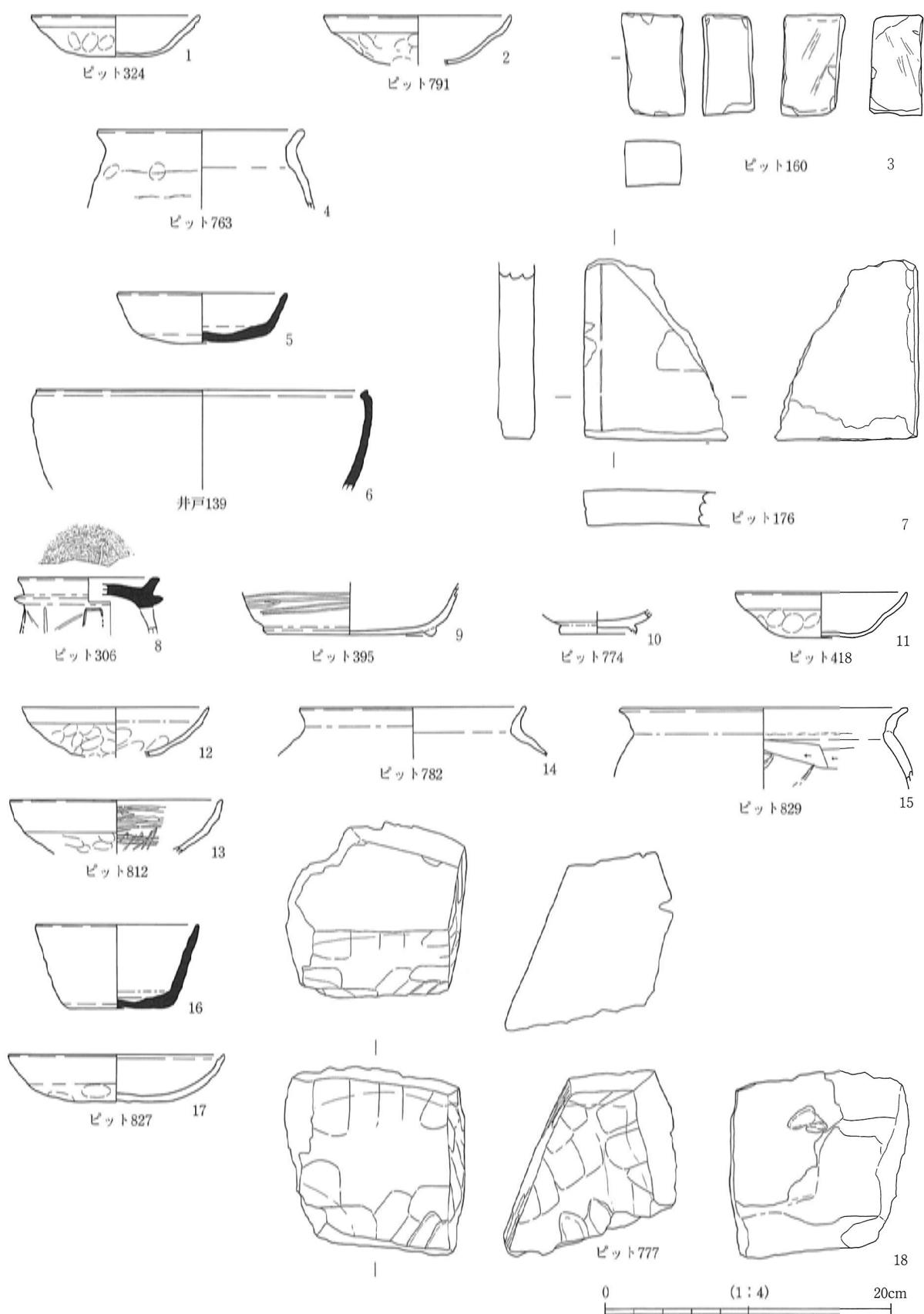


図73 ピット内 出土遺物

土坑658 出土遺物 (図74-3~15、図版26・27) 3~6は須恵器である。3は杯蓋である。頂部には扁平な宝珠つまみがつく。口縁端部は下方へ折り曲げる。4は杯身である。底部には粘土柱から切り離した際についた段が残る。長石を多く含み、色調は7.5Y6/1灰色を呈す。5は平瓶である。6は把手付壺である。体部はタタキ調整を行う。7~14は土師器である。7~10は杯である。7は内彎気味に立ちあがり、口縁端部は面をもつ。8は口縁部内面に暗紋状の沈線が入る。9は表面の剝離が著しいため調整は不明であるが、杯部外面に指圧痕が残る。10は口縁部を大きくつまみ出しており、内面に段をもつ。11~13は皿である。11は口縁部を大きくつまみ出しており、内面に段をなす。また、底部にも調整時の段が残る。12は口縁端部に面をもち、内面に正放射状暗紋を施す。13は杯部内面に斜放射状暗紋を施し、口縁部内面に暗紋状の沈線を巡らす。14は甕である。15は灰釉陶器である。糸尻部を除いて内外面ともに施釉する。

井戸657 出土遺物 (図75-1~16、図版27・28) 1~5は須恵器である。1は杯である。2は杯である。杯部はまっすぐ上外方にのびる。底部端やや内側に断面四角形の高台がつく。3は杯である。口縁部を欠損する。底部外面に「甲」字の墨書がみられる。4・5は壺である。4は頸部である。丸い肩をもち、頸部は外反しながら立ちあがり、口縁部は大きく開いて端部を上方につまみ出す。5は小形の壺である。頸部を欠損する。頸部付け根部分2箇所に、径0.3cmの穿孔がある。また、底部外面には糸切痕がある。6~14は土師器である。6~9は椀である。6は杯部が内彎気味に立ちあがり、やや厚めの器壁をもつ。7は開き気味に立ちあがる。8は底部を欠損する。9は薄い器壁をもち、S字状に立ちあがる。底部は上げ底気味を呈す。10~13は甕である。10は上外方に立ちあがる口縁をもち、体部外面には指押さえの痕跡が残る。11は大きく開き、肥大して面をなす口縁をもつ。12は口縁部は外反しながら開く。13は外反気味に立ちあがり、口縁端部は丸く収める。14は鉢である。大きく外反する口縁をもつ。15・16は瓦である。凸面には繩目タタキが、凹面には布目痕が残る。

溝621 出土遺物 (図76-1~20、図版29-4・7・9・10) 1~9は須恵器である。1は杯蓋である。口縁端部は下方へつまみ出す。2・3は杯身である。2は底部端やや内側に断面台形の高台がつく。3は底部端に高台がつく。4~7は壺である。4~6は小形壺である。4は下半部を欠損する。肩部が屈曲し、口縁部はやや外反しながら上方に立ちあがる。5は大きく外反する頸部をもつが、口縁端部が欠損する。肩部が屈曲するタイプで、断面台形の高台は底部端につく。6は四耳壺である。短くまっすぐに立ちあがる口縁と、なで肩の体部をもつ。体部外面はヘラケズリ調整、その他はヨコナデによる調整を行う。なお、底部外面は粗いヘラケズリを施すが、粘土紐の痕跡が残る。口径5.7cm、最大径10.4cm、器高10.8cmを測る。耳の孔は径0.4cmである。7は壺口頸部である。8は鉢である。口縁は折り返して肥大させており、端部は面をなす。9は甕である。頸部を大きく外反させ、口縁端部を折り曲げて肥大させる。頸部外面には平行タタキが、内面には当て具痕が残る。10~20は土師器である。10~12は椀である。10は底部端やや内側に断面三角形の高台がつく。杯部外面に指圧痕が残る。11は杯部がやや内彎しながら立ちあがる。12は杯部がS字状に立ちあがる。13は皿である。杯部はS字状に屈曲して立ちあがる。杯部内面には粗い斜放射状暗紋を施す。14は鉢である。体部の上部に最大径がくる。口縁は短く上外方にのび、端部を丸く収める。15・16は甕である。どちらも外反しながら開く口縁をもつ。17~20は鐸釜である。17~19は胴部がまっすぐ下がるタイプだが、20は胴部が球形に膨らむタイプである。

溝838 出土遺物 (図77-1、図版28-5) 1は灰釉陶器壺である。口縁はまっすぐ立ちあがり、

端頂部は面をなす。口縁端頂部および体部外面に施釉する。

溝682 出土遺物（図77-2） 2は須恵器杯身である。底部端やや内側に断面四角形の高台がつく。杯部はまっすぐ上外方に立ちあがり、端部は丸く收める。

溝684 出土遺物（図77-3、図版28-6） 3は須恵器壺である。口縁部を欠損する。体部の肩が屈曲する。底部端に断面四角形の高台がつく。

溝752 出土遺物（図77-4～6、図版28-4） 4は土師器壺である。口縁部は上外方に開き、端部には面をつくる。5・6は製塩土器である。5は厚い器壁をもち、口縁端部は丸く收める。内外面ともに指圧痕が残る。6は薄めの器壁で外面に指圧痕が残る。

溝396 出土遺物（図77-7～14、図版28-7～9・29-1～3） 7・8は須恵器である。7は杯身である。底部端に高台がつく。8は壺である。肩が屈曲するタイプであるが、肩部から上を欠損する。底部端に高台がつく。9～14は土師器である。9は杯身である。横方向のナデで調整を行うが、底部には指圧痕が残る。10・11は壺である。どちらも口縁部は大きく開き、端部は上方につまみ出す。10の体部は内外面ともにハケメ調整を行うが、11は外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整を行う。12～14は鐸釜である。13は底部を欠損する。体部外面は縦方向のハケメ、内面には指頭圧痕が残る。鐸部および口

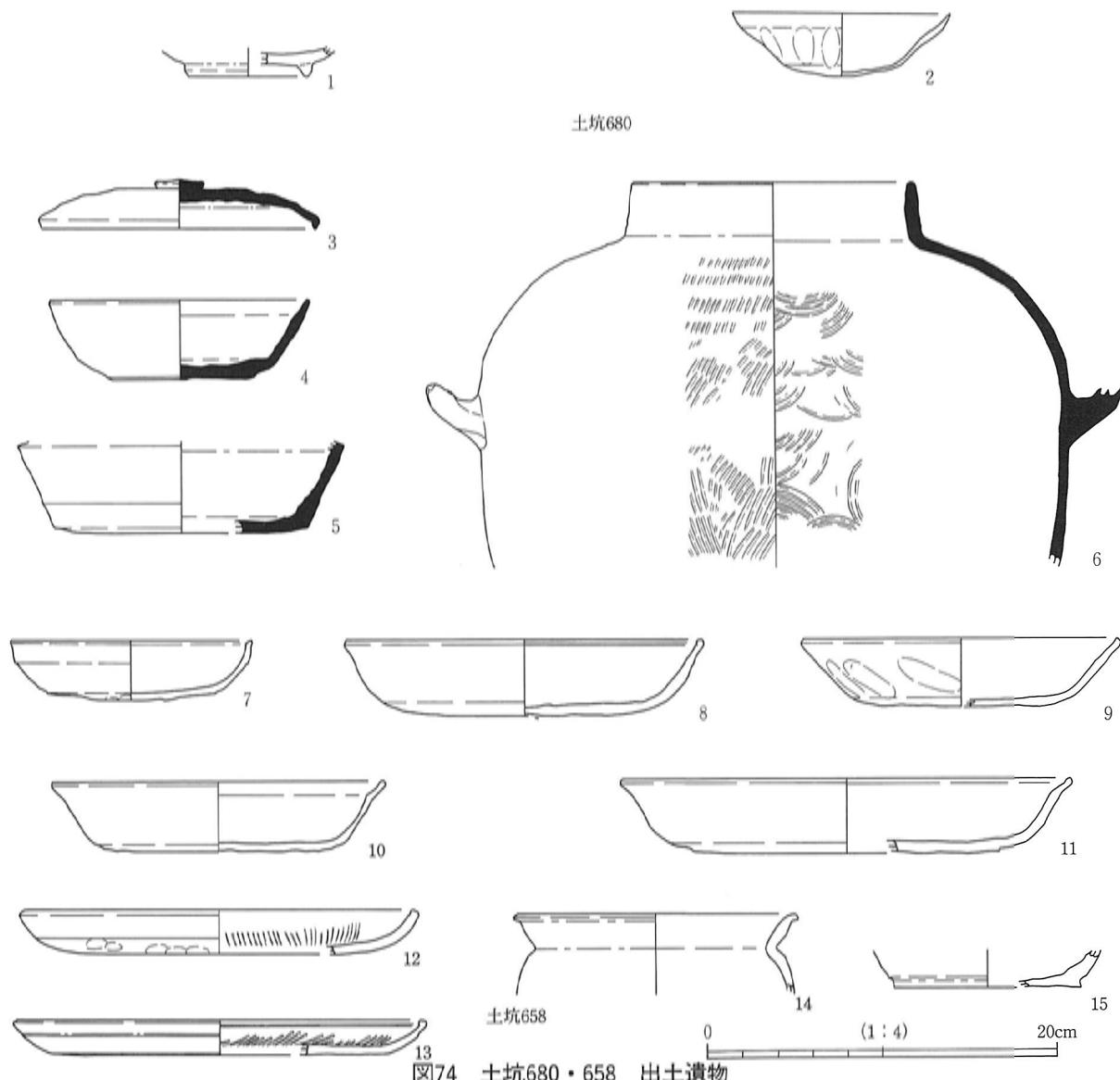


図74 土坑680・658 出土遺物

縁部はナデ調整を行う。14は底部および体部の一部を欠損する。体部外面は縦方向のハケメ、内面には指頭圧痕が残る。鐸部および口縁部外面はナデ調整を行うが、口縁部内面には横方向のハケメが残る。

溝594 出土遺物（図78-1、図版30-1） 1は須恵器短頸壺である。肩部に凹線1条巡る。底部は平底でヘラケズリ調整を施す。

溝929 出土遺物（図78-2、図版29-11） 2は土師器鍋である。口縁部は体部から屈曲して大き

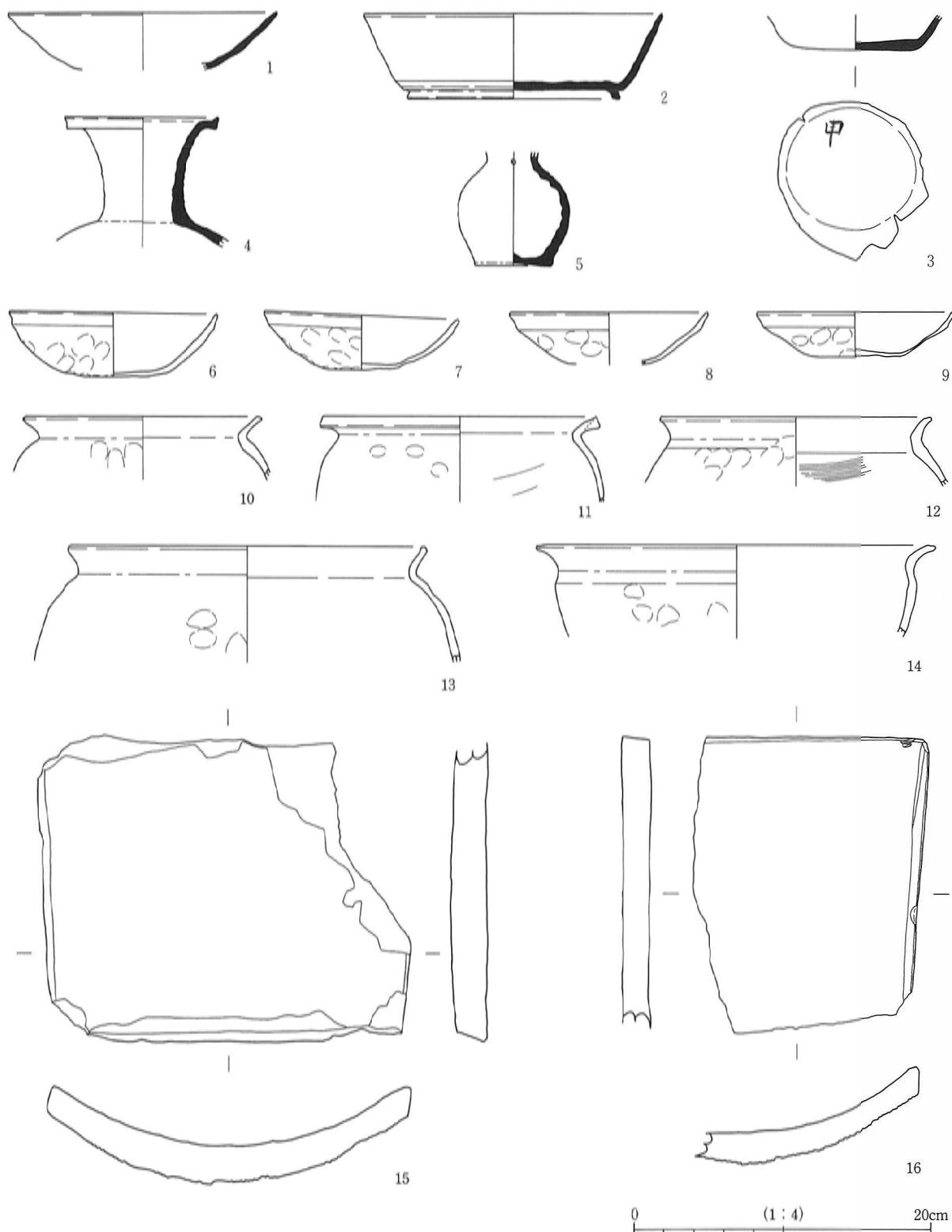


図75 井戸657 出土遺物

く外反する。表面の剝離が著しく、体部の調整は不明であるが、内面には指頭圧痕が残る。

4層 出土遺物（図79-1～12、図版30-2～5） 1～8は須恵器である。1・2は杯蓋で、2は扁平な宝珠つまみがつき、口縁部は下につまみ出して面をつくる。3は壺蓋である。天井面は焼きひずみによって中央部が下がる。その天井中央部には宝珠つまみがつく。口縁部はやや下外方に下がり、端部は内側につまみ出して面をなす。4は杯身である。5・6は壺底部である。6は卵形の体部で底部端

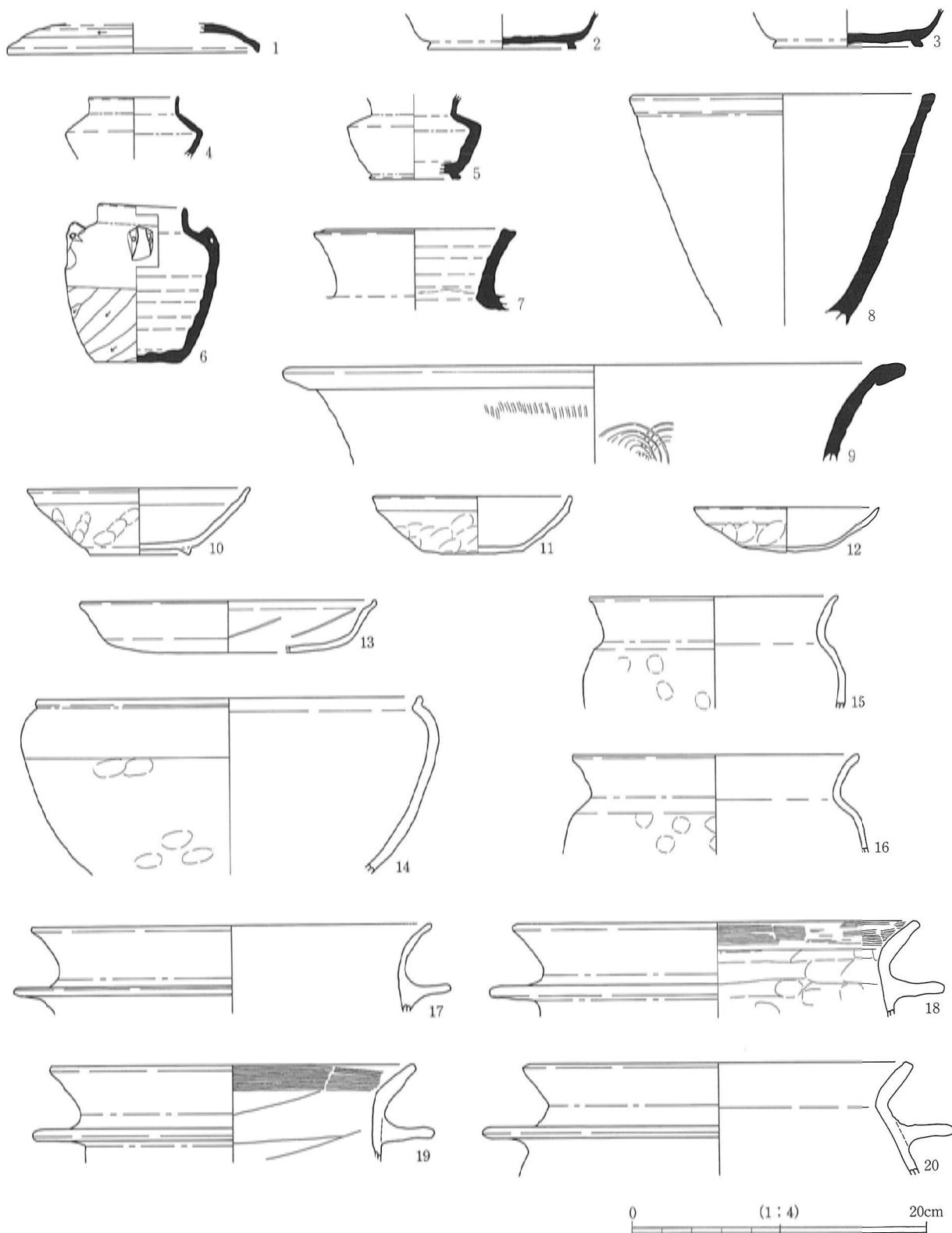


図76 溝621 出土遺物

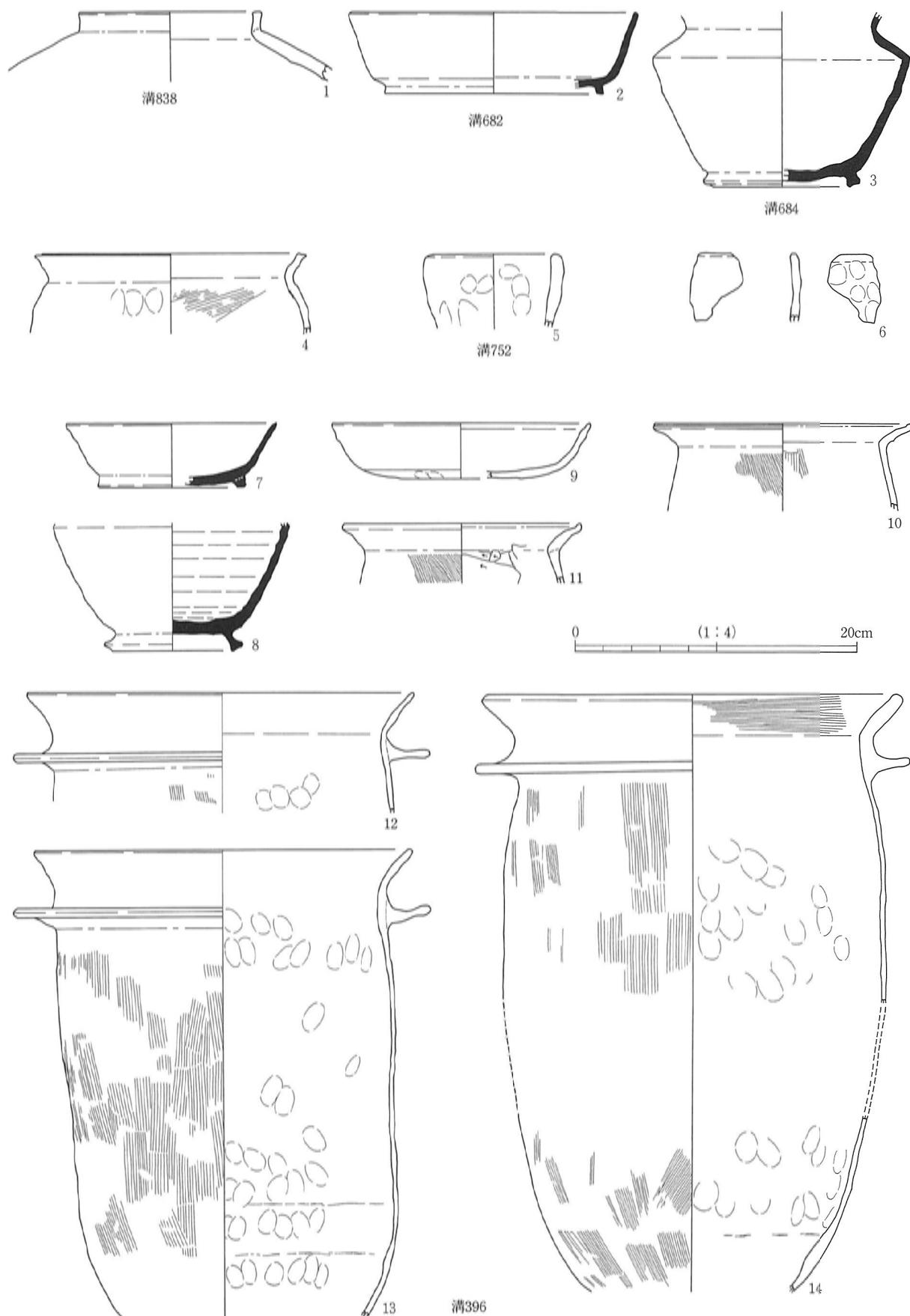


図77 溝396・682・684・752・838 出土遺物

に高台がつく。7は甕頸部である。外面には平行タタキが残り、その上から中央部外面に凹線を巡らす。8は耳か。9～12は土師器である。9は小型の皿である。底部外面は未調整であるが、他はナデによる調整を行う。10・11は鐔蓋である。12は把手付き鍋である。口縁部は体部より屈曲して大きく外へ開き、端部は面をなして、凹線を入れる。体部外面の下半部は指圧痕が残るが、上半部はハケメ調整を

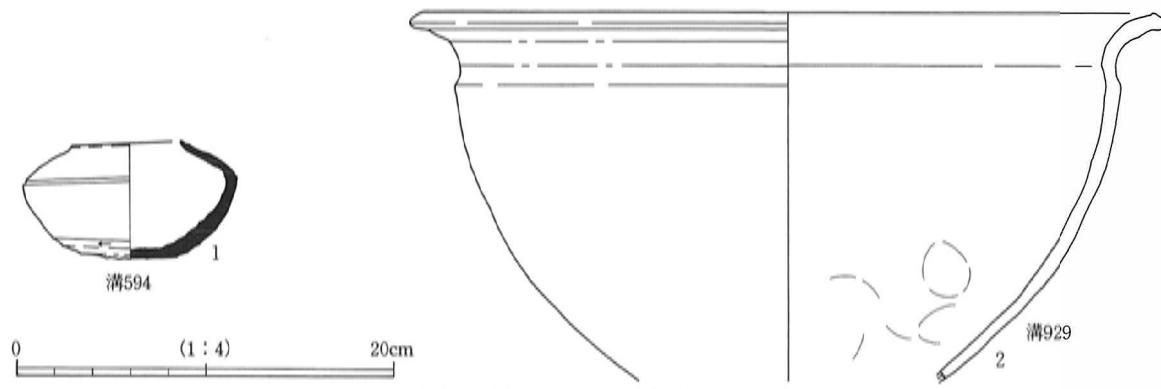


図78 溝594・929 出土遺物

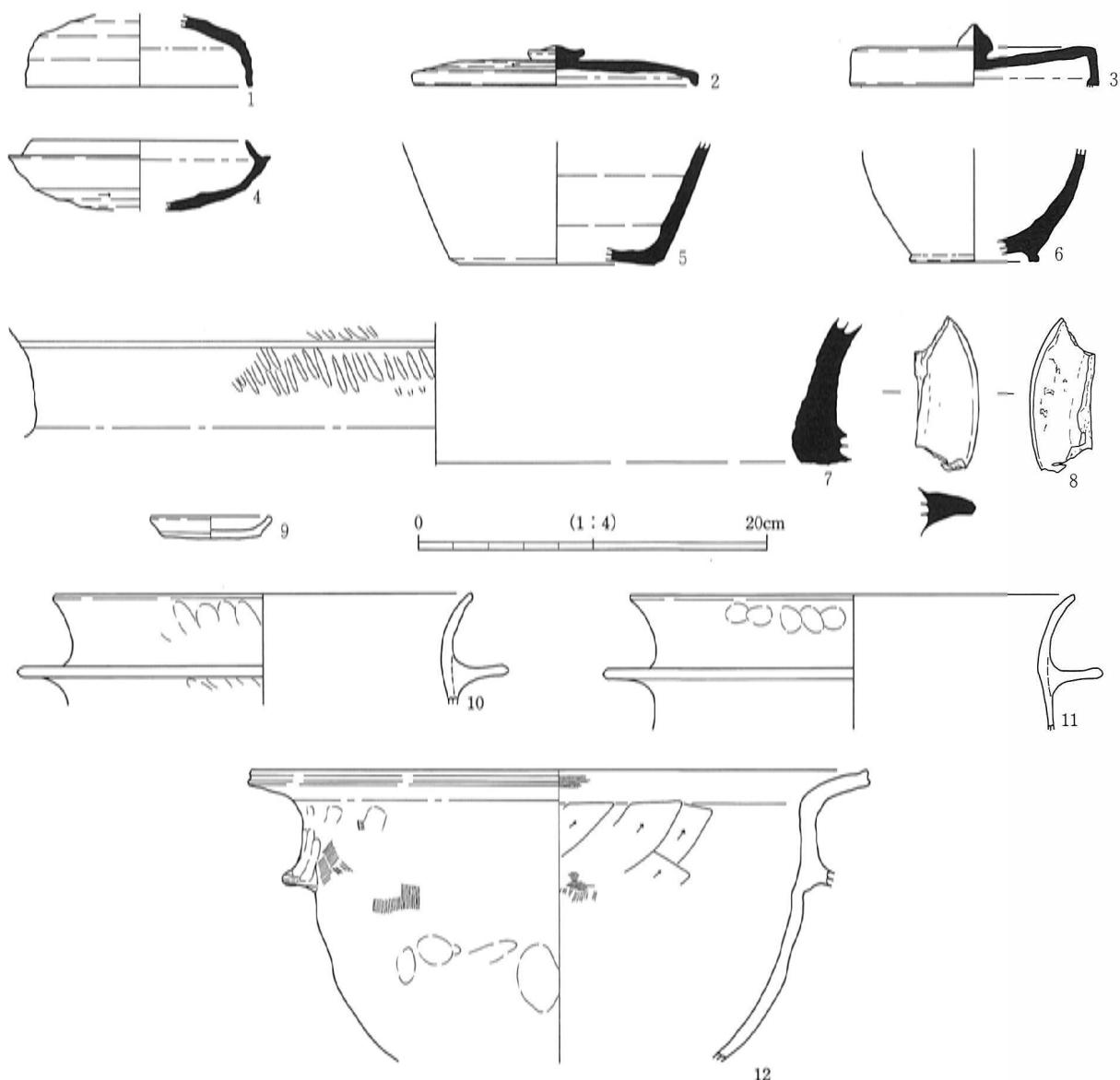


図79 4層 出土遺物

行う。内面はヘラケズリ調整を行う。体部上半部に把手がつくが、先端は欠損する。

土坑913 出土遺物 (図80-1、図版30-7) 1は土師器の小型の皿である。口縁部は横方向のナデを施す。

土坑921 出土遺物 (図80-2、図版30-6) 2は瓦器椀である。底部やや内側に断面三角形の高台がつく。焼きが悪いことと、摩耗が著しいため、調整は不明である。

溝344 出土遺物 (図80-3~11、図版30-8~10) 3~8は瓦器椀である。3は見込み部に格子状の暗紋を施す。4は器高が浅く、見込み部には粗い螺旋状の暗紋を施す。5は底部に痕跡程度の高台がつく。見込み部には螺旋状の暗紋を施す。9は瓦器皿である。10は須恵器圈足円面硯である。脚台部には方形の透かし孔が入る。11は銅製の足金物である。

3層 出土遺物 (図81-1~48、図版30-11~13・31・32) 1~14は須恵器である。1~6は杯身である。3は口縁部が大きく外反する。4は底部端に高台がつく。5・6は底部やや内側に高台がつく。7は壺の口縁部である。8は壺底部である。底部端に高台がつく。9は甕である。10は壺体部である。体部最下部はヘラケズリを行う。11は鉢である。外面ハケメ、内面ヘラケズリを行う。12は捏鉢である。13は硯の脚台部である。ヘラ描きによる綾杉紋を焼成前に施す。14は飯蛸壺である。体部以下を欠損する。15~22は土師器である。15は小型の皿である。16は皿である。口縁端部は内彎して丸く收め、内側に沈線状の段をつくる。17は椀である。内面にハケメ痕が残る。18~21は甕である。18は口縁端部を上方につまみ出す。19は大きく外反する口縁をもつ。20は外反しながら立ちあがり、端部を丸く收める。21は肥大する口縁をもち、端部は面をなす。22は羽釜である。外反する口縁をもつ。23は黒色土器椀である。内黒で、底部端に断面三角形の高台がつく。24・25は瓦器である。24は皿である。25は

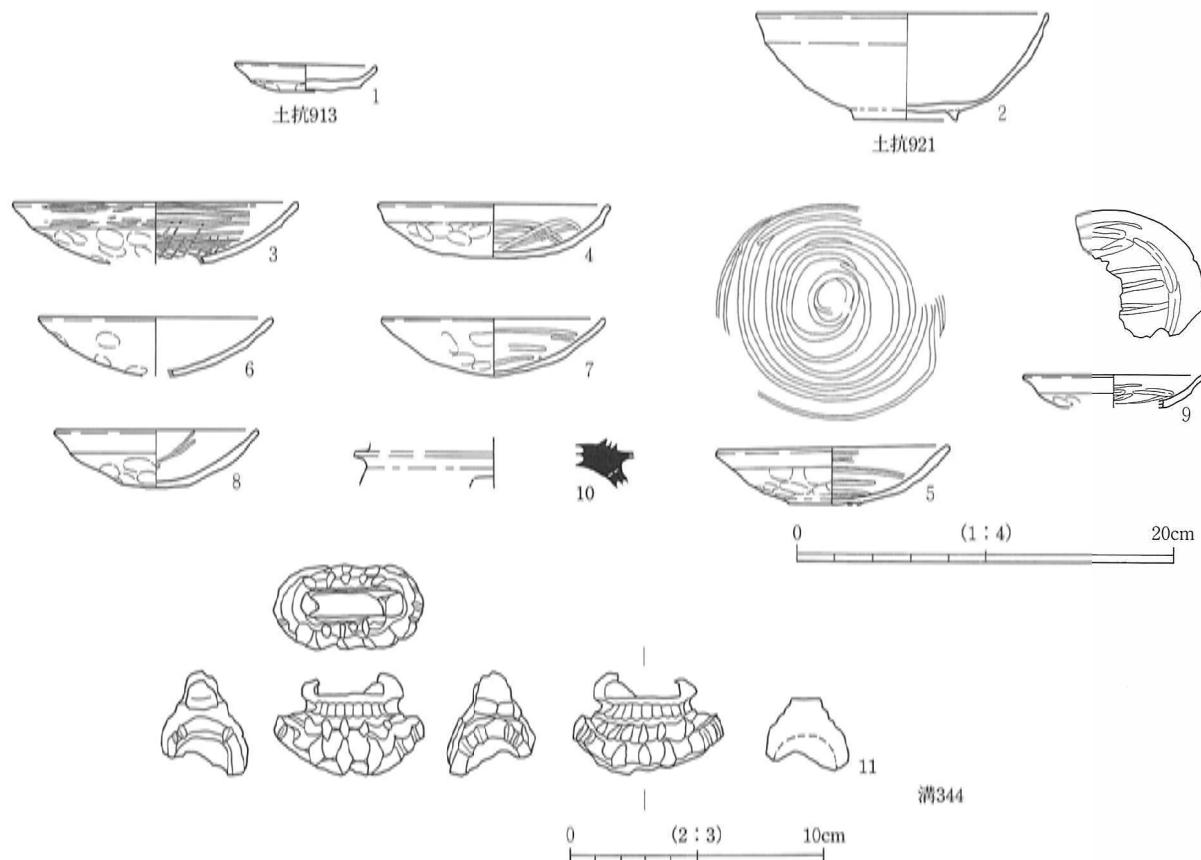


図80 溝344・913・921 出土遺物

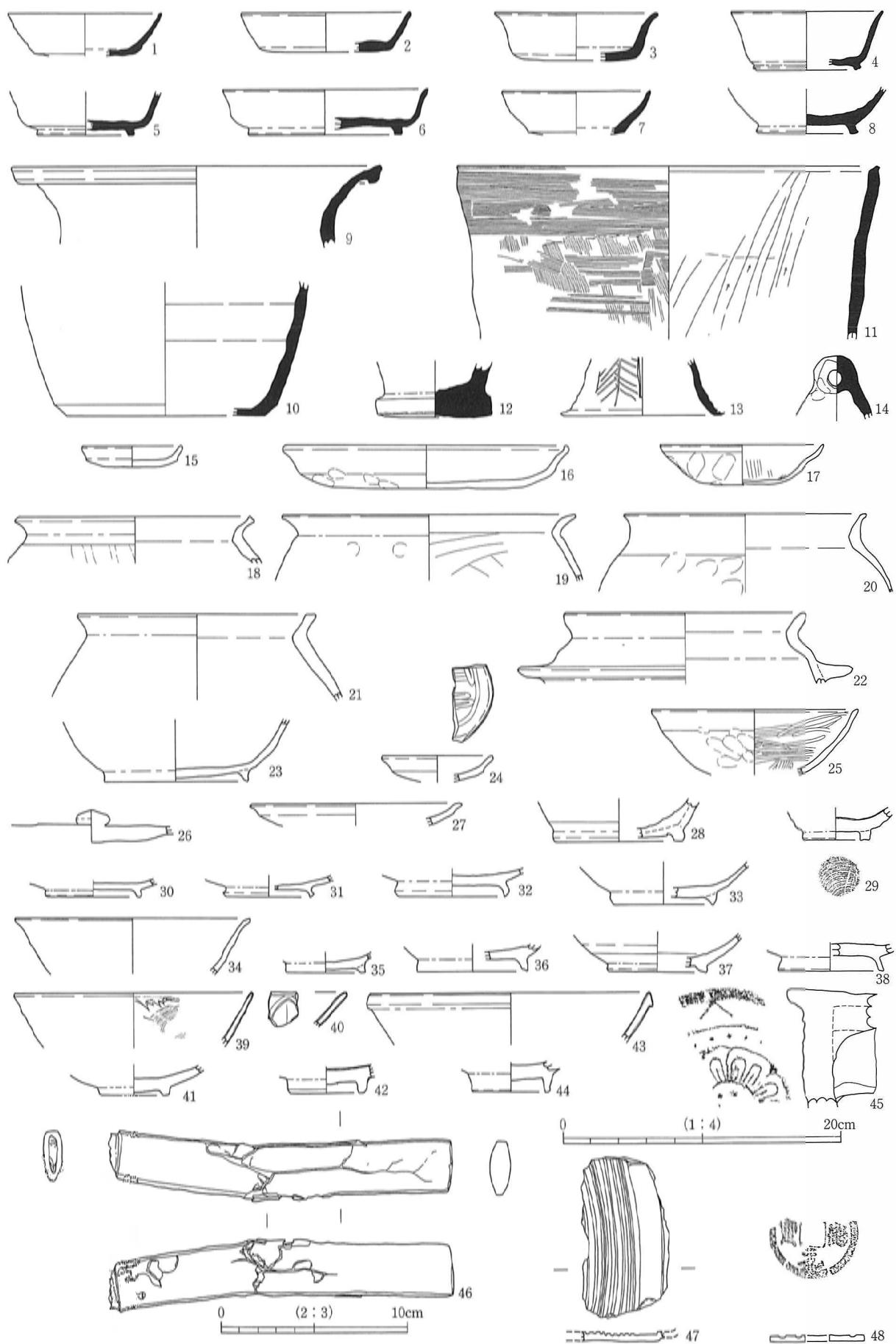


図81 3層 出土遺物

椀で、底部を欠損する。26～33は灰釉陶器である。26は壺蓋である。扁平な宝珠つまみがつく。外面を施釉する。27は皿の口縁部である。28は壺底部である。底部端に高台がつく。29は小型壺の底部である。底部外面に糸切痕が残る。30～33は椀底部である。34～38は綠釉陶器である。いずれも椀もしくは脚付き皿の底部である。39～42は青磁碗である。40は蓮華紋をもつ。41は龍泉窯系の鉢である。43・44は白磁碗である。45は複弁蓮華紋軒丸瓦で、平城宮式6304型式に似るが、相違点も多い。復原すれば、内区は複弁7葉で子葉は独立する。中房は7個の蓮子が巡るが、中央の蓮子を欠く。界線は省略されており、外区は蓮珠が28個配され、その外側に圈線が巡る。また、周縁内側には14個の線鋸歯紋を巡らす。類似する瓦は新堂廃寺（富田林市）や衣縫廃寺（藤井寺市）に認められる。46は小柄である。柄部は欠損する。47は不明銅製品である。48は銅錢である。景德元寶と考えられる。

第5項 小結

当調査区は、地形的には中位段丘に分類されるが、中央部を谷が南西－北東方向に開析しており、その両側に段丘平坦面を形成する。当調査区内における人類の足跡は、後期旧石器時代から辿ることができる。包含層中より国府型ナイフ形石器が出土したのをはじめ、縄文時代の有舌尖頭器や石匙、石鏃にいたっては弥生時代のものまで出土した。ただし、これらの石器に伴う遺構や土器などは検出されなかつたため、具体的な活動痕跡を明らかにすることはできなかったが、石鏃の出土が比較的多いことや当時は原野であったと考えられることから、食料採取の場として利用されていたのであろう。

当調査区内で具体的に生活痕跡を見つけることができるは、古墳時代に入ってからである。段丘平坦面に挟まれた谷の底から須恵器が出土した。また、段丘平坦面上では須恵器の小片が出土した土坑が検出されたことや、東隣の（その2）・（その3）調査区では7基の方墳が検出されたこと、それに調査区の約0.8km南には、黒姫山古墳が立地することなどから、古墳時代中期以降、急速に開発が進んだものと考えられる。

飛鳥時代になると、西側の段丘平坦面上で7棟の掘立柱建物および溝、柵列などが検出された。この建物群は、平坦面の西側の縁辺部をはしる溝と、東側に建てられた柵列4とに挟まれた東西約40mの範囲に展開する。建物の北辺をきちんと揃えて、東西方向に整然と並んで建てられた建物2・3・4の3棟の建物を中心に、倉庫や納屋状の建物などが配される。建物1は建物2の北西に位置する、2×3間の総柱の建物である。建物の西側をはしる溝1・3と同方向に主軸をもつ。建物と溝の間には目隠し塀（柵列1）を配する。建物2は変則的な東柱をもつ建物で、脇殿的な性格をもつ建物と考えられる。南北面を建物3と揃えて建てられる。また、建物5との間には溝88を配する。建物3は3棟の並列する建物の真中に位置し、床面積も最大を測ることなどから、この建物群のなかで主殿的な建物と考えられる。また、この建物3は、南面庇を有するが、その南西隅の柱は溝88を埋め戻した後に建てられていることから、庇部分については拡張されたものと考えられる。さらに、この建物3の北側には目隠し塀（柵列2）をもつ。建物3の東隣には建物4が建てられる。建物6は建物4の北側に位置するが、調査区外にのびており、この建物群が北へと展開すると考えられる。建物2の南、溝88を挟んで南側には1×1間の建物5が西面を揃えて建つ。納屋的な性格をもっていたのであろうか。建物7は建物4の南約9mと、他の建物より少し離れた位置に建てられており、さらに他の建物とは異なる主軸をもつことから、他の建物より建物7は後出したものと考えられる。これらの建物群は南側には広がらず、北側の調査区外に展開するため建物群の全容は不明であるが、建物は幅約40mの場所に「コ」字状に配さ

れている。さらに建物の主軸や面を揃えて建てられていることが看取できる。このように主殿や脇殿、倉庫や納屋に相当するような建物が、規格性をもって建てられていることや、平安時代にも規格性の高い建物群が検出されたこと、さらには、從来から「郡戸」という地名から丹比郡の郡衙があつた場所として指摘されてきたことから考えて、何らかの公的な施設であった可能性が高い。

次に、平安時代の掘立柱建物群について整理する。当調査区における平安時代の集落は、調査区の東側と西側にのびる2つの段丘平坦面上に展開する。東側の段丘面は（その2）調査区に跨って広がっており、全部で16棟の掘立柱建物を検出したが、その分布に規則性は認められない。そしてこの建物群のうち3棟が当調査区内で検出された。

西側の段丘平坦面上では掘立柱建物25棟と、井戸、土坑などが検出された。掘立柱建物の分布は、東西約40m、南北約80mの範囲内に展開する。南群と北群に大きく分けることができる。そして、北群の建物は、西側にはしる坪境溝の軸および南面を意識した建物配置を行っているのに対して、南群の建物群は、北面を意識して建てられているが、この2群の間には約16mの空閑地帯が存在する。この空閑地は建物の配置状況などから考えて、道もしくは広場の存在を想定することができる。また、建物の重複や柱穴の切り合いがみられることなどから、建物は少なくとも2時期にわたって存続することがわかった。まず、古段階の建物群について述べる。建物の主軸および面を揃えて建てられているものを集めてみると、北群に建物11・12・13の3棟が、南群には建物16・18・19・20・21・23・25・26の8棟があげられる。うち、南群の建物18・19・20・21・23・25については柱の掘方が比較的大きくかつ方形を呈する。なお、建物22については方形の掘方をもつものの、他の建物と比べると主軸を東に振っており、かつ前述の建物群の構成する空閑地に建てられていることなどから、時期差があると考えられる。次に新段階の建物群であるが、北群では建物11と同規模の建物10をはじめ建物8・9・14・15である。南群では建物17・24・27・29・31・32があげられる。いずれにしてもこれらの建物は整然と規格性をもつて建てられていることや、遺物も公的な性格を匂わせるものの出土がみられること、さらには飛鳥時代にも整然と並んだ建物群が検出されたこと、さらに、井戸の中から「甲」字の書かれた墨書き器が出土したり、ピットの掘方内からは圈足円面硯が出土したりと、有識層の存在を窺わせる遺物が確認できしたことなどから、一般の集落とは違った性格をもつ建物群であると考えられる。

調査区の中央部にある開析谷は平安時代には埋没する。その上をはしる轍痕と思われる無数の溝を検出した。溝は東西方向にはしるのが看取できたが、これは足利健亮氏が想定した大津道と、位置・方向ともに一致する。また、1.6m幅で並行する溝がみられることや、溝の断面が下幅約5cmの逆台形もしくは方形を呈するなどから、道に伴う轍痕跡と考えられる。集落の西辺を南北方向にはしる溝を検出したが、これは坪境溝であることから、この地域における条里制施行の上限が、少なくとも平安時代にまで遡ることが確認できた。

鎌倉時代になると、狭山池の改修工事に伴って、段丘平坦面上にも耕地化がすすめられるようになり、当調査区周辺も耕作地として利用されていたため、この時期の遺構は希薄である。従って検出された遺構は耕作に伴う溝のみである。以後、現代に到るまで耕作地としての景観ができあがったと考えられる。

第3節 その2調査区

第1項 基本層序

1. 地形の概観

郡戸遺跡は、西除川と東除川に挟まれた中位段丘上の平坦面に立地している。

しかし、この中位段丘は元々、古天野川の扇状地として形成されたものであるため、平坦面と言えどもかなり凹凸がある。主に、扇状地であった頃の流路痕跡と思われる浅谷状の地形が幾つも南北方向に伸びるのが認められ、それに取りつくような枝状の浸食痕跡も見られる。

調査区周辺では東が西より高く、南が北より高い傾向にあり、東隣の河原城遺跡で、東除川への段丘崖縁辺付近に微地形の稜線が走る。付近でもっとも高くなるのは調査区よりやや南の、多治井の集落あたりである。

調査区より西と北には条里制地割りが良好に遺存するが、調査区は自然地形のためその地割りが貫徹できなくなってくる位置にあり、正方位の耕地区画と、自然地形による耕地区画が混在している。

調査区北西端から（その1）調査区へ入ったところで、西へ落ちる大きな段差があり、これは浅谷状地形を形成した古い流路による河岸段丘を踏襲したものである可能性が高い。

調査区は南東から北西へ260mほどの細長い形になるが、現地表でも両端の比高差は2m以上ある。

その比高差は現在の耕地区画では、畦畔を伴う小さな段差の連続となっているが、その段差は大体下層の旧耕土系の層が形成された時点のものを踏襲している。

調査区中央で調査対象外となった旧明法寺池部分は、その左右の耕地のレベル差と外形から見ると、東側は元々あった段差を利用し、西側を堤防で閉じる事によって作られた溜め池と思われる。

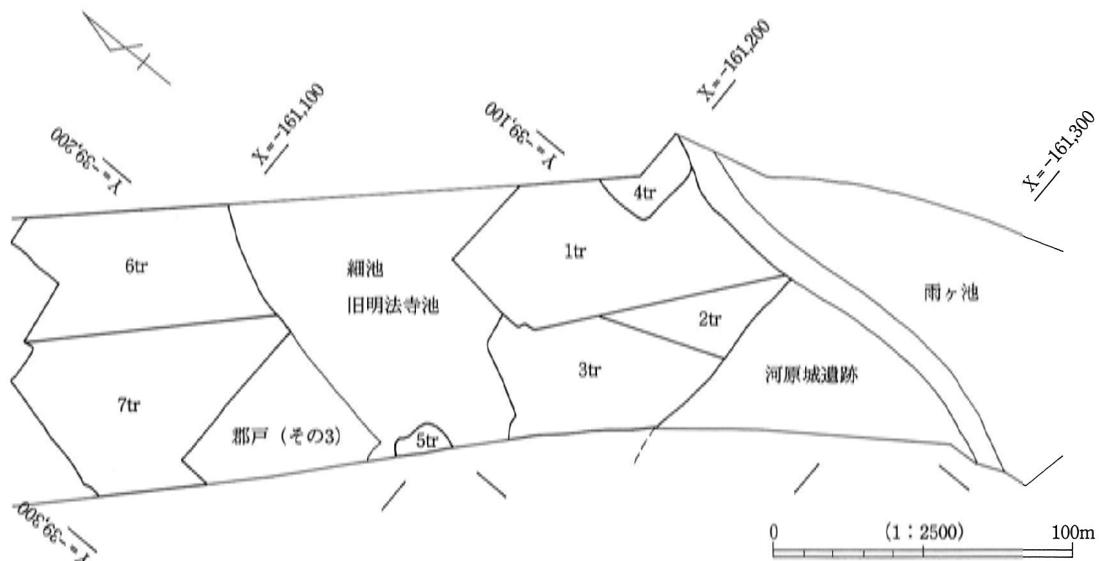


図82 トレンチ割り図

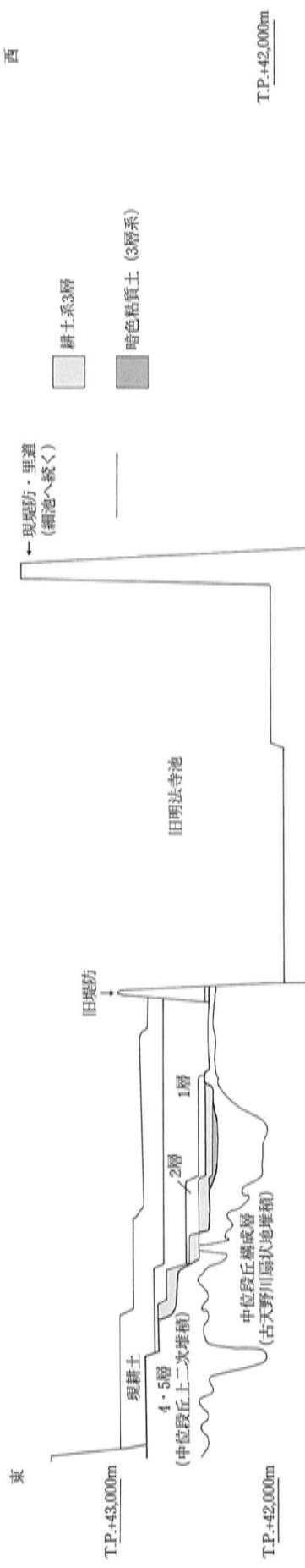


図83 調査区断面模式図（1トレンチ南壁・6トレンチ南西壁を元に作成）

$S=約1/1200$

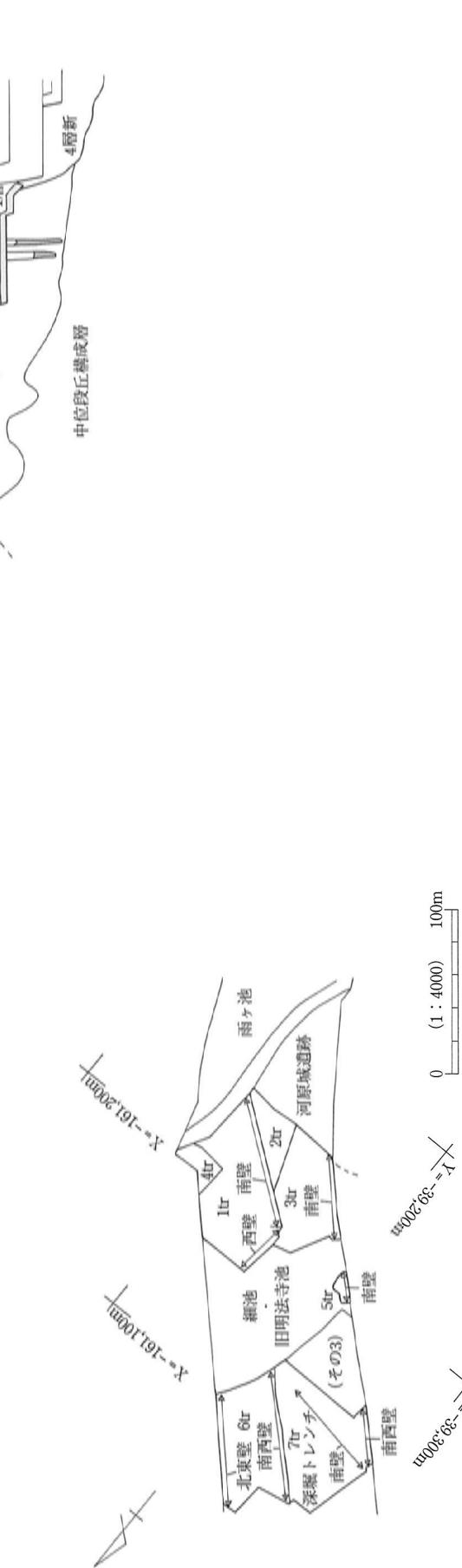


図84 調査区・トレンチ断面位置図

2. 基本層序概観

現耕土の下には基本的に3層の旧耕土層が認められるが、新しい面ほど、区画の平坦面が広く、段差の数が減っていく傾向にある。しかし、削平に対して、盛土があまり見られず、現耕土床面の削平が一番強く、旧耕土が残存していない部分も多い所から、全面に耕地が開発されてから、細かな段差の消滅以外はあまり大規模な耕地区画の改変のないまま現在に至っているものと推測される。

旧耕土系の層を上から1～3層としたが、それらが全て残存している部分はほとんどない。また、3層が他と比べ暗色で、やや粘性が高いのは、耕地開発以前に形成されていた土壤を取り込んで耕土としたせいと考えられる。

その下の4面で検出される遺構埋土や凹地部分に、その3層と起源を同じくすると思われる、有機分を多量に含んで暗色を呈し、粘性の高い層がしばしば見られる。それらの遺構は、本来、4面の上に形成されていた、3層の起源となる土壤の上面から切り込んでいたと考えられるため、その類の土層は3層系とした。

4面以下には、黄褐色系で締まりのよい粘質土の4層と、それより暗色を呈する5層が存在する。これらは、しばしば「地山」と認識されるような層だが、考古学上「地山」という概念は意味がないという問題を別にしても、中位段丘構成層でない事は、わずかながらも5層から縄文時代の石鏃が出土している事で証明できる。

4層は、調査区北西端あたりで上面が西へ下がる段を成し、その部分にほぼ同質の二次堆積土が見られる。それを4層新とし、その部分では4層新の上面を4面、その下を4面古とした。

5層は、残存する有機分はさほど多くないが、粒状構造の痕跡も見られる事から古土壤である可能性が高い。4・5層とも、中位段丘構成層の表面を覆う二次的な層という事ができる。

6層は風化礫を多く含む層を基本として、その中に砂層やシルト層が複雑にからむ。7トレンチでの深掘りトレンチの断面調査から、位置を変えながら浸食と堆積が繰り返される、扇状地的な堆積が確認され、中位段丘構成層の上部と認定できた。

面的な調査は、1面は1トレンチで検出した結果、ほとんどの遺構が近現代のものであったので、それ以降のトレンチでは調査を省略した。また、2・3層は薄く、残存する部分が少ない事もあって、トレンチ毎にその残存状況によってどちらかの面を選択的に調査した。4面は全てのトレンチで調査している。側溝内で5層から石器が出土したため1トレンチ西半で全面6面まで下げたが、結果として石器が1点出土したのに留まり、遺構と認定できるものも存在しなかったため、他のトレンチでは4面までの調査にとどめた。

3. 各層の状況

以下の層の土質の記載には、旧耕土・土壤化の激しい層・混濁層に関しては「砂質土・粘質土」を使用し、地質学的記載法と異なるが、「シルト～細砂主体、粗砂あり」が「粗砂混じり細砂質シルト」と読み替えられるようになっている。

1層 2.5Y6/2～6/4砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、Feあり、を基本的な土質とする。旧耕土である。上面に幅50cm、深さ5cmほどの溝が平行して並び、その中に4層系の粘質土が充填されている事が多い。場所によっては、その粘質土が薄く残るのみで、それを1層と言う他ない部分もある。それらの粘質土は現耕土の床土として入れられたものと思われ、1層が耕土として機能して

いた時期の下限は現代に下る。

層厚は平均5cm強で2・3層と比べれば残りの良いほうである。しかし、それでも削平を受けて残っていない部分もある。層内に染め付けを含み、上限は遡っても江戸時代までであろう。

2層 10YR5/6～2.5Y6/5砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Feあり。残りの良い部分でも層厚3～4cmほどである。旧耕土。層厚が薄いにも関わらず、その中に耕作深度の変化に伴うと思われる層境が2～3ほど見られる部分もあり、かなり長期に耕土として機能していた可能性もある。

その下限は唐津碗や火縄銃の玉などを含む所から近世に入る。

3層 2.5Y5/4～5Y5/1粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、小礫わずかにあり、Feあり。層厚は平均して4cmほど。旧耕土である。2層が耕土となった時点で解消された段差の下段部分に残る事が多い。有機分が多く、粘性が高いのは、耕地開発以前の土壤を利用したせいと思われる。現存では最古の耕土である。その事から、10世紀後半の平安時代集落より後を上限と考える事ができる。

古手の瓦器を含む、3面の遺構の遺物からも、下限は13世紀頃と思われる。

3層系 5Y5/4～4/4粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂わずかにあり、Feあり、Mnわずかにあり。4面の凹地や遺構内の埋土として見られる層で、凹地に堆積したものの中には一部、ラミナの見られるものもある。有機分を多量に含む事から、元々、長い間地表面であった4面上に形成された、腐植土起源の土壤が二次堆積したものと思われる。5世紀代の古墳の周溝埋土にも見られる事から、それ以前にすでに形成されており、10世紀後半の建物の柱穴にも含まれる事からそれまでは広い範囲に残存していたものと考えられる。

4層 2.5Y5/6～6/6粘質土、シルト～粘土主体、粗砂～細砂あり、小礫若干あり、Feあり、Mn粒あり。層厚は、下面の凹凸が激しく一定しないが、平均して10～20cmほどである。現代をはじめ、各時代の削平を受けているが、比較的削平の弱い部分では、上面近くにMn粒が多く形成されている。風化した段丘構成層上部起源の堆積物だが、上面からの土壤化はかなり進行している。極わずかだが弥生土器が含まれており、堆積は弥生時代頃と思われる。

4層新 2.5Y7/6～7/4粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mn粒あり。調査区北西端で4面が西に下がる部分に堆積し、4層の二次堆積層と考えられる。調査区北西外側に現地形で残る段差の本来の形がその4面の段であろう。段の下では層厚30cmを越える部分もあるが、東へ上がった部分でも一部薄く堆積しており、そこでは非常にMn粒の形成が激しい。堆積時期は弥生時代から古墳時代、5世紀までの間と考えられ、それまでは中位段丘上の浅谷状地形の浸食が進行していた事が知られる。

5層 10YR5/1～6/8粘質土、シルト主体、細砂～中砂あり、粗砂～中礫若干あり、斑状Feあり。やや暗色を呈し、有機物が若干残っているようで、一部粒状構造も確認された事から、段丘構成層の風化物も多く取り込んだ古土壤と思われる。凹凸が激しいが、平均的な層厚は20～30cmほどか。層内の下のほうから縄文時代の石鏃が出土しているので、その頃から形成が進んだものと考えられる。

6層の状況 基本的には中礫を主体とした風化礫間に、それ起源の粒子が入っている風化礫層が多く見られるが、それと、砂層やシルト層が複雑に切り合っている。

ここでは7トレンチでの深掘りトレンチの断面の状況を例として(図90)見てみたい。

この部分では風化礫層は認められなかったが、基本的な層は洪水の溢流堆積によるものが多く、この断面で一番古い20でさえ、シルト層と言えどもラミナの形から溢流堆積と思われる。

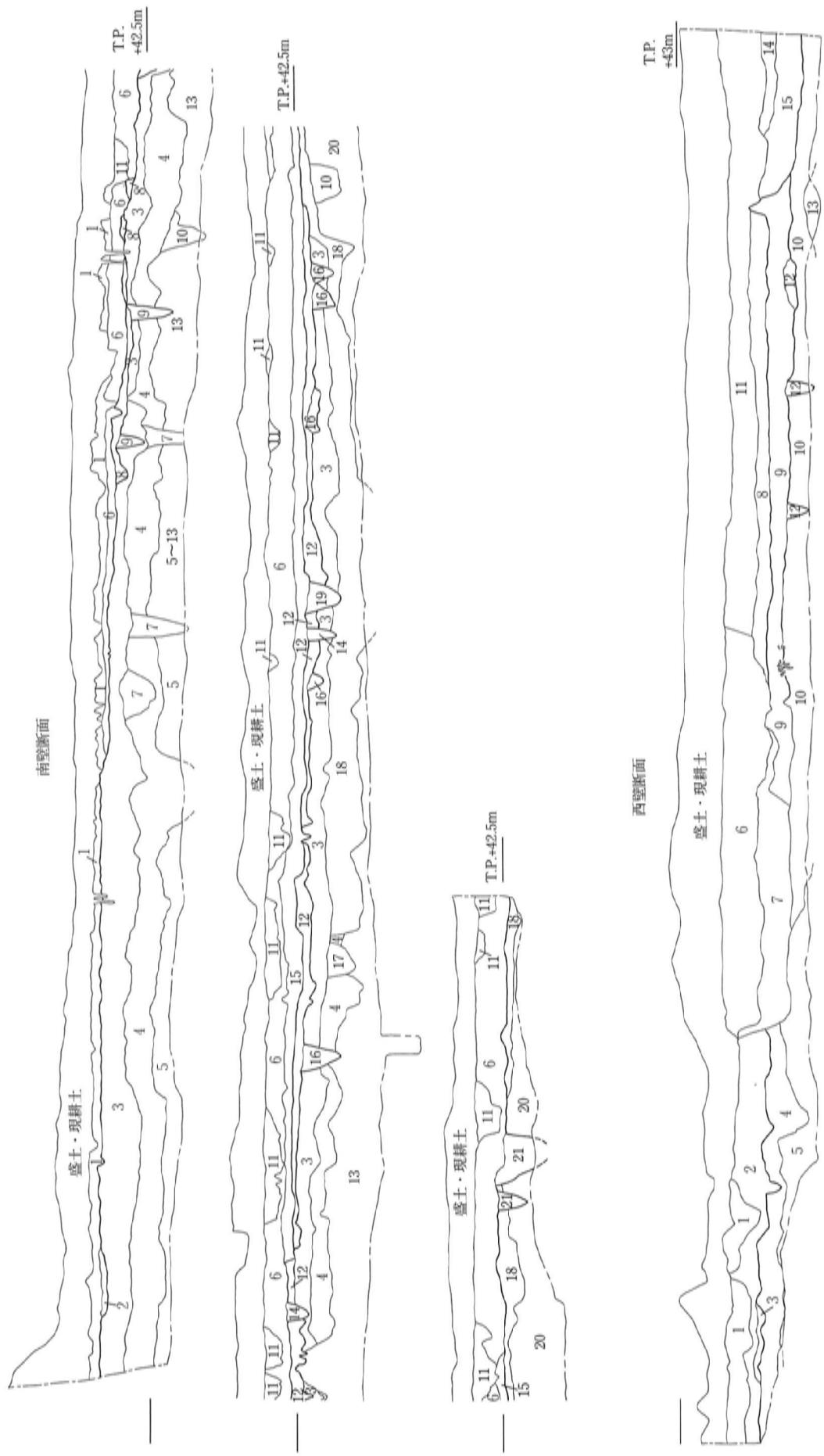


図85 1トレンチ 南壁・西壁断面図

19は締まりがよく、土壤化の痕跡があり、一時地表化していたと思われる。その時点では現在とは違う東側が低い。おそらく東側に比較的大きな浅谷状地形があったと思われ、谷底平野的な堆積環境で6・7が堆積し、その地形を埋める。

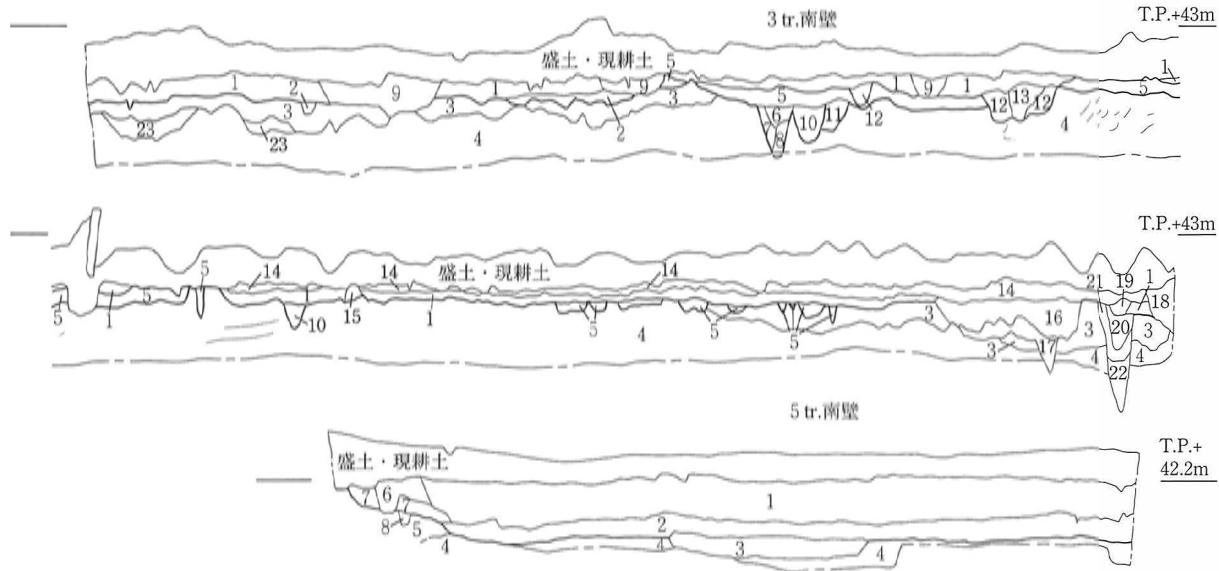
6の上面が比較的長く地表化していたようで、木根痕などが認められる。その面に次々と浸食しては砂層で埋没する流路が形成される。これらは、常時の流水ではなく、砂層も洪水で一気に堆積したものである。扇状地上らしい堆積環境である。

そしてやがて5層が形成され始め、それらの浸食痕は形成されなくなっていく。

これらの状況から見て、6層以下の堆積は、その中で複数の地表化の痕跡を持ちながらも、中位段丘構成層上部に含めて良いものと思われる。

今回の層位的な調査の成果としては、4面上に失われた古土壤が存在していた事と、6面までが調査対象となる可能性を指摘できた事である。本来なら調査区全面6面まで調査すべきであったが、1トレンチ西半での遺構の不在と遺物の極端な少なさを受けて、諸々の事情を鑑み断念せざるを得なかった。

大きく見れば（その1）調査区の大部分を占める、条里制地割りが遺存する、かなり平坦な部分と比べて、微地形の凹凸や傾斜が大きく、堆積状況もその対比を見せていると言える。（三宮）



- 1tr.南壁断面土色・土質
1. 5Y6/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂、斑状Feあり
 2. 5Y6/1 (斑状Feは2.5Y5/6) 以下1と同じ、現耕土下部
 3. 上部Fe5Y5/6、他5Y6/1 粘質土、粘土～シルト主体、粗砂わざか・細砂若干あり、斑状Fe・乾痕・Mn粒あり、4層
 4. 斑状Fe5Y5/6、他5Y6/1～5/1 粘質土、粘土主体、シルト～細砂若干あり、粗砂・斑状Feあり、乾痕激し、5層
 5. 斑状Fe5Y5/6、他5Y6/1 粘質土、粘土～シルト主体、細砂～中砂多し、粗砂～中礫、斑状Feあり、乾痕激し、6層
 6. 5Y5/6 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂わざかにあり、Feあり、1層
 7. 7.5Y5/1 粘質土、粘土～シルト主体、粗砂～細砂若干あり、斑状Feあり、乾痕激し
 8. 2.5Y5/4～5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂わざかにあり、Feあり、Mn粒わざかにあり、3層
 9. 8と4の混濁 4面遺構
 10. 5Y6/1 粘質土、粘土～シルト主体、粗砂・斑状Feあり
 11. 2.5Y4/6～5/6 粘土と2.5Y5/1 粘質土のブロック
 12. 5Y5/4 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂わざかにあり、Feあり、Mn粒わざかにあり、3層
 13. 5Y6/1 シルト～中砂内風化礫他、中礫～粗砂多し、6層
 14. 5Y5/4～6/1 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂わざかにあり、Feあり、3面遺構
 15. 2.5Y6/6～6/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり、Feあり、Mn粒わざかにあり、2層
 16. 5Y6/4 粘質土、シルト主体、粗砂・Fe・Mn粒若干あり
 17. 2.5Y5/3 粘質土、粘土～シルト主体、粗砂～細砂多し、Fe・Mn粒あり、5面遺構
 18. 10YR4/1 (上部2.5Y4/3) 粘質土、シルト～粘土主体、粗砂～中砂下部に多し、Fe上部に多し、Mnあり、5層
 19. 5Y5/1 (上部2.5Y5/4) 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂わざかにあり、下部3の小ブロックわざかにあり、3面遺構
 20. 5Y6/1 中砂～シルト内、砂岩系風化礫と中礫～粗砂非常に多し、上面はFeで2.5Y5/4を呈する、風化礫層、6層
 21. 2.5Y5/6～6/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小～中礫若干あり、Feあり、4面相当遺構？
- 1tr.西壁断面土色・土質 (西壁No.は→南壁No.と同じ)
- 1→11・2→6・3→15・4→18・5→20
 6. 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫多し、2.5Y6/6 粘土～シルトのブロック部分にあり、1面遺構
 7. N5/0 粘土～シルト、粗砂～小礫、管状Feあり、1面遺構
 8. 10YR5/6 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂・Feあり2層
 9. 10YR5/1～2.5Y5/3 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、小礫わざかにあり、Fe若干あり、3層
 10. 2.5Y5/6～6/6 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫若干あり、風化礫あり、Feあり、4層
 11. 2.5Y5/6～6/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小礫わざかにあり、Feあり、1層
 12. 2.5Y5/6～5/4 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、小礫 (風化礫) 若干あり、Feあり、10にやや9が混濁か
 13. 2.5Y6/1 中砂～シルト間、風化礫他、中礫～粗砂多し

14. 「2.5Y6/6～5/4 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂・Feあり」のブロック多し、間に「2.5Y6/1 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂あり、Mn粒わざかにあり」が入る
 15. 14と同じ、ブロックは少なく、2.5Y6/1 砂質土が主体
- 3tr.南壁断面土色・土質
1. 上部10YR5/6 他2.5Y6/～6/4 粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂～極粗砂若干あり、Fe特に上部に多し、1層
 2. 2.5Y6/4～5/6 砂質土、極細砂～シルト主体、粗砂～極粗砂あり、小礫若干あり、Feあり、2層
 3. 2.5Y5/6～6/6 粘質土、シルト～粘土主体、極粗砂～粗砂あり、小礫若干あり、Fe多し、4層
 4. 7.5Y5/1～5/6 中砂～シルト間に風化礫中心に小～大礫多し、Fe・ラミナあり、風化した中位段丘構成層、6層
 5. 2.5Y5/2 粘質土、シルト主体、中砂～細砂あり、粗砂～小礫若干あり、Fe若干あり、3層
 6. 2.5Y6/3～6/2 粘質土、シルト主体、中砂～細砂あり、粗砂～小礫若干あり、Fe若干あり
 7. 10YR5/1 粘質土、シルト主体、中砂～細砂多し、Fe若干あり、3のブロックあり
 8. 2.5Y6/3 砂質土、中砂～シルト主体、粗砂・Fe若干あり
 9. 10YR5/6～7.5YR4/4 粘質土、シルト～粘土主体、中砂～粗砂若干あり、Fe多し、1面遺構
 10. 8と4の混濁
 11. 2.5Y5/2 粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂～小礫あり
 12. 2.5Y5/2 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、Feあり
 13. 12に風化礫中心に小礫～極粗砂あり
 14. 2.5Y5/2 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、斑状Fe若干あり、現耕土下部
 15. 1のブロック土、畦畔か
 16. 2.5Y5/4 粘質土、シルト主体、細砂あり、小礫～極粗砂若干あり、炭化物わざかにあり、Fe若干あり
 17. 5Y6/1 粘質土、シルト主体、細砂あり、斑状Fe若干あり
 18. 2.5Y5/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり
 19. 2.5Y5/3 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・Fe若干あり
 20. 2.5Y5/4 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、小礫わざかにあり、Feあり
 21. 1と3のブロック
 22. 2.5Y6/2 砂質土、中砂～細砂主体、シルト・粗砂あり
 23. 3と4の混濁
- 5tr.南壁断面土色・土質
1. 2.5Y5/1～6/4 粘質土、シルト～粘土主体、極細砂・粗砂若干あり、管状・斑状Feあり、1層相当
 2. 5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫あり
 3. 2内に風化礫中心に中～小礫多し、Fe若干あり、溝埋土
 4. 7.5Y6/1～6/3 粗砂～中砂間に大～小礫多し、風化礫多し、風化した中位段丘構成層
 5. 2.5Y6/8～7/8 粘質土、シルト～粘土主体、風化礫を中心とした中礫～粗砂あり、Feあり、4層
 6. 2.5Y5/2 砂質土、中砂～シルト主体、粗砂～小礫あり
 7. 2.5Y6/2 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あり、斑状Feあり、小礫わざかにあり、整地土？
 8. 5と2のブロック

図86 3トレーナー 南壁・5トレーナー 南壁断面図

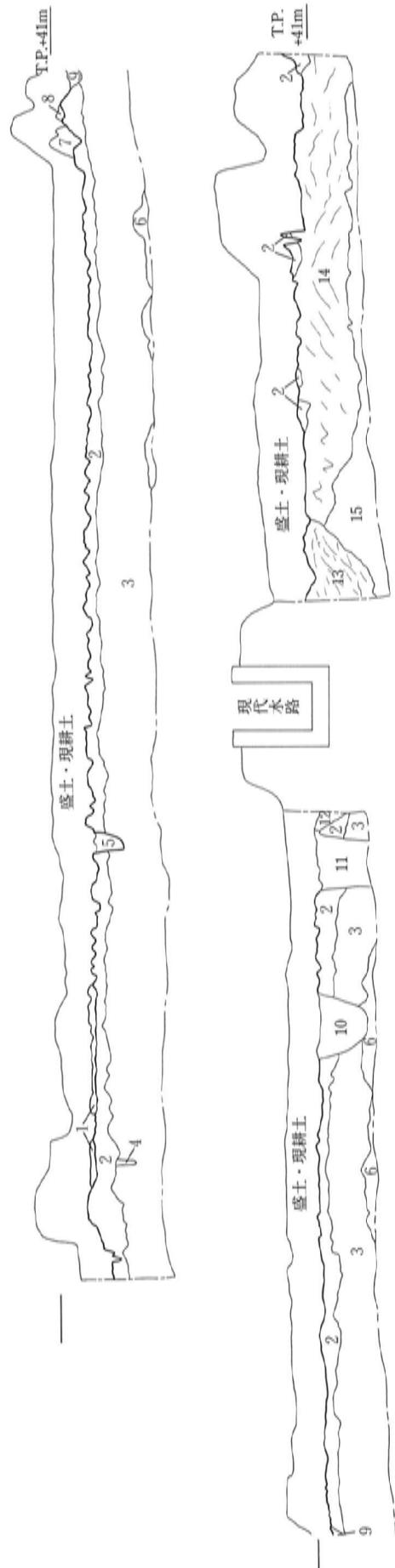
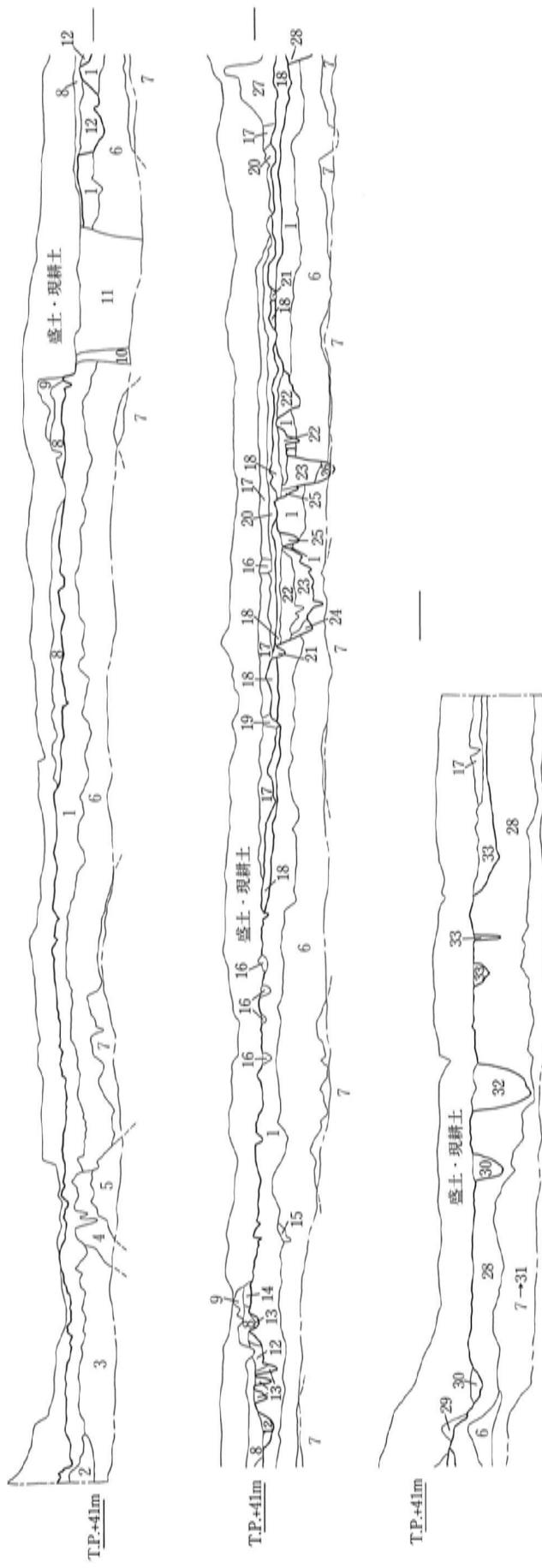


図87 6トレンチ 北東壁断面図

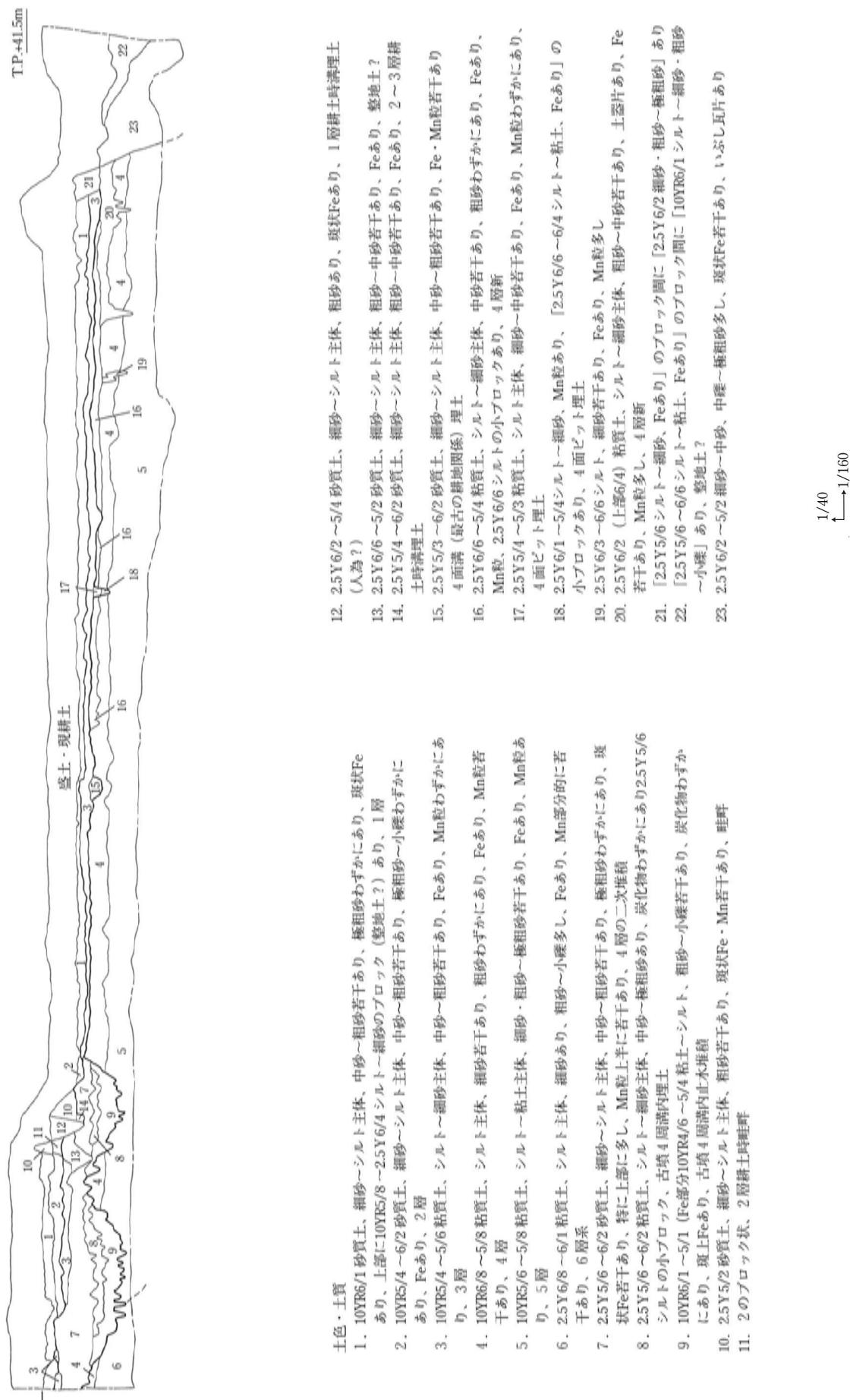


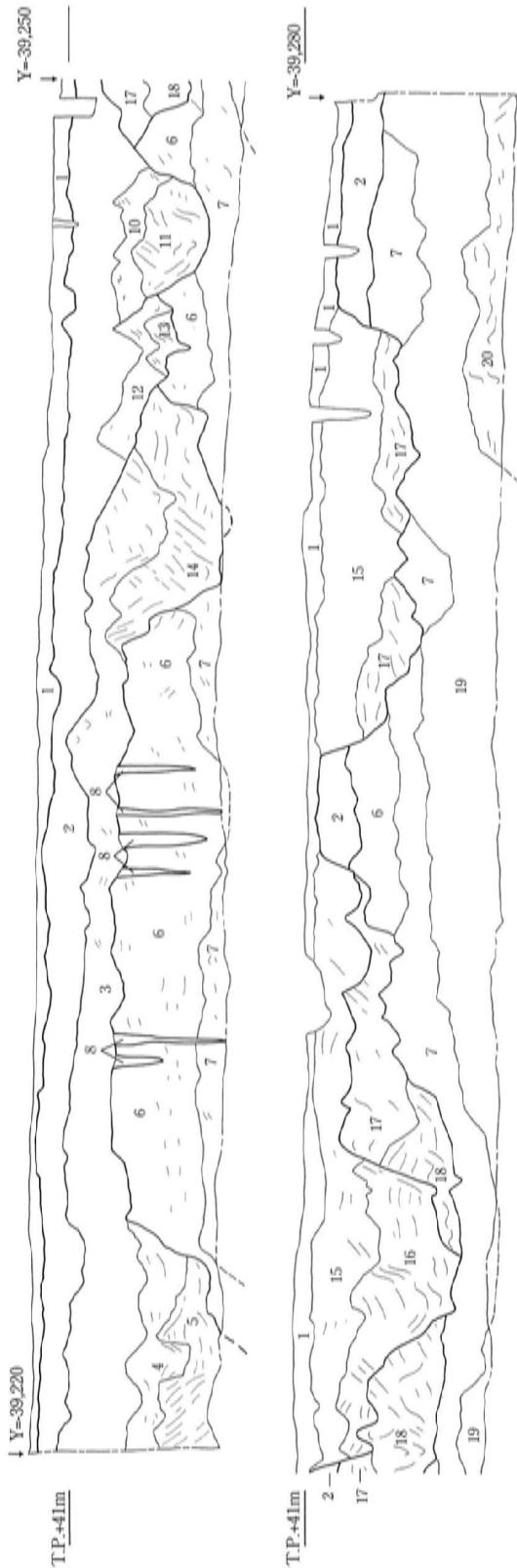
土色・土質

1. 2.5Y6/8 粘質土、シルト主体、細～中砂・Mn粒わずかにあり、Fe多し、4層
2. 2.5Y6/8 粘質土、シルト主体、細～中砂わずかにあり、粗砂若干あり、Fe多し
3. 2.5Y6/6～6/8 粘質土、シルト主体、細～中砂わずかにあり、Fe多り、5層系？
4. 2.5Y6/6 粘質土、シルト主体、細～中砂わずかにあり、粗砂～小砾多し、Fe多り
5. 10YR6/8 砂質土、風化中に小砾と、それ起源の粗砂～シルト、Fe多り、6層
6. 10YR5/1～6/8 砂質土、シルト主体、細～中砂わずかにあり、斑状Feあり、5層
7. 10YR5/8～7/1 砂質土、シルト主体、細～中砂わずかにあり、Fe多り、6層
8. 10YR5/6 砂質土、極細砂主体、シルト若干、Fe・Mn多り、2層？
9. 2.5Y6/2 砂質土、細砂～シルト主体、中砂～粗砂若干あり、斑状Feあり、1層
10. 9内に1・6のブロックあり、井戸更込め
11. 9内に1・6・7のブロック多し、小～中砾あり、1面井戸理土
12. 2.5Y6/～5/6 砂質土、シルト～極細砂主体、細砂～中砂若干あり、Fe多り、Mn粒若干あり、古墳2周溝埋土
13. 1のブロックとその間に2.5Y6/1 シルト～細砂
14. 10YR5/6 砂質土、シルト～極細砂主体、わずかに中～細砂あり、Fe多し、珪質？
15. 7.5Y5/1 シルト～極細砂、炭化物あり、木根根？
16. 10YR5/6～6/1 砂質土、細砂～シルト主体、上部にFe多し、粗砂わずかにあり
17. 10YR5/6～2.5Y6/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂多し、Fe多し、1層
18. 10YR5/6 砂質土、シルト～極細砂主体、細砂若干あり、Fe多し、3層

19. 2.5Y6/5～6/3 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂わずかにあり、Fe多り、Feあり、珪質
20. 2.5Y6/6～7/6 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂若干あり、Feあり、2層
21. 18の塊丸ブロック
22. 2.5Y6/6～7/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂若干あり、Fe・Mn粒若干あり、二次堆積、古墳1周溝理土
23. 10YR5/1～7/1 シルト、細砂若干あり、Fe・Mn粒わずかにあり、古墳1周溝理土、黒泥土系
24. 23内に1のブロック
25. 2.5Y5/4～5/1 砂質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂あり、Fe・Mn粒あり
26. 10YR5/6～6/1 砂質土、シルト主体、粗砂～細砂あり、Feあり、古墳1周溝理土
27. 2.5Y5/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小砾～粗砂にあり、斑状Feあり
28. 2.5Y7/6～7/4 砂質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Feあり、Mn粒わずかにあり、4層断
29. 2.5Y6/3 砂質土、細砂～シルト主体、中砂あり、Fe若干あり、Mn粒あり
30. 2.5Y6/1 砂質土、細砂～シルト主体、中～粗砂あり、Mn粒わずかにあり
31. 2.5Y6/3～5Y6/3 シルト～粘土、風化隙とそれ起源の粗砂あり、6層
32. 10YR5/8～2.5Y7/6 砂質土、シルト主体、細砂～中砂若干あり、Fe多り
33. 2.5Y6/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Mn粒多し、Feわずかにあり

図88 6 トレント 南西壁断面図 1/40





土色・土質

1. 2.5Y6/6～5/4粘質土、シルト～細砂主体、中～粗砂わずかにあり、Feあり、Mn粒わずかにあり、4層
2. 10Y5/8～5/4粘質土、シルト主体、粗砂～中砂若干あり、Fe多し、Mn粒部分的に若干あり、有機分若干含む、5層、有機分はだいぶ溶解しているが、粗砂などがまんべんなく入り、基本的に古土壤である。
3. 10Y5/6～5/8粘質土、シルト～極細砂主体、粗砂わずかにあり、部分的にラミナわずかに残る、Fe多し、広範に水平堆積するゆるい流水堆積、溢流水種か。
4. 10Y5/8～5/6極細砂～細砂、ややシルト含む、部分的にラミナ状の極粗砂～中砂含む、ラミナ若干、Feあり、5の洪水終息時の混濁流（土砂流）的堆積
5. 10Y5/6～2.5Y5/3粗砂～小砾、中砂～細砂含む、ラミナあり、Fe多し、Mn若干あり浸食的な洪水の水流による堆積
6. 2.5Y6/8～7/2極細砂～シルト、粗砂わずかにあるのは全て上層からの降下、ラミナ残る、Feあり、広範に水平堆積するゆるい流水堆積、溢流水種、この上面からの木根痕が若干あるので、元々一時地表化し、古土壤があつたものと思われる。谷底平野的堆積環境
7. 10Y5/8～4/6シルト～粘土、わずかにラミナ残る、Fe多し、堆積環境は6と一連か
8. 6のロック間に2.5Y6/1細砂～シルトあり、木根痕（6上面より）6上面一時地表化の証
9. 5Y6/1～5/1粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、炭化物わずかにあり、4面透構埋土
10. 2.5Y5/6～5/4中砂～小砾、シルトわずかにあり、ラミナあり、Feあり、11の洪水終息時の土砂流的堆積
11. 2.5Y5/6～6/1粗砂～小砾、ラミナあり、Feあり、洪水による浸食
12. 2.5Y5/6粘質土、シルト～細砂主体、粗砂多し、小砾若干あり、ラミナ残る、Feあり13の洪水終息時の土砂流的堆積
13. 2.5Y5/6粗砂、小砾若干あり、ラミナあり、Feあり、洪水による浸食
14. 10Y5/6～2.5Y6/3極粗砂～粗砂、小砾あり、ラミナあり、Feあり、洪水による浸食
15. 10Y5/8～6/1粘質土、シルト～粘土主体、中砂あり、粗砂～極粗砂多し、Feあり、ラミナ残る、16の洪水終息時の土砂流的堆積、5面特点
16. 2.5Y5/8中砂～極粗砂、シルト若干あり、Feあり、ラミナあり、小砾若干あり、浸食的洪水（破堤的）による堆積、5面特点
17. 2.5Y6/6粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～極細砂あり、Feあり、ラミナ若干残る、18の破堤的洪水終息時の土砂流的堆積
18. 2.5Y5/6粗砂～小砾、シルト若干あり、Feあり、ラミナあり、破堤的洪水堆積
19. 2.5Y5/6～5/4粘質土、シルト～粘土主体、粗砂～極粗砂若干あり、Feあり、締まり良し、上硬化痕跡あり
20. 2.5Y4/6～5/6シルト、粗砂～細砂若干含む、Feあり、ラミナあり、流水堆積、溢流的洪水か

$$\begin{pmatrix} X = -161,130 \text{ ライズ} \\ Y = -39,220 \sim -39,280 \end{pmatrix} \quad 1/40$$

図90 7トレンチ 深掘トレンチ南壁断面図

第2項 遺構

1. 6面（図91）

1 tr. 西半において、土層観察用にX=-161190ラインに入れていた筋掘り内で4面より下からサヌカイト製石鏃が1点出土した（図136-3）。

その部分の断面を観察すると、4層の下にやや土壤化した5層が存在しており、この石鏃はその層内の下端近く、6面に近い位置で出土したようだった。

そこで、1 tr. 西半においては急遽予定を変更し、4・5層を掘削し、6面を検出する事にした。

しかし、石器に留意しながら掘削をしたのにもかかわらず、5層内から出土したのは石鏃1点のみであった（図136-14）。約1400m²で2点という希薄さと、6面に遺構と認定できるものが存在しなかつた事から、それ以降のトレンチは4面までの調査に止めた。

しかし、4・5層が中位段丘構成層ではなく、また、わずかながらも遺物を包含している事は確実である。

6面で検出できたものは、自然地形と浸食痕、木根痕などである。

自然地形としては、4面では後世の削平を受けなかった凹地などが、削平以前に次第に埋没していく傾向があったのに対し、6面ではさらに凹凸の激しい地形が形成されていった状況が見られた。

その形は、大勢としては南が高く、北が低いが、東西方向の地形の変化は北半に顕著で、東西両方向に落ちていく地形と、その間で南から北に伸びる形で細長く残った高まりを検出できた。東西方向での高低差は最大40cmを越える。

また、東側の落ちでは、その中心となるような部分に、北側が次第に東に曲がっていく溝状の浸食痕が検出された。

この事から6面時点では、この中位段丘平坦面で、大きいものは浅谷状に現地形でも残っている、南北方向の浸食が進行していた事が分かる。

しかし、東側の落ちの浸食痕が、現地形ではむしろこの位置より高い北東方向に向かっているよう、東西方向の高低差は後の改変がかなり進んでいるようである。

木根痕は、土坑状、または屈曲したり枝分かれする溝状で、底面は凹凸が多く、壁面は上が被るような状態も見られる。また枝根の痕跡が壁の横にトンネル状に入るものもある。埋土は上層が木質の腐食に伴い周辺の土が崩落した、ややぼやけたブロック土の場合が多く、下層は木質が腐食に伴い土に置換したようなシルト系の土の場合が多い。

残っていた木根痕の状況から見ると、当時、この面は木がまばらに生える、疎林から草原のような環境にあったものと思われる。5層がやや暗色を呈するのは、中位段丘上の二次堆積土の中に、それらの植物の腐食がかなり入っているためと思われる。

樹木の密度が低く、見通しのきく平坦な地形で、浅谷上地形の中に水場が点在していたであろう状況は、農耕に充分な水は得られないにしても、狩猟の場としては利用価値の高い環境であったと推測される。

その事が、上層に包含されている、旧石器時代後期から弥生時代にかけての石器群にも反映されているのであろう。（三宮）

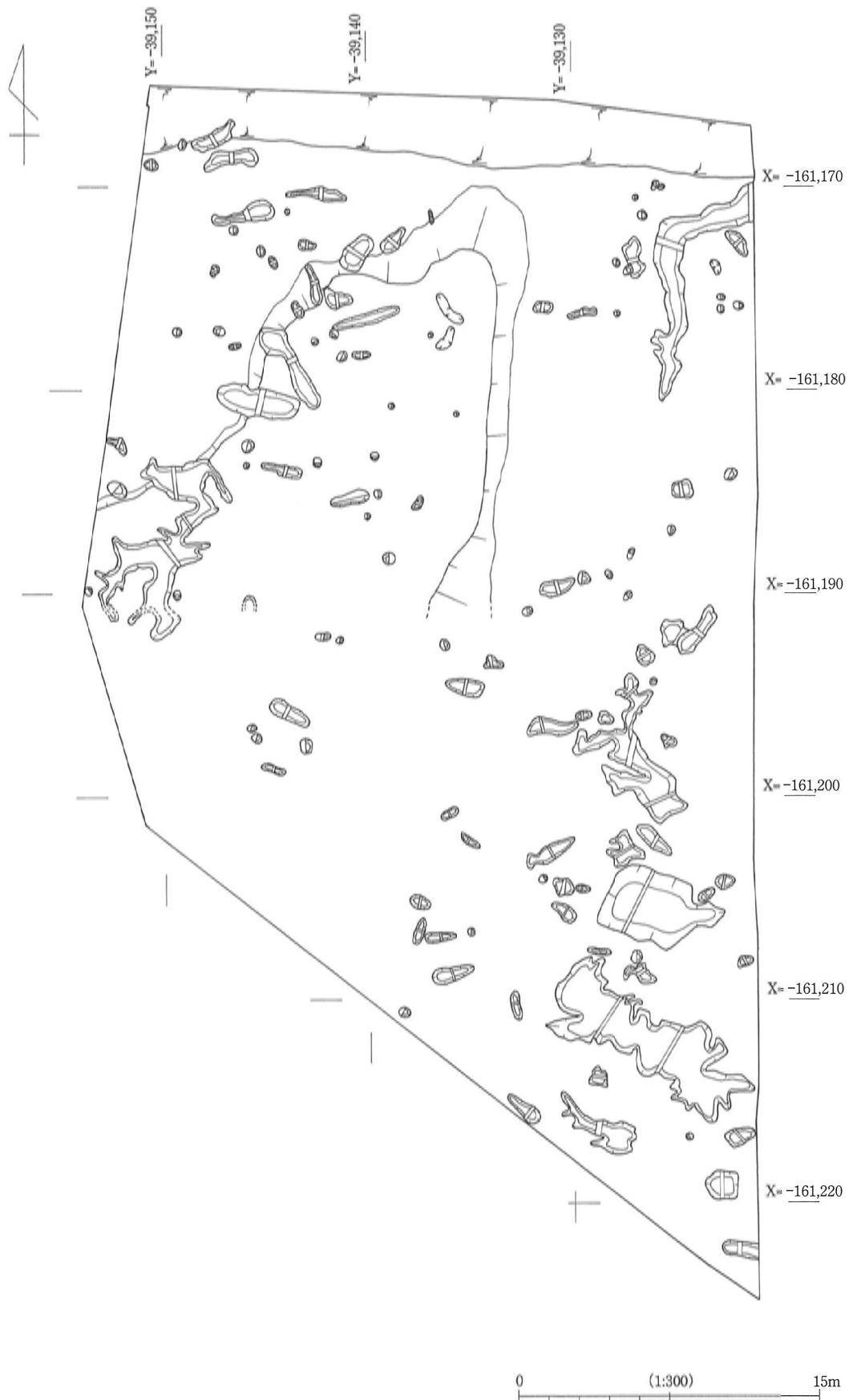


図91 1トレンチ6面 平面図

2. 古墳

遺跡東半部の（その2）調査区では旧妙法寺池西側で古墳1～5、同東側で古墳6、（その3）調査区では古墳7の合計7基の古墳を検出した。全て周溝を巡らせた小型の方墳で、周溝や墳丘は後世の削平を大きく受けしており残存状態は悪く、主体部を確認できたものもない。

これらの古墳は、西側の（その1）調査区で検出されている北東一南西方向に走る開析谷に面した、標高約38～40mの中位段丘面上の比較的平坦な場所に立地している。また、旧妙法寺池東側で検出された古墳6よりさらに東側では古墳の存在は確認されておらず、これらは谷地形に面した段丘の肩付近を選地した一連の古墳群であったとみられる。

ここでは（その2）調査区で検出した古墳1～古墳6を報告する。古墳7は（その3）調査区の事実報告を参照して頂きたい。

古墳1（図92・93、図版34） 6トレンチと7トレンチにまたがって4面で検出された。古墳群の北西端に位置し、長軸はほぼ東西を指向する。墳丘は後世の削平を受けており残存していない。平面形態は北辺・南辺が約5.5m、東辺・西辺が約4～4.5mの長方形を呈する。周溝の外形規模は約7～8.5mで、北側に張り出し部がある。

周溝の幅は約1.0～2.7m、深さは約12.0～30.0cmで、外縁部は不定形である。特に北側周溝中央部は外側に向かって幅約3m、長さ約2mの範囲で張り出している。また西側周溝底の一部は周囲よりやや深くなっている、長さ4m程度の溝状を呈する。周囲の周溝埋土と同じ土で埋まっていることから周溝内埋葬とは考え難い。

周溝の南東隅はブリッジ状に掘り残されている。この部分の北側からは土器が集中的に出土した（図92、図版34）。須恵器杯身6点と杯蓋4点、無蓋高杯1点である。遺物整理作業の結果、出土した各4点の杯身・杯蓋は、焼成の状態や蓋をした際の合い方から本来セット関係にあったと判断したが、出土状況からはこれらが組み合っていたような様相は認められなかった。また、周溝底に接するものや20cm程浮いたものなどレベル差が多様であり、これらのことから本来の位置をとどめていないと判断され

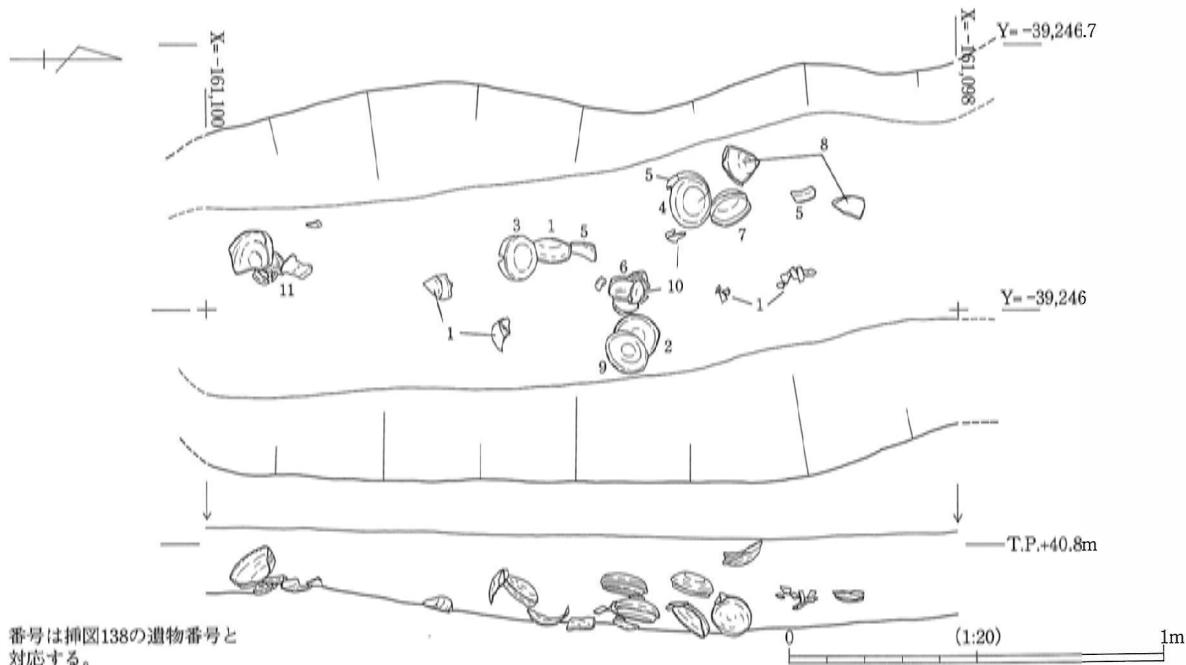
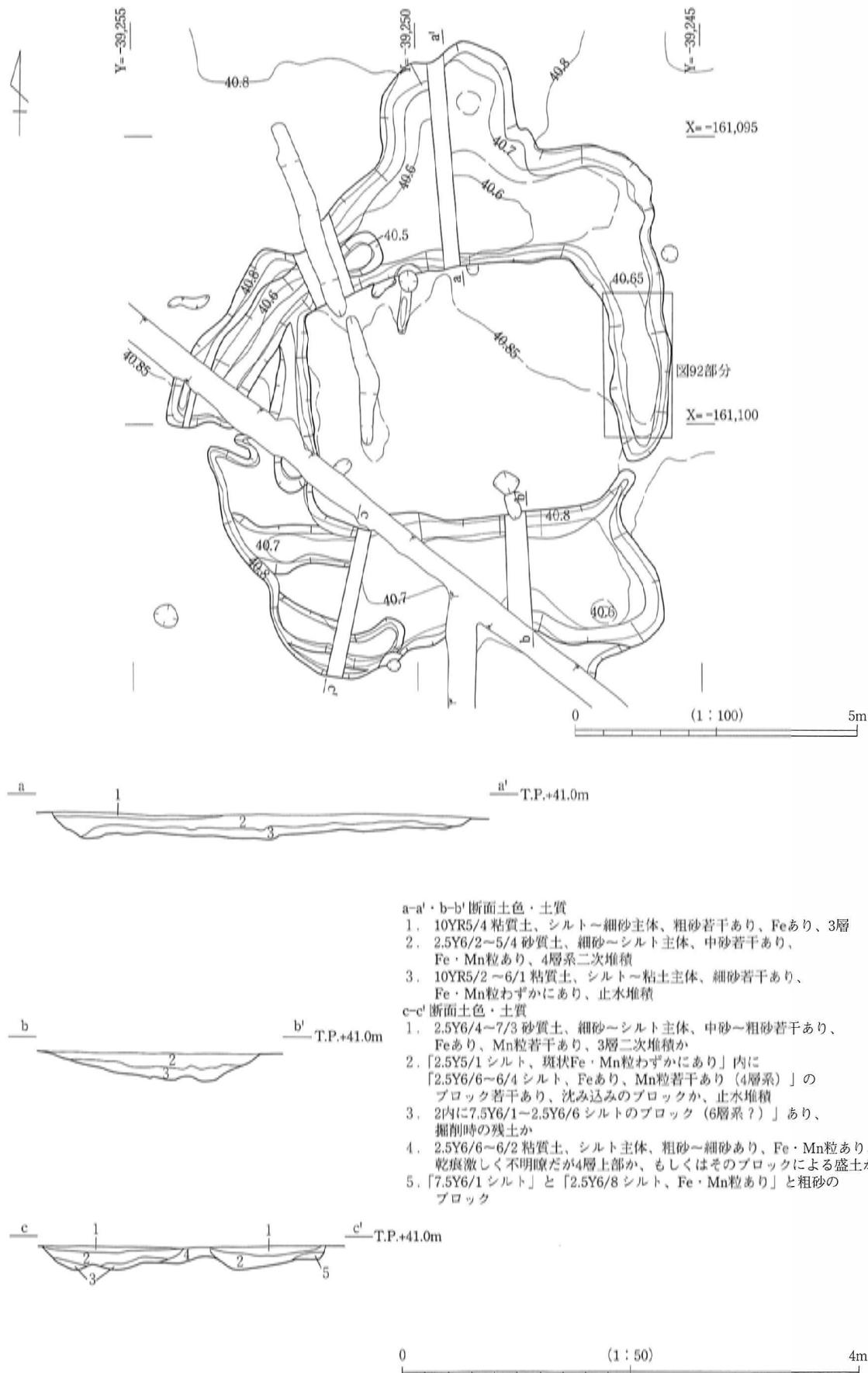


図92 古墳1 周溝内土器出土状況図



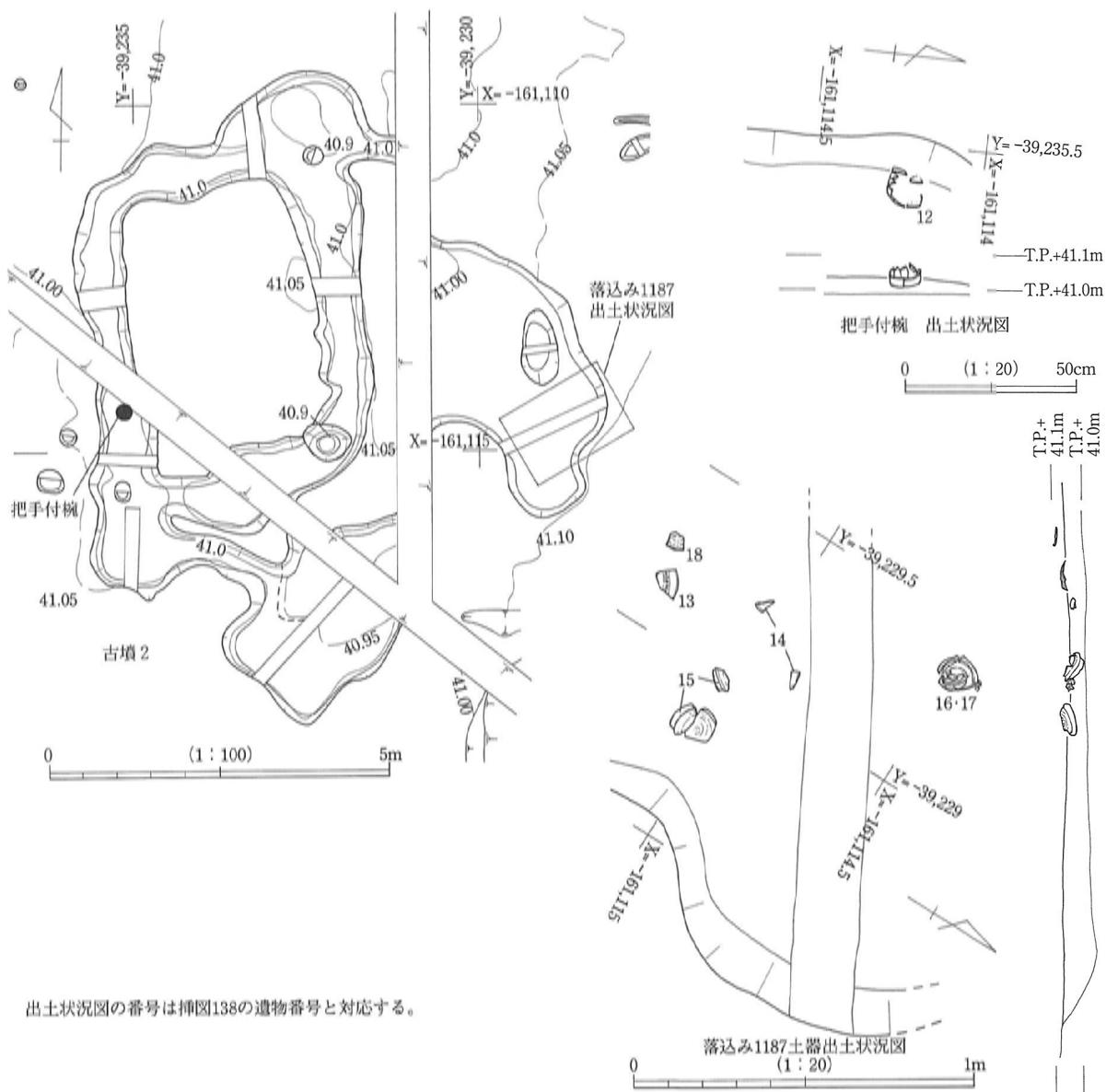
る。墳丘上にあったものが後に転落したか、墳丘側あるいは周溝外から投棄されたものであろう。

古墳2、落込み1187 (図94、図版35) 6トレンチと7トレンチにまたがって4面で検出された。古墳1の南東約20mに位置している。長軸は南北で、北から西に5度程振れている。平面形態は長方形で、墳丘の東辺・西辺が約3.6m、北辺・南辺は約2.7mを測る。張り出し部を除いた周溝の外形規模は約5.5×4.3mである。周溝の深さは約6～10cm残存していた。西側周溝の底付近からは須恵器把手付椀が出土した。

また周溝の南西隅から不整形な溝がのびており、南東に位置する不整形落込みへとつながる。この南東の不整形落込みは他と比べてやや深く、約15cm残存していた。また、周溝の北東隅が張り出し、そこから東側へも溝がのびる。

さらに周溝の東側では不定形な落込み1187が検出された。最大長約5mで、深さが約10cmと浅い。この落込み1187の南東端からは須恵器杯身2点、須恵器杯蓋2点、無蓋高杯杯部1点と脚部1点がまとまって出土している。隣接する古墳2と関連した施設の可能性もある。

古墳3 (図95、図版36) 7トレンチ4面で検出された。古墳1の約35m南に位置し、建物III・IVに



切られている。長軸はほぼ北西—南東方向である。墳丘の平面形態は $3.8 \times 3.1\text{m}$ 程度の長方形であり、突出部を除いた周溝の外形規模は $6 \times 4.5\text{m}$ である。周溝の北東部分は幅 1.5m 、長さ 1m ほど張り出している。

後世の削平を激しく受けており、周溝の深さも東側で約 13cm 程残存していたのみである。また、西側周溝は浅く、細くなりながら北側で途切れている。これは全体的な残存状態の悪さから、元来から周溝をブリッジ状に掘り残していたのではなく、後世の強い削平で途切れただけとみられる。

周溝の北東側から須恵器有蓋高杯と杯蓋が、南東側から須恵器大甕片と土師器片がそれぞれまとまって出土した。南東側出土遺物は残りが悪く図化できなかった。

古墳4 (図96~98・図版37) 7トレンチと(その3)調査区にまたがって4面で検出された。古墳3の約 20m 西に位置する。古墳の南西側は一部調査区外に及んでいる。

後世の削平によって墳丘はほとんど残存しておらず、また後世の溝やピット・井戸の造営による搅乱がひどいため、残存状態は良好ではない。ただし、他の古墳と比べて周溝は深く、最大で 29cm 程残存し

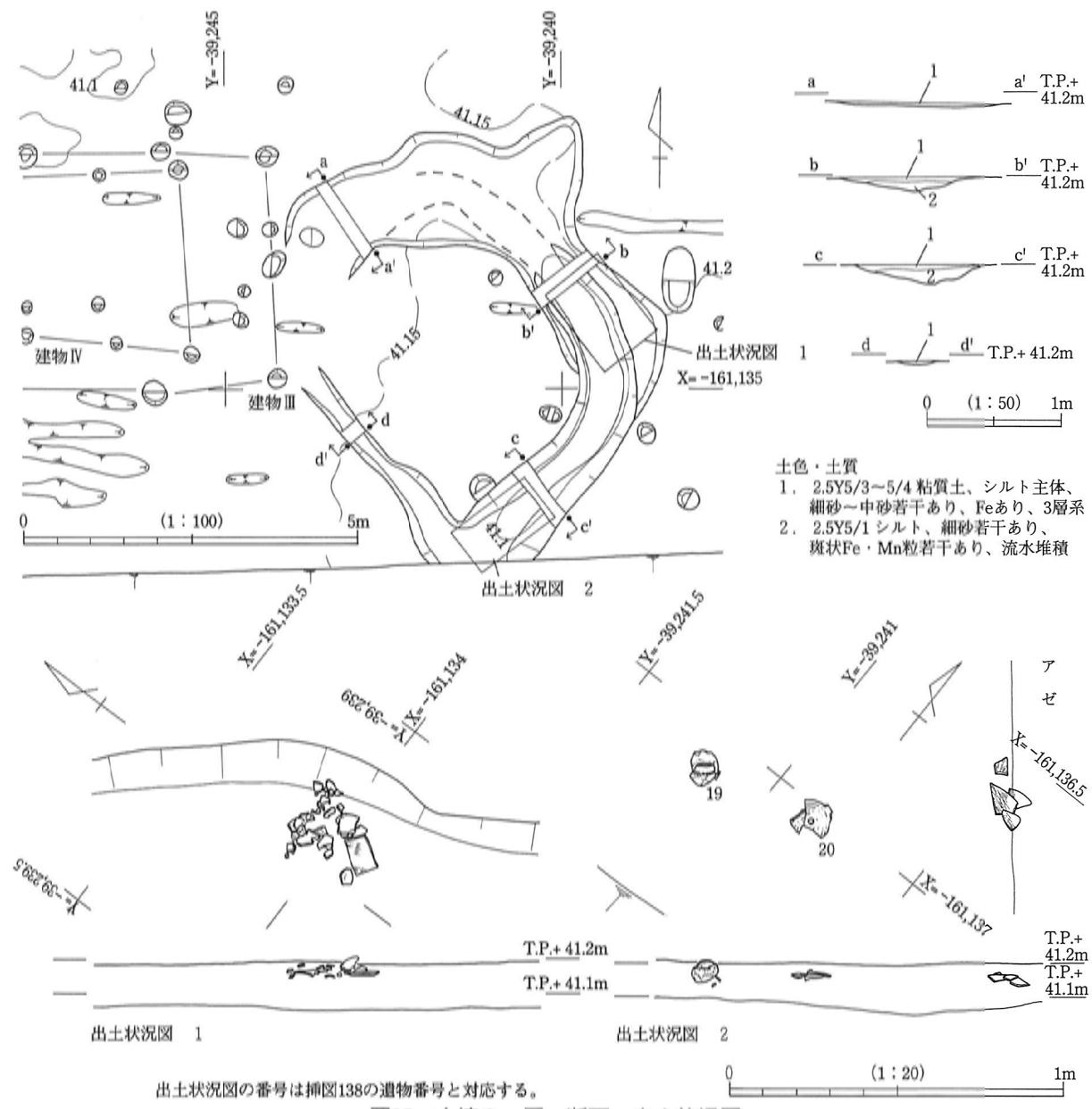


図95 古墳3 平・断面・出土状況図

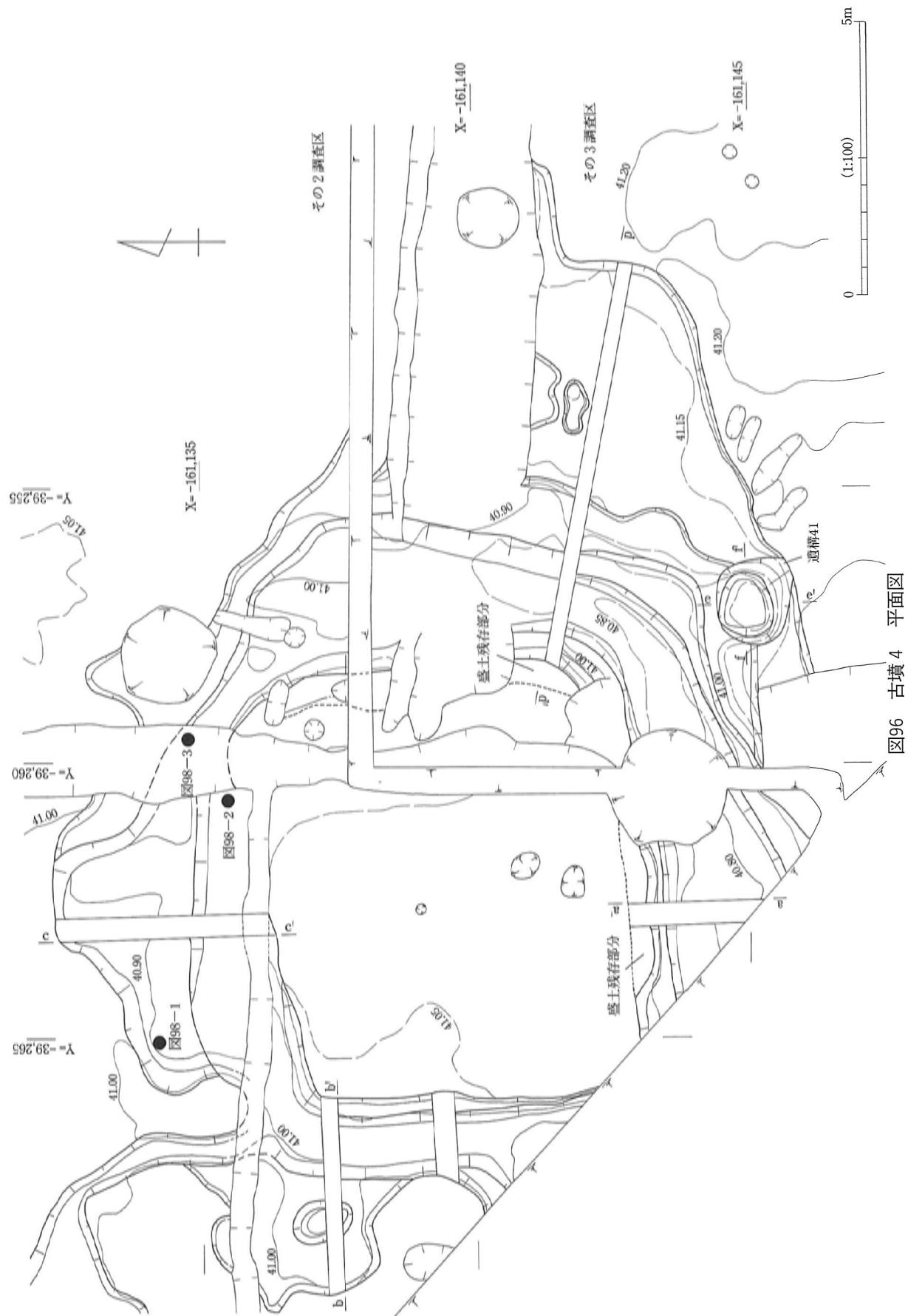


図96 古墳4 平面図

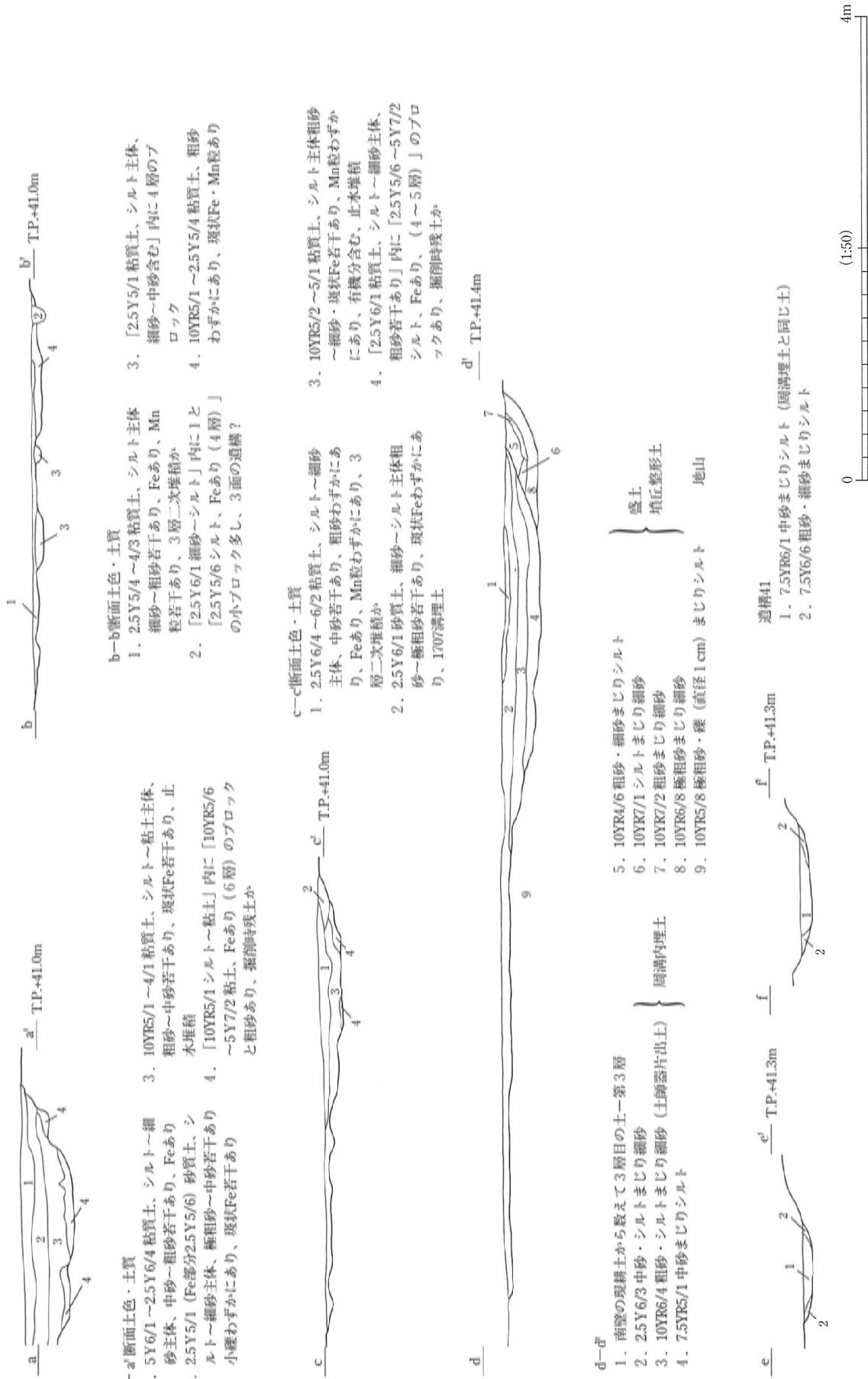


図97 古墳4 断面図

ていた。

墳丘の平面形態は東西8m×南北7.8m程度で、今回検出した7基の中で最も規模が大きい。軸は西へ5度程振れるものの、ほぼ正方位を指向する。周溝の外形規模は約11×11.6mであり、東辺と西辺・北辺にそれぞれ張り出し部がある。張り出し部は西辺が幅2m・長さ2m程度、北辺が幅7m・長さ2.5m程度、東辺が幅8m・長さ6m程度で、深さはともに3~7cmと浅い。

周溝北西隅からは細い溝が北へ向かってのび、隣接する古墳5の周溝とつながる。溝と周溝には切り合いが認められなかった。

東辺～南辺にかけての墳丘部周縁の肩部には、墳丘整形時のものと思われる盛土が残存しており（図97のd-d'）、平面ではベルト状に分布していた。また東辺～南辺では、墳丘肩から周溝にかけて階段

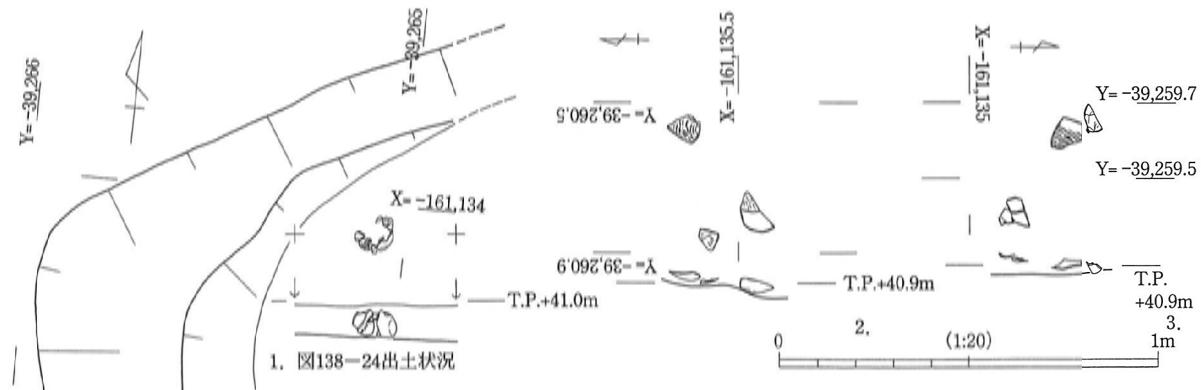


図98 古墳4 周溝内土器出土状況図

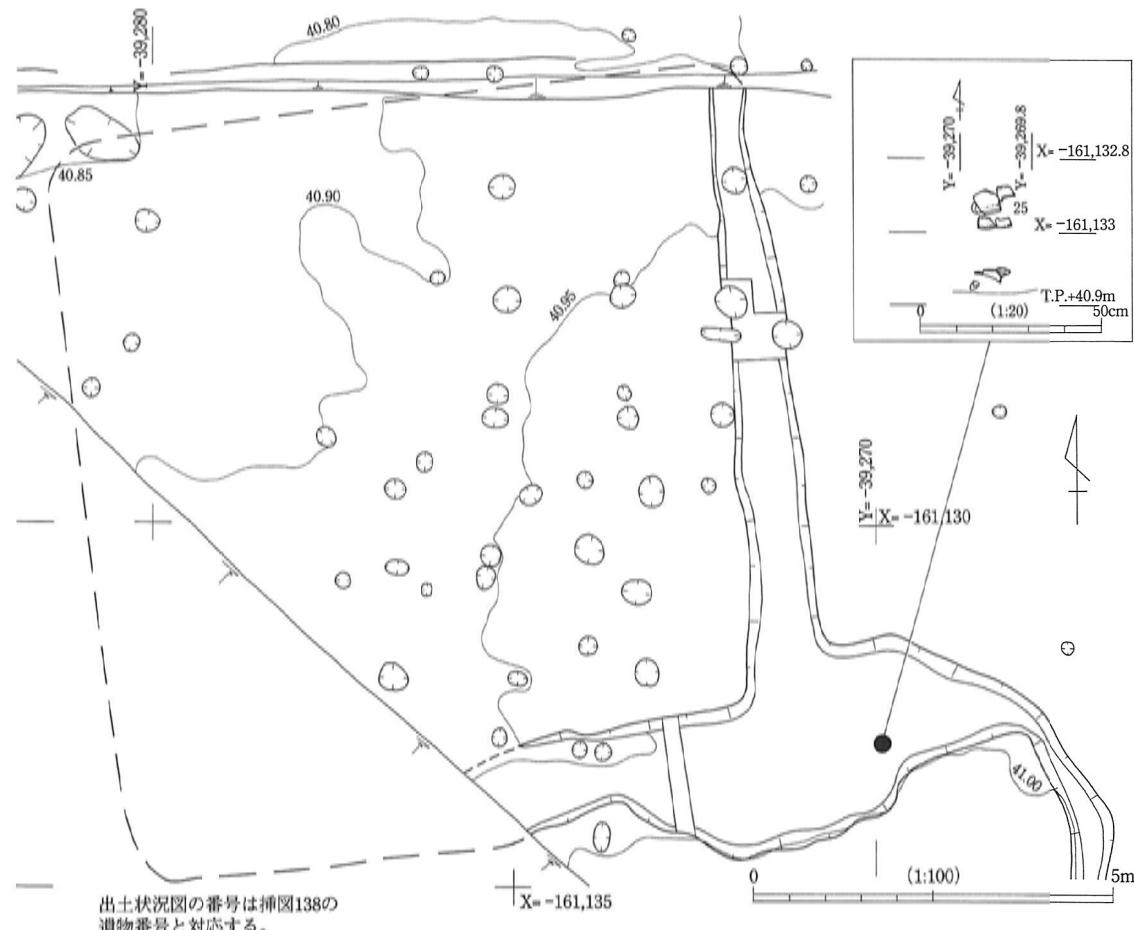


図99 古墳5 平面・出土状況図

状の段差がみられたが、これは後世の耕作などによって改変された結果とみるのが自然であろう。

周溝の南東隅の突出部付近で土坑（遺構41）が検出された。形状は $1.6 \times 1.4m$ 、深さ約30cmの隅丸方形である。これは周溝掘削途中で確認されたものであり、周溝内埋葬の可能性もある。遺物は出土していない。

遺物は周溝北辺突出部近くから須恵器把手付椀（図98）、北東隅付近から須恵器甕片が数点、周溝西辺からは須恵質紡錘車と須恵器無蓋高杯の杯部が出土した。

古墳5（図99） 7トレンチ4面で検出され、古墳4の北西に位置する。L字状の溝であり、当初は後世の耕地区画に関連する溝かと思われた。しかし周辺の区画溝とはその方向を違え、他の古墳と方位がそろう点、また、前述したように古墳4と細い溝でつながっている点から、当遺構を「古墳」として報告する。

検出しえた周溝は東辺と南辺のみであり、墳丘および西辺と北辺の周溝は後世の削平のため残存しなかったものと考えられる。東辺と南辺も非常に浅く残存していたのみである。現状では南辺が太く東辺が細い。また南東部隅の周溝外形はやや突出している。ここから古墳4とつながる溝がのびている。

検出した東辺の周溝長を勘案すると、平面規模は一辺8m以上の方墳であったと考えられ、方向性はほぼ正方位を指向する。

遺物としては周溝東南部隅の埋土から土師器と須恵器の小片が出土したが、これらは後世の混入遺物と思われる。

古墳6（図100） 1トレンチ4面で検出され、旧明法寺池の東側に位置する。平面形状は墳丘や周溝の肩が大きく崩れ不整形である。削平を大きく受けているため墳丘は残存しておらず、浅い周溝のみが確認された。長軸は北から約35°東へ振り、平面墳丘規模は $3.8 \times 3.3m$ 程度、周溝を含めた全体の規模は $6.5 \times 5.2m$ 程度をはかる。周溝の深さは10cm前後残存していた。

遺物は西側周溝内およびその周辺から埴輪片が散在した状態で出土した（図100）。原位置をとどめているものはない。また、接合しても上下はタガ一段程度、水平方向では全周の1/4を越えるものではなく、大きな個体に復元できたものもない。このほか、南西周溝の外側からは、後世の混入品とみられる羽釜細片が、埴輪片とともに出土した。（大庭）



図100 古墳6 平面図

3. 建物

(その2) 調査区では、(その1) 調査区とにまたがって検出された2棟を含め、総数18棟の掘立柱建物が検出されている。大きさは調査区東半の東端で検出された2棟と、西半で検出された16棟に分けられる。

西半のものは、(その1) 調査区の隣接部分で検出された2棟を含めて平安時代に集落を形成していたものと考えられ、検出状況のまとまりからは北、南、東の3群に分別できる。

全ての建物は4面で検出されたが、東半のものは3層のない部分で検出された事と、方位的にはずれるものの、2棟が3面以後の耕地区画の中で収まりの良い位置にあるため、3面時点での建物である可能性を残す。

西半の建物群は(その1) 調査区で検出された浅谷状地形を西に望む段差上に立地し、部分的な堆積層の上面では検出できなかった柱穴がある他、建物の重複状況から、3時期以上に分かれる事は確実である。調査区全体が耕地開発されて以後の耕地関連の溝に切られる例があるため、集落としての存続期間はそれ以前と言える。しかし、わずかながら建物の柱穴が切る溝などもあるため、集落成立以前に耕地区画が存在した可能性もある。

以下、個々の建物に関して述べる。なお、建物内部の梁行と桁行のラインの交点全てに柱のあるものを総柱建物、それ以外を側柱建物と呼称する。庇などの周辺附属構造以外の部分を建物本体と呼称し、梁桁の間数はその本体を以てする。また、柱穴の深さの比較は底面のレベルを以てする。軸の方位記載については座標北をNとしている。

建物I (図101) 調査区の一番東側で検出された、長軸がN13°Eを指向する2×3間の側柱建物である。梁行3.05m、桁行4.4mほど、柱間は1.6m~1.45mでほぼ1.55mほどに統一されている。四隅は直角で、棟ラインも梁行の中心を通る。

南東隅柱の柱穴081は2個のピットの切り合いで、南の方が新しいが、北の方がこの建物の柱穴である。棟持柱が特に深いタイプで、隅柱は側柱と比べても深くない。西側では側柱の方が深いくらいである。確実に柱抜き取りが確認できるのは柱穴078と柱穴081のみで、他に残る柱痕はほとんどが径10~7cmで、柱の径は10cm強程度ではないかと推測される。

柱穴は平面形でやや隅丸方形を呈するものもあるがあまり明確ではなく不整円形のものが多い。断面形は平坦な底面を成すものは少なく、半円形から三角形に近いものが多い。柱の沈み込みが顕著でないのは、地盤が良く締まっているせいか。

北側に近接するピット450は深さ5cm程度のものだが、この建物の棟のラインの延長線上に正確にのり、なんらかの関連があった可能性も考えられる。

なお、この建物周辺では、1層直下に直接4面が露出していたので、建物の所属遺構面が確定しがたいが、次の建物IIと同時期併存と見れば3面か4面のものであろう。

遺物は、器種の特定できない土師器の小片が8片ほど出土しているのみである。

建物II (図102) 建物Iの西側、7.4mほどでほぼ方向を合わせて並ぶ。長軸はN17°Eを指向する2×3間の側柱建物である。梁行3.6mほど、桁行は西4.55m、東4.4mほど。柱間は妻側は1.8~1.7m、桁行は1.6~1.4mで平均1.5mほど。棟のラインはやや歪み、N19°Eを指向する。

やや歪みはあるが四隅はおおむね直角となる。東側桁行は2本の側柱が、隅柱を結んだラインよりやや外側に位置する。

柱穴は、平面形ではやや不整形だが、おおむね隅丸方形を指向している。やや形の乱れているものは抜き取りの影響か。建物Iより一回り大きく、棟持柱、隅柱、側柱の順に大きい。

しかし、深さは明確な差ではなく、何故か南側にいくほど若干深い傾向にある。断面形は乱れが激しいが、本来は平坦な底面を持ったものが多かったようである。柱穴121以外は明確に柱が抜き取られている事が分かる。柱痕、底面の柱の沈み込みの痕跡、抜き取り痕などから考えても、柱の径は11cm前後と推測される。

建物の周辺では、ピット155・100・094・095・153が、建物の北東隅を覆うように鍵形に並ぶのが注目できる。しかし、建物との距離が1.8~2.0mほどあり、妻側の柱間より長い事から庇とは考えにくい。塀や柵のようなものか。

なお、この建物周辺は4面上に3層ではなく、2層のみが薄く残存しており、その上面ではこの建物は検出されなかったので、建物の所属遺構面は3面か4面である。

遺物は、器種の特定できない土師器、須恵器の小片が若干出土しているが、その他に、柱穴122から埴輪片が1片出土している。これは、60m以上離れた1tr.西端に位置する古墳6と1面溝007から出土した埴輪片と接合した(図140-1)。古墳の削平以後、耕作などにより移動したのだろうか。その事からも、この建物が周辺の耕地開発以後のものである事が推測される。

建物I・IIの立地について これらの建物は他の建物とは隔絶した位置にあり、一番近い建物を見ても、南東へ130mほど離れた、河原城遺跡の奈良時代の建物群である。従って集落の一部を成すものとは考えにくい。

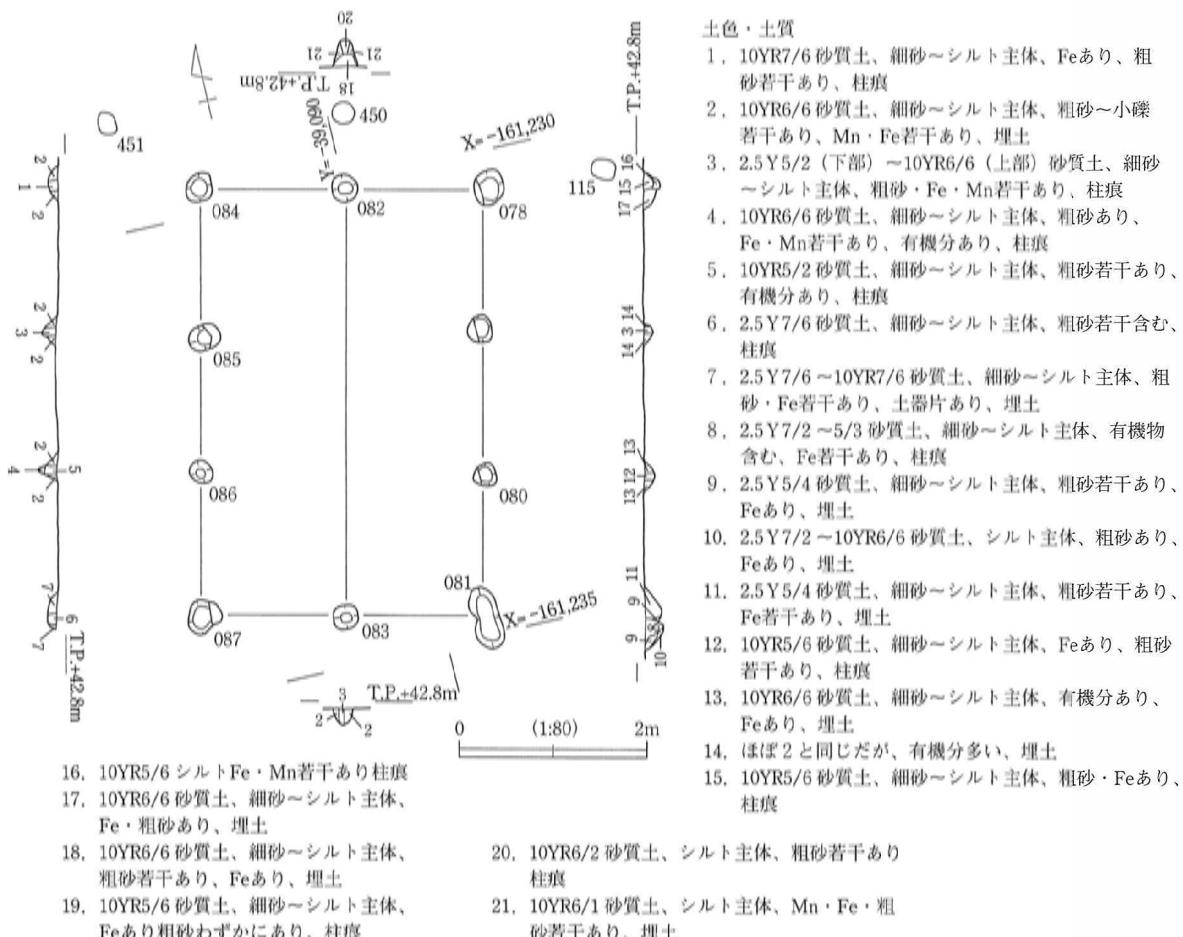


図101 建物I 平・断面図

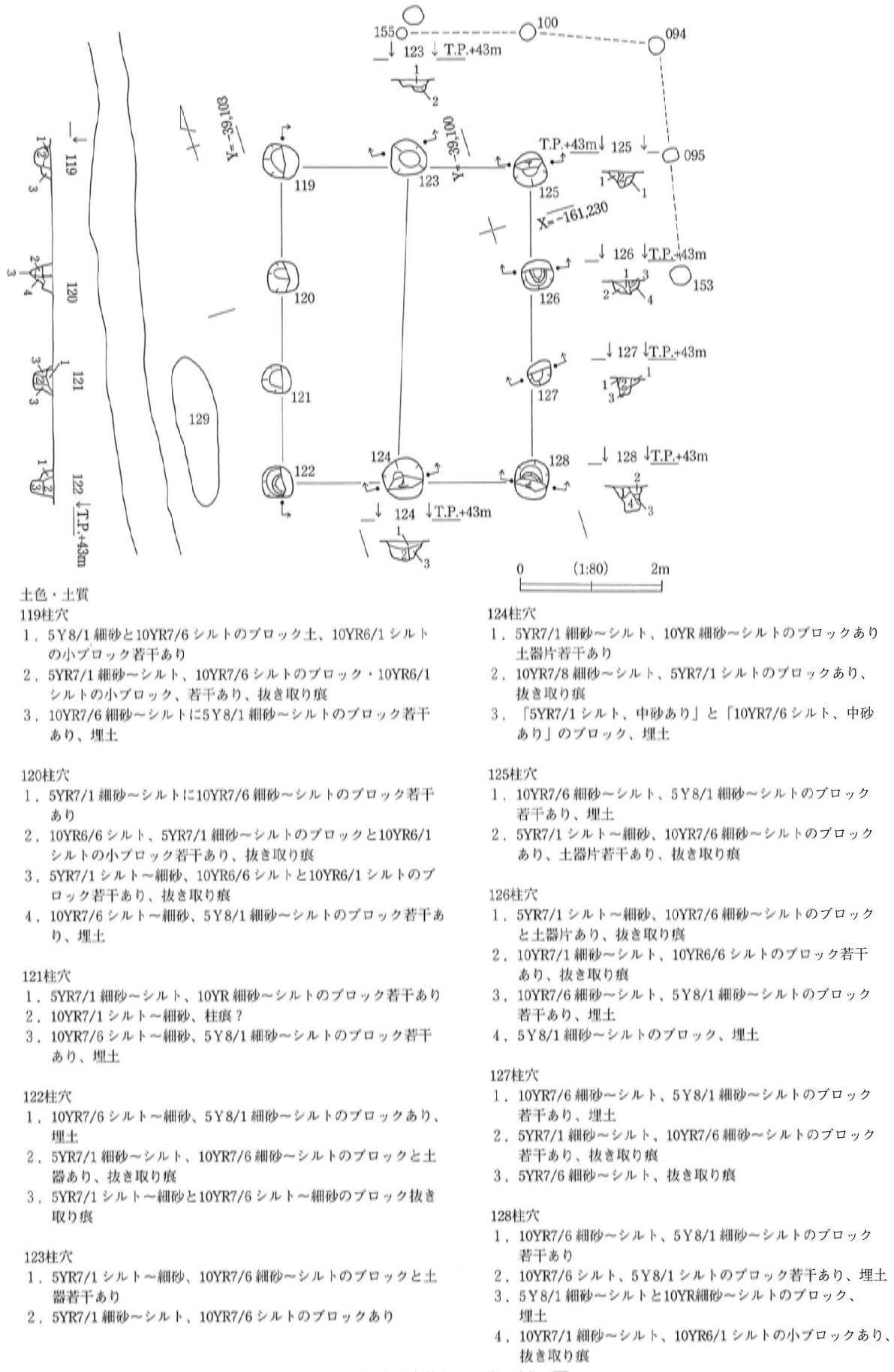


図102 建物II 平・断面図

加えて、他の建物が確実に4面の遺構とされるのに対し、この2棟は3面の遺構である可能性を否定する事はできない。

さらに考えを進めると、周辺の耕地区画は正方位よりN10°Eの方向性を持ったもので、建物I・IIの方向性とはずれるが、3～2面の耕地区画を復元的に考察すると、耕地区画の中にこれらの建物を内包するようなやや狭い区画が存在した可能性を指摘できる。

つまり、建物I・IIは他の建物とは違い、耕地開発以降に、耕地区画内に単独で存在した建物群である可能性が高い。その場合、建物の規模や、2棟構成である事、そして敷地を持つ可能性などを考えると、単なる作業小屋や納屋のようなものではなく、一戸の世帯を成すような住居である可能性が高いと言えるだろう。

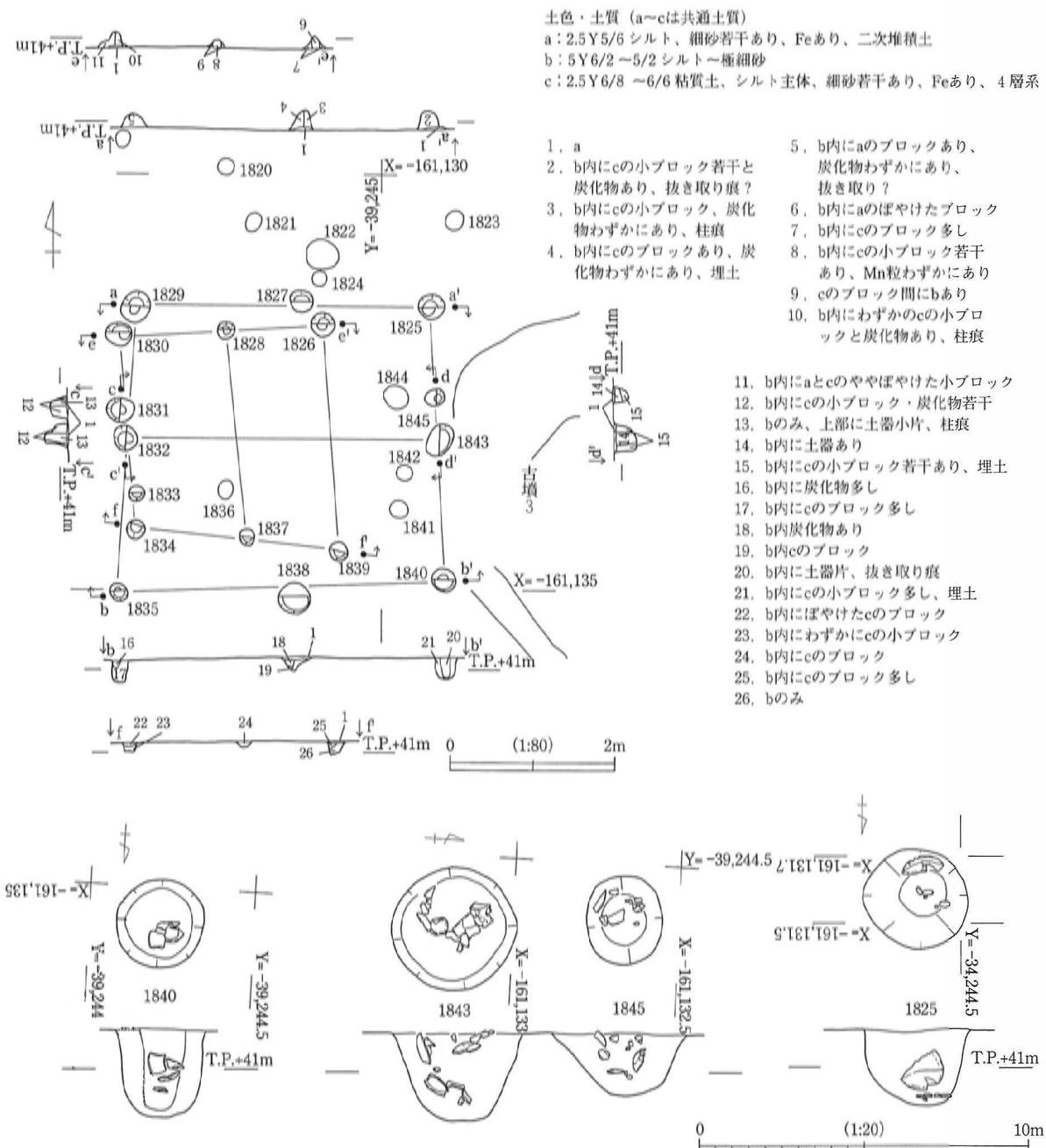


図103 建物III・IV 平・断面図、柱穴土器出土状況図

建物Ⅲ（図103） 建物IVと重複し、その2棟で調査区西半建物群の中で東群を成す。真西に位置する建物Vとは25mほど離れる。2×2間の建物だが、柱穴1827・1838の内、柱穴1838が他と比べ浅く、柱穴1843・1832は他と比べ深いため、棟の通りは後者を結ぶラインと見る。その方向はE 1°Sと、ほぼ正方位を向く。柱穴1827・1838の梁行ラインは中央からやや東に寄るが、棟のラインに直交し、東西妻のラインはそのラインと角度的には均等に南に開く。南桁行は3.95m、北桁行は3.55m、東梁行は3.27m、西梁行は3.47mとやや不整形である。棟ラインもやや北寄りで、南側が開くのは、南を正面とする事を暗示するものだろうか。

柱間は1.55mほどを最小で基本的な間隔とするようだが、最大2.15mまでばらつきがある。柱穴1827・1838は隅柱を結んだラインよりやや外側に位置する。東妻側のラインにのる位置に柱穴1845が存在し、西妻側でも、むしろ建物IVのライン上だが、柱穴1831が建物IIIに付随するものの可能性がある。

柱穴の平面形は柱穴1843が梢円の他はほぼ円形のもののみである。断面形では棟持と南側の隅柱が平坦な底部を持つ。柱の抜き取りがないと思われる柱穴1823・1827のみで他は全て抜き取りと思われる。特に東妻側の四つの柱穴は抜き取り穴に土器が入れられている。柱痕・抜き取り痕などから見ても柱の直径は14cm以下と思われる。

柱穴1825からは完形に近い土師皿（図140-2）と黒色土器A類椀片（図140-3）が出土している（図140）。黒色土器片はやや底から浮いて数片に割れ、平坦に分布していた。土師皿はそれより上で、柱穴壁に立てかけるように、底面を壁に付けて出土した。この柱穴は抜き取りの際に柱穴全体を掘り上げ、その上で土器を入れたのであろう。

柱穴1840から土師器椀（図140-4）1個体が出土した。これは抜き取り穴内の中程の位置からバラバラに出土し、各破片の方向も一定ではない。さらに、底部はほぼ全体が遺存しているが、口縁部は全周の1/3ほどの破片しかなく、外部で破碎された後、一部の破片を欠いた状態で抜き取り穴内に投棄されたと思われる。他に須恵器の小片が1片出土している。

柱穴1843からは土師器椀口縁部が2片、土師器椀高台付き底部1片、黒色土器A類椀5片の他、土師器小片が23片出土している。土師器椀口縁部は同一個体で（図140-5）、高台付き底部片（図140-7）とは別個体である。黒色土器椀片は全て同一個体（図140-6）であった。

出土状況としては柱穴の柱抜き取り穴内にあり、穴の肩部や壁に止まった破片と底部よりやや上まで落ち込んだものがある。外部で破碎したもの一部を、抜き取り穴内に土塊と共に投棄したものであろう。

柱穴1845からは黒色土器A類椀4片、土師器37片（杯？5片）、須恵器小片1が出土した。黒色土器は同一個体であった（図140-8）。

この柱穴は抜き取り痕などが確認できず、抜き取りの際、柱穴全体を掘り上げたと思われるが、土器片はその上層内の中心付近に集中している。外部で破碎したもの一部を、柱を抜き取った柱穴を埋め戻す途中で土塊とともに投棄したものか。

同一建物の柱穴で、全て柱抜き取り穴から出土したこの土器群は、建物IIIの廃絶時期を示す、同時期のものと考えられる事から、その時期は、黒色土器B類の登場を受けて、新黒色土器A類が成立する時期の早い方、平安京III期新型式からIV期古型式の頃、11世紀前葉と考えられる。

建物IV（図103） 建物IIIと重複し、それよりひとまわり小さい、長軸がN 4°Wを向く、基本的には2×1間の建物である。東桁行2.7m、西桁行2.35mと大きく違うが、東・北・西の3辺は直角を成すた

め、南妻側のラインが大きく傾く。北妻側2.38m、南妻側2.47mである。

棟持のラインは桁行の方向より更に西に傾く。棟持柱より隅柱が深いタイプである。

西側桁行のラインには側柱状に柱穴1831・1833が存在するが、位置的には全く不均等でその意味するところは分からぬ。

柱穴は、平面形は全てやや不整な円形である。総じて建物IIIの柱穴より浅く、残りが悪いので確実には言えないが、北妻側は柱痕が残り、南妻側は抜き取り痕のようである。遺物は出土していない。

建物IIIとは直接切り合う柱穴もなく、前後関係については判断のしようがないが、おおむね西辺を合わせる形を見ても、連続した関係であったと思われる。

建物V（図104） 調査区西半の建物群南群の中でも南の端近くで建物XVIと重複し、北の建物VIIIとは近接しすぎて同時併存は考えにくい建物である。長軸方向をE 1°Sに持つ建物である。隅柱が深く、棟持柱は側柱と同じ程度の深さのタイプである。四隅は全て直角で2.54×3.52mの規模の建物である。

棟持ラインは柱穴1877が北寄りで、柱穴1881が南寄りのため大きく歪む。しかし、そのライン上に柱穴1885が存在し、縦柱のようにも見えるが、棟持ラインと柱穴1879～1875の梁ラインの交点からかなり西に寄るため疑問が残る。また、柱穴1881から南北桁行ラインと平行に西にラインを延ばすと、西妻側のやや内側で柱穴1886に丁度当たる。これらの事からいかなる上部構造が考えられるかは結論できないが柱穴1885・1886はいずれもこの建物に関係するものであろう。しかし、柱穴1885は東柱の柱穴とは構造上考えにくく、この建物は、高床構造を想定しうるような縦柱建物とは言えない。

柱間は梁行1.43～1.1m、桁行1.85～1.65mとややばらつくが、桁行に関しては南辺の柱穴1875がほぼ正確に桁行を二分している事から、1.75mが基本的な長さと思われる。

柱穴は平面不整円形で隅柱のものがやや大きい。ほとんどの柱は抜き取られていると思われる。底面の柱の沈み込みの痕跡などを見るとほとんど径7～8cmほどで、柱の径が10cm以上あったか甚だ疑

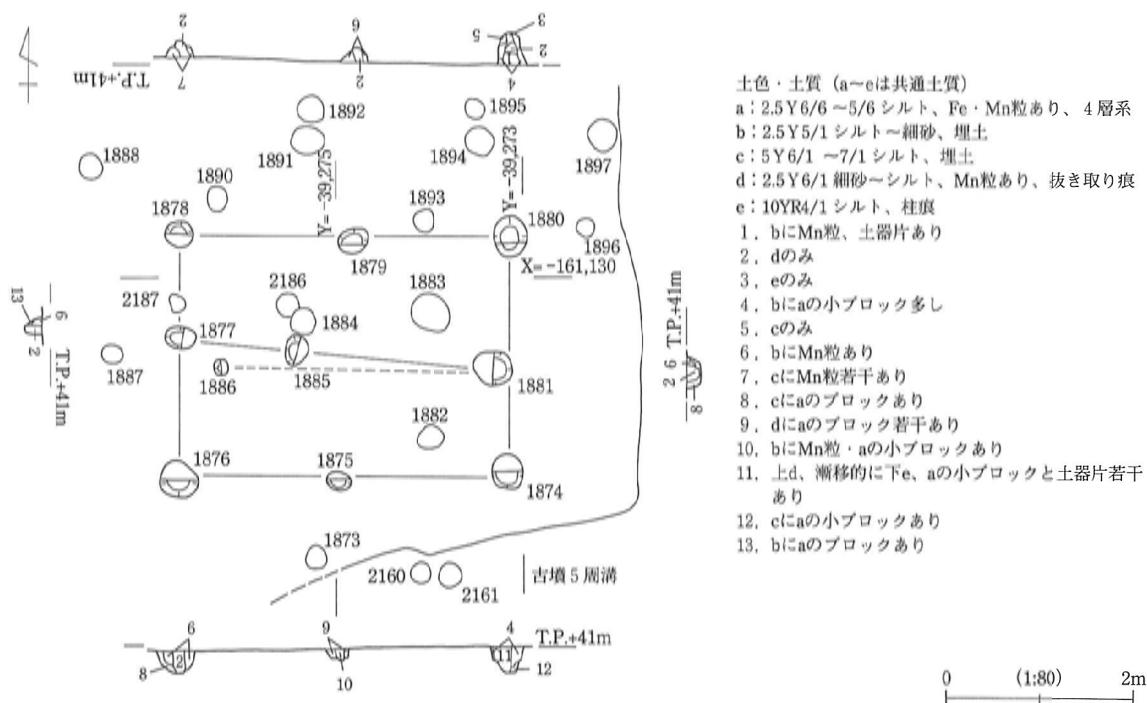


図104 建物V 平・断面図

間である。

建物VIII・XVIとは直接の切り合いがないので前後関係は確定できないが、この建物を検出した時点では両建物の柱穴の幾つかは検出されず、追い打ちをかけた後検出したものがあり、それが、部分的な堆積か土壤化の進行かは別にしても建物Vが建物VIII・XVIより新しい事を示唆しているように思われる。

遺物は、柱穴1877から出土した土師器小片4と黒色土器A類小片1のみである。いずれも器種は特定できない。

建物VI（図105） 建物VIは調査区西半建物群の中で南群の西端に位置し、調査区外へまたがっている建物と思われる。「L」字に並ぶ四つの柱穴を検出したのみなので全体の規模は分からぬが、妻側の柱間が桁行の柱間より長いものがほとんどである事からすると東西に長軸を持つ建物と思われ、柱穴1910が他の柱穴よりかなり浅い事から、隅柱とは考えにくく、東西は3間以上あると考えられる。

それを前提とすると、長軸はE 6°Sの方向性を持ち、柱間は、妻側1.7m、桁行1.65・1.6m、北東隅は直角を成すので、2×3間の整った建物と仮定すると、3.4m×4.9mほどの規模に復元できる。

柱穴は、平面形はやや不整な円形で、底面の丸いものが多い。柱痕の様に見えるものも、土質から見ると全て抜き取り痕のようである。そこから類推される柱の径は非常に細く、10cm程度か。

遺物は柱穴1909から5片、柱穴1910から1片、土師器小片が出土しているが、器種は特定できない。

建物VII（図106） 調査区西半建物群南群の北半に位置し、群中最大の建物である。建物VIIIと重複する。2×3間の両妻側に庇の付く側柱建物で、北辺と西辺が直角で、東辺と南辺が直角だが、それら同士がややずれる。棟のラインはその中間の角度のE 9°Sを取り、やや北寄りである。

建物本体の規模は東妻側が3.64m、西妻側が3.5m、北桁行5.43m、棟ライン5.39m、南桁行5.34m。

柱間は妻側が1.69～1.88m、桁行は北は中央の柱間が広く、南は西の柱間が狭い傾向があるが、平均して1.85mほどが基本のようである。

両妻側の庇を含めると建物の長さは9mほどになるが、庇はどちらも本体より幅を狭くする。庇の軒先ラインは東は本体と平行するが、西は南にやや開く。

柱穴は、総じて平面不整円形で、底面は元々は平坦だったものが多いようである。北桁行の方が南よ

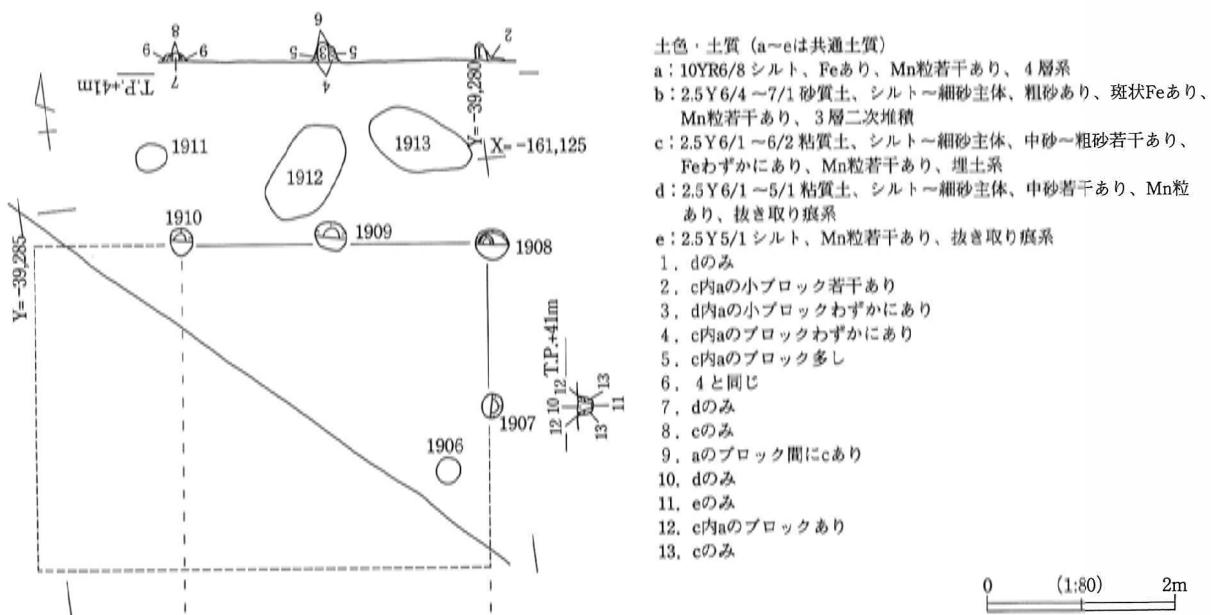


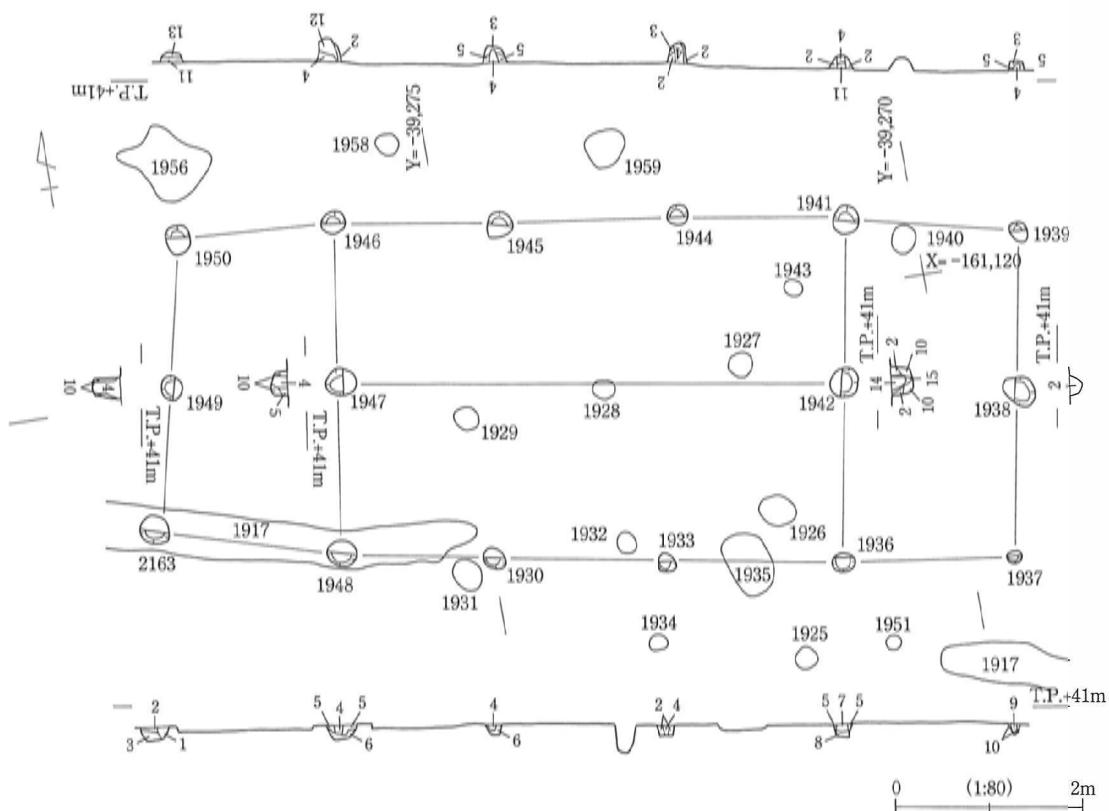
図105 建物VI 平・断面図

り若干深い傾向にある。隅柱と棟持柱が側柱より深い様だが、それほど顕著な差はなく、柱穴1941などは側柱より浅い。

ここで注目されるのは、庇の柱穴で、東の庇は両隅のものは小さく浅い。中央のものは深さはやや浅いが、平面規模は本体の柱穴と同じである。西の庇にいたっては、平面規模が同じなだけではなく、中央の柱穴1949はこの建物の柱穴の中で一番深い。通常の庇とは違い、切り妻屋根を延長したような上部構造も考えうると思われる。

断面実測位置が柱位置の芯を外したものが多いのでいちがいには言えないが、柱の抜き取りが多いものの、柱穴1933・1944など、柱痕を残すものも確実にあるようである。また、柱穴1936のように抜き取り痕の中に炭化物を含むものがあるのが注目される。

遺物は柱穴1942から土師器小片が4、柱穴2163から土師器小片3、黒色土器A類小片1が出土しているが、器種は特定できない。



土色・土質 (a~eは共通土質)

- a : 10YR6/8 シルト、Feあり、Mn粒若干あり、4層系
- b : 2.5Y6/2 砂質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、Fe若干あり、3層二次堆積
- c : 2.5Y6/1～6/1 粘質土、シルト～細砂主体、中砂若干あり、Mn粒若干あり、埋土系
- d : 2.5Y6/1～5/1 シルト～細砂主体、中砂若干あり、Mn粒若干あり、抜き取り痕・柱痕等
- e : 2.5Y5/1 シルト、抜き取り痕・柱痕等

1. d内aの小ブロック・土器片あり

- 2. c内aの小ブロック若干あり
- 3. c内aのブロック多し
- 4. dのみ
- 5. cのみ
- 6. c内aのブロックと粗砂多し
- 7. e、下部に炭化物多し
- 8. d内aの小ブロック若干と炭化物あり
- 9. e内aの小ブロック若干あり
- 10. c内aの小ブロックあり
- 11. bのみ
- 12. e、炭化物わずかにあり
- 13. d内aの小ブロック若干あり
- 14. d内aの小ブロックあり
- 15. eのみ

図106 建物VII 平・断面図

他の遺構との切り合いで重要なのは、柱穴1948・2163が溝1917を切っている事である。この溝は、耕地区画の基本線を成す溝1707より西側で、それと方向性の異なる溝群の中の一つで、これもなんらか耕地区画に関連するものと考えられる。この溝を建物の柱穴が切っているという事は、集落に先行する耕地開発が存在した事を示していると考えられる。

建物VII（図107） 調査区西半建物群南群のほぼ中央に位置し、北側で建物VIIと重複し、南側で建物Vと近接する、南北に長い建物である。

検出当初は 2×2 間の建物2棟と認識していたが、最終的には1棟の建物であると判明した。

問題なのは建物本体が 2×3 間のものなのか 2×5 間の建物なのかという事であるが、深さT.P.40.5m前後の柱穴が三つ並ぶ桁行は柱穴1926～1932～1931ラインと、柱穴1900～1901～1903ラインであるので、それを妻として、隅柱と棟持柱が側柱より深いタイプで、両妻側に庇、更に南側から西辺中程にかけて「L」字形に庇の付く建物と判断した。

長軸方向は南北を正確に指向する。建物の規模は本体 $3.1m \times 4.77m$ 、両妻庇を加えると $6.4m$ ほど、さらに「L」字庇を加えると最長 $8.9m$ ほどにもなる。

柱間は妻側は $1.5 \sim 1.67m$ 、桁行は $1.5 \sim 1.7m$ ほどだが、いくつかの例外を除いて、大体 $1.55m$ ほどが基本の様だ。

柱穴は、平面形はやや方形を意識したような梢円形もあるが、大体、やや不整な円形である。ほかの建物と比べて立地的にも削平が少ない位置にあると思われるが、それにもまして現状での柱穴は深い。

底面は元々平坦にしていたようである。柱の沈み込みが若干見られる。柱抜き取りのものが多いた。

構造として気づく点では、西桁行の柱穴1924・1931のラインが外へ膨らむ事が先ず挙げられる。これは推測するに、北西隅柱の柱穴1931が、建物VIIの柱穴1930を避けているように見える。この建物が、建物VIIに直接後続するものであったため、土が締まっていない元柱穴を避けたのであろうか。

両妻側の庇は、どちらも隅のものは側柱と同じ程度の深さを持ち、中心の柱穴は棟のラインに通り、かつ、やや深い。単なる庇以上の上部構造を支えうるもののように思われる。庇ではなく、本体自体の増築のような事も考えられよう。

南側妻から西桁行の途中までめぐる「L」字形庇の柱穴はそれらに比べ小さく、浅く、かつ、並び方も不整である。西辺のものは本体の梁行に大まかに対応するが、南辺のものは大きくずれる。北端の柱穴1923が後世の北へ落ちる段差の下で遺存しているので、それより北のものが削平で消滅した可能性は薄く、やはり北側妻のラインまでは伸びていなかったのだろう。

東側にも梁のラインにのり、東桁行にほぼ平行するラインを成す、柱穴1951・1914が見られるが、2個検出するのみなので庇とは言いがたい。

他に、棟のラインで、棟持柱柱穴1901に切られる柱穴1902や、建物本体内部の北東隅に位置する土坑1935などが、この建物に関係しそうな遺構である。

遺物は、柱穴1893から黒色土器A類椀片1（図140-9）と土師器小片3が出土している他、各柱穴から、土師器・黒色土器の小片が少数出土しているが、器種が特定できるのは柱穴1893出土の黒色土器椀のみである。

建物IX（図108） 調査区西半建物群南群の北端に位置し、建物VIIから $1.8m$ ほど、北群の建物Xから $5.6m$ ほど離れている。 2×2 間の側柱建物で、長軸はE $5^{\circ}N$ を指向する。梁行 $2.35 \sim 2.58m$ 、桁行 $3.48 \sim 3.68m$ 。東西妻ラインが南に開き、南北桁ラインが東に開く、棟ラインはそのほぼ中央だが、角

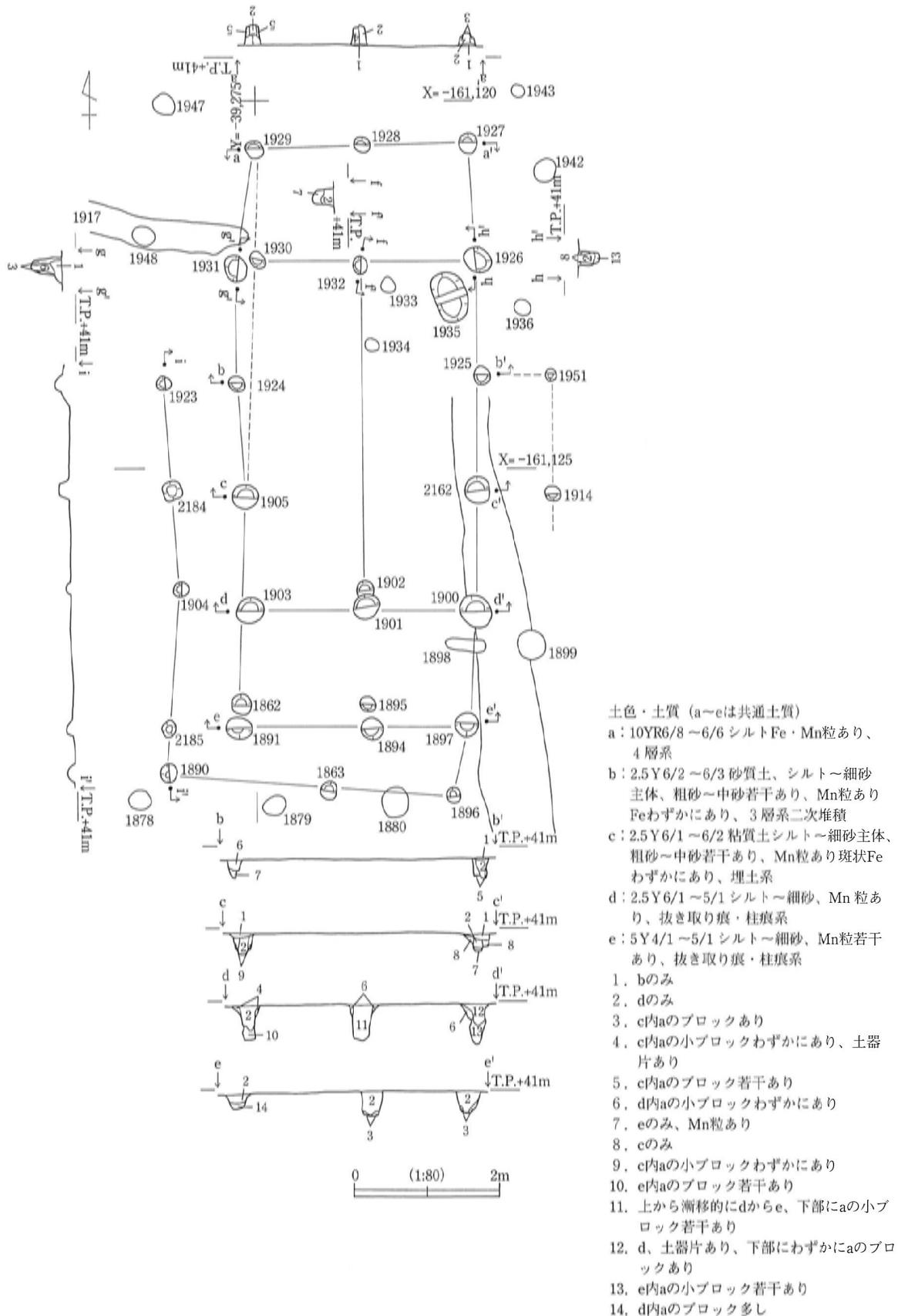


図107 建物VII 平・断面図

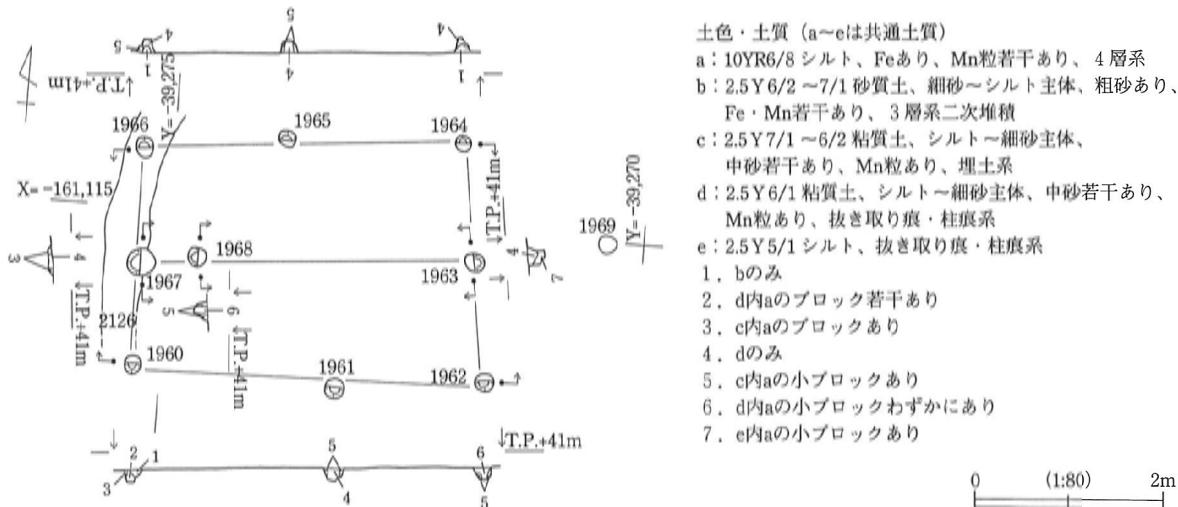


図108 建物IX 平・断面図

度的には北側桁行に近い。

西側妻の棟持柱のはずの柱穴1967が浅く、むしろその東側で棟ラインにのる柱穴1968が東側棟持柱の柱穴1963と深さも近い。桁行は柱穴1963より浅いが隅柱・側柱も同じ深さ。側柱柱穴1961・1965は隅柱を結ぶラインよりやや外側に出る。

柱穴は平面やや不整な円形、断面形は底面が平坦でやや柱の沈み込みが見られる。ほとんどが抜き取り痕がある。

西側で、柱穴1966・1967が溝2126を切るが、この溝は溝1917と同じく、古い耕地区画を示す溝で、溝1917と建物VIIとの関係と同じく、集落成立以前の耕地区画の存在を示唆する。

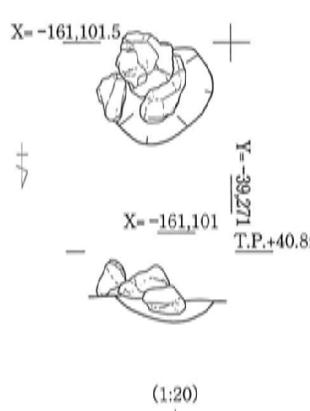
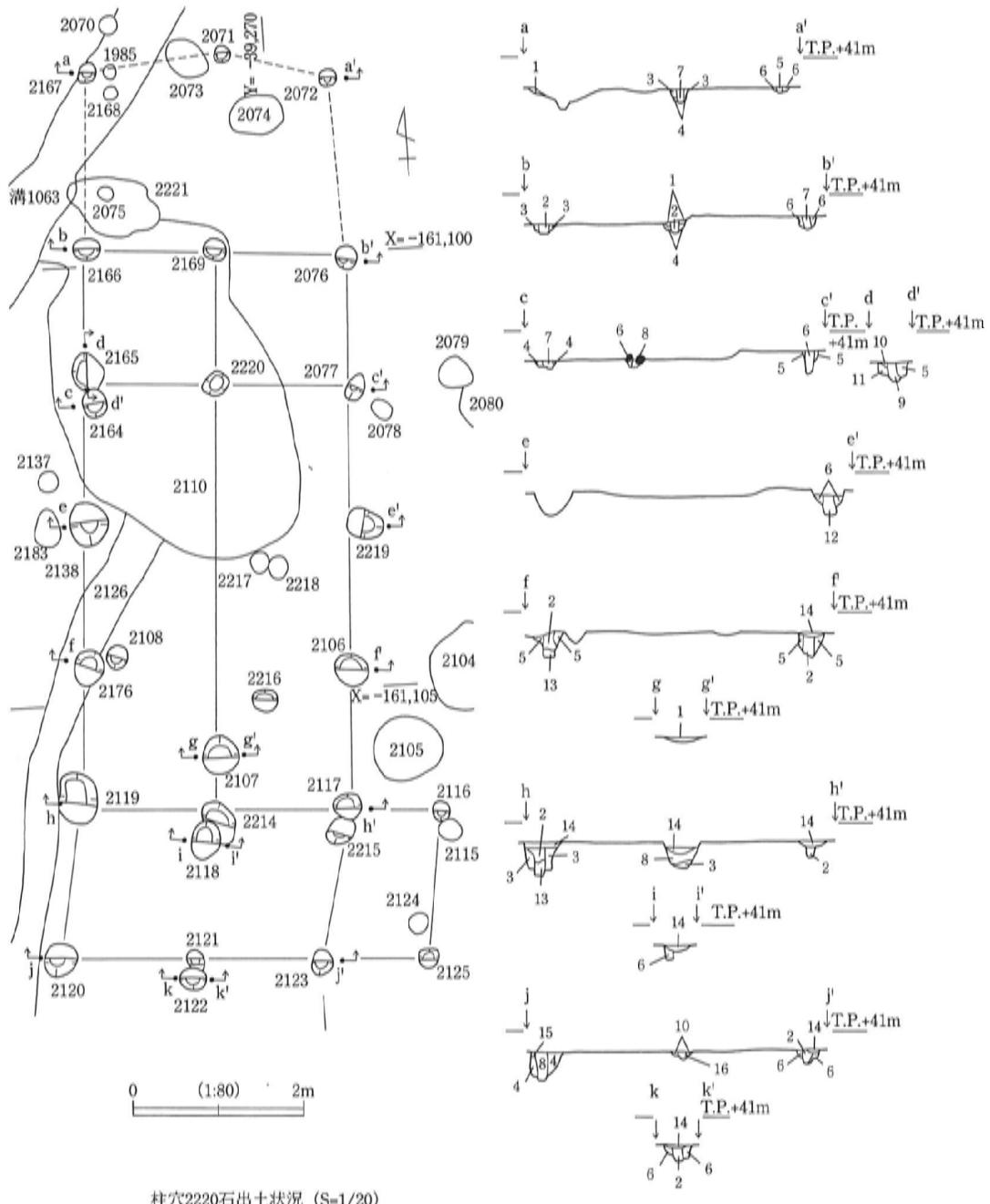
遺物は出土していない。

建物X (図109) 調査区西半建物群北群の南半に位置する。検出当初は南北2棟の不整形な建物と考えていたが、土坑2110の底部や、追打をかけて新規に柱穴を検出した結果、1棟の建物と把握された。

本体2×3間の側柱建物の両妻側に庇が付き、他に若干の付帯施設のある建物と考えられる。北側庇の柱穴2076～2169～2166のラインは、桁行の通りも良く、柱間も整って、むしろ、妻の2077～2220～2165ラインが本体内部で一部床張りを成すように見えるが、この建物では桁行の側柱・隅柱が深さを揃え、棟持柱より深い傾向があることから見ると、やはり北側も、柱穴に深さの足りないものは庇と見たほうが良いようである。

長軸方向はN 4° E。建物規模は本体梁行3.1m～3.14m、桁行4.9m、妻の庇含めて8.17m。全体にやや歪みはあるが、柱間は1.55m前後と統一感がある。建て方の基本的なラインは西梁行にあるようだ。

南側の庇はやや歪むが軒は本体と平行、柱穴2116・2125によって東へ張り出す可能性が高い。東西桁行を北に延長すると、柱穴2092・2167に当たるが、これらは柱穴2071と合わせ、軽く「く」の字に曲がる東西ラインを成す可能性がある。北側庇からもやや離れ過ぎているので、建物からは独立した何らかの施設か。その中で柱穴2167は溝1063に切られている。土坑2107は棟ラインで建物本体内部南端に位置しており、この建物に関連する可能性が高いと思われる。その他、この建物の柱穴を切る、柱穴と思わ



- 土色・土質 (a~eは共通土質)
- a : 2.5Y5/6 シルト、Feあり、Mn粒若干あり、4層系
 - b : 2.5Y7/2 砂質土、細砂シルト主体、粗砂あり、Feあり、3層二次堆積
 - c : 2.5Y6/2 ~6/1粘質土、シルト~細砂主体、中砂~粗砂若干あり、Mn粒あり埋土系
 - d : 2.5Y6/1 粘質土、シルト~細砂主体、中砂若干あり、Mn粒あり、抜き取り痕系
 - e : 2.5Y5/1 シルト~細砂、Mnあり、抜き取り痕系
 - 1. cのみ 11. c内aのブロックわずかにあり
 - 2. dのみ 12. d内aのブロックと焼土わずか
 - 3. c内aの小ブロック若干あり 13. e下部にaの小ブロック若干
 - 4. c内aのブロック多し 14. bのみ
 - 5. d内aの小ブロックわずかにあり 15. aのブロックのみ
 - 6. c内aのブロックあり 16. d内粗砂あり
 - 7. d内土器片あり
 - 8. d下部aのブロックわずかにあり
 - 9. aのブロック多し、間にc
 - 10. aのブロック多し、間にc

図109 建物X 平・断面図

れるピットが幾つか見られるが、建物を成すものはない。

柱穴は、平面形は不整円形、元々は底部が平坦だったものが多いと思われる。柱の沈み込みが見られるものも比較的多い。柱は抜き取られたものがほんとどのようである。柱の径は10cm強か。

この建物も、建物IXと同じく、溝2126を切る柱穴がある。

本体北側棟持柱にあたる柱穴2220には拳大よりやや大きめの礫が3個入っていた。その下の埋土から見ると、柱抜き取り穴に入れられたもののようにある。土坑2110の掘削時にやや動いたか。

その他にも幾つかの柱穴から土師器や黒色土器A類の小片が出土しているが、器種が特定できるものは柱穴2164の土師器高台付き椀片（図140-10）、柱穴2106の土師器甕口縁部片（図140-11）、柱穴2176出土の須恵器高杯身部片（図140-12）程度である。

建物X I（図110） 北群南半で建物Xの東側に位置する。建物とは考えられるが、通常のものではない。東辺に5個、西辺に6個の柱穴が並び、その間にもいくつか柱穴がある。東・南・西の各辺が直角を成し、北辺は歪む。東西辺の方向性はN 6°W。建物規模は東西2.95m、南北3.32m・2.99m。

東西の対応する位置にある柱穴で同じような傾向を示すものがある。柱穴2089・2100はラインより内側に寄り、柱穴2088・2094はラインより外に寄る。

南北辺以外に東西で結べるラインは柱穴2087～2097～2096、柱穴2089～2101～2100などで、傾きは北辺と同じだが、角度は異なる。

柱穴は平面形は不整円形、深さはまちまちで、特に規則性は見いだせない。しいて言えば北辺のものは浅く、その南側の東西ラインの柱穴が比較的深い事から、北辺は付随的な施設で、建物本体の北端はその南側のラインであろう。

おそらくは、屋根構造はないか、あっても簡便なものと思われる。その割に深い柱穴もあるのは壁体構造に強度を求めたためではないだろうか。想像の域を出ないが、南側に簡便な屋根を掛け、北側に開閉できるような柵を持つ、家畜小屋のようなものを想定してみたい。

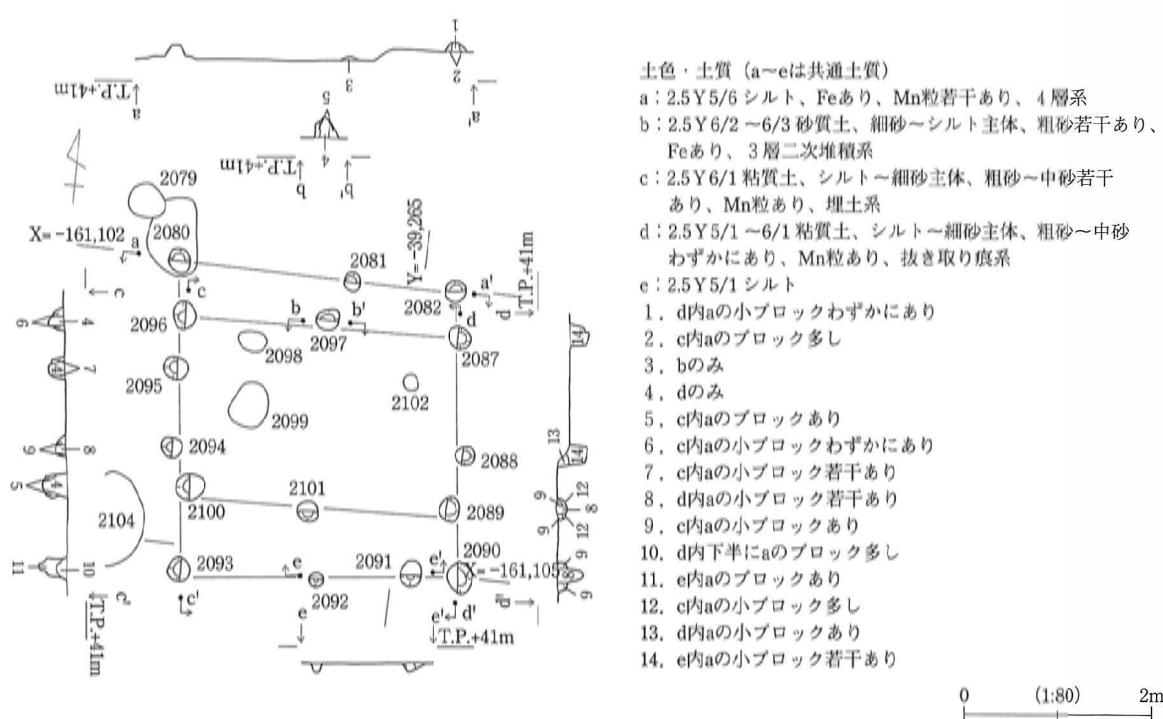


図110 建物X I 平・断面図

遺物は柱穴2093・2100より、器種不明の土師器小片が6片出土したのみである。

建物X II (図111) 調査区西半建物群北群の中央付近で建物X IIIと重複する、本体 2×3 間の西側妻に庇が付随する建物である。東側妻の東にも、妻ラインと平行するピット列があり、庇が付いていた可能性がある。柱穴2168が南桁行のライン上にあり、柱穴2064が棟ラインにあるが、北端の柱穴2055は北桁行ラインよりだいぶ南側である。

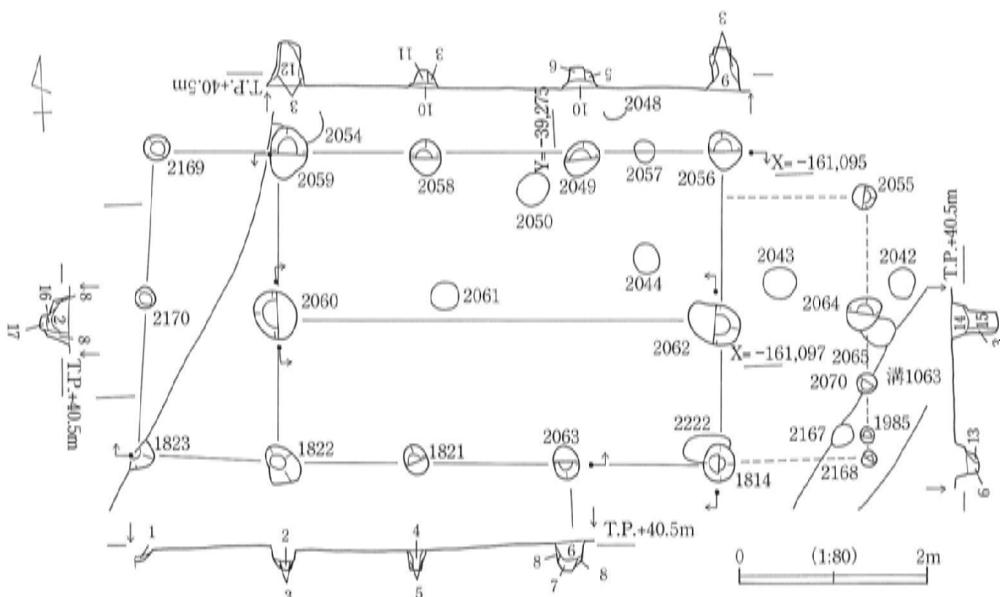
長軸方向はE 3° Sで、本体の規模は $3.28m \times 4.7m$ 、西の庇を加えると長さ $6.1m$ ほど、東も庇と認められるなら全長 $7.6m$ ほどになる。柱間は妻側が $1.78 \sim 1.5m$ 、桁行は平均して $1.55m$ ほど。

本体は四隅とも直角で、棟ラインも桁と平行するがやや南に寄る。西の庇は柱穴2169・1823の角が直角だが、他の二つの隅は歪み、南側にやや開く。

柱穴は、平面不整円形で、全てに柱抜き取り痕が見られる。元々は底部は平坦だったようで、幾つかの柱穴には柱の沈み込みの痕跡が顕著に残る。本体北辺は隅柱が深く、側柱が浅いが、南辺はその中間の深さで統一されている。棟持柱の深さは西側が南辺と同程度で、東は北辺隅柱と同じである。庇の柱穴は浅い。推定される柱の径は、棟持柱・隅柱が $10cm$ 強、他が $10cm$ 弱か。

この建物は、両妻側庇付きと考えたほうが、建物Xと直交し、その北側で、庇とは言えなくても関連する施設と見られるピット列と一部重複し、南群で同じ両妻側庇付きの建物2棟が直交重複している、建物VII・VIIIの関係と同じ状況が北群にもある事になり、理解しやすいと考えられる。

その場合、東側庇の柱穴2168・1985・2070が溝1068に切られている。



土色・土質 (a~eは共通土質)

- a : 2.5Y6/8 ~ 6/6 シルト、Feあり、Mn粒若干あり、4層系
 - b : 2.5Y7/2 ~ 7/3 砂質土、細砂シルト主体、粗砂一中砂あり、3層二次堆積
 - c : 2.5Y6/1 粘質土、シルト一細砂主体、中砂一粗砂若干あり、Mn粒あり、埋土系
 - d : 2.5Y5/1 ~ 6/1 粘質土、シルト一細砂主体、中砂若干あり、Mn粒あり、抜き取り痕系
 - e : 2.5Y5/1 シルト
- 1. d内aのブロックあり
 - 2. d内aのブロック若干あり
 - 3. c内aのブロックあり
 - 4. d内aのブロックわずかにあり

5. c内aのブロック多し

- 6. dのみ
- 7. e内aの小ブロックわずかにあり
- 8. aのブロック多し、間にc
- 9. 上から下へ漸移的にdからc
- 10. bのみ
- 11. d内aの小ブロックわずかにあり
- 12. d内下半にaの小ブロックわずかにあり、土器片あり
- 13. c内aの小ブロックあり
- 14. d内aの小ブロック多し、土器片あり
- 15. d内aの小ブロックわずかにあり、炭化物・土器片あり
- 16. d内aのブロック多し
- 17. e内ややぼけたaのブロックあり

図111 建物X II 平・断面図

遺物は土師器・須恵器の小片が若干出土しているのみである。

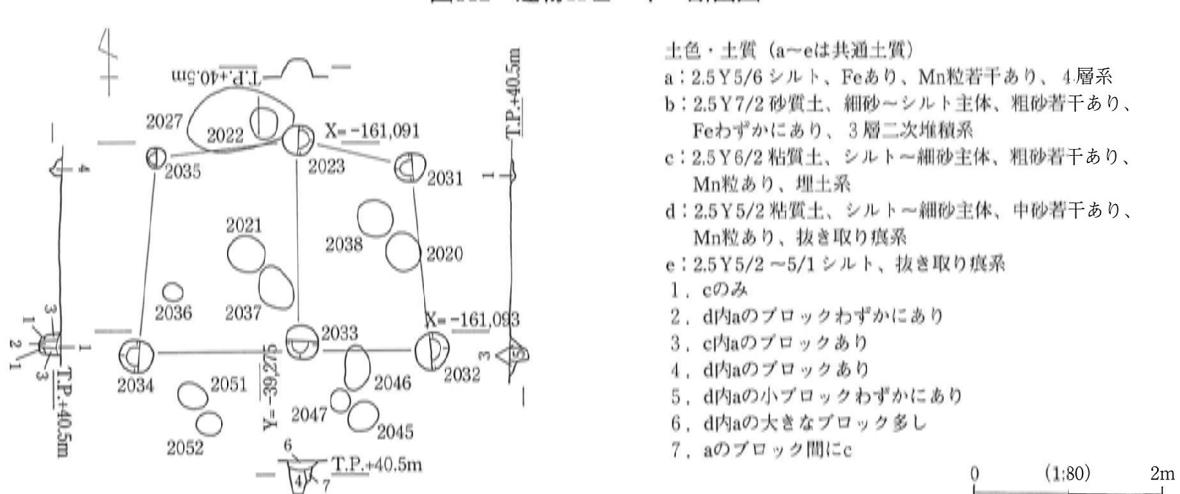
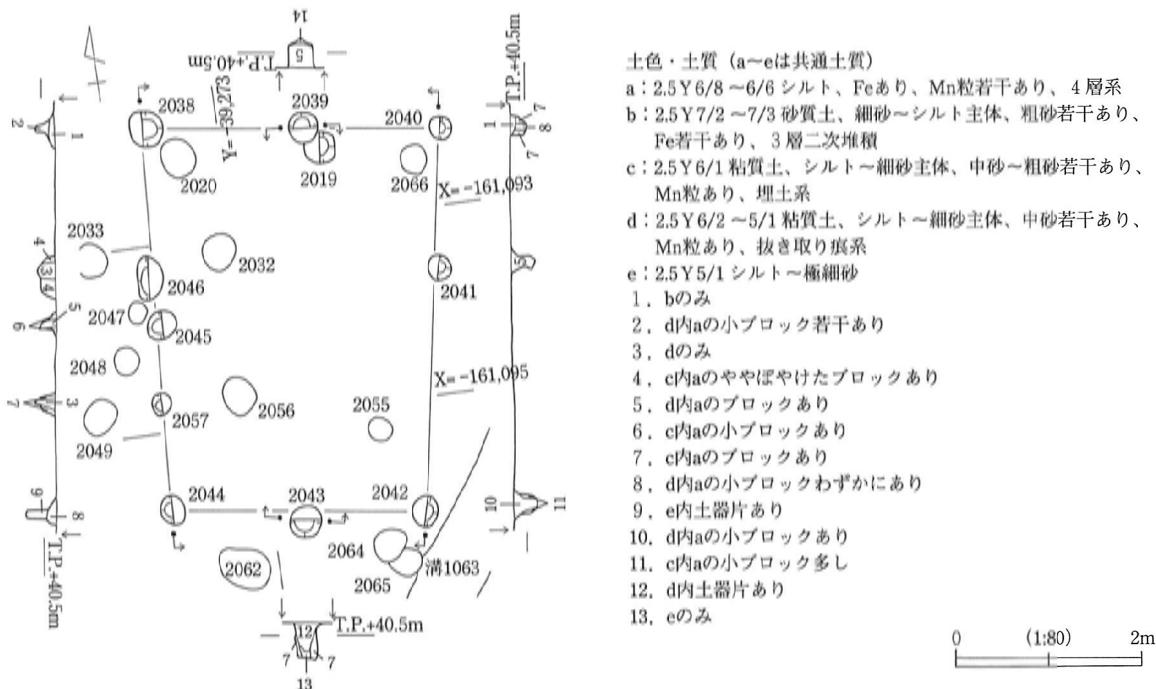
建物X III (図112) 北群のほぼ中央で建物X II・X IV・X Vと重複している側柱建物である。東西桁行の柱数が異なるが、西辺は柱穴2045がイレギュラーなものと見られ、東辺では柱穴2041の南に一つ柱穴を欠くと見れば、基本的には 2×3 間の建物と考えられる。南北妻ラインは正確に平行し、棟ラインはそれに直交するが、東西桁行は北側に開く。長軸方向はN 8°E。建物規模は、北妻3.2m、南妻2.75m、長さ4.06m。柱間は妻側1.3~1.75m、桁行1.2~1.5mとばらつく。

柱穴は、大体平面不整円形で断面形はまちまちである。柱は全て抜き取りで、沈み込みの痕跡が残るものが多い。棟持柱の柱穴が深く、隅柱と側柱の差はないが、何故か南側が深い傾向がある。推測される柱径は10cm以下か。

柱穴2039が建物X Vの柱穴2019を切り、この建物のほうが新しい事が分かる。

遺物は須恵器・土師器・黒色土器A類の小片が若干出土しているのみである。

建物X IV (図113) 北群の中でも北寄りにあり、建物X III・X Vに重複する。検出当初は北側にある



建物XVIIIの柱穴の一部をこの建物に属すると見て、 2×2 間の建物と考えていたが、（その1）調査区の成果により、建物XVIIIの存在が確認されたため、残りの柱穴を以て建物と考えたものである。

2×1 間の建物で、棟ラインは正確に南北を指向する。南側妻の幅3.13m、長さ2.08m。南側妻ラインは棟ラインと正確に直交し、東西の桁行は南に開く。北側の棟持柱の柱穴2023は突出した位置にあり、南の柱穴2033はやや内側に位置する。

柱穴は平面やや不整な円形、全て柱抜き取り痕が見られた。棟持柱の柱穴が深い。北側の隅柱になる柱穴2031・2035がかなり浅いのが気にかかるが、削平の結果と見れば建物が立たない事はないと思われる。遺物は須恵器、土師器の小片が1片ずつと、柱穴2023から黒色土器A類碗の高台付き底部片（図140-13）が1片出土している。

建物XV（図114） 北群の北半に位置し、建物XIII・XIV・XVIIIと重複する、 2×3 間の側柱建物である。長軸はN 8° Eを指向し、北側妻3.02m、南側妻3.22m、長さ4.63mを測る。

四辺とも微妙にずれ、正確に直角を成すものはない。西辺と棟ラインが平行、南北妻ラインは平行に近いが少しずれる。柱間は妻が1.35~1.67m、桁行が1.4~1.7mである。

柱穴は、平面不整円形だが、やや隅丸方形を指向するようなものもある。深さに差はない。柱は全て抜き取りで、推定径は10cm弱か。南東隅柱の柱穴2019が建物XIIIの柱穴2039に切られ、こちらの建物の方が古い事を示す。また、北西隅柱の柱穴2012が切るピット2013は、建物XVIII内部でその棟ラインに近い位置にあり、その建物に関連する遺構とすると、建物XVIIIの方がこの建物より古い可能性もある。

遺物は柱穴2017・2019から須恵器・土師器の小片がわずかに出ているが、柱穴2017出土の土師器鉢口縁片（図140-14）のみが器種が特定できるものである。

建物XVI（図115） 調査区西半建物群南群の南端で、調査区外へ伸びていく建物である。

現状では「L」字に並ぶ5個の柱穴を検出するのみである。西側は調査区内に柱穴が検出されていないので、こちらに伸びる可能性はないよう見えるが、そちら側には部分的な浸食が見られ、現状の柱穴の深さの場合、消滅している可能性もあるため、西か南かどちらに伸びるかは確定できない。

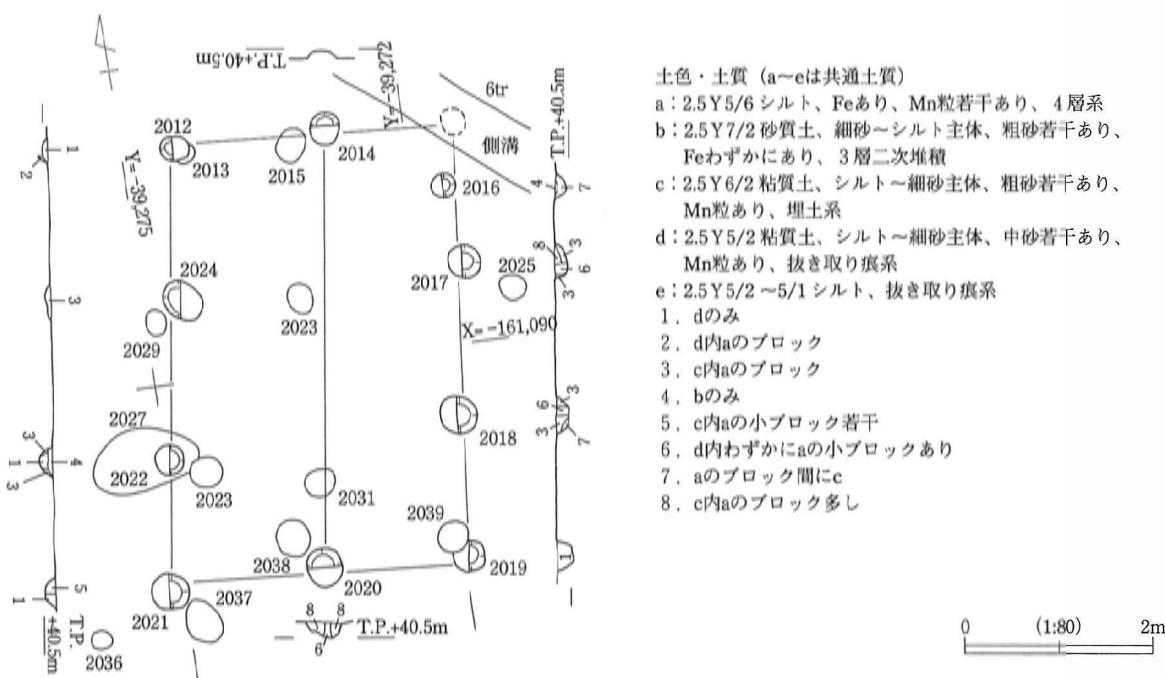


図114 建物XV 平・断面図

東西ラインと南北ラインは正確に直角がとれ、南北ラインはN 2°Eを指向する。現状では東西2.58m、南北2.75m。柱穴は平面不整円形で深さの差はない。遺物は出土していない。

柵列などの可能性もあるが、一応建物としておく。

建物XVII (図116) 北群南半で建物Xの西側に位置している。この位置は土壤化が激しく、また、4層の二次堆積が部分的に薄くあったので、それを除去した後に検出された。

四周のラインに不規則に並ぶ柱穴が多いが、東辺中央の柱穴2212が深く、それに対応して西辺中央に柱穴2177が存在していたので、それらを棟持柱の柱穴と考えた。北辺中央には、南辺中央の柱穴2128に対応する柱穴を欠くが、一応 2 × 2 間の建物と考える。北東隅と南西隅が直角で、他の二隅は歪む。北辺2.55m、南辺2.67m、東辺3.2m、西辺3.05m。棟ラインはE 11°Sを指向する。

柱穴は、平面やや不整な円形、底部は平坦で柱の沈み込みが見られるものもある。柱痕の残るものと柱抜き取り痕のあるものとがある。柱穴2173・2174・2177が溝1063に切られる。

大きさから見て住居ではなかろう。

遺物は須恵器小片1、土師器小片3が出土するのみである。

建物XVIII (図117) 調査区西半建物群北群の北端に位置し、建物XVと重複する。検出時点では建物と認識できず、南辺の3個の柱穴を建物XIVの北側妻と認識していたが、(その1)調査区の隣接地

の調査により 2 × 3 間の側柱建物である事が判明した。

長軸方向はE 0.5°Sとほぼ正確に東西方向を指向する。規模は 5 × 3.4m。四隅は全て直角で、棟ラインは平行でやや南寄り。柱間は妻側1.8mと1.6m、桁行1.5~1.7m。

柱穴は、平面やや不整な円形で底部は平坦。深さは棟持柱が他よりやや深いが、側柱でも深いものがある。柱は全て抜き取りか。

柱穴943は柱位置が南辺のラインに正確にのる事からこの建物に付随するものと思われる。また、内部では東西棟持柱よりやや内側で棟のラインに接するような浅いピット944・2013があ

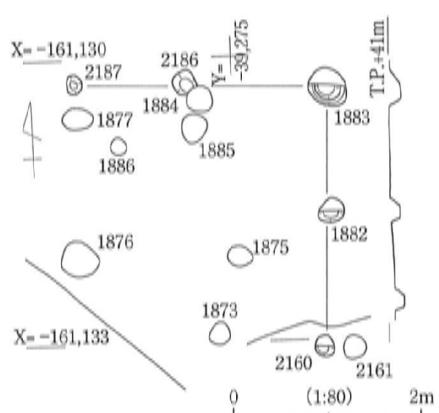
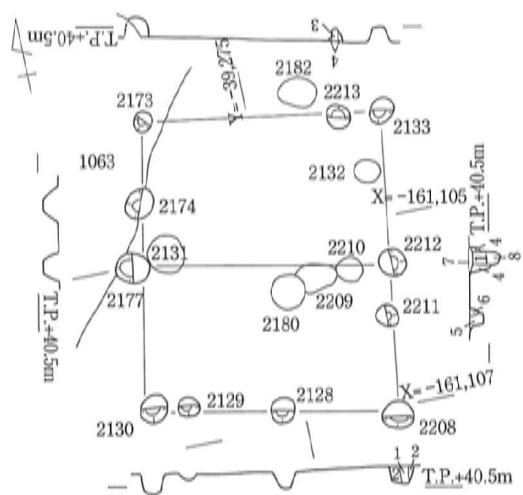


図115 建物XVI 平・断面図



土色・土質 (a~eは共通土質)

- a : 2.5Y5/6 シルト、Feあり、Mn粒若干あり、4層系
- b : 2.5Y6/2 砂質土、細砂シルト主体、粗砂あり、Mn粒あり、3層二次堆積
- c : 2.5Y6/1 ~ 6/2 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂若干あり、Mn粒あり、埋土系
- d : 2.5Y5/1 粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~中砂わずかにあり、Mn粒あり、抜き取り痕系
- e : 2.5Y5/1 ~ 4/1 シルト、抜き取り痕系
- 1. d内aの小プロックわずかにあり
- 2. c内aの小プロック若干あり
- 3. dのみ
- 4. c内aのプロック多し
- 5. d内aのプロック若干あり
- 6. c内aのプロックあり
- 7. bのみ
- 8. eのみ

図116 建物XVII 平・断面図

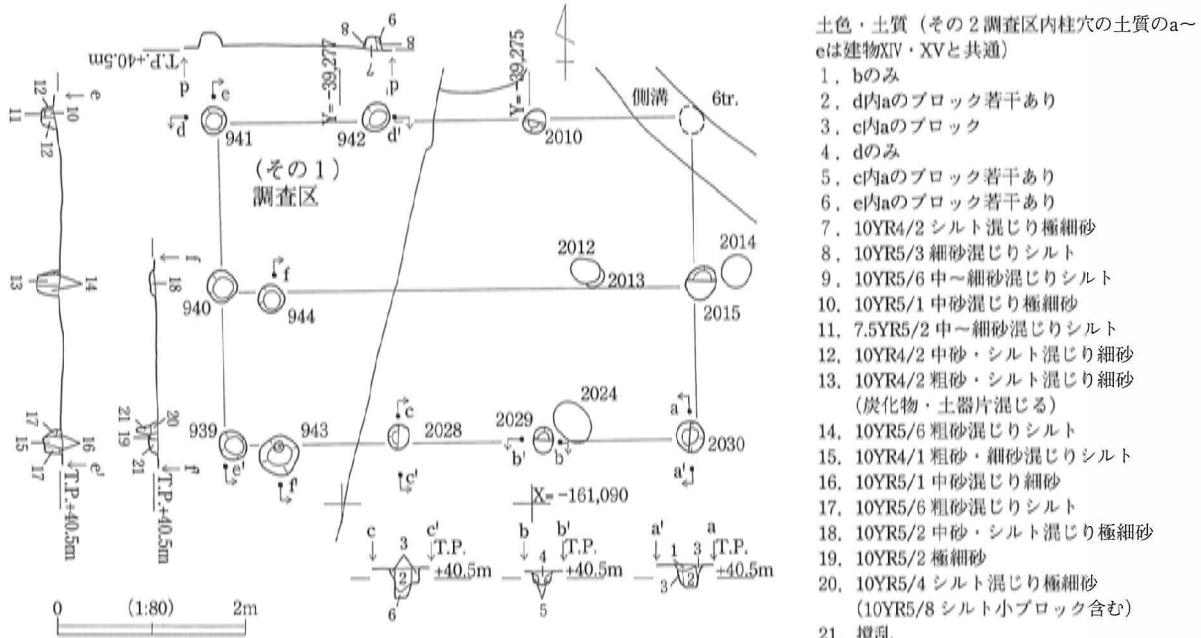


図117 建物XVIII 平・断面図

り、これもこの建物に付隨するものだとすると、建物X Vの柱穴2012がピット2013を切るので、建物X VIIIがX Vより古い事になる。

遺物は出土していない。

柵列 I (図118) 建物Xの西側4 mほどを東端に、東西方向に四つの柱穴が並ぶものである。方向性はE 3°Sで、建物X・XIIとほぼ同方向である。建物Xとの間にもピットが多く、この柵列が続く可能性はあるが、正確にラインにのるものはない。

(その1) 調査区内の建物 (図118) これらの建物の他、(その2) 調査区西端より少し西側で西に落ちる段差の上に立地し、調査区西半建物群に含まれると考えられる建物が、(その1) 調査区で2棟検出されている。

建物33は建物XVIIIの西5 mの位置にあり、東西に長い1×2間以上の建物と思われるが、北側の柵列としている柱穴もこの建物のものかも知れない。

建物36は建物XVIIIより北へ27mも離れた所に1棟のみで位置していて、建物XVIIと似た規模と形態をとる。その位置は西側の落ちが屈曲する部分で、北東側に落ちへの浸食痕があり、それがこの建物群が形成する集落の北限になると思われる。

調査区西半建物群の構造と時期 これらの建物群を概観すると、東群とした建物III・IVは重複しているので、北群と南群の2群があり、その周囲に単独の建物が散在している状況が見られる。

北群の建物の重複状況から見て、最低でも3時期に区分可能であると思われる。南北両群内に2×3間両妻側庇付きの建物がほぼ直交に近い方向性で重複する状況が見られるので、各々この種の建物が中心的な建物である時期が2時期あると考えられる。両群とも1時期2～3棟が同時併存であろうか。

建物の構造を見ると、2×3間と2×2間の建物が主流で、2×2間の建物は形態や規模の面で多様性があるようである。おそらく、2×3間の建物はほとんど住居で、2×2間の建物は住居でないものが多いと思われる。

柱穴の深さから見ると、建物の上部構造を保持するのに重要な柱が隅柱である例が多いと言える。中

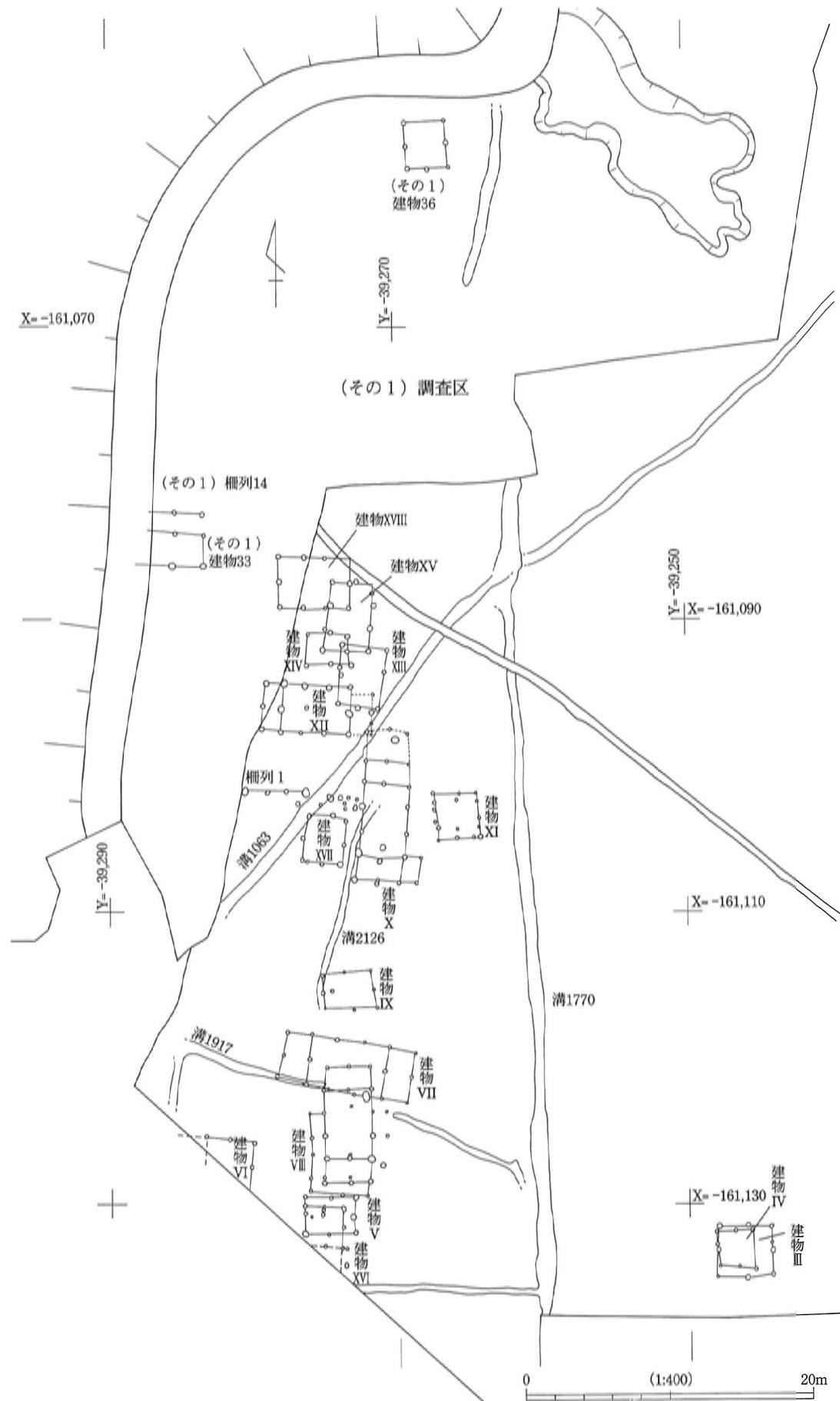


図118 調査区西半掘立柱建物分布図（建物Ⅲ～XVII）
(自然地形と最古段階耕地区画溝)

には棟持柱より隅柱の方が柱穴が深いものもある事が注目される。屋根重量の多くがかかる棟持柱が貧弱なのは、比較的軽量な屋根構造を持つからであろうか。

建物の歪みかたを検討すると、建築に際して、一つの桁行を基準とするもの、一つの妻を基準とするもの、棟を基準とするもの、一つずつの妻と桁行を組として二つの組がずれるもの、などに分けられるようで、建築の手順が多様であった事を示唆するように見える。

また、しばしば桁行の柱間の長さの平均や基準として1.55mという単位が導きだされたが、これは唐大尺の5尺(1.555m)に近似しており、単なる偶然とは思えない。

集落としての存続時期に関する資料は、建物IIIの廃絶時期が11世紀前葉に限定できる他は絞り込む要素がないが、黒色土器A類の小片が出土する建物が多く、瓦器の出土は見られないので、時期のかけ離れる建物の混在はないと推測され、11世紀中葉までには廃絶したと考え、1棟の耐用期間を20年ほどと仮定し、集落の存続期間を60年ほどと見ると、その存続時期は10世紀後葉から11世紀前葉と推測する事ができる。

なお、集落の変遷過程については、小結において詳細に考えてみたい。(三宮)

4. ピット列群・轍状条痕・溝群（図119～122、図版46）

（その2）調査区内では、1トレンチでピット列群I・轍状条痕・多数の溝が重複する溝群を（図119・121・122）、6トレンチからはピット列群IIを検出した（図120）。

ピット列群I（図119） 1トレンチ北側4面で検出した。概して直径15～30cm程度の円形～橢円形のピットが約50cm前後の間隔で並ぶようにしてできたピット列群である。個々のピットの中には瓢箪のように二つ並んだ形状を呈するものもある。これらピットの残存深長は10cm弱だが、削平を受けているため本来はさらに深かったものと考えられる。ピットの断面形はU字形のものもあれば不整形なものもある。また柱痕や底部の沈み込みは確認できなかった。この群のうち、それぞれの方向性によってラインI～IVという名称を便宜上ふった。

ラインIは東北東～西南西に並ぶ。残存長は約16.5mである。

ラインIIは北西～南東に並ぶ。残存総長約5mである。

ラインIIIは北北西～南南東に並ぶ。残存長は約7mである。

ラインIVは北北東～南南西に並ぶ。残存長は約4mである。

ピット列群II（図120） 6トレンチ北東部4面で検出された。概して直径15～20cm程度の円形～橢円形のピットが並ぶようにしてできたピット列群である。これらピットの残存深長は10cm程度である。ピットの断面形はU字形のものもあれば不整形なものもある。ピット列群I同様柱痕や底部の沈み込みも確認できなかった。それぞれの方向性によってラインI～IVという名称を便宜上ふった。

ラインIは北東～南西に並ぶ。残存長は約2.5mである。

ラインIIは北北東～南南西と、途中から北東～南西に並ぶ。残存長は約13mである。

ラインIIIは北東～北西に並ぶ。残存長は約5.5mである。

ラインIVは北東～北西に並ぶ。残存長は約4mである。

轍状条痕I（図119） 1トレンチの北側4面で検出された。幅150cm前後の間隔をおいて2条の溝が北東～南西方向に平行して走っている。残存長は約23mである。溝自体の幅は10cm前後で残存深長は約5cmであった。溝の断面形態はコの字状あるいはV字状であった。

轍状条痕II（図121） 3トレンチの南側4面で検出された。幅135cm前後の間隔をおいて2条の溝が西～東に平行して走っている。残存長は約12mである。溝自体の幅は10cm弱で残存深長は約5cmであった。溝の断面形態はコの字状あるいはV字状であった。

溝群（図122） 1トレンチ4面で検出された。この溝の大半は北東～南西方向に幾度にもわたり重複した状態である。溝自体の幅は20～60cm程度のものが混在している。残存深長は最も残りのよいものでも10cm程度であった。全体の残存長は約26mである。この溝群は轍状条痕Iと平行して走っているため、これもまた轍などに関係する可能性もある。レベルを考慮するとこの周辺部は北西方向に向かう微弱な深い谷底地形であったと考えられる。

残存するピット列群はさほど長くない。また、一定方向ではなく様々な方向を指向する。ピット列群は大阪府内ののみならず日本全国でも確認されており、その性格に関しては牛馬の歩行痕説、排水施設説、枕木・コロ説、路床基礎工事説など諸説のある遺構である。今回検出されたピット列の性格については不明である。

また轍状条痕は、名称通り轍の痕跡と考えられ道路・往来に伴う遺構という見解がある。しかし今回検出されたものは果たして車輪に伴うものかどうかも明確ではない。仮に轍に伴うものであるなら

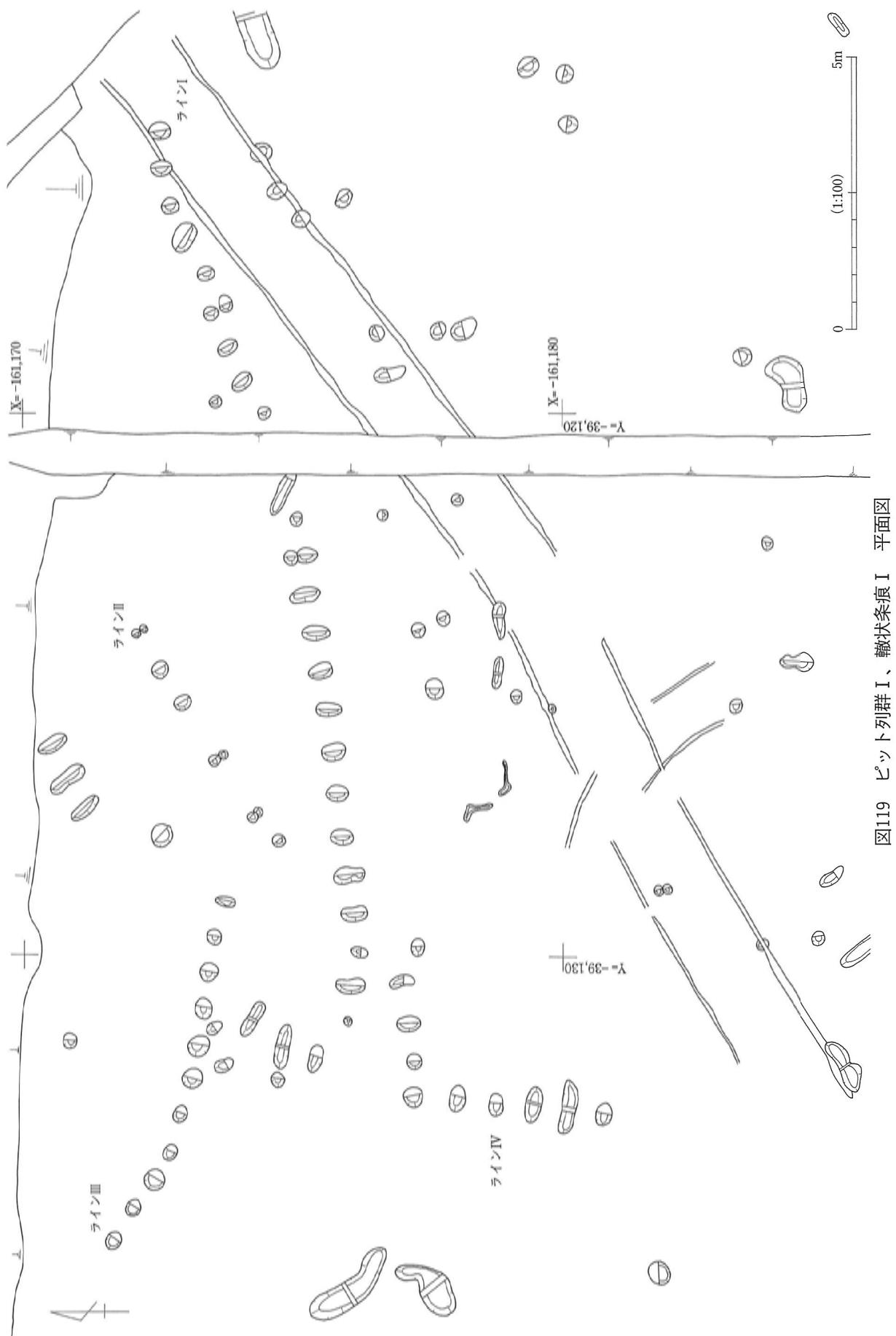
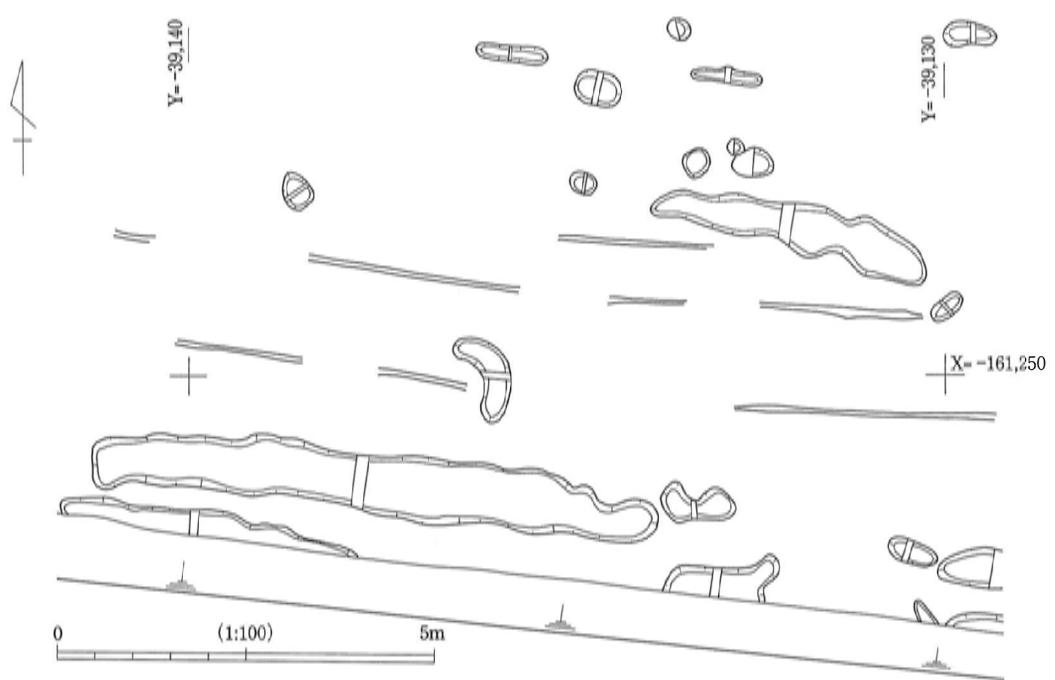
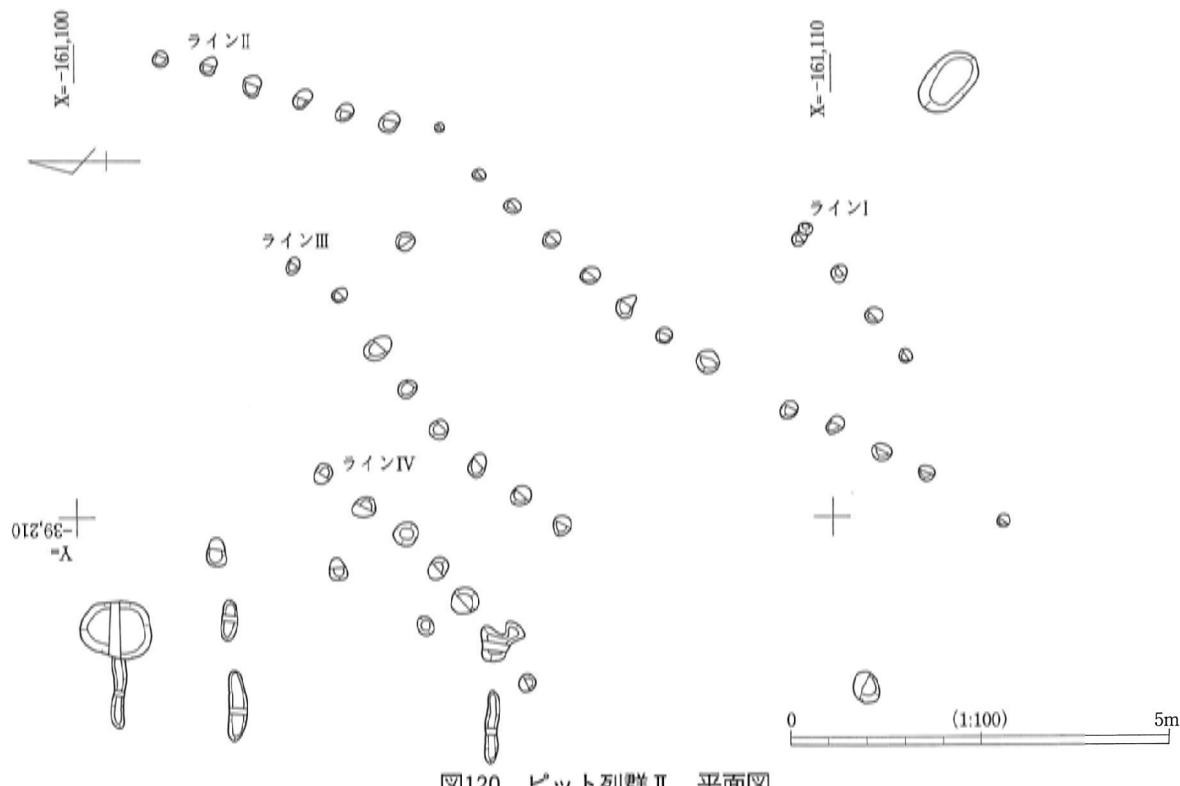


図119 ピットト列群I、轍状条痕I 平面図

ば、周辺の土地開発などの土や物資の運搬に関連するものとも考えられる。しかしながら、途中で異なる方向を向いたり、曲がったりしているので明瞭に区画の決められた道ではなく、人・牛馬・荷車などが単純に往来していた近道のような未整備の道だったとも考えられる。（大庭）



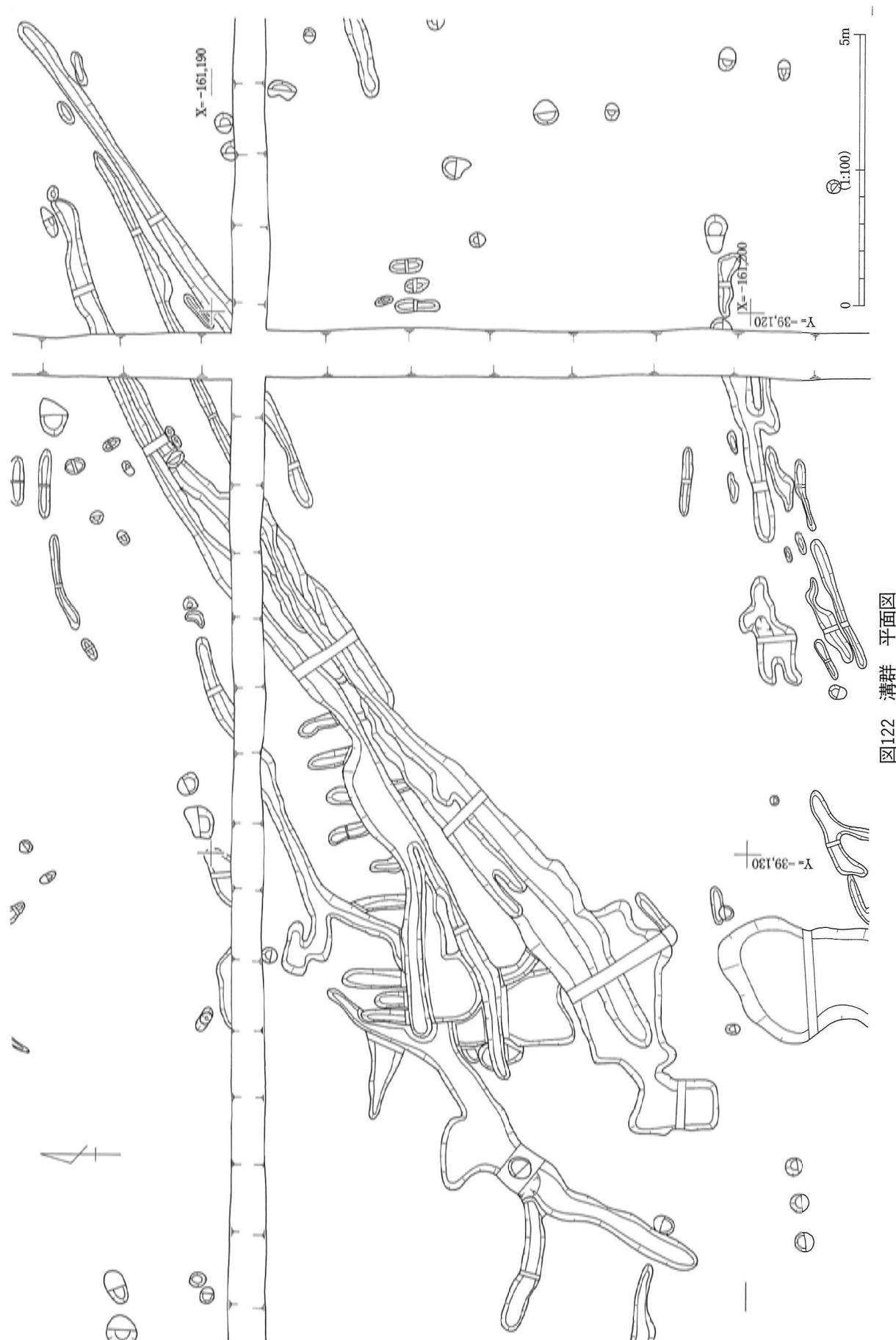


図122 溝群 平面図

5. 4面、溝・ピット・土坑

ここでは、4面検出の遺構のうち、今まで述べてきた、古墳・建物・ピット列群・溝群・轍状条痕以外の遺構の中で主なものを取り上げる。

それらの中で数的に多いものは、鋤溝や古い段階の耕地区画に伴うと思われる溝や段差などで、本来は3面から切り込まれ、その後の耕地区画の変化などで3面からの切り込みを失ったり、形を変えたものも含まれる。

しかし、少數ながらも古墳と併行する時期の遺構も存在し、基本的には古墳時代から中世にかけての遺構が混在している。

溝1063（図123・124） 7 tr. 南西端近くから北東へ直線的に伸び、6 tr. 北端近くでさらに東側に屈曲してから調査区外へ抜ける。場所により、後世の削平の度合いが違うため、幅90～55cm、深さ40～10cmとばらつくが、底のレベルは全体的にはほぼT.P.+40.4mほどで安定しており、地勢的には南西から北東への導水路と思われる。

6 tr. 西端の7 tr.との境に近い部分の耕地区画による段差の部分で、ややつながりが不明確で溝1707にも切られており、そこから北東側と南西側では埋土が異なり、包含される遺物の時期も異なる。

しかし、段差の下に残された溝の痕跡、方向性、溝の規模からも、本来は一本の溝であったと判断した。

先ず、その部分の変遷についての考えをまとめておきたい。（図124）

段差は正方位にのる「く」の字形のもので北と西に落ちる。その形は2面で検出できたが、その時点では段差斜面では二次堆積土により、溝1063は見えず、南から来て、段差を落ち、その下段東端を直線的に走る数本の溝の重なりと、段差南辺の下段に沿った溝が見られた。

また、その時点で段差南側上段では3面が直接出ていたが、そこで段差東辺に沿った南北溝の内、一番古い溝1707に西側から取りつき、南西側は4面の溝1063と同じ位置になる、つまり溝1063を一部付け替えたような溝があった。

4面まで下げると溝1707が段差下段東端を突き抜け、それに段差下段で南辺に沿った溝が取りついた形が見られ、段差斜面に現れた溝1063の断面形がそれらに切られている状況が見えた。

それらを完掘すると、南北方向溝群の底部が重複している中を北東側の溝1063と南西側溝1063をつなぐように斜めに横切る溝の底の痕跡が見られた。

おそらく、段差造成以前は溝1063が直線的に伸びていたが、段差が角の部分でそれを切り（図124右の1）、その時点で北東側の溝1063は埋められ、南西側溝1063の続きは段差下段東端を北上する形になったものと考えられる。そして、その次にその南西側は段差より南側で東に屈曲する形を作り直され、新たに掘られた幹線水路である溝1707と合流する形になったようだ（図124右の2）。

最終的には段差を落ちていく溝は溝1707に統一され、溝1063南西側も埋められる（図124右の3）。以上のように、溝1063は本来一本の溝として掘削されたが、この段差の造成により北東側は廃絶し、南西側はしばらくは存続したが、その後溝1707に取って変わられる状況が考えられる。

埋土は、北東側は4層のブロックを主体とした一層のみで人為的に埋められているが（図123断面No.1・2）、南西側は掘りなおしの可能性もあり、下部には止水堆積層も見られる（図123断面No.3）。

遺物も、北東側は土師器小片4、埴輪小片1の他、陶邑編年I-3～4の須恵器蓋杯蓋1個体が出土していて、ほぼ古墳時代にまとまるものしか出土していない。

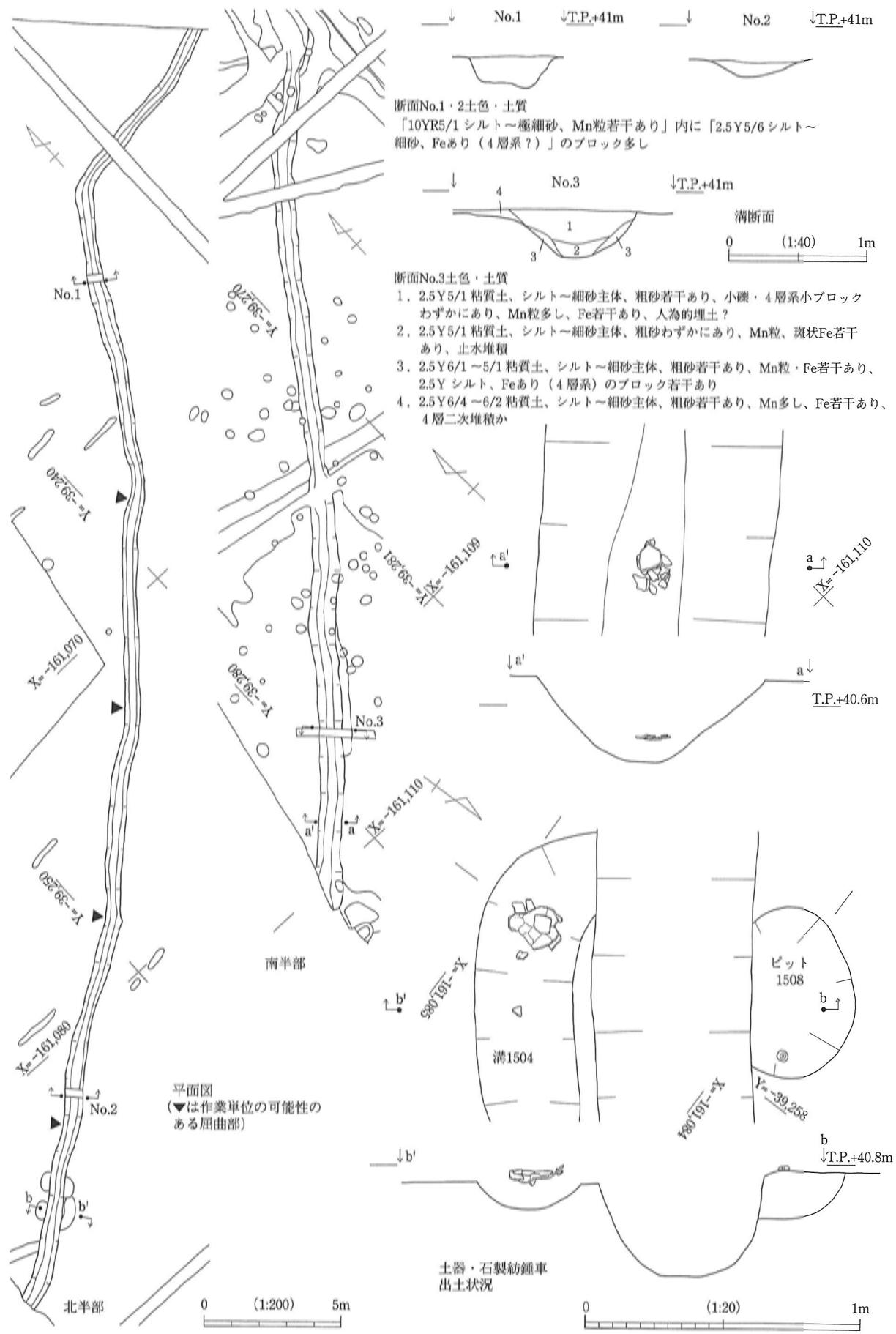


図123 溝1063（その1）、土器・石製紡錘車出土状況図

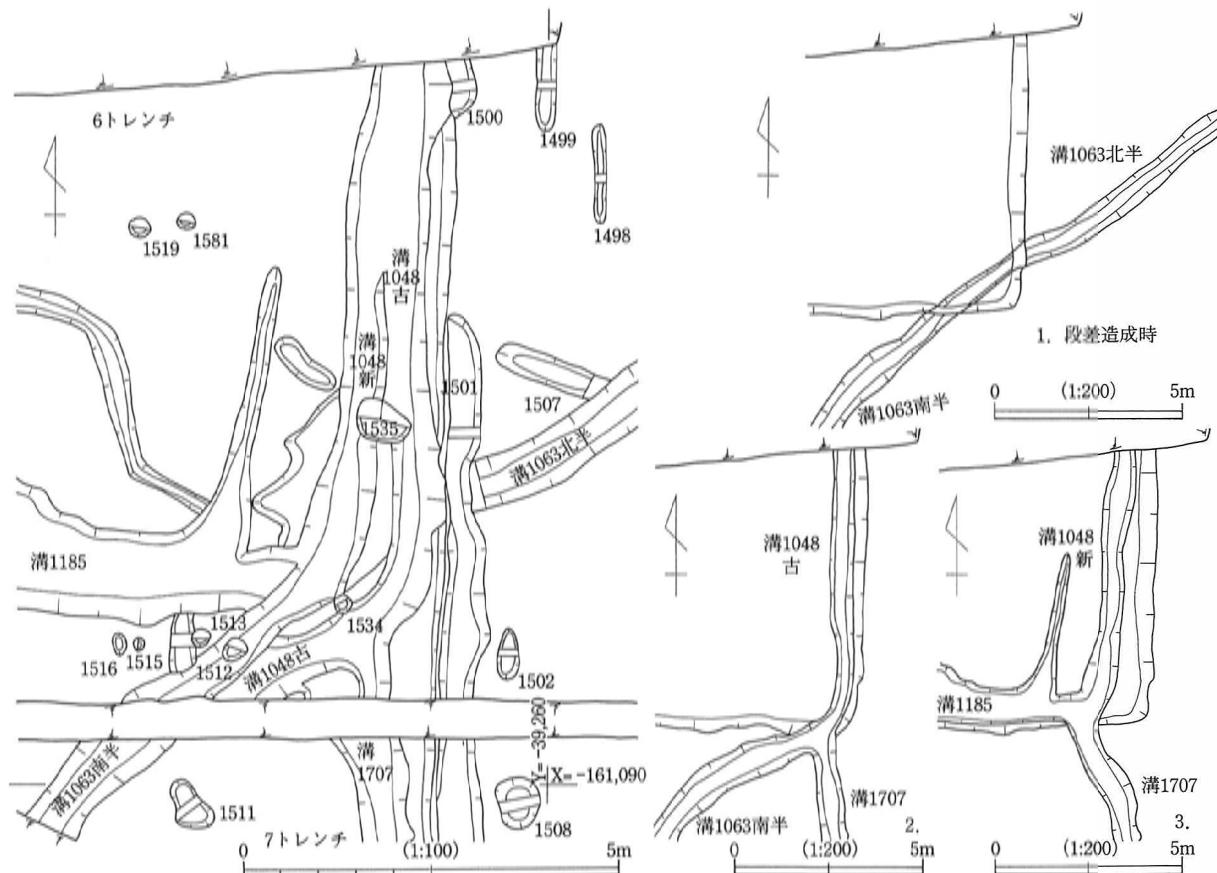


図124 溝1063（その2）、北半・南半境付近及びその変遷模式図

それに対し、南西側は、須恵器は鉢底部片1、甕片1、壺片1、器種不明小片5、土師器は高杯脚部片1、甕口縁片1、皿片3、高台片2、器種不明小片107、埴輪は小片1の他、瓦器椀が3個体出土している。瓦器椀は3個体とも下層の止水堆積層の上面付近で破片が平らに重なる状態で出土した。

他の遺構との切り合いでは、4面の鋤溝や耕地区画関連の段差・溝などには切られているが、建物群の柱穴は全て切っている。建物X・XIIIの柱穴がこの溝に切られているのが知られる。

以上の事から、この溝が掘削されたのは調査区西半の集落廃絶以後、11世紀中葉以降の事で、南西部も埋められるのが、瓦器から見れば13世紀前葉の事と考えられる。すると溝の北東部分が埋め立てられ、周囲に正方位の耕地区画が出現するのはその間の期間、12世紀前後の事か。

溝の北東部分では、調査区北端で東側に屈曲する部分以外に、短い範囲でゆるく「S」字に屈曲する部分が4か所あった（図123三角印）。その部分を中心として両側の溝の形を見ると、一方の肩部のラインの延長が、もう一方の反対側の肩部にのってくる状況にあるのが分かった。

その状況を解釈するならば、直線的な溝を掘削する場合、一つの点を定め、そこに向かって両側から別々の作業者が掘削していく時、各々自分の右側の溝肩部をその点に向けるように掘削していくと、目標点に到達した時、各々の溝は食い違う事になる。そういった状況を目標点付近の短い距離で解消しようとしたのがここに見られる屈曲ではないだろうか。

そこから、この溝を掘削する際、計画ラインの何ヶ所かに棒のようなものを立て、それを目標に、同時に複数の人間が掘削していく事が想像できる。屈曲部分が、ほぼ15mの距離で等間隔に並ぶのは、それぞれの、最初に設定された作業単位であったからではないだろうか。

この溝の調査区外の延長方向を見てみると、南南西側には上青井池と言う溜め池があり、その、現在

でも樋のある部分に到達する。溜め池の築造年代やそれ以前の原地形などは不明だが、その南側はかなり高い地形が残っており、元々湧水地点が存在した可能性がある。この溝の水源としては、自然の湧水地点か、掘削当時に溜め池があったか、もしくは溜め池はなくとも狭山池からの灌漑体系に組み込まれていたか、などが考えられる。

北側で屈曲した後、東北東に方向を変えて調査区外へ出していく先を見てみると、先ず東から張り出す尾根状の微地形が存在するが、それはレベル的に稜線を突っ切つていけそうである。その後は西に落ちる緩傾斜面を延ばしていけば、かなり広い範囲で西側に給水できる溝になる。

それらの事から、この溝は当初、この付近の幹線的な給水路として、自然地形に合わせた形で掘削されたが、調査区北西外に現存する条里制地割りを基準とする耕地区画が進んでいく中、おそらくさらに東側の高所に幹線的水路が作られ、正方位を向く耕地区画に組み込まれていく中で消滅していった溝と考えられる。

溝1504・ピット1508（図123） 溝1063を北東と南西に分ける段差から北東へ6mほどの所で溝1063の両側で各々それに切られる溝とピットである。

溝1504はおそらく元々は緩く「C」の字に曲がる短い溝と思われ、幅60cm、深さ15cmほど、残る長さは1.2mほどである。

ピット1508は元々長径61cm、短径45cmほどの楕円形のピットと思われ、深さ17cm。

各々埋土上面から遺物が出土した。この部分はマンガン粒の沈着が激しく、遺構検出のためにかなり強めに掘削したため、本来はどちらも遺構埋土内上半ぐらいに包含されていたものと思われる。

溝1504から出土したのは土師器甕1個体である（図141-9）。破片が水平に重なるようにして出土した。残存率は5割程度だが、胴部破片が内面を上に向けていた下に、口縁部片が散在していた状況だったので、削平によって失われた破片もあったと思われるが、破碎状態で投棄されたものと考えられる。

ピット1508からは滑石製紡錘車が出土した（図141-10）。水平状態で小さい面を上にして出土している。

この二つは元々の位置も近く、共に溝1063に切られている事からも、時期の近接したものであった可能性が高いと思われる。

土師器甕は5世紀後半から6世紀頃としか言えず、紡錘車も5～6世紀頃としか言えないが、調査区の状況から見れば、今回検出された古墳群の形成時期に併行する時期のものと推測される。

溝1917・2126（図130） どちらも7tr. 西端近くで検出された溝で、やや蛇行気味ながら直線的に伸びる。溝1917は東南東から西北西を指向し、トレンチ西端で南側に直角に曲がり、溝2126は北北東から南南西を指向し、両者はほぼ直交するが、正方位を向く溝1707とも斜行する溝1063とも方向性が異なる。

さらに注目すべき点は、溝1917が建物VIIの柱穴に、溝2126が建物IX・Xの柱穴に切られている事である。

調査区内がほぼ全面耕地開発されるのは調査区西半建物群の集落が廃絶した後、溝1063を端緒とし、溝1707を区画の基本線とするものであったと考えられるが、これらの溝はそれより古く、集落成立前に遡る事になる。

しかし、溝の位置や形態から見ればこれらもやはり耕地区画に関連した溝の可能性が強い。つまり、

調査区内最古の耕地開発の痕跡と考えられるのである。

調査区内で同じ方位性を示す水利体系の存在は認められない事から、その耕地開発は全面的、広範囲なものではなく、部分的なものであった可能性が強い。また、直線的な溝が直交するという方形を基調とした耕地区画であるにもかかわらず、近辺の条里制地割りと方位を違える事は、それとは一線を画す耕地開発であった事を示唆するように思える。

溝1707（図125・130） 調査区西半の西側で南北正方位を指向して6・7 tr. を貫く溝である。幅は1.5m～60cm、深さは25～12cmほど。断面形は逆台形である。

6 tr. 南端近くで古墳4を切り、そこで溝1710が西から直角に取りつく。

それよりやや北側で、北へ落ちる段差を通過しているが、3面時点では、北から、その段差を上がった所までが検出されていた。つまり、3層が耕土とされていた時の最終時点ではそこから南は廃絶し埋められていたようである。その当時の溝南端は段差南側からの水口状に始まっていて、段差付近の溝内には拳大よりやや大きめの礫が幾つか点在していた。そして段差を北側に下りきったところで東西から水口が切り込んでいたようである。

さらにそこから6mほど北で須恵器こね鉢底部片が倒置状態で出土した。

北端、6 tr. 部分での変遷は溝1063のところで述べたとおりである。

出土遺物は、先ほどのこね鉢片のほか、須恵器片10（内甕5）、土師器片54、黒色土器A類片2、黒色土器B類片4、瓦器片19（内高台片2）である。

この溝の位置は、調査区外北西側に現存する条里制地割りを延長してこの付近に割りつけてみた場合に、一つの坪の中心を通る南北溝となり、条里制地割りの基準線を意識した位置にあると言える。ま

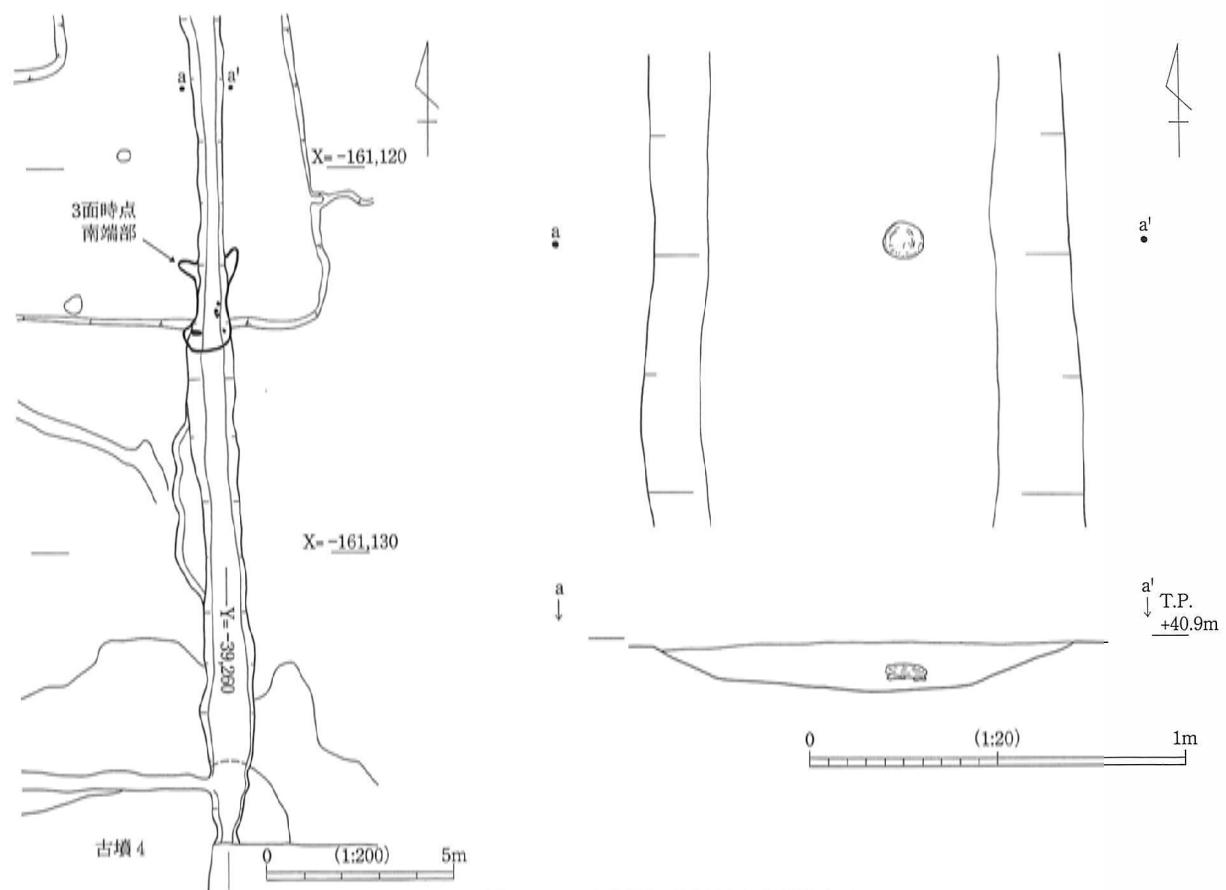


図125 溝1707 南側及び土器出土状況図

た、幾つかの段差を越え、高低差のある部分を通ってもそれを起こさず直進し、3面以降で復元される耕地区画がこの溝の東西で異なる事、この溝に取りつく部分で屈曲する段差などがある事を見ると、溝1707は、この付近の耕地区画の基準となるラインであると考えられる。

しかし、溝1063と一時併存する事や、3面の最終時点までに南側の一部が廃絶している事などから見ると、水路としては幹線的なものではなく、調査区内では主に排水や隣接耕地区画の水回しなどに使用されていた溝と考えられる。

その事からこの溝の掘削時期は、調査区全域が耕地開発される時期の中でも古い段階で、溝1063の掘削よりは後と考えられ、溝1063が南西部分も埋められる13世紀前葉より前、おそらく12世紀前後の事と思われる。

そして、3面では一部が埋め立てられながらも存続していた事は確実で、周辺に2層が残存していないかったので2面時点での存続は不明だが、3面検出の遺構で、この溝の北半を切って重複する溝が2～3本あり、それらが本来2面のものであったとするなら、この溝自体は2面までに埋没し、それを踏襲するような溝が規模を縮小しながら掘りなおされていたと考えられる。

溝1710（図126） 7 tr. の南側で溝1707に西側から直角に取りつく、ほぼ東西方向に直線的に伸びる溝である。溝1707の東側にも、後世の段差などで削られてはいるが延長線上にわずかに残る同規模の溝があり、本来もう少し東側にまで伸びていたのかもしれない。幅40cm前後、深さ10cm前後。

遺物は、土師器では粗製椀が2個体、高台付き椀底部片2の他、器種不明小片14、須恵器器種不明小

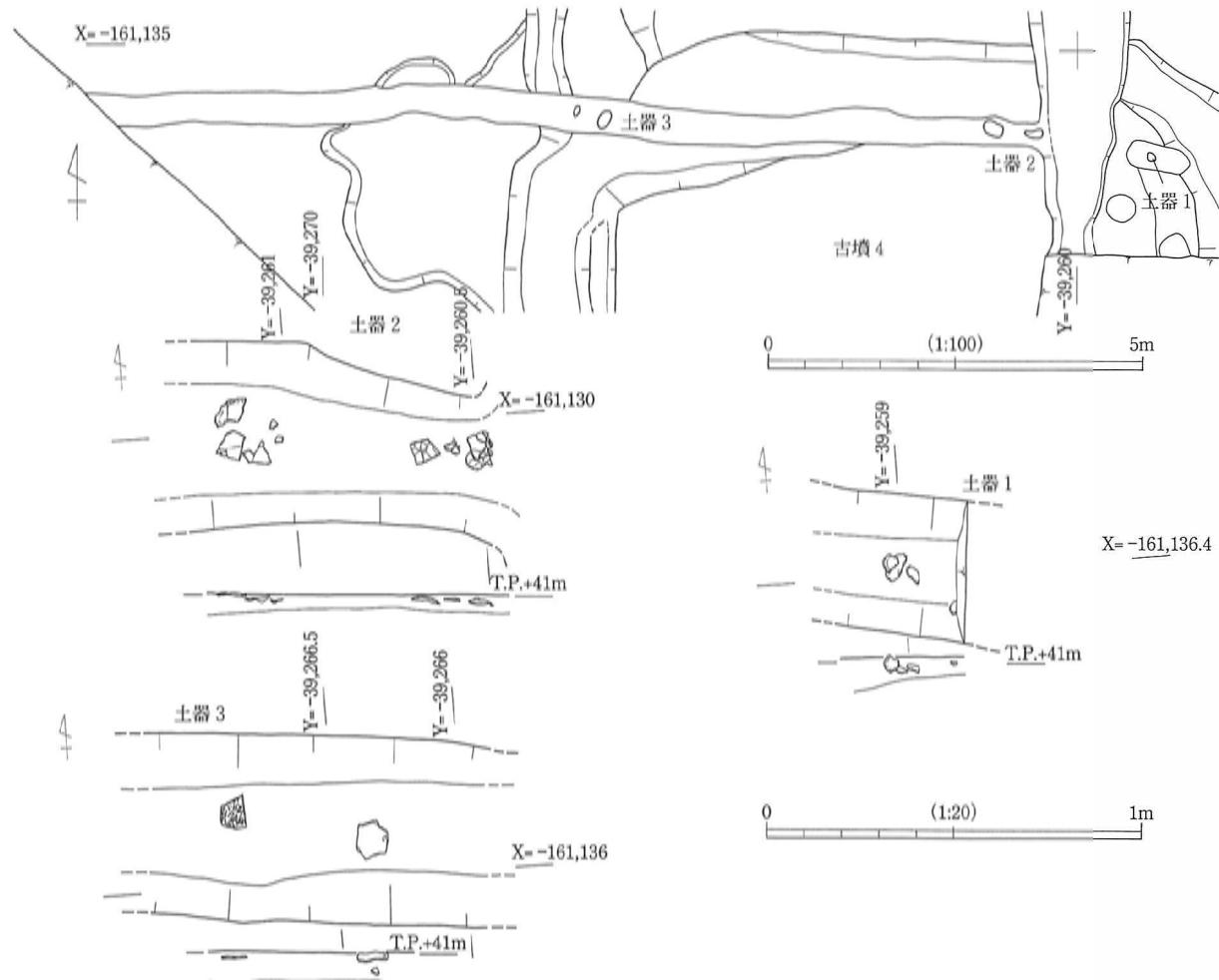


図126 溝1710 平面図及び土器1～3 出土状況図

片1、黒色土器A類器種不明小片4が出土している。

その内、図化可能な土師器碗3点（図141-6～8）を見ると、建物IIIの柱穴出土の土師器碗と同時期かそれよりやや古いもののもの、10世紀後半から11世紀前半のものである。いずれも完形ではなく、やや磨滅も見られる所から、この溝が集落の跡地に掘削された際に、その中の遺構から混入したものである可能性が高いように思える。

この溝の掘削時期は溝1707と同時期か、やや後と考えられ、下限は2層が耕土として成立する13世紀後半前後と思われる。

溝2405（図127） 4 tr. 東側で南北に走る溝で、南は一部1 tr. を通り調査区外へ抜ける。

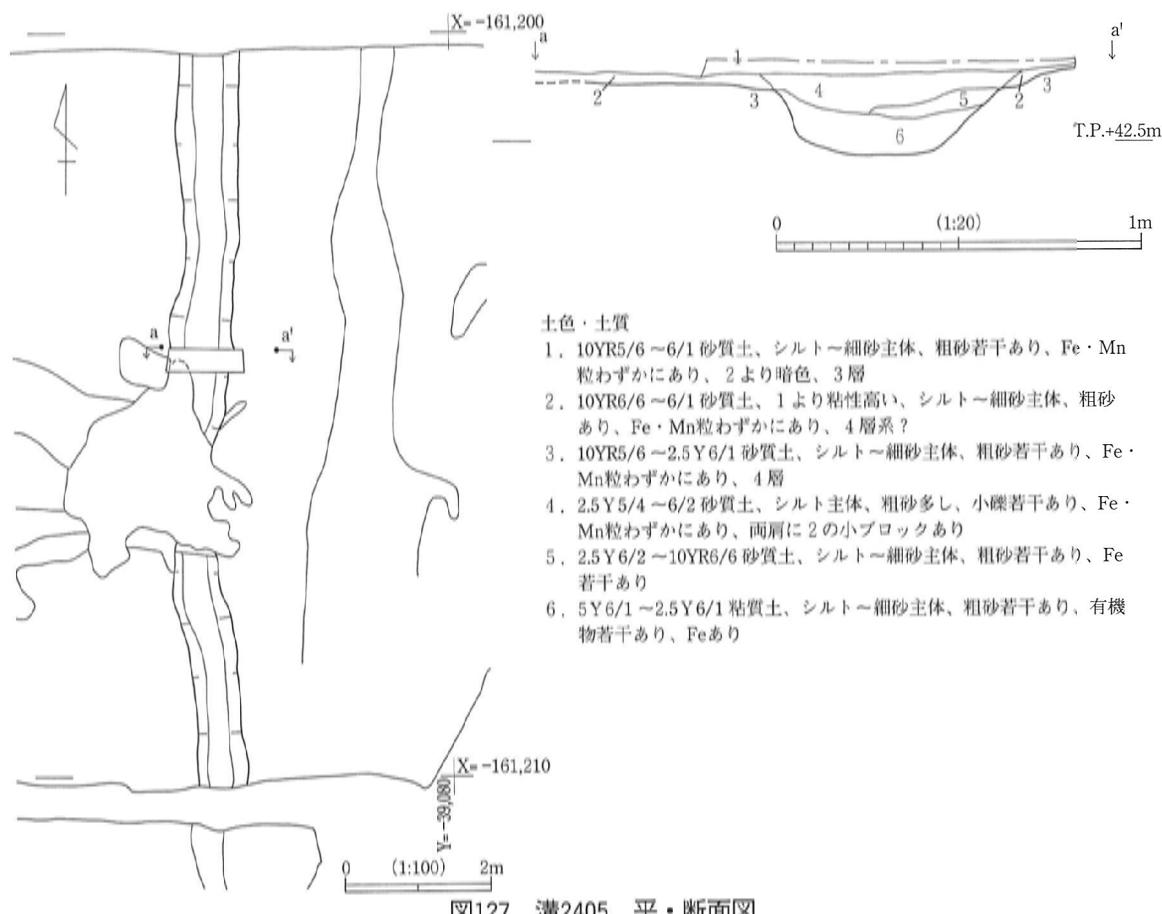
幅約70cm、深さ約20cm。断面逆台形を呈し、北西へ伸びる溝1188と、西から伸びてくる溝2392を切り、落ち込み1192に切られる。

耕地区画の段差沿いに伸びる溝2392を切り、断面でもその段差を埋めたと思われる4層系の二次堆積土を切っているので、その段差を埋め、平坦化した時点で掘削された溝と思われる。また、3層が上面を覆っているので、3層が耕土であった期間の最終時点までは存続していなかったと考えられる。

遺物は出土していない。

この溝が注目できるのはその立地と方位性である。現在、調査区の東側には雨ヶ池と言う溜め池があり、その池と調査区の間に道路と、狭山池からの幹線的な水路が走っている。また、4 tr. の北側すぐには細池という溜め池があり、道路と水路はその池の東岸を走っていく。

水路は雨ヶ池の西岸で、一旦正方位の南北方向に向くが、北側で東に屈曲する。溝2405はその屈曲部分で水路をそのまま正方位で北に延長した部分に存在するのである。



溜め池がある程度元の地形を反映しているとすれば、周辺の中位段丘平坦面の地形を見ると、雨ヶ池より東側は東へ傾斜していき、細池より西は西へ傾斜する。つまり、現水路と溝2405は東西ラインで見れば周辺地形の最高所を南から北へ走っている事になる。

溝より西側は南北方向の地形はやや北へ下がって行く地形で、4 tr. の北側は細池の堤防が接しているので、溜め池が存在している時点では溝2405により灌漑可能な部分は非常に少ない。そこから考えれば、この溝は、溜め池が作られるより前の時点での、狭山池からの幹線水路であった可能性が高いのである。

溜め池が次第に拡張されていった可能性を考えると、少なくとも両溜め池がほぼ現在の形と同じになる時期は、溝2405が廃絶する時期、つまり3面最終、2層が耕土として成立するよりやや前と考える事ができる。

ピット149（図129） 2 tr. の中央付近の4面で検出された、長径40cmほど、短径30cmほどの楕円形のピットで、深さは30cmほど。同一個体の土師器羽釜片が7片出土している。

その羽釜は10世紀後半から11世紀前葉頃のものと思われ、調査区西半の集落に近い時期に東半にも遺構が存在する事が知られる。

ピット2416（図128・129） 4 tr. の西側で耕地区画の段差に切られる形で検出された、長径約35cm 短径約28cm、深さ約10cmのピットである。土師器の躰1個体、高杯身部、甕腔部片が出土した。

内面を上に向けた甕腔部片の上で、高杯身部が割れた状態で、躰は完形のまま横向けの状態で出土した。

遺物から5世紀台のものと考えられ、調査区東半では数少ない古墳時代の遺構である。

ピット2137・2183（図128） 7 tr. の西半で建物Xの南側で南北に並ぶピットである。ピット2137はほぼ円形で径約25cm、深さ約10cm。ピット2183は隅丸方形の北側が崩れたような形で長径43cm、短径32cm、深さ17cm。遺物の出土状況から、やや削平を受けていると思われる。

ピット2137からは自然礫中礫1個と土師器椀1個体の半分程が出土した。どちらも底から浮き、埋土上面に接しているので、土師器椀の残りの部分は削平で失われた可能性が高い。椀は内面を上に向け

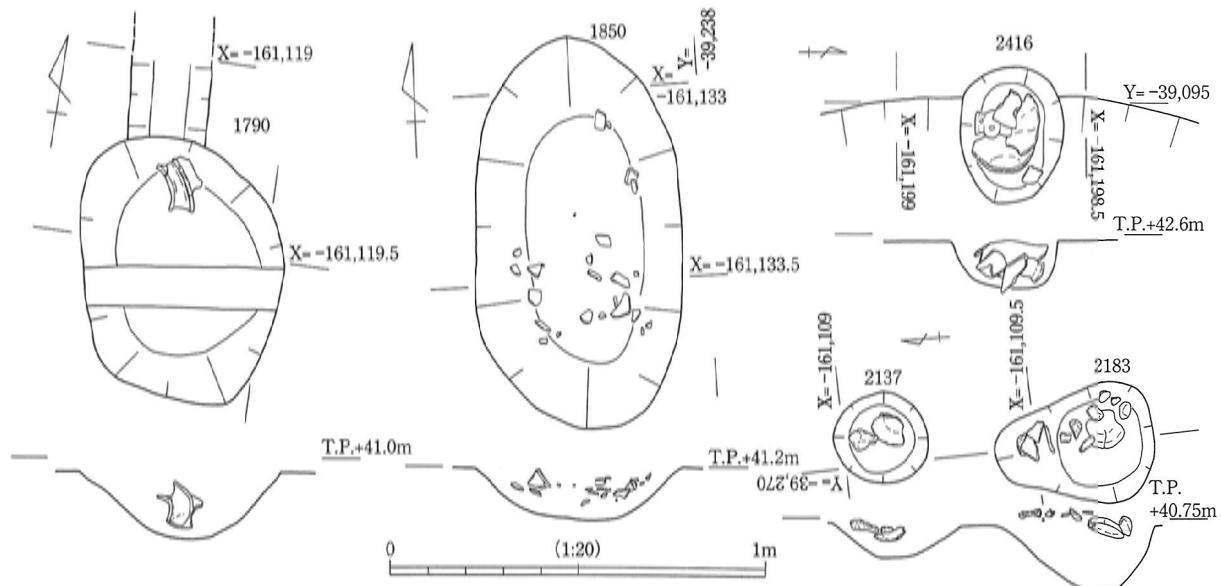


図128 ピット1790・1850・2137・2183・2416 土器出土状況図

て、大きめの破片の状態で出土した。

ピット2183からは自然礫中礫3個と土師器粗製小皿1個体が出土した。土師器粗製小皿は埋土のほぼ上面で内面を下に向ける状態で出土し、一部の破片が北側に散乱していた。

遺物からはピット2137が10世紀～11世紀前葉、ピット2183は10世紀末～11世紀前葉頃と考えられ、状況から同時期の遺構と思われる。周辺の集落存続期間の遺構と言える。

ピット2171（図130） 7 tr. 西半で建物X・XVII・柵列Iに囲まれる部分にあるピットの一つで、溝1063に切られる。長径約40cm、短径約30cm、深さ約30cmの楕円形のピットである。

土師器小片4と灰釉陶器高台付き椀底部片1が出土している。灰釉陶器から見れば10世紀の遺構か。

ピット1552（図130） 6 tr. 西端近くは、後世の削平が少ないためか、マンガン粒が非常に多く沈着した4層系の二次堆積土があり、それを除去した面で検出したものを4面古の遺構とした。

しかし、マンガン粒の沈着や土壤化は堆積後の変化であり、そのため、本来上面から切り込んでいた遺構もその中に混在しているものと思われる。このピット1552もそういったものの可能性が高い。

ほぼ円形で径約25cm、深さ約23cm。同一個体と思われる土師器甕の破片が23片出土した。遺物から10世紀中葉～11世紀中葉頃の遺構と思われる。

土坑1790（図128・130） 7 tr. 東半北西側で検出された。南北1.68m、東西54cm、深さ20cmで平面はやや長方形に近い不整形を成す。中から土師器羽釜の口縁から鍔にかけての部分が、全周の1/4ほど出土した。その羽釜は11世紀後半以降、おそらく12世紀頃のものと思われる。

集落廃絶後、調査区全体が耕地化した時期の遺構か。

土坑1850（図128・130） 7 tr. 東半西側で古墳3の周溝東角の北東隣で検出された土坑である。南北に長軸を持つ楕円形で、長径1.03m、短径50cm、深さ14cm。土師器片が出土しているが、器種の分かるものはない。

土坑1918（図130） 7 tr. 西隅付近で検出された。調査区外へ続いており、北側は後世の段差で切られているので全体形は分からない。南へ深くなる溝の可能性もあるが、一応南北方向に長い長楕円形の土坑と考える。黒色時A類小片1、須恵器小片1と土師器椀片6が出土している。土師器椀は同一個体である。

それで見ると10世紀～11世紀前葉の遺構と考えられ、おそらく集落存続時期のものであろう。

土坑2110（図130） 7 tr. 西半の北側で溝2126と建物Xを切り、段差に沿って東西に走る溝2175に北側で繋がる。溝1063との切り合いは不明。平面は不整形で、南北4.3m、東西2.7m程、深さ約20cm。調査区内全体が耕地開発されて以降の耕地区画に伴う遺構と思われる。

出土遺物は黒色土器A類18片、須恵器5片、土師器では鉢口縁片1、高台付き椀底部片1、羽釜片3の他、器種不明小片77片。遺物の示す時期は、重複する集落の時期だが、新しい時期のものを含まない事から、そこからかけ離れた時期でもないと思える。11世紀後半頃か。

この面の遺構は、古墳群と建物群以外でも、その時期の遺構が幾つかみられた他、建物群の集落存続時期前後の耕地区画関連の遺構が多く見られたと言える。

中でも集落以前の耕地区画の存在や、集落廃絶以後の耕地開発の試行錯誤しながらの変遷過程が追えたのは貴重な成果であろう。（三宮）



図129 (その2) 調査区 1～4 トレンチ 4面

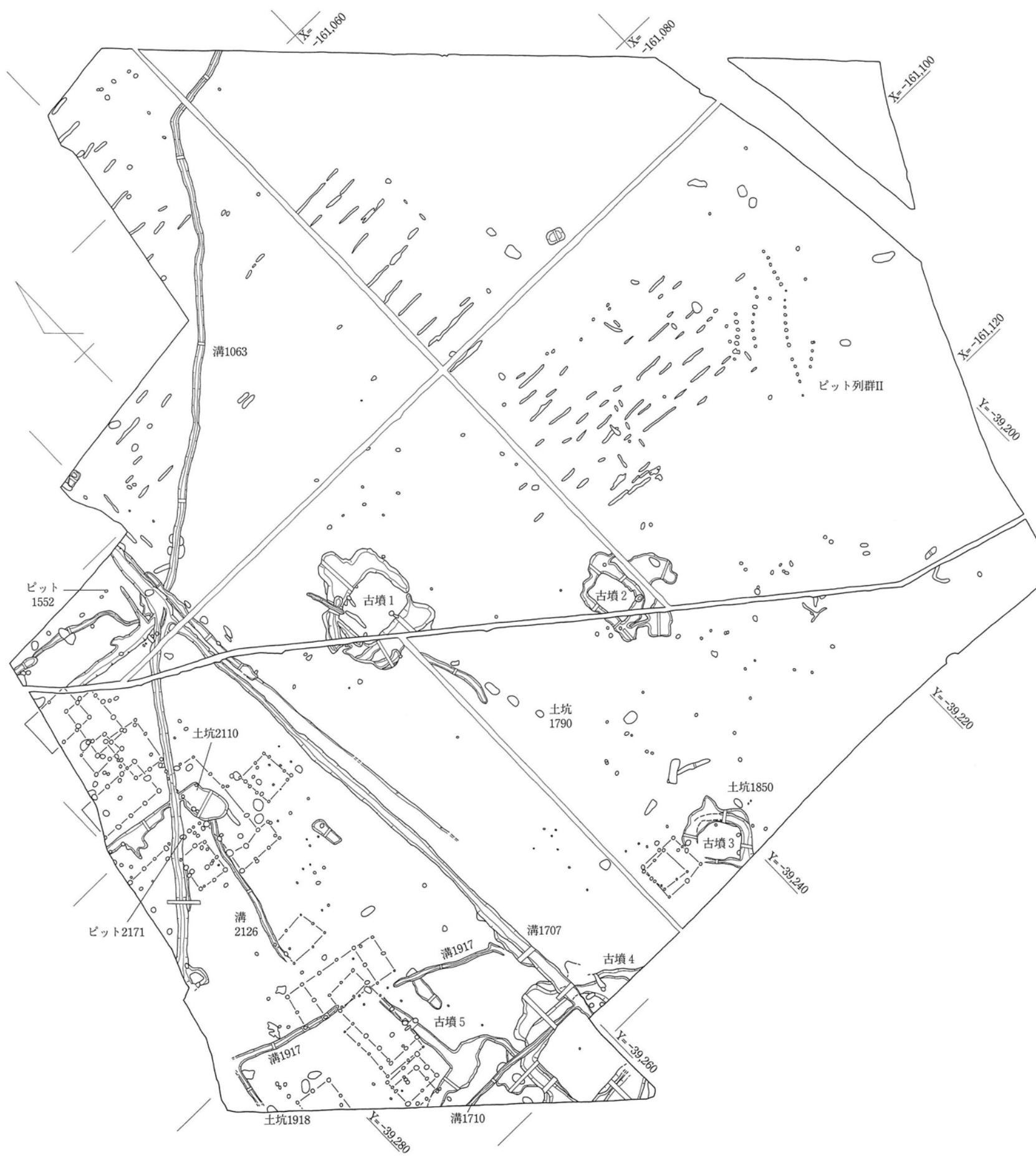
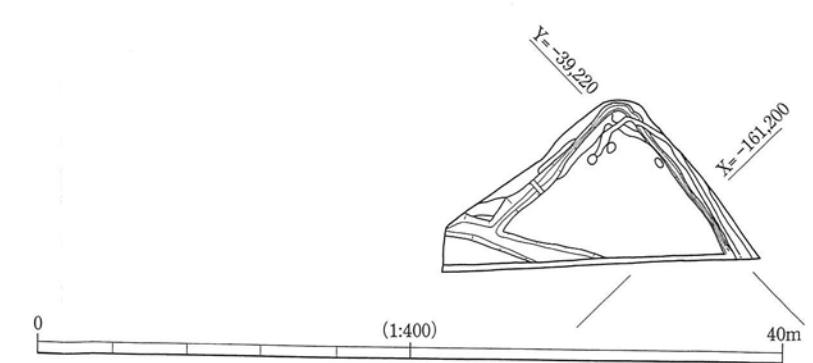


図130 (その2) 調査区 5~7トレーナー 4面
(建物番号は図118参照)



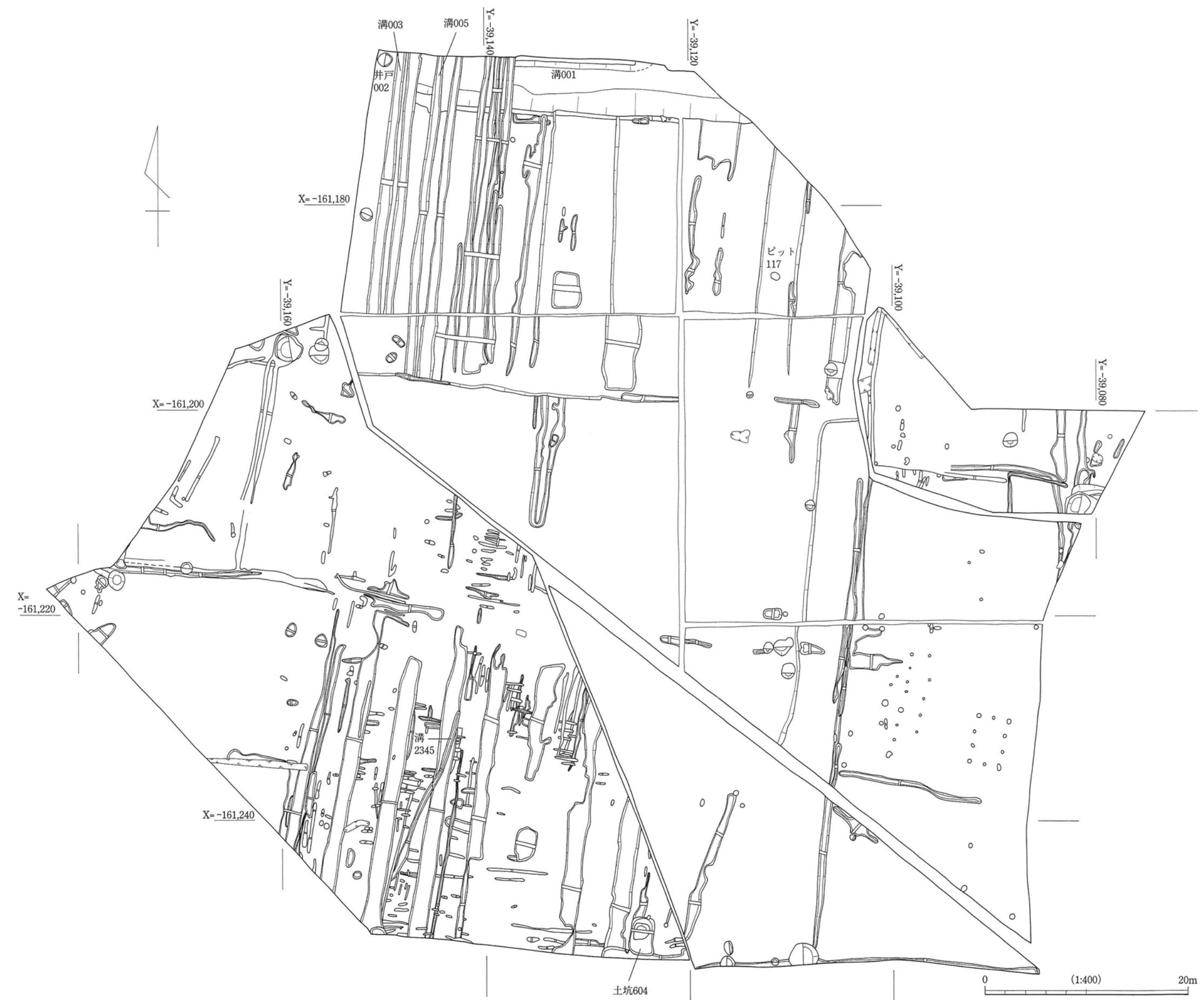
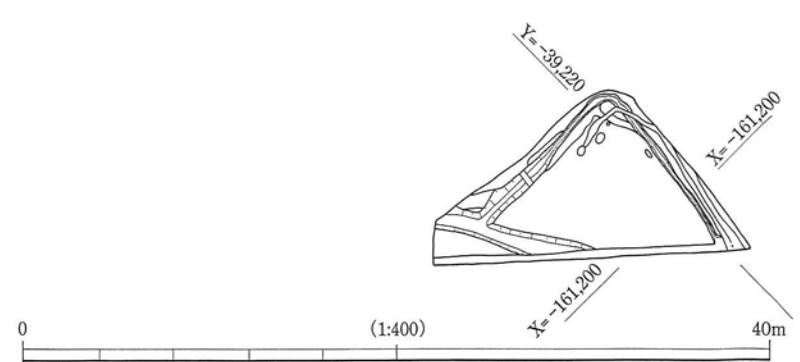


図131 (その2) 調査区 1~4 トレンチ 1~3 面



図132 (その2) 調査区 5~7 トレンチ 1~3面



6. 1～3面の遺構

1面は現耕土直下の面で、1トレンチで検出した結果、現耕土を入れる際の床面形成に関する遺構など、多くが現代の遺構である事が判明し、古く遡りえる遺構でも江戸時代に入るかどうかという状況であったので、それ以後のトレンチでは検出していない。

2面は近世、おおよそ江戸時代を下限とする面と考えられ、上限は中世に入る可能性が高い。

3面は、4面の遺構で本来この面から切り込んでいたものが多くある事が考えられるが、最終的に残された遺構は13世紀代の中世のものであり、最新のものは13世紀後半のものである。

つまり、3面は旧耕土である3層の上面として成立するのは11世紀後半頃と考えられるが、繰り返される耕作や耕地区画の変遷によって古い遺構の切り合いは失われていき、13世紀後半頃、2層が成立する直前に存続していた遺構のみが残されていると言える。

しかし、実際には2・3層は残りが悪く、両者が共に残存している部分はかなり少ない。また、両者とも残っておらず、1層や現耕土の下に直接、削平を受けた4面が存在している部分もかなりある。

そのため、各トレンチで4面以前の調査としては、トレンチの範囲内でどちらか残りの良い面を選択して調査する事になったが、2面もしくは3面として調査したトレンチでも、部分によっては2～4面の様々な面が露出し、遺構としてはさらに1面の遺構も混在する状況になった。

故に、ここでは1～3面の遺構として包括的に述べ、各遺構に関しては、検出部分の状況や、埋土・遺物により本来帰属していた面を考える事とする。

1面の概観 各遺構の前に、1トレンチで検出した1面の状況を述べておく。

一番高い東端の部分は直接4面が露出した。削平を受け、全くの平坦である。そこから西へ段差を一段落ちた部分は北半が高く、そこでも4面が直接露出、その面には東へ落ちる段差が三つ見られたが、段差間の平坦面が徐々に東に上がるため、地形的には平坦である。南半は一層の上に4層を起源とするような黄褐色系の粘質土が被覆しており、その下で幅70cm～1.2m、深さ8cmほどの南北溝が密集していた。埋土は1面を被覆するものと同じで、底面は平坦である。

さらに西側に一段落ちたトレンチ西端側では1層の残りが悪く、2～3面が部分的に露出するような状態であったが、同じ南北溝が確認された。

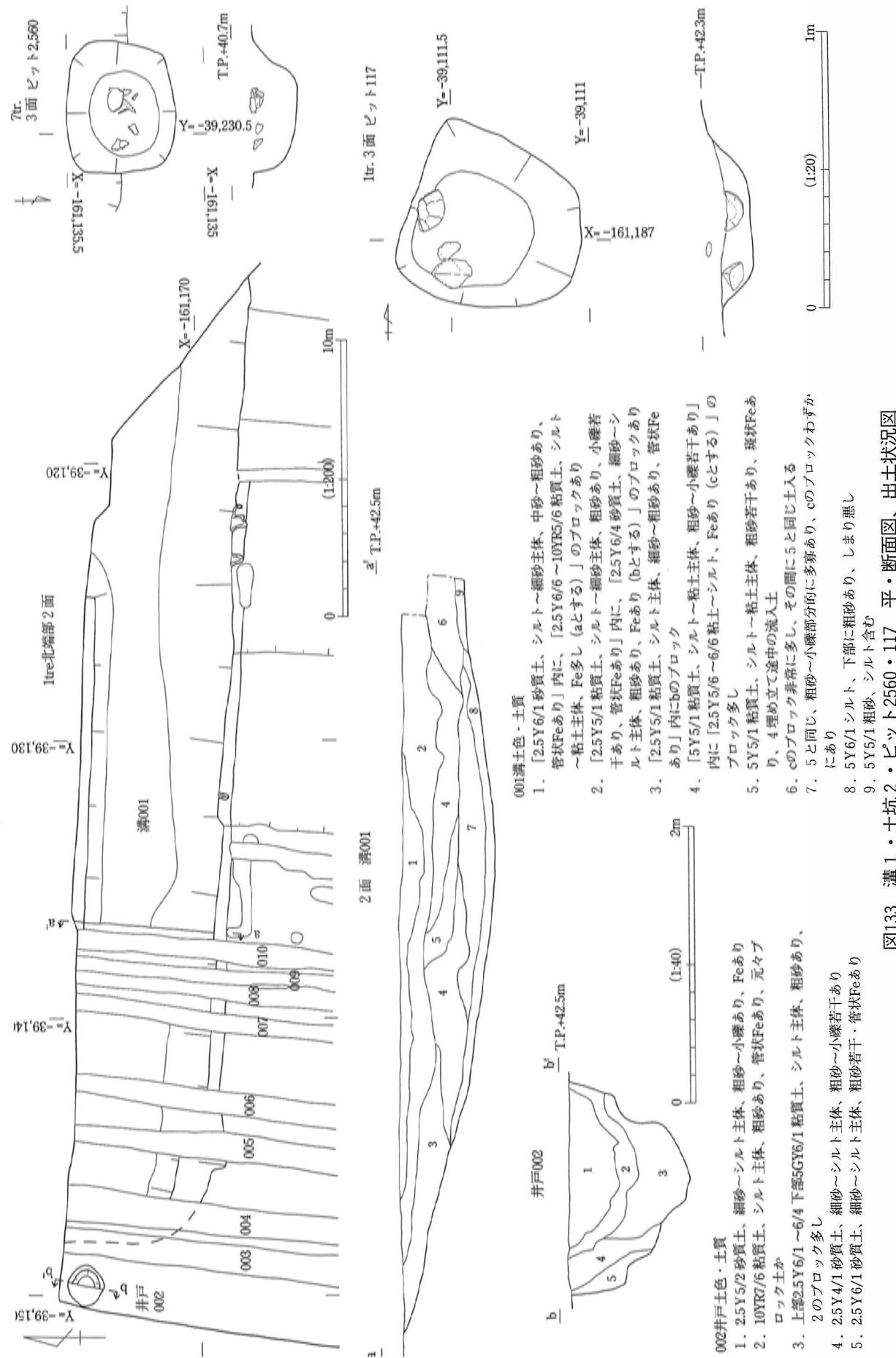
これらは現耕土を入れる前の床面成形と思われ、1～3層が下に遺存している部分で溝状に粘質土を充填するのは、耕土から下への水の逃げを制限する、一種の貼り床と思われ、元々高い部分を削平した土を以て行ったのであろう。

その削平と土の移動の規模や、現耕土自体がほとんど1層を転用せず新たに盛られている事からも、その作業は機械力によるものと思われ、これらは現代の遺構と考えられる。

溝001（図131・133） 1 tr. 北端で2面で検出した遺構である。正方位の東西に走り、西側はトレンチ西辺近く、井戸002の手前で止まる。北側の本来の肩は調査区内では確認できなかったが、底面が北に上がりはじめている事、北側に埋没以前に盛土による肩が見られる事などから溝と判断した。

この部分は1層の残りが悪いが、1面に特徴的な南北溝が幾つもこの溝を切り、また、溝南肩で2層が耕土時点の畦畔が1層形成時に削平された状態で検出されたので、存続機関の下限が1面にあがる事はないと言える。

長さ24m以上、幅5.5m以上、深さ52cm。断面を見ると（図133）最下層として砂層が北寄りにあり（9）、その上にシルト系の層が南に広がる（7・8）。次に北側に盛土がなされ（6）、溝の幅が4.9



mほどになる。

さらに、半分ほどの深さまで埋め立てられる（4）が、その途中に南側からの土砂の流入（5）がある。この状態で上面に溝状の凹凸などが見られるのと4の中のブロック土がそれより上のブロック土と異なるため、一時期存続期間がある可能性も考えられる。その後1～3の層で埋め立てられ、平坦化する。

1トレンチ北隣の細池の南辺の堤防が、この溝と平行する部分のみかなり太くなっているので、この溝は元々その盛土のために掘られたものかも知れない。しかし、その後しばらくどのように利用されていったかが疑問として残る。東隣を通る幹線的水路より肩も底部もはるかに低いので水路から水を落とす事はできても、水路へ排水する事はできない。おそらく南側から配水されてきた余り水を一時的に蓄えるようなものであったのではないだろうか。

出土遺物には湊焼きの甕片や、燻し瓦片が見られるので、埋め立ては江戸時代頃とは言える。須恵質瓦転用の權衡や埴輪片の出土が注目できる。

井戸002（図131・133） 溝001の西側、1tr. 北西隅の2面で検出された。径1.5m、深さ約90cm。埋土上面で井戸枠の抜き取り痕状の状態が見えたため井戸としたが、深さからは疑問が残る。

断面を見ると（図133）、裏込め状の層（4・5）と、抜き取り痕を埋めたような層（1～3）がある。完掘した形では北半に1段、南半に2段の段が見られた。掘りなおしの痕跡の可能性もある。

遺物は出土していない。

溝003・005（図131） 1tr. 北西側で南北に走る溝である。溝001を切る。この部分では薄く残る1層を一挙に掘削して2面を検出したが、これらは1面の概観で述べたとおり1面の遺構である。その代表例としてここで述べる。

溝003は幅1.2m～1m、深さ10～2cm。005溝は幅1m～70cm、深さ5～3cm。どちらも底面は平坦で南北の高低差もない。埋土は4層系と思われる黄褐色粘質土のブロックである。

出土遺物はどちらも小片ばかりだが、陶磁器類を含み、燻し瓦片もある。どちらからも須恵器片転用の面子が出土している。

溝1048（図132） 6tr. 西端部分で、北と西側に落ちる「く」の字形の段差があったが、南西の7tr. 側からその段差の角に向かって伸び、同じく南から伸びてきた1707溝と合流し、段差を下った後、その東辺に沿って北へ抜ける溝である。幅70cm～1m、深さ20cmほど。

2面として検出したが、この溝を検出した部分は3面が直接露出しており、7tr. で3～4面の遺構と確認された溝1707と合流する事からも3面の遺構と確認される。

但し、7tr. 側でこれに続く遺構は4面検出の溝1063である。溝1063は6tr. 側では南西部分での溝と完全に重複しているが、北東側で屈曲せず直進し、この溝とはずれていく。また、この溝を検出した3面時点では段差には3層系の斜面堆積があり、溝1063の断面形は見えていない。

つまり、この溝は、段差が造成された時にそれに切られた溝1063の部分を一旦埋め、段差上段で屈曲させて溝1707と合流する形に付け替えたものであると考えられる。

掘削時期は11世紀後半から12世紀とまでしか限定できないが、埋没時期は遺物から13世紀中葉から後葉頃と思われる。

土坑2423（図132） 6tr. 北東側の2面で検出された、平面長方形の土坑で、長辺1.5m、短辺1m、深さ約50cm。長軸は正方位を向かず東南東から西北西を指向する。

付近の耕地区画は全て正方位であり、またそれらのどれとも距離を置くので土坑の性格は良く分からぬ。内面に布目痕のある焼し丸瓦が1片出土しているので近世頃の遺構と思われる。

溝2427（図132） 6 tr. 東辺沿い2面で、ほぼ南北方向に走る溝である。南側はやや西に振れる。

幅1.4m～80cm、深さ10～15cm、底のレベルは北側に下がり、南から北へ水を流す溝と思われる。西側の何ヶ所かに水口が開くが、全て西北方向を向くので、この溝から給水する水口と思われる。

トレンチ東辺外側には、細池の西辺堤防裾を走る水路が今でもあり、この溝はその前身と思われる。全体の水路体系としては、西側の4面溝1063の後を引き継ぐ給水路と言え、間に3～4面溝1707を挟むかもしれないが、それが3面の最終時点では南側が埋没し、排水路の形に変化しているので、3面時点での既に掘削されていた可能性が高い。

出土遺物には土師器、須恵器、瓦器、埴輪の破片もあるが、近世陶器と思われる破片もあり、埋没時期は近世以降と思われる。

ピット117（図131・133） 1 tr. の北東側で2層掘削中に検出し、3面の遺構と確認されたものである。やや不整形な隅丸方形を呈する。64×63cm、深さ12cm。自然礫2個と瓦器碗半個体が出土している。瓦器碗はピットの壁面に底部を接するようにあり、その状態で上半分が遺構と共に削平で失われたような形である。その事からおそらくピットの深さは元々20cm以上あったと考えられる。

耕地区画からも離れ、遺構の性格は定かではないが、元々完形の土器が入れられていたと思われる事から祭祀的な感じも受ける。時期は13世紀前葉～中葉か。

土坑604（図131） 3 tr. 南東隅の3面で検出された、平面長方形の土坑である。この部分は2層が残存していなかったので元々どちらの面の遺構であるかは定かでない。

正方位にのり、南北4.7m、東西2.4m、深さ58cmほど。底部は二段掘り状を呈する。

3～2面に存続していた耕地区画の南西隅に位置し、水溜めのような機能が考えられる。

遺物には瓦器片が含まれるが、時期の限定はしにくい、12～13世紀以降に埋没か。

溝2345（図131） 3 tr. 中央付近をやや蛇行しながら南北に走る溝で、2面検出時点で、2層を欠く部分で一部検出し、4面で全体形を検出した。幅50～40cm、深さ約25cm。

トレンチ南端で井戸747に取りつき、そこから徐々に東に振れながら北に伸びる。北へ落ちる段差を越えてからは、浅く切れ切れになって終わる。

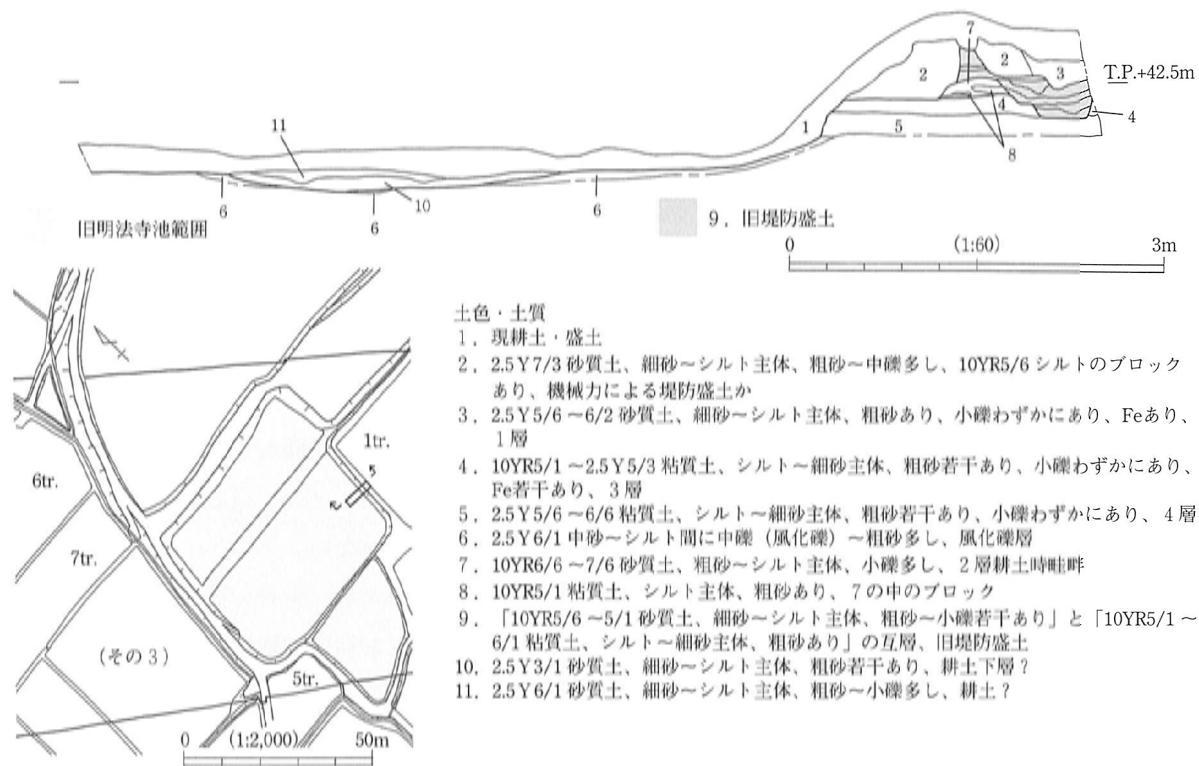
この溝の西側に、正方位にのる南北方向の溝や段差が幾つか見られ、それらの中に2面のものや、1面まで存続するものが知られる事から、まずこの溝が、自然地形に沿った耕地区画に伴うものとして掘られ、後にそれが正方位にのる耕地区画に変更されていったものと思われる。しかし、井戸に取りつく溝という形態はいかなるものであろうか。井戸から人力でくみ上げた水をまわす溝か。

遺物としては須恵器片の他、廈門系白磁碗片も出土しており、13世紀前葉前後に埋没した遺構と思われる。

ピット2560（図132・133） 7 tr. 東側の3面で検出された、平面隅丸方形のピットで、47～40cm、深さ17cmほど。底面は平坦である。埋土上面近くから土師器甕片13が出土した。時期は特定できない。

旧明法寺池堤防断ち割り（図134） 調査区東半、西半を分ける旧明法寺池は昭和期前半頃まで溜め池であった部分で、現在は3枚の耕地に改変されているが、その周囲の堤防は原状を留めている。

元溜め池という事で、その範囲は調査から除外されたが、池の築造時期、内部の掘削の度合いなどを



確認するために、その堤防部分に断ち割りトレンチを設定し、調査した。位置は 1 tr. 西端に沿った堤防部分、それに直交する形で幅 3 m、長さ 8 m のトレンチを入れた。

その成果を図134の断面図により報告する。現状での堤防は幅約 2.5 m、高さは、池の底からは約 1.2 m、東の耕地からは約 50 cm ほどとなっている。

古い堤防盛土（9）は一旦両側から削られ、4 層系のブロック土（2）が新たに盛られていた。その形状から重機による補修と思われる。古い盛土（9）は基本的に砂質土と粘質土の互層状を呈しており、元の高さは分からぬが、現状よりやや低かったようである。

堤防の下には、平坦な 3 層（4）の上にのった畦畔（7・8）があり、その東側に溝が走っていた。層位的には 2 層が耕土であった時期の畦畔と思われ、堤防の盛土は東側の溝にも充填されている。少なくともこの部分の堤防が築かれたのは 1 層が耕土として成立した時点であった可能性が強い。

堤防内側は 3 層が水平に走ったままの状態で切られており、掘削を受けているのは確実である。堤防裾から 2 m の距離をおいて、幅 2.2 m、深さ 18 cm の溝が掘られていた。池の底部は風化した礫がかなり混じった層が見えており、中位段丘構成層と思われ、遺構の残存の可能性は少ないと考えられた。

遺物としては近くの古墳 6 に関連すると思われる埴輪片などもあったが、古い堤防盛土から伊万里などの近世陶磁器の小片が出土し、堤防内側の溝からは焼瓦片も出土しているので、堤防の築造は遡っても近世以降の事と確認された。

ただし、この溜め池は、西側に落ちる地形の中で作られたものであるので、現在里道となっている西側堤防の築造のほうが古く、この東側の堤防と池内の掘削が、後の拡張である可能性も残る。

以上の遺構も含め、結果として把握できた、4～1 面の耕地区画の変遷は、小結において述べる。

(三宮)

第3項 遺物

1. 石器遺物

(その2) 調査区からは全部で142点の石器遺物が確認された。そのうちナイフ形石器や石鏸・石匙などの他、特徴的な剝片、楔形石器など総計44点を図化した。これらは全て包含層や後世の遺構から出土した遊離資料である。

ナイフ形石器 (図135・図版55) ナイフ形石器は1～8までの8点が出土した。

1は翼状剝片を用いたと思われるナイフ形石器であり、上部および下端部を折損する。先行する目的剝片作出の際のネガ面が残り、打面調整も見られる。プランティングは単位の大きい剝離で施される。

2は有底横長剝片を素材としたナイフ形石器である。素材の面構成は、右面が一枚のポジティブ面、左面が石核の平坦なポジティブ面と先行する剝片剝離作業によるネガティブ面で構成されている。プランティングは左面右側縁に施されるが、直線的な側縁は作り出してはいない。

3は有底横長剝片を素材としたナイフ形石器である。上端部を折損する。素材の面構成は、右面が一枚のポジティブ面で構成され、左面が石核のポジティブ面と、先行する剝片剝離作業に伴うネガティブ面で構成されている。プランティングは左面右側縁を打面に丁寧に施されている。

4は有底横長剝片を素材とするナイフ形石器である。下部を折損し、側縁に欠損が多くみられる。素材の面構成は、左面が石核のポジティブ面と、先行する剝片剝離作業に伴う一枚のネガティブ面で構成され、右面は一枚のポジティブ面で構成されている。左面における2枚の剝離方向は同一ではない。プランティングは左面左側縁を打面にして施されている。

5は上端部を欠損、下半部を折損するナイフ形石器である。素材は左面に一枚のネガティブ面、右面に一枚のポジティブ面をもつ横長剝片を用いており、ともに平坦面である。目的剝片作出に伴う先行する剝離痕は見られない。プランティングは対向調整でまとまりをもって施されている。

6は下端部を折損するやや小型のナイフ形石器である。素材は右面が一枚のポジティブ面で構成され、左面は2枚のネガティブ面と一枚のポジティブ面で構成される横長剝片と考えられる。左面の素材面のうちネガティブ面は剝片剝離作業に伴い、ポジティブ面は石核の平坦なポジティブ面と思われる。プランティングは左面左側縁を打面に直線的にまとまりをもって施される。

7は横長剝片を素材とするナイフ形石器である。左面左側縁、及び右側縁下半部にプランティングが施されている。刃部はヒンジフラクチャーになっており鈍い。そのため有効な刃部とは考えられない。打面調整がみられる。

8は上端部を折損するナイフ形石器である。素材は右面が一枚のポジティブ面、左面は4枚のネガティブ面で構成される横長剝片を用いている。プランティングは右面右側縁を中心にして、左面側から大きめの剝離単位で施した後、側縁端部に小さめの剝離を施す。また、右面左側縁においても細かなプランティングが施されており、左面側から調整を行っている。

剝片 (図135・図版55) 9は翼状剝片である。4枚の打面調整が見受けられる。剝片剝離作業のための先行剝離がネガ面に確認できる。また、翼状剝片にまで及ばなかった剝片剝離が2枚存在する。主要剝離面の剝離方向と底面の剝離方向はほぼ同一である。

10は両極剝片である。左面に自然面を残す。右面のポジティブ面はバルブが発達せずリングが反転しているため、両極打法によってこの剝片が作出されたことがわかる。上端・下端部に階段状剝離がうか

がえる。特に下端部は衝撃が加えられることによりツブレ状になっている。

石鏸（図136、図版56・57） 石鏸は30点出土した。形態は凹基無茎式が24点（1～24）、平基無茎式が5点（25～29）、凸基有茎式が1点（30）である。平面形としては、縦長の形状の12～14、五角形状の23、24、やや幅広で正三角形に近い27があるが、二等辺三角形に近いものが主体である。側縁の形状は内弯するように調整されている6、16、19、21、26、27、やや肩を持つように作り出されている

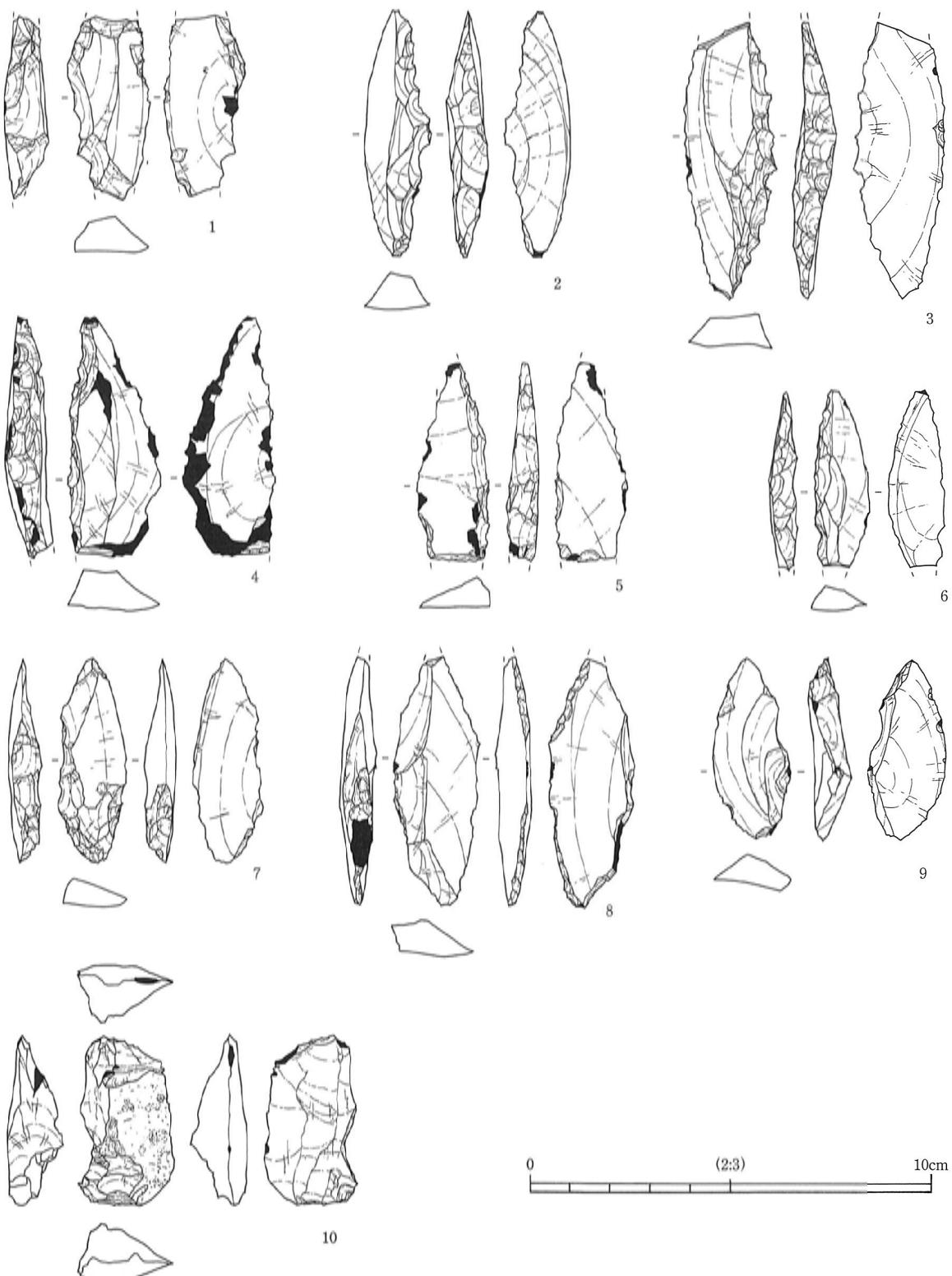


図135 出土石器遺物（1）

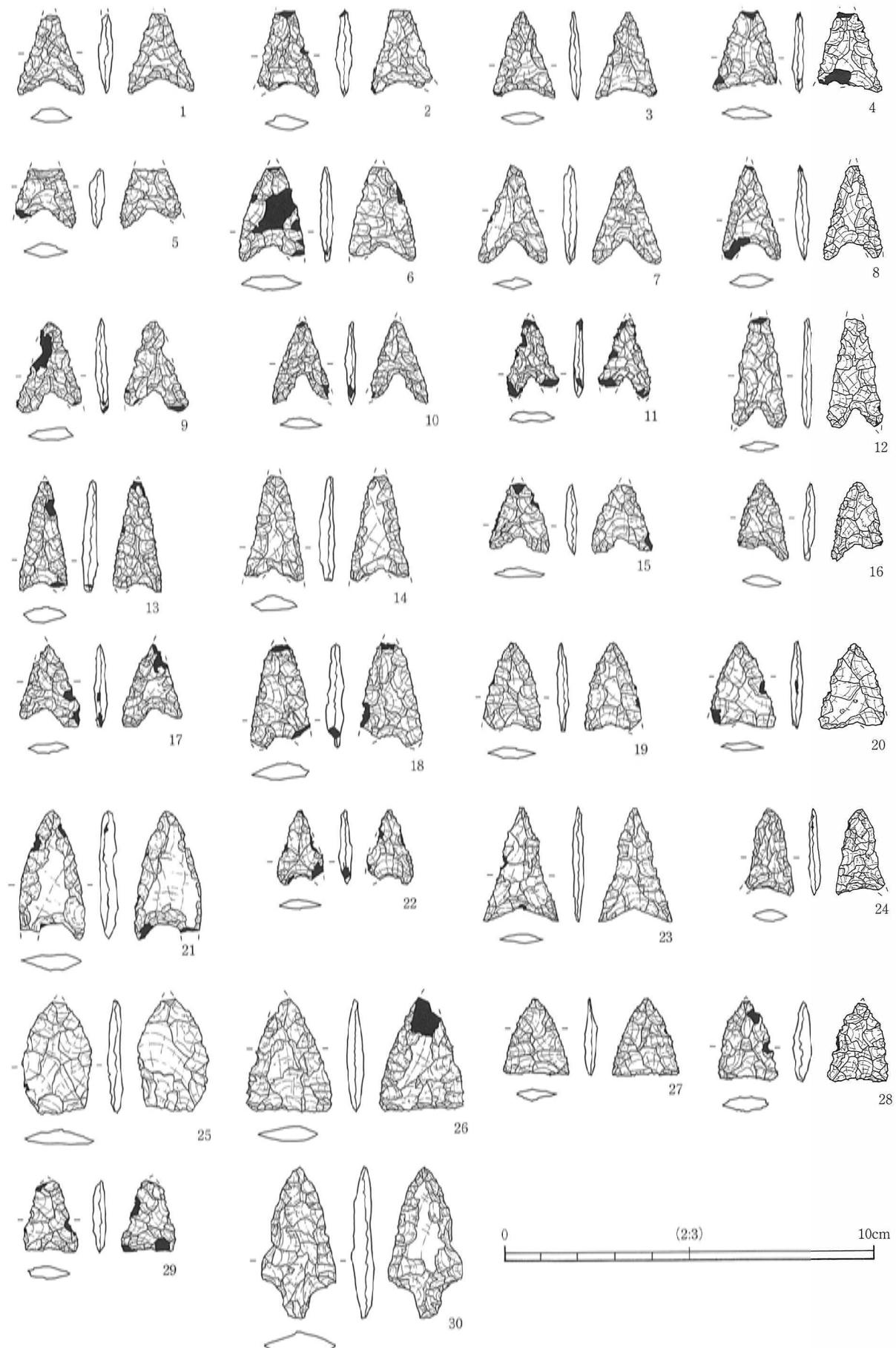


図136 出土石器遺物（2）

23、24も認められるが、直線的に調整されているものが主体である。また基部の抉りは丸い形状の2、5～7、直線的にとがる23、広く深い8、18、21、22、広く浅い3、4、19、20などがある。さらに脚部の形状は先端の丸い6～8、先端の尖る1、23、24、先端を平坦気味に作り出す15、17などがあり、バリエーションにとんでいる。

その他の石器遺物（図137・図版56～58） 1は木葉形の尖頭器である。上端部および下端部を欠損する。両面とも大きめの剝離単位で調整を行った後、両側縁部から細かい調整を施し尖頭部分が凸形の弧を描くように作り出している。

2は横型の石匙で一部欠損する。刃部の両面調整はあまりまとまりがない。つまみの抉り部は両面調整を施している。

3は石錐と考えられる。両面とも大きめの剝離単位で調整を行った後、側縁部は細かい調整を施し凹形の弧を描くように尖頭部を作り出している。

4は楔形石器で、扁平な原礫を用いている。平面形は四角形に近く、上下両端部に両極打法による階段状剝離が見られるが、左面下端部のみ階段状剝離が生じていない。両極打法による剝離はあまり内側に侵入せず対辺に向かってのびる剝離はみられない。そのため自然面が大部分残っている。

なお、郡戸遺跡（その1）～（その3）調査区で出土した製品の一部と、図化できなかった石核・剝片などの中から50点の試料を分析委託した。多くは二上山産のサヌカイトだったが、石鏃（13）は下呂産であった。その結果の詳細は後章に譲ることとする。（大庭）

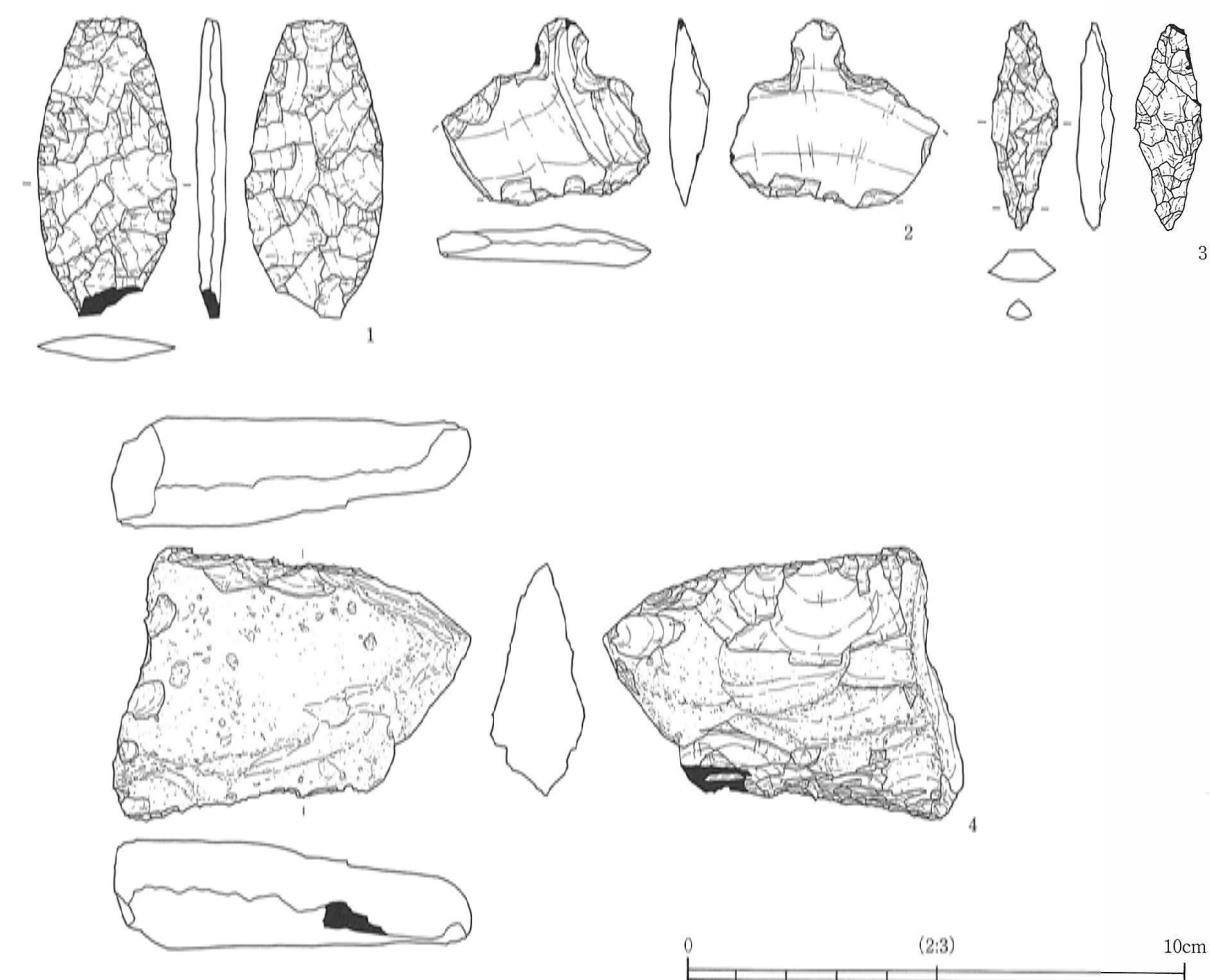


図137 出土石器遺物（3）

2. 古墳出土遺物

古墳1出土遺物（図138、図版58・59） 南東隅のプリッジ状掘り残し部北側の周溝内から須恵器高杯1点、杯身6点、杯蓋4点が集中して出土した。残存状態は良く、ほぼ完形品で占められる。1と2、3と4、5と6、7と8の蓋と身は、焼成の状態、器形や蓋をした時の合い方から、各々セット関係にあったとみられる。

杯蓋は1・5・7が口径11.6～11.8cm、器高4.9～5.0cm、3がやや小さく口径10.9cm、器高4.3cmである。ともに天井部が丸く、口縁端部が内傾し段を有する。3は端部がややあまい。1は外面に降灰痕が、3は天井部付近に発泡した釉がそれぞれ確認できる。杯身は2・8が口径10.4cm、器高4.9～5.0cmで、4・6がやや小さく口径10.0～10.2cm、器高4.2～4.4cmをはかる。底部が杯蓋天井部同様丸く、口縁端部が内傾し段を有する。6は端部がややあまい。4は底部外面に沈線1条によるヘラ記号があり、一部降灰痕が確認される。9・10はともに対応する杯蓋のない杯身である。9は口径9.6cm、器高3.8cm、10は口径10.4cm、器高は4.2cmをはかる。9は他より扁平で、10は立上がりが長く直立し、口縁端部は内傾せずに面をもつ。11は口径13.6cm、器高11.2cmの無蓋高杯で、杯部と脚部の高さはほぼ同じである。杯部外面には2条の突帯間に波条文を1条巡らせ、脚部外面にはカキメを施したあと、三方に長方形透かしを穿つ。杯身内面・脚裾部を中心に降灰痕が多く見られる。以上の須恵器は陶邑編年I～4段階に属する。

古墳2出土遺物・落込み1187出土遺物（図138、図版59） 古墳2からは須恵器把手付椀1点が出土した（12）。把手部の剝離痕が確認でき、底が丸く、無文である。内面は静止ナデ、外面は下半部静止ヘラケズリで上半部は回転ナデを施す。断面は暗赤灰色である。このように特殊な器形、調整は無文、焼成状況などから初期須恵器の可能性も考えられる。

落込み1187は古墳2と隣接しており相互に関連がある遺構と考えられる。ここからは須恵器無蓋高杯2点、杯蓋2点、杯身2点が出土した。13は無蓋高杯の杯部で復元口径14.9cmである。杯底部は扁平で、口縁部は直線的に立上がる。外面に突帯を1条、その下に波条文を1条巡らす。14は無蓋高杯の脚部である。外面にカキメを施したあと、三方に長方形透かしを穿つ。杯蓋は15が口径11.0cm、器高4.5cm、17が復元口径11.8cm、16が口径9.8cm、器高5.0cm、18が復元口径10.0cmをはかる。15・16は17・18に比べて器壁が厚く、小型である。陶邑編年I～4～5段階に属する。

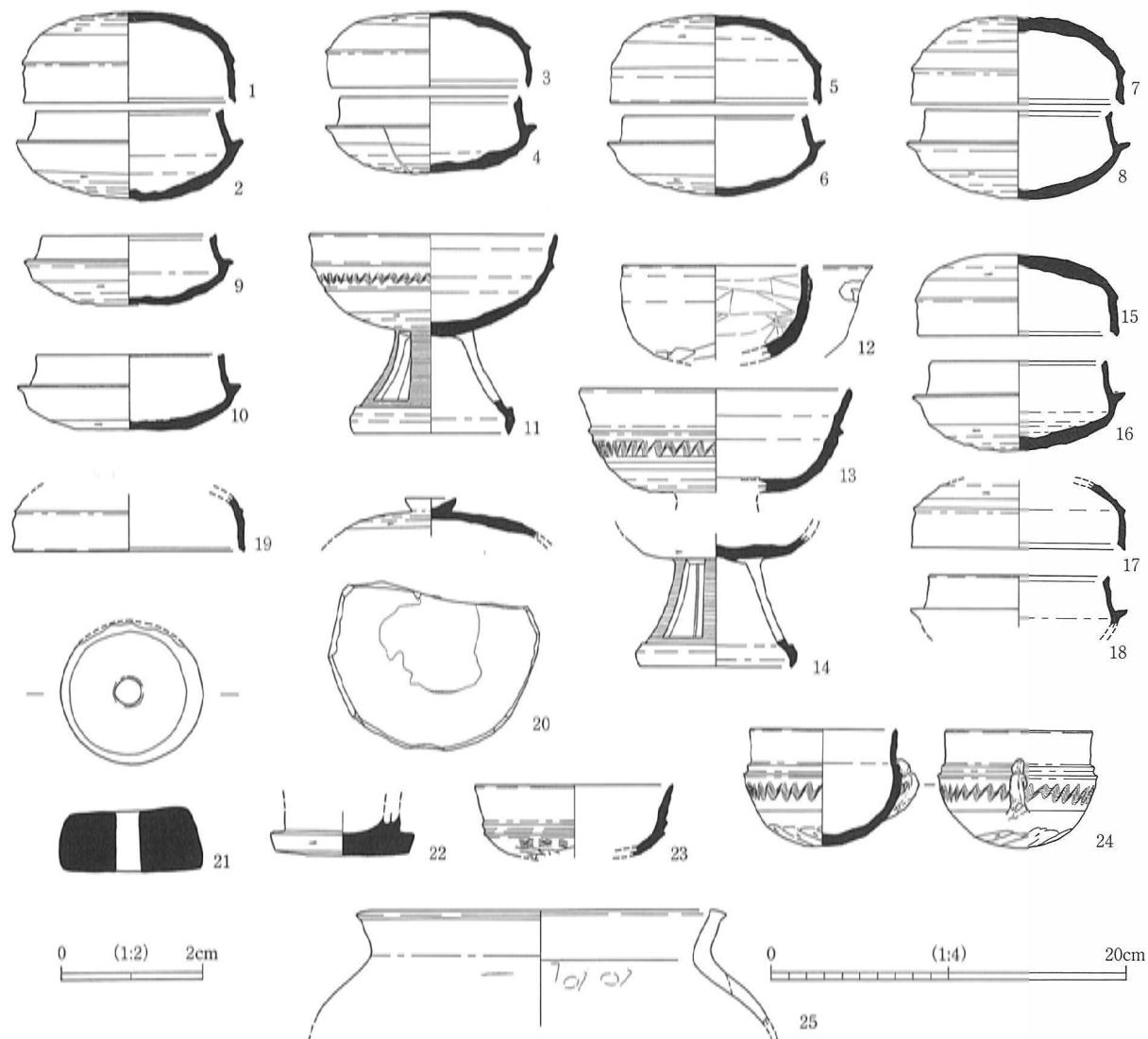
古墳3出土遺物（図138、図版59） 杯蓋1点と有蓋高杯蓋1点を図化した。19は復元口径12.8cmの杯蓋である。20は中凹みのつまみを有する有蓋高杯蓋で、内面にユビナデで粘土をのばした痕跡がみられる。天井部外面には降灰痕がみられる。陶邑編年II～1段階に属する。

古墳4出土遺物（図138、図版60） 須恵質紡錘車、須恵器こね鉢、無蓋高杯、把手付椀各々1点を図化した。21は最大幅4.0cm、細大厚1.8cmの紡錘車で、断面が丸みを帯びた台形をなし、平面中央に0.7cmの孔を穿つ。表面は前面研磨調整されており、やや焼きが甘い。22はこね鉢底部で、周溝の上層から出土した。23は口径11.0cmの無蓋高杯の杯部である。2条の突帯とその下に波状文を巡らす。24は口径8.1cm、器高6.5cmの把手付椀で、底部は丸底である。肩部に突帯を2条、その下に波状文を1条巡らす。把手部には退化した蕨手がつく。底部外面には静止ヘラケズリを施す。この把手付椀は初期須恵器に属するとみられる。

古墳5出土遺物（図138、図版60） 25の土師器甕のみ図化した。10世紀以降のものと考えられ、埋土の最上部から出土したことから、後世の混入品であろう。この他は土師器細片が出土したが図化に耐

えうるものはなかった。

古墳6出土遺物（図139、図版60） 古墳6の周溝内およびその周辺から埴輪細片が散乱して出土した。周囲の上層の包含層からも比較的多くの埴輪片が出土しており、これらには古墳6出土埴輪と接合するものも多くみられた。このうち確実に古墳6に伴っていたと判断されるものとして、円筒埴輪9点を図化した。1・2は須恵質、3～9は土師質で、ともに無黒斑である。1・2は外面にタテハケ1次調整、内面に粗いハケのちタテ方向にナデを施しており、胎土やハケ原体の特徴から同一個体の可能性がある。突帶は断面台形で、一段おきに円形の透かし孔を穿つ。3～5・7・9も外面にタテハケ1次調整を施すもので、突帶は断面台形である。7の外面にはヘラ工具による横方向の線刻が認められる。6は風化のため調整が不明である。また、8は外面に2次のヨコナデ調整を施しており、突帶は低く、また突帶間も他のものと比べて極端に狭い。以上の古墳6出土埴輪は、川西編年のV期に位置づけられる。（大庭）



1～11：古墳1〔1：土器2・10・15、2：土器5（1とセット）、3：土器3、4：土器6（3とセット）、5：土器7・12、6：土器11（5とセット）、7：土器8、8：土器9（7とセット）、9：土器4、10：土器13・14、11：土器1〕、12：古墳2、13～18：1,187落込（13：土器4、14：土器3、15土器2、16：土器1、18：土器5）、19・20：古墳3（19：土器1、20：土器2）、21～24：古墳4（21・23：周溝西辺、22周溝上層、24土器1）、25：古墳5

図138 古墳関連遺構出土遺物

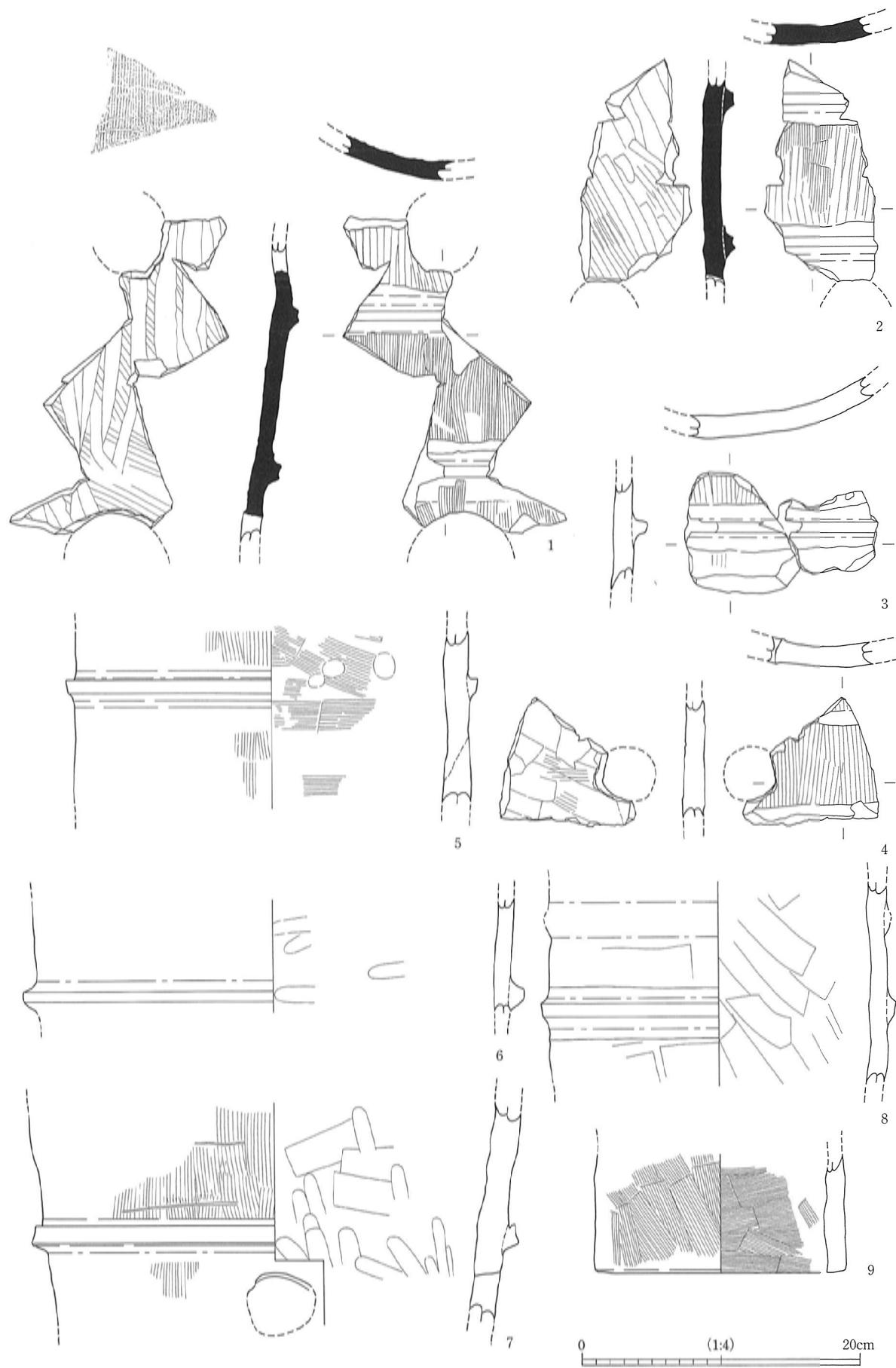


図139 古墳 6 及びその周辺出土遺物

3. 建物出土遺物（図140、図版61・62）

（その2）調査区内で検出された18棟の掘立柱建物の内、14棟の柱穴から遺物が出土した。しかし、土器の細片が多く、図化可能なものは6棟出土のもの内、図140の14点のみであった。

以下、建物毎に出土遺物について述べる。なお図化遺物の番号は図140のものである。

建物I出土遺物 土師器小片8片、器種は不明。

建物II出土遺物 土師器小片30片、須恵器小片2片が出土しているが器種不明。1は柱穴102と古墳6、1面の溝007から出土したものが接合した土師質円筒埴輪片である。一つのタガとその上下が遺存している。復元径は21.8cm。外面は磨滅激しいがタテハケ後ヨコナデ。しかし、粘土接合痕が粗く溝状に残り、そこから一つの粘土紐の幅が約1.5cmほどであるのが分かる。タガを付けるナデが他のヨコナデを切る。タガは断面台形。

胎土は表面5YR7/4を呈し、断面5Y6/1。4～1mmの石英・長石の他、5mmほどの泥岩らしき黒色の砂粒をわずかに含む。微細粒子には石英・長石のほか赤色粒あり。

建物の時期を直接示すものではないが、元々古墳6の付近にあったものが耕作により移動してきたものと考えられ、建物IIが耕地開発以後に建てられた可能性を示唆する。

建物III出土遺物 土師器87片、須恵器3片、黒色土器A類9片が出土している。

2は柱穴1825から出土した土師器皿である。ほぼ完形でわずかに口縁の一部を欠失する。口径13.9cm、高さ2cm。

外面は底部から側面にかけてユピオサエのみで、口縁に一条の強いヨコユピナデが入り外反する。端部は丸くおさまる。内面はナデだが方向不明。全体に歪みが見られる。

胎土は5YR5/4～6/4を呈し、2～1mmの石英・長石・クサリ礫を若干含む。微細粒子にはそれに雲母・赤色粒・角閃石が見られる。

「て」の字状口縁の皿と併行して見られる、その粗製のような皿の類と思われるがあまり時期は限定できない。10世紀末から11世紀ぐらいか。

3は同じく柱穴1825から出土した黒色土器A類碗片である。4片が接合し、残存率は3割ほど、復元径は約14cm、残存高4cm。

内面はミガキ、下方には見込みのミガキの一部らしい輪状のものも残る。ミガキの幅は2mm弱。口縁端部内面に1条の沈線が巡る。外面は口縁部よりやや下まで、炭素吸着が見られ、口縁端部から1.5cmほど下まで分割ミガキ、それ以下はナデか。

胎土は炭素の吸着していない部分は10YR6/4を呈し、3～2mmの石英・角閃石と1mm前後の長石・黒色粒をわずかに含む。微細粒子には雲母も見られる。

外面にミガキが及ぶ事や身が深い形態から、黒色土器B類成立の影響をうけた、新黒色土器A類の碗と考えられ、11世紀前葉のものと思われる。

4は柱穴1840から出土した粗製土師器碗である。11片が接合するが残存率は4割ほどで、高台の付く底部は完存するが、口縁部は1/3弱しか残っていない。やや歪むが復元径11.1cm、器高4.1mm。

内面は全面ヨコナデ、口縁部に最後に1条のヨコナデが入る。外面は側面にはユピオサエ、中でも左傾の連続ユピオサエが並ぶ。それは下のものを上が半分近く切るユピオサエが並ぶもので、一見強いユピナデのようにも見える。そしてその上から単独のユピオサエが散在している。口縁部はそれらのユピオサエを切って強めのヨコナデが1条巡り、それによって外形が屈曲して立ち上がる。

底部外面はゆるいナデのみが残る周囲に非常に矮小な高台が巡る。断面三角形だが、高さは1 mm弱しかなく、底部の中心のほうが1 mmほど下に突出しているので、高台の用をなしていたか疑問である。

胎土は7.5YR7/6を呈し、1 mm前後の石英・長石・雲母・クサリ礫をわずかに含む。微細粒子には角閃石もわずかに見られる。

中河内南半から南河内北半にかけて平安時代初頭から瓦器出現直前の11世紀前葉まで見られるタイプの土師器椀で、12cmをきる口径や、非常に矮小化した高台などから10世紀後半から11世紀前葉のものと考えられる。

5は柱穴1843から出土した粗製土師器椀片である。2片が接合するが、全体の3割ほどしか残存していない。復元径は12cm、残存高3.25cm。

4と同じタイプの土師器椀で、法量的にも近いが高台が付くものかどうかは分からぬ。内面はナデで口縁に1条のヨコナデ、外面のユビオサエは残りが悪いが右傾の連続ユビオサエが列を成しているようだ。口縁にはそれを切って1条のヨコナデが入る。

胎土は2.5YR5/6～7.5YR6/4を呈し、1 mm前後の石英・赤色粒・角閃石若干あり、微細粒子には雲母も見られる。

4と同タイプと言っても、高台が付かない場合、この種の土師器椀の存続時期全般に渡ってあり得る法量で、単独では9世紀代から11世紀前葉としか時期を限定できない。

6も柱穴1843から出土した黒色土器A類椀片である。5片が接合し、残存率は2割ほど、復元径15cm、残存高3.8cm。

内面にはややまばらなミガキが残る。ミガキの幅1 mm強。口縁にはそれらを切って1条のヨコナデが巡り、口縁端部内面にはやや不明瞭ながら沈線が1条巡る。

外面は内面に対応するヨコナデが口縁に1条、それ以下もヨコナデか。

炭素吸着はわずかに口縁端部で外面にも及ぶが、それ以外の胎土は10YR6/4を呈し、1 mm前後の石英・長石・赤色粒をわずかに含む。微細粒子には雲母・角閃石も見られる。

器形が杯の影響を脱しておらず、ミガキも外面に及んでいないが、内面のミガキがまばらで、それを切るヨコナデも見られるところから、黒色土器B類と併存している時期、平安京編年のIII期、10世紀前葉から11世紀初頭頃のものと思われる。

7も柱穴1843から出土した土師器椀底部片である。高台は完存している。高台径7.1cm、残存高1.6cm。土師器椀といつても5とは別個体である。

やや磨滅するが、内面はナデ、外面はユビオサエ後ナデ。高台は貼りつけ後ナデ。

胎土は5 YR5/6～6/6を呈し、2～1 mmの石英・長石を若干含む。微細粒子には赤色粒・雲母もあり。

かなり高い高台だが、時期を限定できる要素はない。

8は柱穴1845より出土した黒色土器A類の底部片である。高台の1/3ほどが残る。復元高台径8.4cm、残存高1.1cm。

内外面ナデだが、外面には一部ユビオサエが残る。高台は貼りつけ後ナデで断面三角形。

胎土は外面5 YR6/6を呈し、大きな砂粒は見られない。微細粒は長石・石英・赤色粒が若干見られる。

時期は限定できない。

以上が建物IIIの柱穴出土遺物だが、全て柱穴の柱抜き取り痕から出土しているので同時期遺物と見れば、建物IIIの廃絶時期は、黒色土器B類の影響を受け、新黒色土器A類が成立してから瓦器が登場するまでの間、平安京IV期古段階、11世紀前葉と見られる。

建物V出土遺物 土師器小片4、黒色土器A類小片1。器種不明。

建物VI出土遺物 土師器小片6、器種不明。

建物VII出土遺物 土師器小片7、黒色土器A類小片1。器種不明。

建物VIII出土遺物 器種の不明な小片としては、土師器29片、黒色土器A類5片あり。

器種の分かるものは柱穴1893出土の黒色土器A類椀底部片1(9)のみであった。高台の1/3ほどが残存し、復元径7.4cm、残存高1.7cm。

磨滅激しいが、内面は暗文らしき痕跡残る。外面はナデか。高台は断面三角形の貼りつけ高台。

胎土は外面5YR6/6を呈し、2~1mmの石英・長石をわずかに含む。微細粒にはわずかに角閃石も見られる。

時期は限定できない。

建物X出土遺物 器種を特定できない小片としては、土師器38片、須恵器1片、黒色土器A類5片があり、他に柱穴2220から出土した自然礫3個がある。

10は柱穴2164から出土した土師器椀底部片である。高台は1/4ほどが残存。高台復元径7.4cm、残存高2.4cm。

内外面ともナデで、高台は貼りつけ後ナデるが接合痕を残す。

胎土は10YR7/4~7.5YR7/4を呈し、1mm前後の石英・長石・クサリ礫を若干含み、微細粒には赤色粒・チャートをわずかに含む。

時期は限定できない。

11は柱穴2106から出土した土師器甕口縁片である。口縁は短く外反し、端部は肥厚し、外傾した面を持つ。内外面ヨコナデ。肩部はゆるく膨らみ、外面ユビオサエ、内面はナデか。共に煤が付着する。

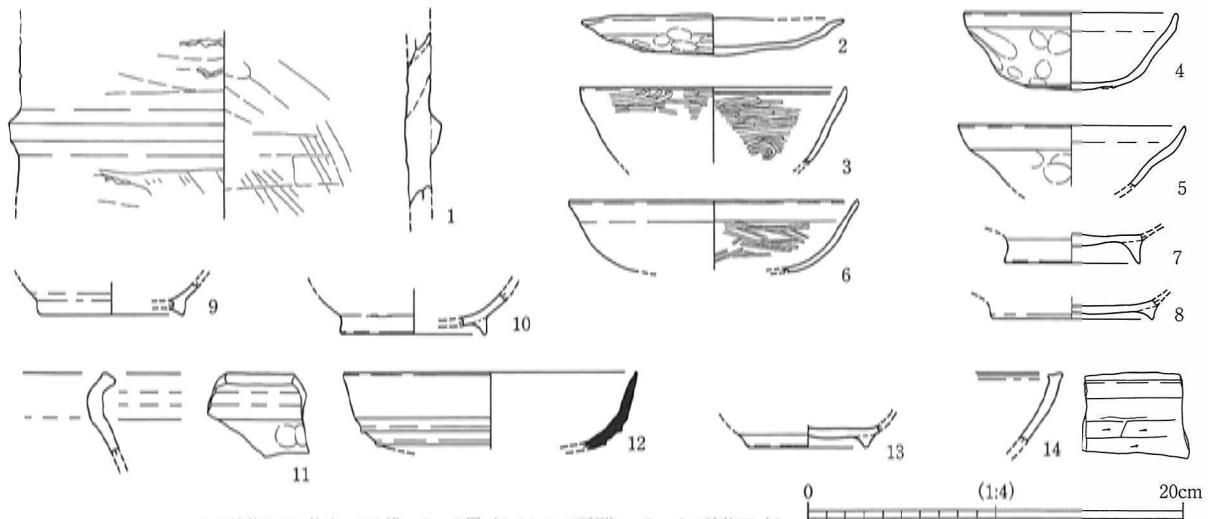


図140 建物柱穴出土遺物

胎土は7.5YR4/1～5/3を呈し、1 mm前後の石英・長石・赤色粒・チャートを若干含む。微細粒子には雲母も含まれる。

時期は限定できない。

12は柱穴2176から出土した須恵器高杯身部片である。口縁の2割程度残存。復元径15.4cm、残存高4.1cm。

内外面とも回転ナデで外面身部下半に2条の突帯あり。

胎土は7.5Y6/1を呈し、1 mm前後の石英・黒色粒・長石を若干含む。石川流域産か。

陶邑編年で言えばII-3～4ぐらい、6世紀後半のものと思われる。建物の時期とは直接関係ないものか。

建物Xの時期を10・11から考えると、確実には限定できないが、10世紀後半前後の時期が妥当だと思われる。

建物X I出土遺物 土師器小片6片出土。器種不明。

建物X II出土遺物 土師器小片21、須恵器小片3出土。器種不明。

建物X III出土遺物 土師器小片5、須恵器小片1、黒色土器A類小片3出土。器種不明。

建物X IV出土遺物 器種不明のものとしては土師器小片1、須恵器小片1があるが、他に柱穴2023出土の黒色土器A類椀底部片(13)がある。高台はほぼ完存し、高台径6cm、残存高1.2cm。

内面はナデ、外面もナデだが、底部にユビオサエ残る。高台は貼りつけ後ナデ。

胎土は外面5YR5/4を呈し、1 mm前後の石英・雲母・長石を含む。

高台の径と高さから考えると、B類と併存する10世紀代のものの可能性が強い。

建物X V出土遺物 器種不明の小片は土師器6片、須恵器1片がある。

14は柱穴2017から出土した土師器鉢口縁片である。口径の復元はできないがわりと小型のものか。

内面は煤が付着するがヨコナデか。口縁端部はやや肥厚し、やや内傾の凹面を持つ。外面は口縁から2条のヨコナデ、その下ユビオサエ後右方向のヨコヘラケズリ。

胎土は5YR6/4～10YR7/4を呈し、1 mm前後の石英・長石・赤色粒を含む。微細粒には雲母・角閃石も見られる。

平安時代の土師器鉢の類例は少なく、時期を限定しがたいが、外面にケズリを残すのは古い要素か。しかし、1片のみなので建物の時期と直接関係するかは疑問である。

掘立柱建物全体で見れば、建物III～X Vの、調査区西半建物群は、建物IIIの廃絶が11世紀前葉として一つの定点が得られ。他の柱穴の出土遺物でも、黒色土器A類がしばしば見られる事、そのA類や土師器椀に黒色土器B類の影響のあるものが見られる事、瓦器が共伴しない事などから、かけはなれた時期の建物はなく、全て一連の集落の中の建物と考えられ、おおよそ10世紀後半から11世紀前葉のものと考える事ができる。

建物I・IIに関しては、それら調査区西半の集落が廃絶した後、調査区全域の耕地開発がなされた事と、建物II出土の埴輪片が原位置から遠く離れて柱穴に入った状況を考え合わせると、11世紀後半以降、3層が耕土として使われていた間、13世紀までの建物と類推される。(三宮)

4. 4面、溝・ピット・土坑出土遺物（図141、図版63・64）

溝1063出土遺物（図141-1～4）

この溝では北東部と南西部が埋め立てられた時期が異なるため、出土遺物のまとまりも異なる。

北東部では土師器器種不明小片4、埴輪小片1の他、須恵器蓋杯蓋1個体（1）が出土した。

1は残存率は7割以上である。胎土には3～1mmの石英・長石・黒色粒を若干含む。石川流域産と思われる。陶邑編年のI-3～4にあり得るもので、溝の時期を直接示すものではない。おそらく、調査区内の古墳群と関係する時期のものと思われる。

南西部では、須恵器は鉢底部片1、甕片1、壺片1、器種不明小片5、土師器は高杯脚部片1、甕口縁片1、皿片3、高台片2、器種不明小片107、埴輪は小片1の他、瓦器碗が3個体（2～4）出土している。

2の瓦器碗は、残存率は4割ほどである。外面口縁のヨコナデは太く、その下も不定方向の粗いナデがあり、ユビオサエがそのまま残るのは高台周辺のみである。高台は非常に低平な、断面三角形。

内面も口縁はヨコナデで、それが下のミガキを切る。ミガキは右上がりのものが数本ずつ疎らに入り、見込みは、底部を欠くため明確ではないが渦巻き状のようである。

器面の色調は、磨滅が激しいため5Y7/1～N3/0、断面は5Y7/1を呈する。胎土には2～1mmの石英・長石・黒色粒・角閃石・クサリ礫がわずかに入る。

尾上編年の和泉型IV-1～2のように見えるが、深さと口径にやや不安があり、III-1の時期である可能性も高く、13世紀前葉か中葉ぐらいのものと思われる。

3の瓦器碗は残存率8割近い。外面口縁のヨコナデは幅広く、2段である。それより下はユビオサエを残す。高台は低平な、断面三角形。内面も口縁はヨコナデで、ミガキは疎らで不連続である。

器面は磨滅し、7.5Y6/1を呈し、胎土には1mm前後の石英・長石・黒色粒を若干含む。

全体の歪みが激しいが、法量的にやや縮小化していると思われ、尾上編年の和泉型III-3頃のものと考えられる。13世紀前葉か。

4の瓦器碗は残存率9割ほど、外面は口縁のユビナデの下はユビオサエをそのまま残す。高台はやや高めの断面三角形。内面は口縁端部に上からの沈線が入り、口縁部は一条のヨコナデ。ミガキは1mmほどの細いものが疎らに入る。

器面はやや磨滅し、N4/0を呈し、胎土に大粒の砂粒はなく、微細粒は石英・長石・雲母・角閃石が見られる。

大和型的要素もあるが、楠葉型と見て良く、橋本編年のIII-2、13世紀前葉のものと思われる。

これら3点の瓦器碗が、溝1063の南西部分が最終的に埋め立てられた時期を示すものと考えられる。

溝1707出土遺物（図141-5） 須恵器片11、うち甕片5、こね鉢片1、土師器片54、黒色土器A類片2、黒色土器B類片4、瓦器片19、うち高台片2、が出土している。

図化可能なのは5の須恵器こね鉢底部片のみであった。内面は回転ナデ、外面は、胴部下端は回転ケズリ後ナデ、底部との接合部分には粘土紐の接合痕とユビオサエが残るが、そこから底部側縁にかけて回転ナデ、底面は回転ヘラキリ。

底部は内外面とも使用痕と思われる磨滅が激しい。

胎土は10Y6/1を呈し、1mm前後の石英・長石を若干含む。

溝の時期を示すものではないが、激しい使用痕から、調査区内の古墳群に伴う遺物とも思えない。平

城宮型式にも類例のある事から、可能性としては、調査区より南側に広がる事が推測されている河原城遺跡の奈良時代集落と関連する遺物かもしれない。

溝の時期を示すものとしては黒色土器と瓦器があげられ、おおまかに11世紀から13世紀ぐらいが溝の存続時期と考えられる。

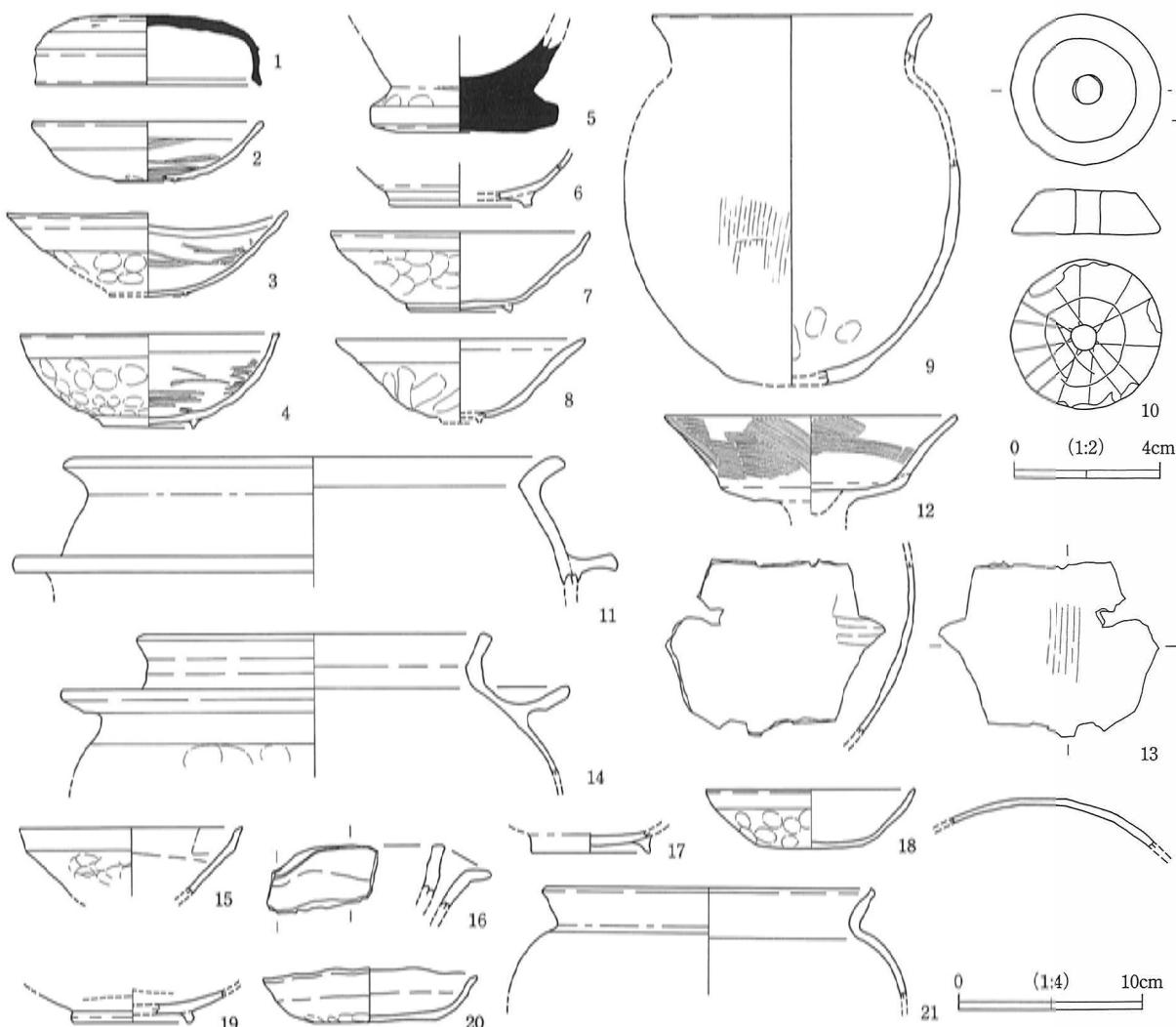
溝1710出土遺物（図141-6～8） 土師器では粗製椀2個体、高台付き椀底部片2、器種不明小片14、須恵器器種不明小片1、黒色土器A類小片4が出土している。

6は土師器高台付き椀底部片である。高台の1/4ほどが残存。内面は不定方向のナデ。外面は胴部は磨滅して調整不明。高台は断面逆台形でヨコナデにより貼りつける。底部はユビオサエ後ナデ。

胎土は5 YR5/6を呈し、4～1 mmの石英・長石・赤色粒・クサリ礫を若干含む。微細粒子には雲母も若干あり。

黒色土器の器形的影響を受けた粗製椀と思われる。10～11世紀頃のものか。

7は土師器高台付き粗製椀である。残存率は4割ほど。口縁は内外面とも強めのヨコナデが1条入り屈曲する。端部は上へ丸く納まる。外面はそのヨコナデに切られるユビオサエ。そのユビオサエは左下がりの列を成しており、左の列が右の列を切る。高台は断面三角形でヨコナデにより貼りつけ。底部に



1：溝1063北部、2～4：溝1063南半部、5：溝1707、6～8：溝1710（6：土器1、7・8：土器2）、9：溝1504、10：ピット1508（9・10は共に溝1063に切られる遺構）、11：ピット149（2トレンチ）、12・13：ピット2416（4トレンチ）、14：土坑1790（～20まで7トレンチ）、15：土坑1918、16・17：土坑2110（建物IXを切る）、18：ピット2137、19：ピット2171、20：ピット2183、21：6トレンチピット1552

図141 4面溝・ピット・土坑出土遺物

は軽いナデ。

胎土は7.5YR5/6を呈し、2～1 mmの石英・赤色粒がわずかにある。微細粒子には長石もあり。

この種の粗製椀は中河内南半から南河内北半に多く見られるもので、高台付き椀は法量的な変化が少なく、厳密に言えば9世紀後葉から11世紀前半までにしか限定できないが、10世紀前葉から11世紀初頭にかけて多い例であると言える。

8は土師器粗製椀である。残存率が2割以下そのため、法量的にはやや不安のある復元となっている。

口縁は内外面に強めのヨコナデ1条で屈曲、端部は斜め上方に丸く納まる。内面それ以下は磨滅激しいがナデか。外面は右上がりの連続ユビオサエの列が並ぶ。高台の有無は不明。

胎土は7.5YR5/6を呈し、3～1 mmの石英・長石がわずかにあり、微細粒子には赤色粒・雲母もあり。

7と同種の椀で、高台のないものとすれば、10世紀前葉で大小に法量分化した後の大の方で、11世紀初頭まではあり得る。

少なくとも7・8と同種の椀は、同時期性の高い一括資料での瓦器との共伴例は知られていない。

以上の図化可能であった3点の示す時期は、溝の時期というより、それ以前の集落の存続時期と思われる。やや磨滅が激しい事からも、集落の跡地を通る溝の掘削の際、集落関連の遺構などから混入した可能性が高い。

溝1504出土遺物（図141-9） 土師器甕1個体である。残存率は5割ほどで、口縁から底部まで部位的にあまり偏りなく破片が失われている。器表の剥離が激しく調整の残る部分は少ないが、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面はタテハケ、底部内面はユビオサエが認められる。底部は欠失部分があるが、やや不明確な平底を成す可能性が強い。

胎土は2.5Y5/6～10YR7/3を呈し、4～1 mmの石英・長石・赤色粒・雲母あり、微細粒子には角閃石・チャートもわずかにある。

全体的に復元された形からは、5世紀中葉から6世紀代までのものと思われる。

ピット1508出土遺物（図141-10） 滑石製紡錘車である。径4.1～4.05cm、高さ1.25cm、孔の径0.75～0.7cm。色調は5Y6/3～N5/0。

孔は途中に段ではなく、上面（小さいほうの面）側の孔の縁の方が丸みが強いため、そちら側からの片面穿孔と思われる。

下面には線刻がある。0.1～2 mmほどの非常に細い線である。先ず頂点を中心の孔に向けた七つの長三角形が刻まれている。割りつけは不正確である。孔の周囲で二辺が交差しており、それは全て右が左を切っているので、右回りに線刻していったものと思われる。隣り合った三角形同士の辺は大体外側へ開く角度だが、1ヶ所のみ平行するものがあり、それが施文開始位置と思われる。それより後に孔の周辺を一周する弧線とその内側にもう1本短い弧線が引かれる。一周するものも歪な形で、端同士が閉じずにずれる。

下面に線刻された三角形は鋸歯文を表現していると思われる。鋸歯文のある石製紡錘車は近畿地方を中心に分布するもので、6世紀後半から7世紀前半に見られ、絞り込めば6世紀末葉から7世紀初頭という短い時期に限定的に生産されたものとの見解もある。

その中でも鋸歯文は側面と下面に刻まれるのが基本で、側面のみのものはある程度の例があるが、下面のみのものは非常に少ない。また、三角形の中を斜格子文で充填するのが通常であり、比較的幅の広

いものが多い。また、三角形の数は、側面では6～8個とばらつくが、下面のものは6個がほとんどである。また、それらの紡錘車のなかで、これはもっとも偏平なものに分類される。

本例の文様は、割りつけもせず、針状の工具で刻まれたと思われ、線の運びも稚拙で、石製品を製作する工人の手によるものとは思えない。むしろ、石製紡錘車には鋸歯文が付くといった情報を持っただけの人物による施文ではないだろうか。

また、上述の年代観が正しければ、調査区内では古墳群の形成も終わった後で、同じ時期の遺構が見られない。同じ時期で現在判明している周辺の遺構としては、東隣の河原城遺跡の古墳時代後期から飛鳥時代前半までの集落があげられる。

ピット149出土遺物（図141-11） 土師器羽釜片である。口縁と鐸の1/4ほどが残存。器表の剥落が激しく、調整が不明瞭だが、口縁内外面と外面残存部分はヨコナデ、内面頸部以下はケズリと思われる。鐸は端部が肥厚し、ゆるやかな凸面を持つ。

胎土は7.5YR7/6～8/4を呈し、5～1 mmの石英を多く、長石・赤色粒を若干、チャートがわずかにあり、微細粒子には角閃石も見られる。

河内地域では古式の羽釜の消滅後、鐸より上に内湾する肩部があり、その上に短い外反する口縁が付く新式の羽釜が登場するのは10世紀中葉頃の事と思われる。また、これは胴部を欠くが、鐸下端の状態から、あまり胴部は膨らまないと思われ、胴部が球胴化し、その最大径が鐸と同じかそれ以上になるよりは前のものと思われる。おそらく10世紀中葉から11世紀中葉頃のものか。調査区西半の集落の時期に重なり、東半にも同時期の遺構があると知れる。

ピット2416出土遺物（図141-12・13） 土師器甌1個体、土師器高杯身部、甌胴部片が出土した。

土師器甌はほぼ完形であったが、整理作業中行方不明となった。記憶の限りでは須恵器的な形態・調整はなく、むしろ土師器の小型丸底壺に似たスタイルであった。胴部の孔は焼成前穿孔である。

12は土師器高杯身部である。身部の8割は残存するが、脚部の破片は一切なかった。内面は、左上がりのナナメハケを密に入れた後、やや左上がりの、単位の長いヨコハケがわずかに入る。底部はナデ。

外面は、下が上を、右が左を切る、やや右下がりのヨコハケを密に入れた後、右下がりの、口縁端部から下の屈曲部まで1ハケで入れるナナメハケをまばらに入れる。下面是ナデ。脚部との接合部分には円盤充填が見られる。

胎土は10YR6/6～7.5YR6/6を呈し、3～1 mmの石英あり、1 mm前後の赤色粒若干あり、微細粒には長石・角閃石も見られる。

時期的には5世紀代から6世紀前半頃までは見られるものであろう。

13は土師器甌胴部片である。器表の磨滅が激しいが、外面にはタテハケが残存し、内面にはハケかナデの工具のアタリの痕跡が残る。

胎土は2.5Y5/1～7/2を呈し、1 mm前後の石英・角閃石若干あり、微細粒子には長石・赤色粒も含まれる。器壁の薄さから、布留式の影響の残る、5世紀代の甌の可能性が高い。

これらの遺物は調査区内の古墳群の形成時期に併行するものと思われる。

土坑1790出土遺物（図141-14） 土師器羽釜の口縁から鐸にかけての部分が、全周の1/4ほど出土している。口縁は内外面ヨコナデ、外面は、鐸は貼りつけ部分も鐸自体もヨコナデ、胴部はユビオサエ。内面は胴部もナデか。しかし、頸部のシャープな稜や胴部器壁の薄さから、内面はケズリ後ナデの可能性強い。

胎土は5 YR5/6を呈し、6～1 mmの石英あり、3～1 mmの長石若干あり、微細粒には赤色粒・雲母・クサリ礫も若干ある。

胴部が球胴化し、最大径が鐸を凌駕するタイプのものと思われ、11世紀後半から12世紀頃のものか。
ピット21918出土遺物（図141-15） 黒色土器A類小片1、須恵器小片1、土師器碗片6が出土。15は6片出土した土師器粗製碗片である。全体の3割程度残存。口縁部は内外面ともヨコナデでそれにより屈曲する。内面のものはナデを止めた痕を残す。内面はそれ以下もヨコナデか。外面はそれより下はランダムなユビオサエを残す。

胎土は10YR7/3～7/4を呈し、1 mm前後の長石・石英・赤色粒わずかにあり。

歪みがあるので、復元法量にはやや不安がある。

また、高台の有無も確認できないためあまり時期を限定できない。7・8と同じ種の粗製碗で、10世紀～11世紀前葉のものか。位置的にも集落に付随する遺構と思われる。

土坑2110出土遺物（図141-16・17） 黒色土器A類片18、須恵器片5、土師器では鉢口縁片1、高台杯碗底部片1、羽釜片3、器種不明小片77が出土している。

16は土師器片口鉢片である。口縁端部には面あり、内外面ともナデか。

胎土は7.5YR5/3～10YR6/3を呈し、1 mm前後の長石・石英・雲母若干あり。

時期は限定できない。

17は土師器碗片である。高台の5割ほどが残存。内面はユビオサエ後ナデか。高台は外側はヨコナデだが、内面にはユビオサエが強く残る。外面底部はユビオサエ後ナデ。

胎土は10YR7/4～5 YR6/6を呈し、3～1 mmの石英・長石・赤色粒・クサリ礫若干あり、微細粒子には雲母もわずかに見られる。

南河内の土師器粗製碗で高台にユビオサエがそのまま残るのは10世紀中葉から11世紀前葉に多いのでそういったものか。

遺構自体は集落の建物を切っているので、これらの遺物は集落の時期を示していると考えられる。

ピット2137出土遺物（図141-18） 中礫大の自然礫と土師器粗製碗が出土している。

18の土師器粗製碗は残存率5割ほど、口縁は内外面ともヨコナデで屈曲、内面はそれ以下もヨコナデ。外面はそれ以下底部もユビオサエがランダムに残る。

胎土は2～1 mmの石英・赤色粒若干あり、微細粒子には長石・角閃石・チャート・雲母も見られる。

大小に法量分化した時期の、小の部類の碗と思われる。10世紀前葉～11世紀初頭にあり得るもので、この遺構が集落に付随するものである事を示す。

ピット2171出土遺物（図141-19） 土師器小片4と灰釉陶器碗底部片1が出土。19の灰釉陶器高台付き碗底部片は高台の3割ほどが残存。内外面とも全体に回転ナデ、釉は内面は底部に及ばず、外面も高台よりやや上で止まり、薄い。高台はやや内弯気味で先は丸い。10世紀頃のものか。

ピット2183出土遺物（図141-20） 中礫大の自然礫3個と土師器粗製小皿1個体が出土している。

20は土師器粗製小皿である。残存率は9割ほど。口縁内外面に1条のヨコナデ、内面はそれ以下もナデ。外面はそれ以下のユビオサエをナデで消しているようで、ユビオサエは底部にのみ残る。口縁は細かく波うち、成形時の歪みと思われる。

胎土は2.5 Y6/3～5 Y6/6を呈し、3～1 mmの長石・石英・赤色粒・チャートを若干含む。

平安時代の、杯と皿の法量的境目が崩壊した後に出現してくる皿と思われ、平安京では皿Nの系統に

なるが、河内地域では粗製の小皿類として黒色土器の小皿と共に10世紀末～11世紀初頭頃に成立していくもので、以後、法量の縮小化と製作技法の粗雑化が進む。

これはその早い時期のもので、10世紀末から11世紀前半頃のものと思われる。集落の範囲内で時期的にもそれに属するものと言えよう。

ピット1552出土遺物（図141-21） 4面古で検出されたが、本来4面から切り込んでいた可能性の強い遺構である。同一個体の土師器甕片が23片出土した。

21はその土師器甕片である。器表剥離が激しく、胴部の調整は不明、口縁部は内外面ともヨコナデのようで、端部は上につまみ上げる。

胎土は5 YR4/8～5/8を呈し、2～1 mmの石英・長石・角閃石をわずかに含む。微細粒子には雲母もわずかに見られる。

あまり時期を限定できる要素はないが、10～11世紀頃のものか。

全体的に見ると、調査区内での主な遺構の時期に分別できる遺物が多い。即ち、古墳群の形成時期のもの、集落の存続時期のもの、その後の耕地開発の時期のものである。

特に、集落存続時期のものは、集落での土器様相の復元に関して有力な資料となり、耕地開発の頃のものは、その開発過程での各遺構の前後関係と時期に関する資料として貴重である。（三宮）

5. 1~3面遺構出土遺物（図142、図版63）

溝001出土遺物 須恵器片7（器台片1）、土師器片9、瓦器片2（椀片1）、湊焼き片6、瓦片4、須恵質埴輪片1、須恵質瓦片転用権衡1、が出土している。

図142-1は須恵質瓦転用の権衡と思われる。おそらくは平瓦の破片を利用し、最終的に全ての面をミガキによって仕上げている。上辺と下辺はやや丸く弧を描き、側辺はやや下に開く。前面には瓦であった時点の縄目をわずかに残し、上部、穿孔付近はやや上方に傾斜した面を成す。上部の穿孔は両面穿孔で、前面より後面の方が穿孔位置が低く、斜めに孔が通る。

胎土はN7/0を呈し、7mmのチャート数個あり、4~1mmの石英・長石多くあり。

重さは現状で101.5gあり、欠失部分を勘案すれば、ほぼ30匁と考えられる。

2は須恵質埴輪片である。タガの部分での復元径は43.6cmとなる。外面は、幅広い凹面の間が稜を成すようなタテハケが、右が左を切る形で入り、それをタガのヨコナデが切る。内面は同じタテハケがやや左傾ぎみに、下が上を、右が左を、切って入り、それを、まばらなタテユビナデが切る。

胎土は、5Y5/1を呈し、3~1mmの長石・石英若干あり。

いわゆる日置莊系の埴輪と思われる。

以上の遺物を見れば、湊焼きがあり、瓦に焼し瓦が含まれることから溝001の埋没は江戸時代頃のことと考えられる。

溝003出土遺物 須恵器片10（甕片2）、土師器片21（高杯脚部片1）、瓦器片2、瓦片2（須恵質1、焼し1）、陶磁器片2、埴輪片7（須恵質3、土師質4）、須恵器片転用面子1が出土している。

図142-3は須恵器片転用面子と思われる。片面には、やや木目が浮き出た平行タタキが見られ、その裏面には同心円文タタキが見られるので、甕の破片を利用しているものと考えられる。

側面には打ち欠きが見られ、それによってだいたい径3cm弱の円盤形に作られている。

共伴遺物から、江戸時代以降のものと思われるが、土器片の出土する遺跡ならではのものだと言える。

遺構自体は、1面から切りこんだ、現代のものである。

溝005出土遺物 須恵器片1、瓦器片3、土師器片7、須恵器片転用面子1が出土している。

図142-4は須恵器片転用面子と思われる。概要はほぼ溝003のものと同じである。側面の打ち欠きは全て両面からなされている。遺構自体も溝003と同じ性格のものである。

溝2427出土遺物 須恵器片6（甕片4）、土師器片4（羽釜片1）、埴輪片2、瓦器片1、陶磁器片2（壺口縁部？1）、サヌカイト製石鏃2が出土している。

図142-5は土師器羽釜片である。口縁が直立し、胴部が寸胴のタイプのものである。外面は、口縁から鐸の下端まではヨコナデ、それ以下は煤の附着で見にくいかヨコケズリ後ヨコナデのようである。内面は口縁から鐸の上端あたりまではヨコナデ、それ以下は、下が上を切るヨコハケである。上のナデがハケを切る。内面もやや炭化物附着。胎土は、10YR6/1を呈し、3~1mmの石英・長石・チャートを含む。

このタイプの羽釜は、13世紀に摂津地域で見られるようになり、15世紀には和泉地域でも出現するようだが、河内地域ではほとんど見られないものである。時期は限定しがたい。

遺物から推測される遺構の埋没時期は近世頃か。

溝1048出土遺物 須恵器片3（擂り鉢口縁片1）、土師器片7（甕片1）、埴輪片6、瓦器片5（椀

1個体、皿1個体)が出土している。

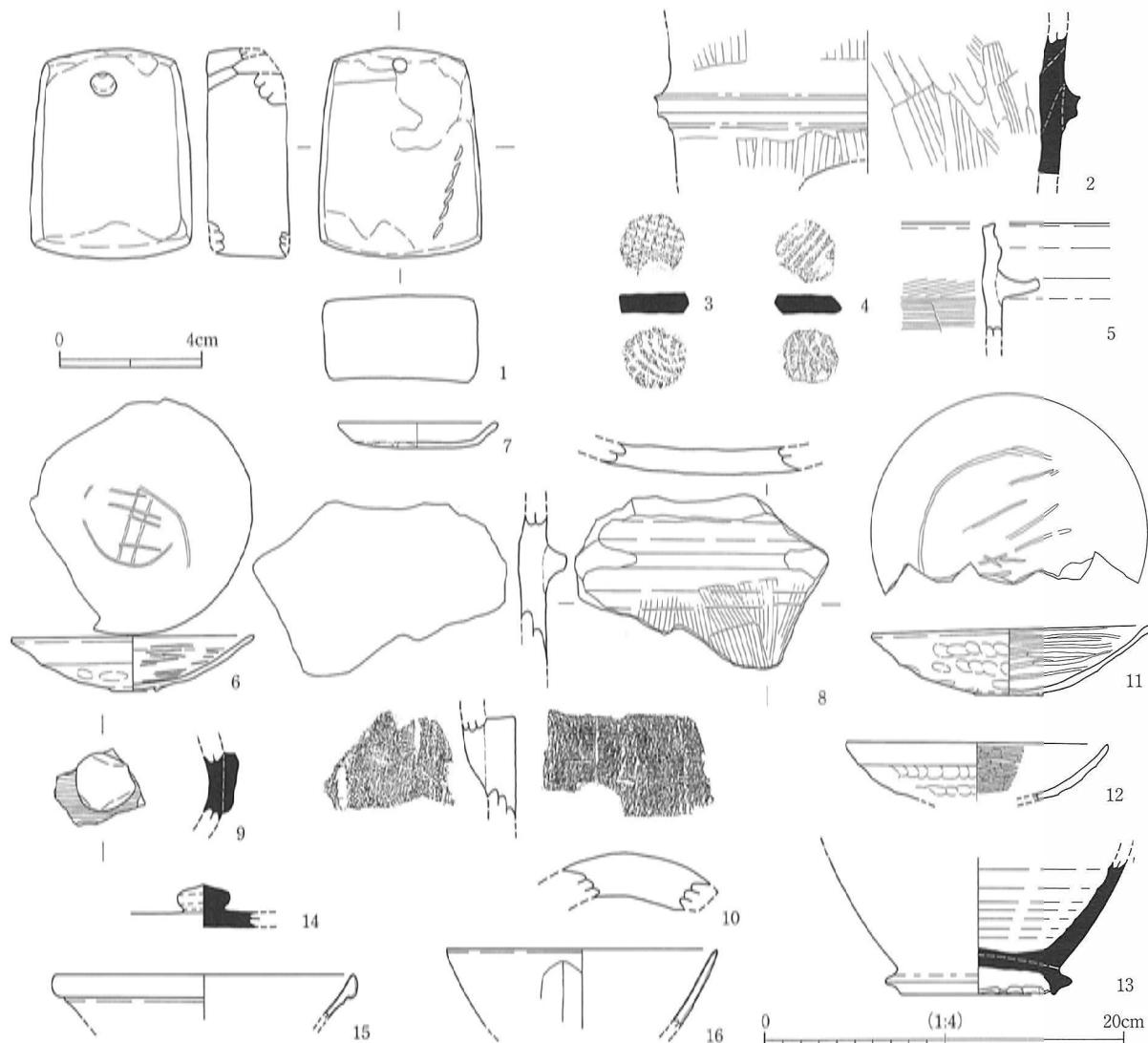
図142-6は瓦器碗である。口縁部周辺のみ半分ほどを欠く。外面は、口縁に幅広のヨコナデ1条、それ以下はユビオサエ後、まばらにゆるいナデ。底部には径も小さく、低い高台がつく。断面はやや内傾した三角形。内面は、先ずヨコナデ、口縁のナデは1条独立して入る。その上にまばらなミガキ。ミガキの幅は細く、約1mm。見込みには粗い格子状に入り、上のものに切られる。

器表はやや荒れ、2.5GY8/1を呈し、胎土は5Y7/3と、若干黄色味を帯びる。2~1mmのチャート・石英・長石をわずかに含む。

尾上編年のIV-1~2ぐらい、13世紀中葉～後葉頃のものか。

図142-7は瓦器小皿である。ほぼ完形だが、磨滅が激しい。内面は、底部調整不明、口縁はヨコナデの痕残る。ミガキの有無は不明。外面は、口縁ヨコナデ、ミガキ不明。底部はユビオサエ残る。

器表は磨滅のためN5/0を呈し、胎土は2.5Y6/4と少し黄味を帯びる。1mm前後の長石・石英をわずかに含み、微細粒子には赤色粒・雲母も見られる。



1・2：1トレンチ2面001溝、3：1トレンチ2面003溝、4：1トレンチ2面005溝、
5：6トレンチ2面2427溝、6~8：6トレンチ2面1048溝、9：6トレンチ2面2420竪溝群、
10：6トレンチ2面2423土坑、11：1トレンチ3面117ピット、12・13：3トレンチ3面604土坑、
14・15：3トレンチ3面2345溝、16：3トレンチ1面617溝

図142 1~3面遺構出土遺物

瓦器の小皿12世紀以降のことだが、ミガキがないものとすれば、平安京VI期中段階、13世紀中葉以降のものと言える。

図142-8は土師質埴輪片である。径の復元はしにくいが、いずれにしてもかなり大きなものと思われる。外面は、タテハケをタガのヨコナデが切るが、一部消え残ったハケがタガの裾にまで及んでおり、タガを貼り付けた後にタテハケを入れていることが分かる。内面は器表剥落激しく、調整不明。

胎土は5 YR5/6~10YR7/4を呈し、3~1 mmの石英・赤色粒・長石を含み、微細粒子には雲母もある。

遺物から考えられる遺構の埋没時期は13世紀中葉から後葉である。

畝溝群2420出土遺物 6 tr. 2面のほぼ中央で検出された畝溝群で、範囲が四角くまとまり、この一角のみ耕作深度が異なっていたと思われる。1層下面の遺構である。

遺物は、須恵器片6（器台片2、甕片1）、土師器片4、瓦器片2だが、ここでは図142-9を紹介する。須恵器の溶着資料である。大きな破片は、内面回転ナデ、外面カキ目の壺胴部片である。しかし、それに溶着する小さな破片は円盤状で割れ面を持たない。類例を知らないが、焼成前に粘土塊が附着したものだろうか。

土坑2423出土遺物 図142-10の焼し丸瓦が出土している。下面是布目と紐の圧痕が見られ、わずかに側縁のヘラ切りの平坦面も残る。上面はやや磨滅するが、半分ナデ消された縄目が残る。

器表は7.5Y6/1を呈し、胎土は7.5Y8/2で、2 mm前後の石英・クサリ礫を含み、微細粒子には長石もある。

ピット117出土遺物 図142-11の瓦器椀が出土している。残存率は6割といどである。外面は、口縁端部はヨコナデが入るようだが、そのすぐ下から体部上半は、右が左を切る、水平方向のユビオサエ列が2条めぐる。その下はユビオサエが散在する。高台は矮小で、底部が同じ高さまで下がる。断面は三角形。

内面は、隙間の開いたミガキが見られる。体部のミガキは下が上を、右が左を切り、上から見て左回りに入れられたことが分かる。見込みのミガキは、幅3 mmほどと太く、粗く平行に走るもののが見られるが、わずかにそれらと交叉するものもあるので、斜格子状であったかもしれない。

器表は若干荒れ、N4/0~5/0を呈し、胎土はN7/0を呈する。1~2 mmの石英・長石をわずかに含む。

尾上編年の和泉IV-1でも早い頃か、13世紀前葉のものと思われる。

土坑604 須恵器片3（壺底部片1）、瓦器片2（椀1）、土師器片1が出土している。

図142-12は瓦器椀片である。残存率は2割ほど。外面は、口縁ヨコナデ、その下には左が右を切る、水平なユビオサエ列が2条認められる。内面は、密にミガキが入る。ミガキの幅は2 mmほど。

器表はN4/1を呈し、胎土はN8/1を呈する。粗い砂粒は認められない。

法量と傾きの復元にやや難があり、外面にミガキなく、内面のミガキが密な事も矛盾している。しいて言えば尾上編年の和泉III-2、12世紀末~13世紀初頃の、イレギュラーなものか。

図142-13は須恵器壺底部片である。高台全周の1/3ほどが残存している。外面回転ナデ、内面回転ユビナデ。内面底面には自然釉の溜まりが見られる。高台端部には、内面に打ち欠きが成されている。打撃は下方から成され、右の打ち欠きが左を切る。

胎土は、N8/1を呈し、4~1 mmの長石・石英・黒色粒あり。

平城宮 I～II型式、8世紀前半頃のものか。

遺構の埋没時期は、遺物からは限定しにくく、12～13世紀頃としか言えない。

溝2345出土遺物 須恵器片2（瓶子底部片1、杯蓋片1）、白磁碗片1が出土している。

図142-14は須恵器宝珠つまみ付き杯蓋片である。残存部分の調整は全てナデ。胎土はN7/0を呈し、1mm前後の石英をわずかに含む。微細粒子には長石・黒色粒もあり。奈良時代のものか。

図142-15は廈門系の白磁碗片である。同安窯系か。残存率は口径の2割ほど。釉の剥ぎ取りは見られず、その下は全体的にナデのようだが、外面下方はケズリが入るか。玉縁の下端は明確で、釉は薄い。12世紀中葉から13世紀前葉頃のものか。

溝617出土遺物 3 tr. で検出された1面に所属する南北溝の一つで、須恵器片33、土師器片21、瓦器片8などが出土しているが、ここでは図142-16の青磁碗について述べる。

残存率は口径の2割ほど、復元径は17cmほどになる。残高4.5cm。外面には輪郭を片彫りした鎬蓮弁文がある。口縁端部に釉の剥ぎ取りはない。龍泉窯系のものか。

平安時代後期から、鎌倉時代にかけて、かなりの有力者しか持ち得なかつたもので、この出土はそれなりの意味があるものと思われる。

以上、1～3面の遺構出土の遺物を見てきたが、ここで目立つのは、13世紀代の瓦器が、実質3面の遺構から出土していることである。これは3面でも新しい時期、おそらくは2層が成立する直前の時期を示しているものと考えられる。

また、青磁・白磁の破片が出土しているのも注目される点である。地域の有力者の館などの遺構が、付近に存在する可能性も考えておく必要があろう。

他に、近世遺物として、須恵器や瓦の破片を再加工したものがあるのもおもしろい。（三宮）

6. 各層出土遺物（図143～145、図版62・65）

（その2）調査区の各層からは、多種多様の遺物が出土した。総じて細片ばかりであるが、器種・器形の分かるものはできる限り図化した。

表採遺物（図143、図版62） 1～4、6～9は陶磁器である。1・3は波佐見窯系染付碗で、1は高台底部に丸福の裏銘がある。18世紀のものと考えられる。2は景德鎮窯系青花折花文碗で、16世紀後半のものと思われる。4は唐津窯系碗である。見込みは胎土目積みで、けずり出し高台である。17世紀初頭と思われる。6・7は同安系白磁碗のIV-2類で、時期は13世紀第1四半期である。8は龍泉窯系青磁印花文碗で、15世紀後半に属する。9は同安窯系青磁皿のI 1 b類で、時期は13世紀と考えられる。5は近世の巴紋軒丸瓦片である。10は土師器壺口縁部である。11は須恵器壺口縁部で、口縁端部を平たくおさめており、復元口径は25.6cmある。

1層出土遺物（図143、図版62・65） 12～15、18～22は陶磁器である。12は信楽のすり鉢である。13は未焼成の中国青花碁笥底皿で、16世紀後半に属する。14は美濃窯系鉄釉天目茶碗である。15は波佐見窯系染付一重網目文碗で、18世紀に属する。18～20は龍泉窯系青磁蓮弁文碗のI 5 b類で、13世紀第3四半期のものである。21は唐津窯系碗で17世紀後半のものである。22は白磁四耳壺で、13世紀に属する。25～32は須恵器である。25は杯蓋で7世紀代、29は高台をもつ杯身で9世紀代のものである。26は壺、27は壺の口縁部、28は大型高杯か器台の脚部、30は蓋のつまみ部、31は高杯で、5世紀後葉のものであろう。28は下端付近に透かし孔の一辺が2個所で認められるが、一方はほぼ垂直に端部まで切りこんでおり、もう一方は少し傾き気味と傾きが異なる。小片のため詳細は不明であるが、図面では縦長方形と三角に復元した。31は円形の透かし孔を三方に穿つ。また、32は長脚三方二段透かしをもつ高杯の脚部で、6世紀後葉のものである。16は瓦質すり鉢の片口部である。17は瓦器椀で、高台はしっかりしているが、径は3.8cmと小さい。23は須恵器片を円形に加工したおはじきである。24は須恵質円筒埴輪片で、外面はタテハケ一次調整である。33は弥生後期の甕底部である。風化が著しいがタタキが部分的に残存する。34は石帶（丸鞘）である。ほぼ半分を欠損するが孔は2ヶ所残存する。特に表面と周縁部を丁寧に研磨調整している。ほかにも、6トレンチから鉄滓が出土した（図版65）。

2層出土遺物（図144、図版62・65） 2～6は陶磁器である。2・3は白磁碗のIV-2類で、時期は13世紀第1四半期のものである。4は龍泉窯系青磁蓮弁文碗のI 5 b類で、13世紀第3四半期のものである。5は龍泉窯系青磁碗のI 2 aで、13世紀第2四半期のものである。表面は二次焼成を受けている。6は綠釉陶器の椀である。貼りつけ高台で、胎土は須恵質である。残存する見込み部にトチンの痕跡が3ヶ所確認できる。10世紀代のものであろう。8～17は須恵器である。8・9は蓋で低く扁平なつまみを有する。10は高台を有する大型の杯B、11は杯A、12は立ち上り部が内傾した杯身である。13は高台を有する大型の皿、14・15は壺の底部である。16は台付壺で、外面にはタタキを施す。脚部には四方透かし孔を穿つ。17の器種は不明である。貧弱な突帯を貼りつけたものとして復元しているが、左面はナデが残存しており、貧弱な高台を有する底部片とも考えられる。12は6世紀後葉、それ以外は9世紀代のものとみられる。1は瓦質すり鉢である。7は鉄砲の玉で、素材は鉛と思われる。

2・3層出土遺物（図144、図版65） 20～31は須恵器である。20は瓶子で、底部には静止糸切り痕が確認される。21は壺蓋に復元したもので、外面には降灰痕が残存する。22は壺底部で、静止糸切り痕がみられる。23・25は鉢底部片である。24はすり鉢である。26～28はしっかりした高台が底部の内側に付く杯である。29は薬壺蓋、30は平瓶と思われる。30は外面に自然釉、内面の一部にも釉が付着する。31

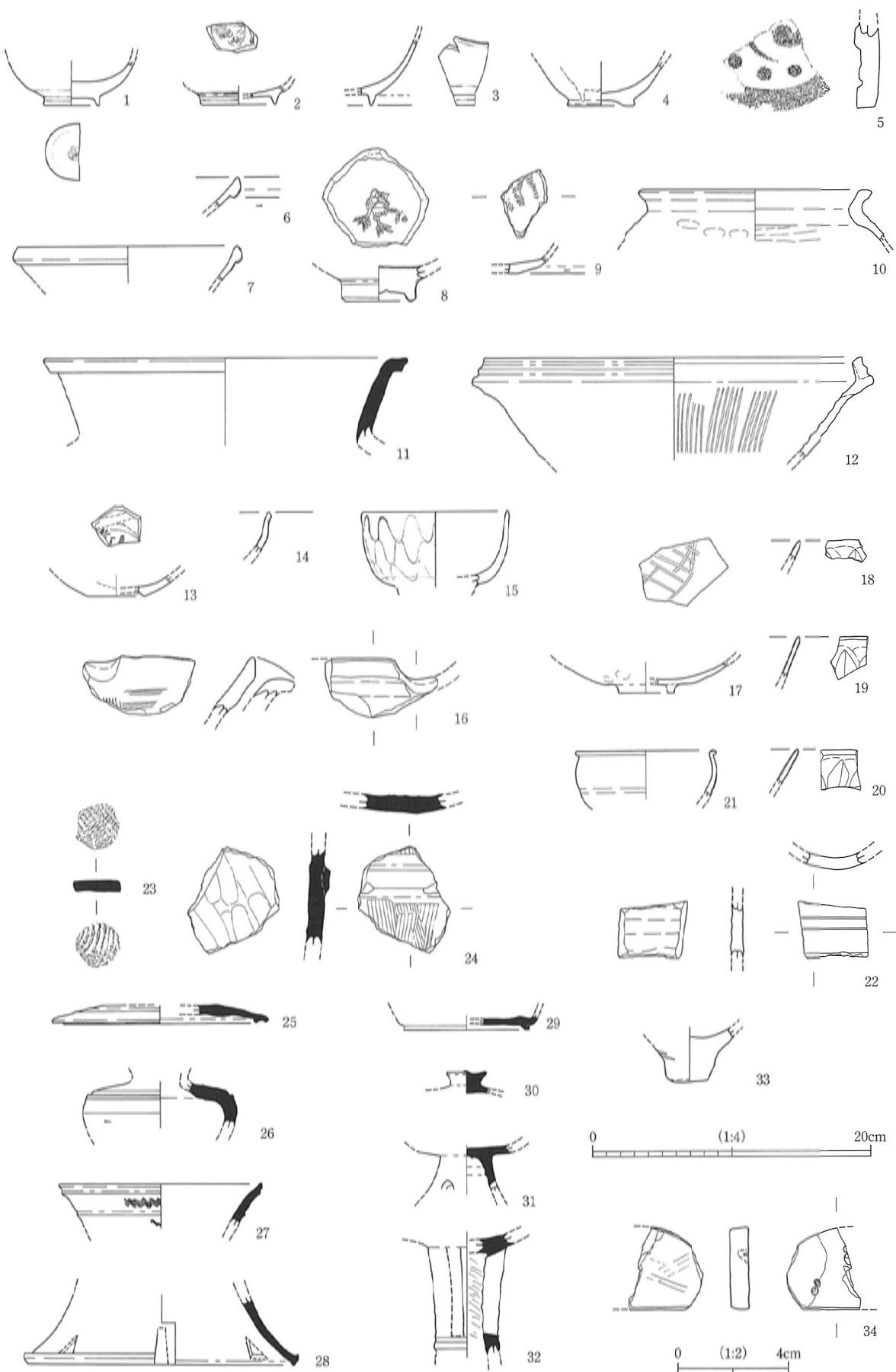


図143 表採及び1層出土遺物（1～11：表採、12～34：1層）

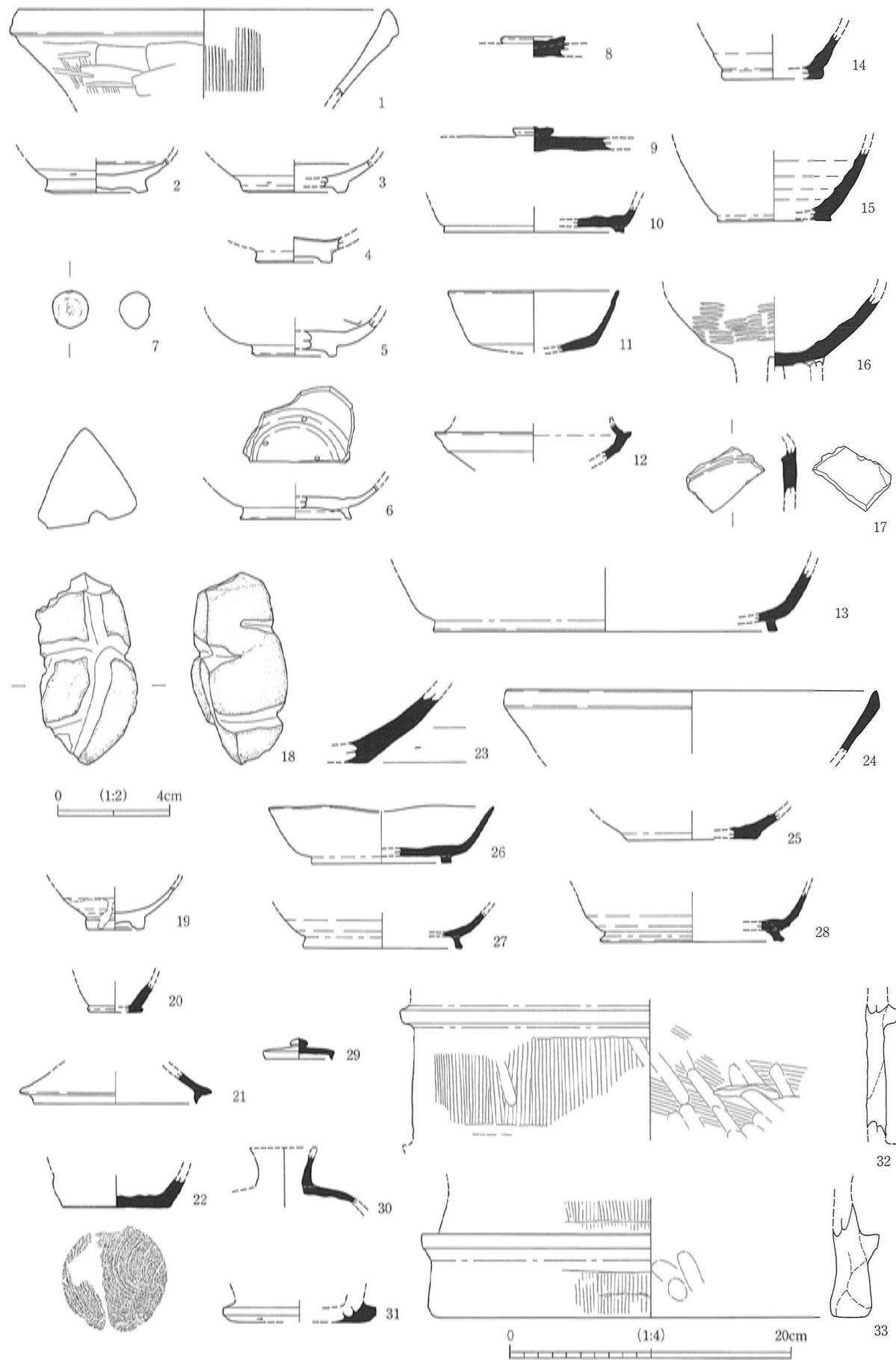


図144 2層、2・3層出土遺物（1～17：2層、18～33：2・3層）

はこね鉢底部である。9世紀から10世紀までのものが含まれる。18は砂岩製の石製品である。周囲に溝を穿っており錘に用いられたものであろうか。19は唐津窯系碗で、ケズリ出し高台である。32・33は土師質の円筒埴輪で、ともに外面タテハケ1次調整で、無黒斑である。32の内面には接合痕が明瞭に確認され、ヨコハケのちナデを施している。

3層出土遺物（図145、図版62・65） 1・3は黒色土器A類の椀で、3は突出した高台を有する。2は瓦器椀で、外面の調整はヨコナデとユビオサエである。4・5は龍泉窯系青磁蓮弁文碗のI 5 a類で13世紀第4四半期のものである。6～9は土師器で、6は把手部、7・8は甕口縁部、9は羽釜である。10～15は須恵器で、10は杯蓋、11は高台を有する杯身、12は有蓋高杯の杯部、13・14はつまみを有する杯蓋、15は甕口縁部である。12は6世紀後葉、それ以外は9世紀のものである。17は土師質円筒埴輪で、突帯の下にタテハケ1次調整が残る。18は平瓦片で、凹面は粗い布目痕の上に斜め方向の工具痕跡が残る。凸面には縄目が確認できる。このほか、研磨調整を受けている平石が出土した（図版65）。片面は欠損しているが残存するもう一方の面と側縁部は研磨を受けている。残存する辺の長さは2辺とも3.5cmをはかる。用途は不明である。

4層出土遺物（図145、図版65） 16は弥生後期の壺底部と考えられる。風化により表面は摩滅しているが、内面にはユビオサエが確認される。（大庭）

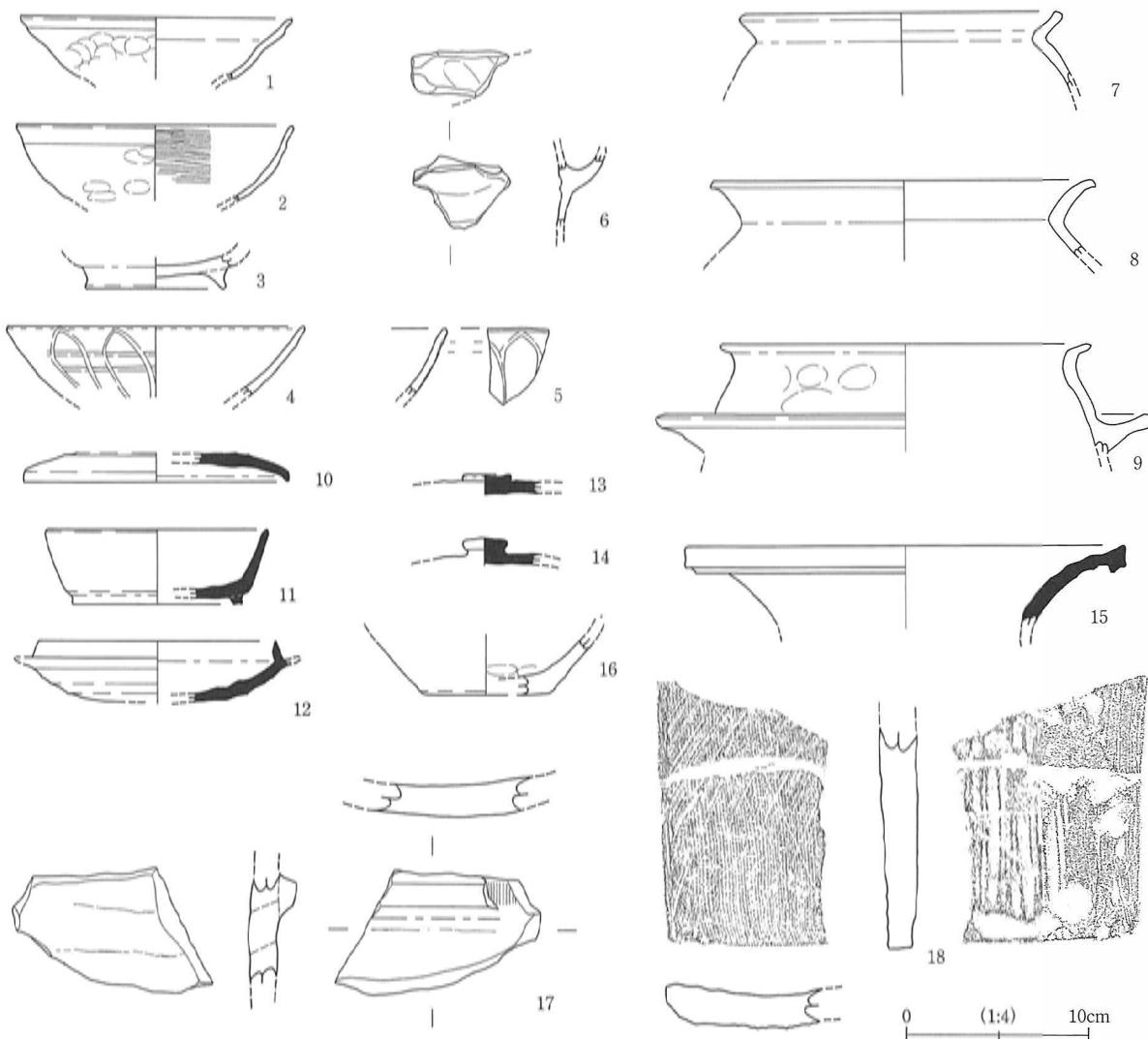


図145 3層、4層出土遺物（16：4層 それ以外は3層）

第4項 小結

1. 出土石器遺物

(その2) 調査区では、旧石器時代～弥生時代までの石器遺物が合わせて142点出土した。ナイフ形石器や石鏃・石匙などの製品、剝片類、楔形石器、石核など多岐にわたる。全面がネガティブ面の石核や、集中した打点を持つ石核・剝片も出土しており、当遺跡内での石器製作も想定されるが、出土石器遺物はすべて元来の位置を留めていない遊離資料であり、帰属時期も明確ではない。したがって、ここでは主として製品について遺跡の特徴をまとめる。

まず、(その1)～(その3)調査区出土石器遺物のうち、製品・剝片・石核など50点の試料を産地同定のため分析委託した。詳細については後章に譲ることとするが、大部分の石材は当遺跡から東に約10kmの所に位置する二上山で産出されるサヌカイトであった。

旧石器時代の所産と考えられるものとしては、ナイフ形石器・翼状剝片・両極剝片があげられる。これらの中には国府型ナイフ形石器と考えられるものが何点か含まれる。同一の中位段丘（河内台地）の北端に位置する長原遺跡ではナイフ形石器の製作址が確認され、羽曳野丘陵末端部の中位段丘面に位置する翠鳥園遺跡でも石器製作址が検出されている。郡戸遺跡を含むこの地域は、石器の素材となるサヌカイトの産出地で知られる二上山とは地理的に近いため、大阪府の中でも特に旧石器時代の遺跡が高密度で分布する注目すべき地域である。

また、縄文時代の遺物としては石鏃の出土の多さが目を引く。今回出土した石鏃の約半数は先端が欠失したもので、これらは使用されたものとみられる。その他の製品としては石匙が数点出土したのみで、土器も出土していない。このことから標高約38～40mの比較的平坦な場所に立地する郡戸遺跡は、縄文時代には主として狩猟地として利用されたようである。これに関して隣接する河原城遺跡では、当遺跡から約2km東の中位段丘を下った谷底平野で縄文時代前期とみられる石器製作址が検出されており、1862点にも及ぶ石核・剝片・微細なチップなどと共に石鏃が2点出土している。

縄文時代の石鏃の大半は二上山サヌカイト製であったが、下呂産と同定できる石鏃も1点出土している。(その1)調査区出土石鏃の中には金山東産の石材を利用したと同定されたものもある。サヌカイト生産地である二上山を控えた当地域で、このような遠距離地域の石器石材が少ないながらも持ち込まれていることは、縄文時代の広範な石器石材交流の意味を考える上で示唆的である。

弥生時代の遺物としては、有茎式石鏃が1点のみ出土した。当該期の土器もほとんど出土しておらず、近隣にも弥生時代に属する遺跡・遺構は顕著ではないため、弥生時代における遺跡周辺の中位段丘上の活動は希薄であったとみられる。(大庭)

2. 古墳の特徴

今回の調査では、古墳時代中期から後期にかけての小型の方墳（古墳1～7）が検出された。古墳の評価については、後述する第VII章の論考で詳細に論じられているので、ここでは調査で確認した事実についてまとめておきたい。

まず、古墳の立地をみると、7基の古墳はすべて遺跡東半部の（その2）調査区と（その3）調査区で確認され、遺跡西半部の（その1）調査区で検出されている開析谷から東側へ高くなつた中位段丘上の比較的平坦な場所に位置している。

次に、古墳の位置関係をみると、各古墳の主軸はおおむね東西、南北方向を指向しており、古墳4・5が隣接している以外は、約10～65mの間隔を置いて点在している。（その2）調査区は旧妙法寺池を挟んで東西に分かれており、東側の調査区の西端で検出した古墳6と西側の古墳群とは若干距離があるが、その間に旧妙法寺池の造営に際して破壊された古墳が存在していた可能性もある。また、古墳6以東では古墳の存在は確認されていないことから、ここが古墳群の東端であったと考えられる。このことから、調査範囲内に限ってみれば、東西約130mの間に散在して群を形成した、比較的小規模な墓群単位であったとみることができる。検出した古墳も小規模方墳で占められており、最も大きいものでも古墳4および古墳5が一辺8m前後であり、それ以外は一辺4m前後と小型である。

検出した古墳はいずれも墳丘・周溝が後世に著しい削平を受けており、墳丘主体部が確認されたものはないが、古墳4では他と比べて周溝の深さが深く、周溝内埋葬の可能性のある土坑が1基確認されている。また、この古墳4では墳丘の肩部に墳丘整形時のものと考えられる盛土がわずかに残存していた。さらに性格は不明であるが、古墳1・古墳2・古墳4では周溝の外縁部が部分的に広がる張り出し部が認められた。

各古墳の周溝内から出土した遺物のうち図化可能であったものとしては、古墳1から須恵器無蓋高杯1点、杯身6点、杯蓋4点が、古墳2から須恵器把手付椀1点が、古墳3から杯蓋1点と有蓋高杯蓋1点が、古墳4から須恵質紡錘車1点、須恵器こね鉢1点、無蓋高杯1点、把手付椀1点が、古墳6とその周辺からは円筒埴輪8ないし9点が、それぞれ出土した。また、古墳2と隣接した落込み1187では須恵器無蓋高杯2点、杯蓋2点、杯身2点が出土している。

供膳形態の須恵器を中心とした供献は、5・6世紀代の小型方墳としては一般的なあり方であり、特に古墳1の周溝からまとまって出土した杯身・杯蓋のセットと高杯は、原位置をとどめていないものの当時の供献様式を復元する上で重要な資料となろう。また、古墳群中、唯一埴輪が出土した古墳6は一辺4m未満の小型墳であり、なぜこのような小型の墓にのみ埴輪が持ち込まれたのかについては、今回の調査では判らず、課題として残されている。

最後に、出土遺物からみた古墳の造営時期は、古墳4が5世紀中葉、古墳1・2が5世紀後葉～末、古墳3が6世紀前葉、古墳6が6世紀前～中葉とみられる。（大庭）

3. 平安時代集落の構成と変遷

建物群の概要（図118）

（その2）調査区の西端から、一部（その1）調査区の東端にかけて検出された平安時代の集落は、18棟の掘立柱建物からなり、その中で重複するものがあるところから、一定の期間の中で建物が建て替えられながら存続していた事が分かる。

特に建物XIII・XIV・XVが一ヶ所で重複しており、少なくとも2回の建て替えが行われた例が存在している事が分かる。また、建物VとVIII、XとXVIIのように、重複していなくても、あまりに接近しすぎて同時期存在が不可能と考えられる例も見られる。

ただ、直接建物の前後関係を知り得るような遺構の切り合いは、建物XIIIの柱穴が建物XVの柱穴を切る例が唯一のものである。

他に、状況証拠的に、前後関係を考える参考になる資料といえば、建物XVIIIの棟ラインに位置するピットが、建物XVの柱穴に切られる事、建物Vの柱穴が全て検出された時点で、部分的な堆積や土壤化の進行で、建物VIII・XVIの柱穴のいくつかが検出されていなかった事、などがあげられる。

しかし、建物の方位性を見ても、正方位からのズレは、0°から9°までまんべんなくあり、それによるグルーピングはしにくい。わずかに、建物IV・IX・XIが、北が西に傾くものとして抽出できるていどである。

また、柱穴の形や大きさも、元々全ての柱穴が小さく、不整形な円形が多いため比較ができない。柱穴の深さのパターンも、棟持柱のみが深いもの、隅柱のみが深いもの、棟持柱と隅柱が深いもの、などが抽出できるが、さして有効な見通しは立たない。

遺物に関しても、建物IIIの柱穴出土遺物によって10世紀後葉から11世紀前葉頃という定点をえられるものの、各々の遺構の時期差は抽出しがたい。

以上のことから前提として、以下この集落の分析をすすめ、その時期的変遷の復元も試みてみたい。

集落の構造

この集落は西側に落ちる、やや大きめの段差の上、その縁辺に立地している。その段差は、さらに西側、（その1）調査区で検出された、古墳時代以前から形成され、奈良時代以降に埋没する、浅い谷状の浸食地形があるが、その浸食作用の古い時期に形成された、河岸段丘状の地形と考えられる。

現在も、この段差より北西側は比較的平坦で、条里制地割が良好に遺存しているのに対して、ここよりも東側は、やや高く凹凸がある地形で、耕地区画も、自然地形に合わせたものになっている。

今回の調査成果においても、東側は集落存続時期までは、あまり耕地開発が進んでいなかったようだ、それに対して西側は、条里制地割が示すように、平安時代には耕地が開発されていたと思われる。

つまり、この集落は、その当時、西に耕地の広がる高台の縁辺に立地していたと言える。

集落の広がりに関しては、西は上述の段差に限られるものとみてまず問題ない。南は地形からすれば調査区外へまだ広がる可能性が強いといえるだろう。東は、後世の削平により消滅した建物があった可能性もあるが、建物III・IVが、建物が密集している部分から距離をおいて存在している状況を見ても、それが集落の東限であるとして良いと思える。北側は、離れて単独である（その1）調査区建物の北側に、西の段差が回りこみ、さらに北東側に、その段差に抜ける小さな浸食痕が見られるのが北限として良いだろう。南側の形が不明だが、現在判明している範囲では、南北に細長い形の集落範囲と言える。南北長85m以上、東西幅50mほど。

建物の配置を見ると、先ず、建物III・IV・（その1）調査区建物33・36など、集落周辺部で、中心の建物群と距離を置き、単独で建っているものが目に付く。それらはみな小さな建物で、1世帯の住居とは考えにくい。むしろ、集落と外側との境界付近にある、その共同体の公的性を持った建物のような印象を受ける。4棟中3棟が、正方形に近い平面形を持った、2×2間の建物であるのも、何か意味があるのだろうか。

中心に集まる建物群は、建物IXと建物Xの間でやや間があき、北群と南群に分かれる。両群を見ると、北群に建物X・XII、南群に建物VII・VIIIと、各群に2棟ずつ、2×3間で妻側に庇の付く建物がある。

これらの建物は集落の中でも大型のもので、各群の中心的建物と思われる。南群では2棟が重複しているので、そういう建物が同時期存在ではなく、建て替えられていると考えられる。

北群の、建物X・XIIは、直角に近い位置関係にあり、同時期のものと見ても良い感じだが、建物Xは北側庇のさらに北側に何らかの構造があった可能性があり、建物XIIも、東側妻にも庇があった可能性があり、その場合、両者は重複してしまう事になる。

小群の抽出と、その前後関係

以上の事をふまえ、正方位からのズレが0～3°までのものを一応正方位のグループと仮定し、他の建物も、個々の厳密な方位性ではなく、周辺の建物との関係で、方位性によるグルーピングを行い、南北両群の中で小群を抽出してみたい。

北群の中で正方位の小群となるのは建物XII・XIV・XVIIIである。その他を見ると、重複する建物XIIIとXVは方位が同じだが、建物XIIIの東辺の傾きが強く、それからは建物VIIと方位性が近いと言える。すると、建物XとXVがもう一つの小群として抽出できる。建物XIは、西に傾くものとして、北群の中では単独で小群を形成する。

建物XVは建物XIIIより確実に古く、建物VIIIがXVより古い可能性を否定すると、XVIII→XV→XIIIと言う組列が成り立ち、北群の中で3時期が設定できる。建物XIを各建物の配置間隔から建物XIIIの小群に帰属させると、XII・XIV・XVIII→X・XV→XI・XIII・XVIIという変遷が仮定できる。

北群をA群とし、各々をA-1群・A-2群・A-3群としたい。A-1群は3棟がかなり近接するが、軒の出方を勘案しても、建たないことはないだろう。また、棚列Iも方向性から、ここに属する可能性が高い。ただ、この小群では、建物VIIIがXIIの本体部分より大きく、どちらが中心的建物であるか分からぬのが若干不自然ではある。

A-2・3群は、建物の配置がやや散漫な感じを受けるが、棟数が少ないためなんとも言えない。ただ、2棟の小群の場合、「く」の字形に、直角に配される例が多い事からすると、少し異質ではある。

なお、建物XVとXVIIIの前後関係の仮定が崩れればA-1群の位置付けが問題となるが、A-2・3群は建物配置の方向性から見ても連続性が高いと思われる所以、その場合はA-1群が最後の時期となる。

南群で正方位の小群となるのは建物V・VIII・XVIだが、VはVIII・XVIとは、近接・重複関係にあり、同時期存在はありえない。また、建物XVIは、全体形が不明のため方位性に疑問が残る。検出状況を参考にすれば、3棟の内、建物Vが一時期新しいものである可能性が高い。

建物VIIIとVIIは、北群の様相を参考にすれば、正方位の建物VIIIから、方位のずれた建物VIIに変わったようにも考えられるが、建物VIIIの本体部分の柱穴が、規格どおりに建てれば建物VIIの柱穴と重複するはず

のものを、わざわざ規格性を崩すかのように位置をずらしているのは、見逃せない事実であろう。

以上の事を肯定すれば、建物VII→VIII→Vという組列が成り立ち、南群もやはり3時期の変遷を考えられる。建物VIIと方位が近いのは建物VIで、建物VIIIはやはりXVIと方位が近い。ならば方位的に孤立している建物IXをVと結びつければ、3時期2棟ずつの変遷が考えられる。

すなわち、VI・VII→VIII・XVI→V・IXという変遷が仮定できる。南群をB群とし、各小群をB-1群・B-2群・B-3群としたい。

改めて見ると、建物VIIは、集落成立以前の耕地区画に関連する溝と考えられる溝2126を南辺で切っており、方位もそれに近い。その事もB-1群がB群内で一番古い事を傍証しているとも言える。

ただ、B-3群に関しては、どちらも小型の建物で、距離も離れ、方位も異なるところが、難点といえる。しかし、B群自体がまだ調査区外に広がるので、その部分が将来明らかになれば、解釈もまた変わらであろう。

A・B両群が同じく3時期に分かれたので、それらを同じ時期として、集落全体が3時期に変遷していったと仮定し、各々I期～III期としておく。掘立柱建物の耐用年数を20年と仮定すれば、60年ほどの期間の事か。

そして、各時期に孤立して群を成さない建物をまとめてZ群としておくと、それには建物III・IV、(その1)調査区建物33・36の4棟が含まれる事となる。

(その1)調査区建物33は、正方位を向き、建物VIIIが一番近い事から見ても、I期に属する可能性が高いと言える。建物36はやや西に傾き、同じ方位性の建物IX・XIが規模も似ており、規模だけなら建物Vも近いが、それらが全てIII期に属する事から、この建物もその時期である可能性が考えられるが、あまりに他と離れ、また、地形の影響も考えられるので確定はできない。

建物III・IVは重複しているものの切り合いはなく、どちらが古いかも確証はないが、正方位の建物IIIから、西に傾き規模も小さい建物IVへの変遷を仮定すると、建物IVが、先述のIII期の西傾、小型の建物らと同じ種類のものとして、III期に属する可能性が高いと言える。

建物IIIは、IVと西辺を揃える事から連續性があると思われ、II期に存在していたであろう。しかし、I期から既に存在していた可能性も充分考えられる。

集落の変遷(図146)

I期

A群は正方位で、住居と思われる建物が2棟南北に並ぶ。その間の建物XIVは倉か納屋のようなものか。その西側には建物33が段差際に建っている。

B群は、集落成立以前の耕地区画に合わせるように建物VIIが建てられ、その南西側に建物VIが付属する。「く」の字配置をとるものか。

両群の方位性は独自のものと言える。

II期

A群は前の時期と大きく変わり、両妻庇の住居と、住居らしき規模を持つ建物がおおまかに南北方向を指向しながら斜めに並ぶ、住居が2棟並ぶという意味では前の時期と同じとも言えるが、納屋のような小型の建物が1棟減少している。

B群は、中心的な建物が、大体90°向きを変え、正方位を取るようになる。付随する建物は方位を同じくして並ぶが、かなり近い位置にある。

この時期、B群の東に距離をおいて、建物IIIが建てられる。集落内では耕作地のある西側とは反対の位置であり、地形的にも高い位置にあるのが意味ありげである。

III期

全体的に建物の規模が縮小し、西傾した方向性を持つ建物が出現する時期である。

A群では建物X IIIが中心的住居か、それに直線的に並ぶX VIIは住居としてはかなり小さい。東のX Iは住居ではなく、なんらかの特殊な建物である。住居が2棟という形がここでくずれ、附隨する施設としての建物が2棟となると言えるか。

B群は小型の建物が距離をおいて2棟並ぶような状況になる。住居ではなく、倉が並んでいると考えた方が良いのかもしれない。その場合、住居は廃絶したか、さらに南へ移動したかであろう。

東の建物も小さく不整形な建物IVになる。そして集落北端にも小型の建物が1棟のみ建てられる。

集落の存続時期と周辺との関係

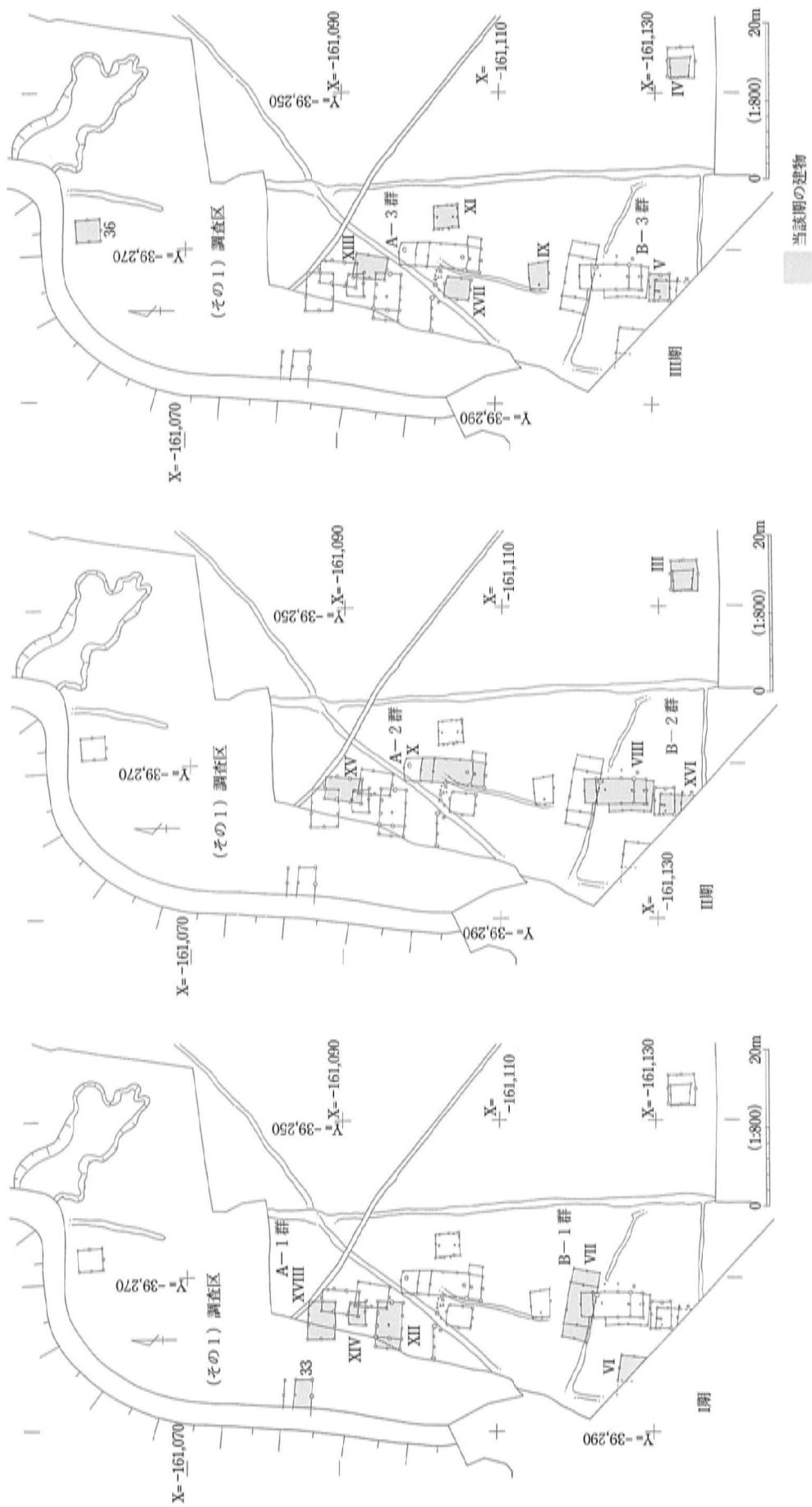
建物の柱穴や、その付近のピットなどから出土した遺物を見ても、集落の時期は10世紀後葉から11世紀前葉の中にあるとしか言えない。しかし、わずかに10世紀に限定できる遺物が含まれている事と、瓦器とは共伴しない遺物がある事、そして包含層も含めて遺物の時期別の量を見ていくと、恐らく集落は10世紀後葉でも早い時期頃に成立し、11世紀初頭までは存続していたと思われ、それは推定される約60年間という存続期間の長さとも、矛盾はないと言える。

周辺を見渡せば、丹上遺跡で10世紀後半の集落が確認され、丹上遺跡と郡戸遺跡の境にまたがって10世紀前半までの集落が存在する。

10世紀前半の集落と比較すると、10世紀後半のものも、当集落も、集落の規模、建物の柱穴の規模、遺物の量などが、明らかに劣っている。おそらくは、10世紀中頃に、なんらかの地域の再編があり、比較的大きな集落が解体し、小規模な集落が散在するような状況に変化したのではないかと推測できる。

10世紀は、律令体制の崩壊期であり、武士階級の台頭期でもある。南河内地域でも、荘園関係史料の欠如している時期であり、中央に官人を輩出してきたこの地域の渡来系氏族が、9世紀後半に大学寮に出仕した船連副使麻呂を最後としてその伝統を終え、11世紀に入ると源頼信が石川流域の壺井に根拠地を据え、河内源氏を興すのはその象徴であろう。

この頃、河内に本貫を持つ在京官人の京戸への編入が進行していたとも言われ、調査成果から判明した、この地域の集落分布の変化も、それらの時代背景によるものかと思える。（三宮）



4. 耕地区画の開発と変遷

今回の調査では1～4面において、耕地区画に関係すると考えられる、溝・段差・畦畔やその痕跡などが見られ、また、水口・井戸・土坑・鋤溝などで、耕地区画を推定できる例もあった。

(その2) 調査区は、現在でも自然地形に合わせた耕地区画が見られ、条里制地割の認められない部分であるので、その起源となる耕地開発が何時、いかなる原理でなされ、それからどう変化していったかを考えるのは、一つの重要な課題だと言える。

1～3面の記述においては、個々の遺構についての記述が中心となり、全体の耕地区画を概観することができなかつたので、この小結において見ていただきたい。

図147は、1～4面の耕地区画に関係すると思われる主な遺構を示し、その存続した面を付記したものである。以下、この図により考察を進める。

耕地開発の段階

耕地開発が段階的になされていく状況は、調査区西半で確認された。すなわち、平安時代集落に先行する溝1917・2126と、集落後の、溝1063・1707がそれを示す。

溝1917・2126は正方位からN15°E傾く直交する溝で、復元されうる耕地区画も方形を基調としたものであったと思われるが、全体的に溝がやや蛇行気味で、溝2126は東側で南に屈曲している。

それらをふまえて東半を見ると、3面の遺構ではあるが、同じような方向性で、同じように蛇行気味の溝が2本ほど見られる。これらも同じ時期の耕地区画と思われる。

以上が、(その2)調査区内の最古の耕地区画である。方形区画を指向しながら、自然地形に大きく左右され、基本的な方位性も正方位からずれ、直線を指向しながらも蛇行気味になる溝は、正確な測量を成さずに掘削されたものと思われる。

この耕地区画は、残された範囲が限られているだけでなく、全体の基準となるラインがない事、灌漑体系の幹線的水路が見られない事、正確な測量を欠いた場当たり的なライン設定が見られる事などから、調査区周辺に広がる全面的な開発ではなく、部分的な耕地開発であった可能性が強いと考える。

調査区西半のものは、集落の成立により廃絶してしまうが、東半のものは後の正方位基調の耕地区画の中に取り込まれ、その中で高低差を解消するのに役立っている。

その後の耕地開発は溝1063の掘削に始まる。しかし、斜行する幹線導水路であるはずのこの溝は、調査区周辺に新たな耕地区画ができていく中で、早々と下流側が埋められ、残った部分も程なく埋められる。そして、調査区全域が耕地化する。

耕地区画の基準線と区画原理

この開発の基準となるラインは、東半では、Aライン、西半ではBラインである。Aラインは調査区内では正方位よりやや斜行するが、調査区から北西側に広がる条里制地割をこの部分まで延長すると、ちょうど東西坪境に位置している。また、Bラインは一つの坪を正確に2分割するラインである。

つまり、自然地形に合わせた耕地区画が施行され、条里制地割が見られない部分ではあるが、その区画の基準としては、隣接する条里制地割から、おそらくは測量により延長されてきた、正方位を指向するラインが採用されているという事である。

その開発主体は、北西側の条里制地割を開発、運営していたものと、無関係ではあるまい。

その基準ラインの他に、調査区内を貫徹する南北ラインはC・Dラインがある、しかし、これらのラインは東西ラインと交叉する部分でやや方向を変える事があり、全体としては、やや蛇行し、自然地形

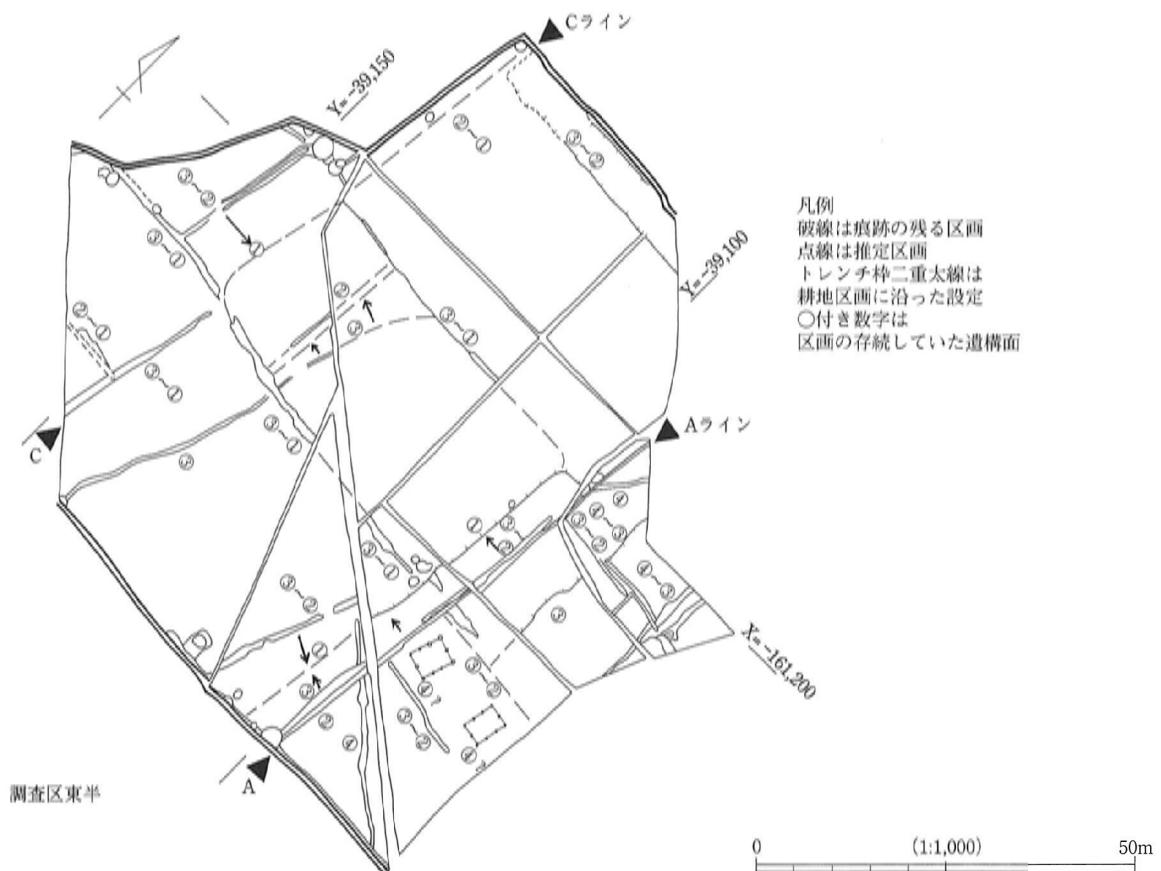
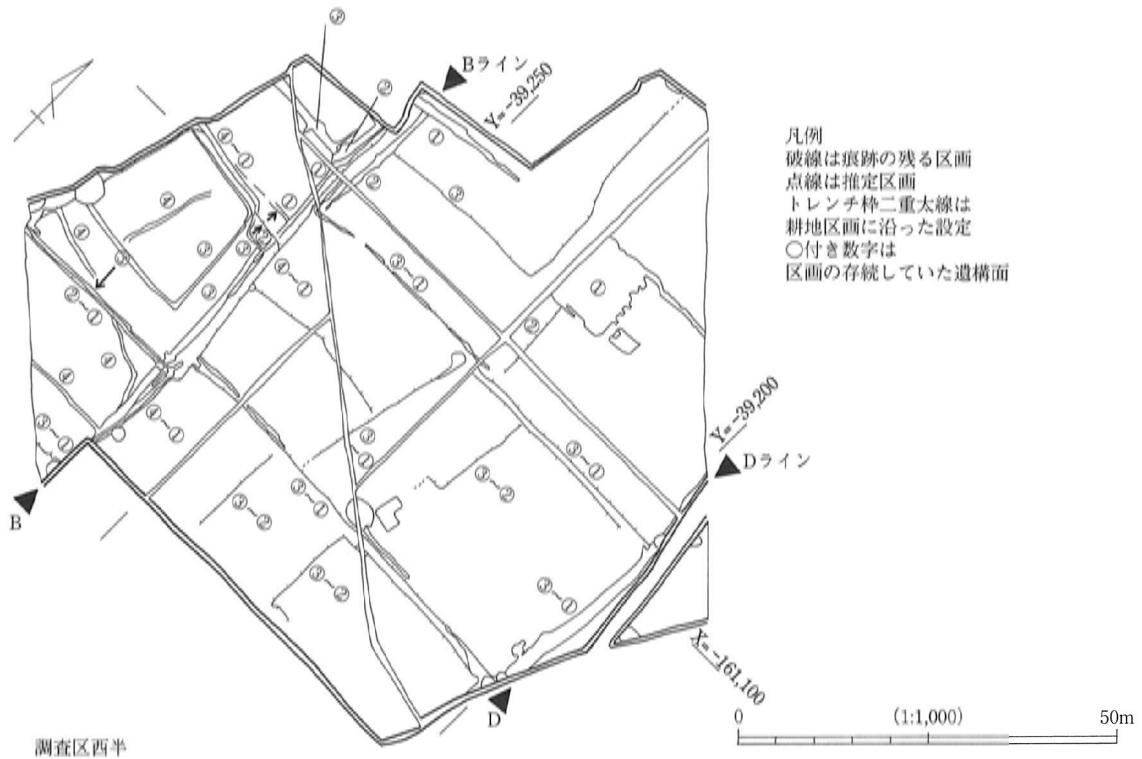


図147 1～4面耕地区画関連主要遺構及び耕地区画変遷図

による影響を脱しきれていない。

むしろ、幹線的なA・Bラインから直角に伸ばされる東西方向のラインのほうが直線的である。これが、二次的な設定ラインであろう。そしてその間にさらに南北方向の区画を入れるが、この時点の区画は地形に合わせ斜行するものがいくつか見られる。そして、その中にさらに東西方向の区画が入る事もある。つまり、耕地区画の原理として以下の手順がとられているのが分かる。

1. 条里制にのっとった南北方向の基準ラインを設定する。
2. そこから直角に東西方向に直線的なラインを伸ばす。ここまで正方位を指向する。
3. その東西ラインの中を南北ラインで区画する。この段階から、自然地形に合わせせるものがでてくる。
4. 場合によってはその中をさらに東西ラインで区画する。

以上のようにまとめる事ができるように、この段階の耕地開発は、自然地形に合わせたものであっても、そこに強い正方位指向があり、それは北西側に広がる条里制地割と密接な関係が伺える。そして、極めて計画性が高く、広い範囲を一括した開発であった事が理解できる。

その後の耕地区画の変遷

以後の耕地区画の変更は、主に上述の3、4、の段階のラインを、正方位化する事と、1枚の区画を大きくするという方向に進む。

しかし、東半の西側では、明法寺池の造成に伴い、斜行した区画ができ、狭くなった区画を東側のラインを移動させて回復するような形も見られる。

Aラインは、その東側の小さな段差が次々と解消されていき、最終的にはライン自体が西に拡張され、東側全体が平坦化する。

西半では、Bラインの西側で、段差が東と南に移動し、一枚の区画が拡大する様子が3面で見られた。しかし、その古い段差とBラインとの間が狭く、ここは元々里道のような道が存在した可能性もある。

大体、2面の段階で解消される小さな段差が多く、この段階で一枚の耕地区画がかなり大きくなつていったようである。

しかし、こういった区画の変更は、部分的で小規模なもので、大規模で、統一性のある改変は現代の、新たな耕土の供給までなかったようである。そして、その状況は結果として、耕地開発当初の計画性の高さを覆い隠す事となったと言える。

耕地区画、特に、条里制地割でもない、自然地形に合わせた区画などは、従来調査の対象としては軽視されがちであるが、それらの開発や維持が、多くの労力が投入され、結果として貴重な収穫をもたらす、人間社会の重要な営みである事は忘れてはいけないことであろう。

今回の調査でも、一見なんもないような耕地区画が、その開発段階で、極めて高い計画性を持っていた事が判明した意義は大きい。

その開発の行われた11世紀頃は、この地域の莊園などの文献資料はかなり乏しいが、こういった調査結果を積み重ねていけば、その空白を埋める史料となっていくだろう。（三宮）